五月一日發行

女學世界

第十巻
第六號

明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可
明治四十三年四月廿六日印刷納本（毎月一回廿六日印刷納本）



博文館

美顔水

美顔料として世界に名高き美顔水

品質精良にして色を白くしきめをこまかに
つやを出す効力は天下類なし
又おしろいのとき
水として化粧
に用ゆれば
巧妙なる
作用にて
おしろい濃く
淡く心の儘にのび
常に用ゆれば花の顔
ばせ雪の肌となる眞に
美顔料として重寳なる
發明品なり

定價＝拾五錢、廿五錢、特別製五拾錢なり

○本品御購求の節は化粧用美顔水と御指名た乞ふ
▲東京市内は勿論日本全國各地
到る所の有名なる化粧品小間物店にて販賣す

淑女令嬢方は常に美顔水を愛用す





女學世界第拾



巻第六號目次

一品一効

!!純無鉛!!

御料たつた白粉

●一品多能の望なきを主張する
吾製造各種の化粧料は常に

▲博士大家無害證明▼



▲新式中の新式白粉▼

●如斯美人を試金石とし着實に
善良の効果を収めつゝあり

御料あらいこ

▲一合の牛乳で洗ふより▼



▲一さじの御料あらひ粉▼

歐羅巴宮殿式

御料フード

▲水なしで化粧のできる▼



▲西洋風新式おしろい下▼

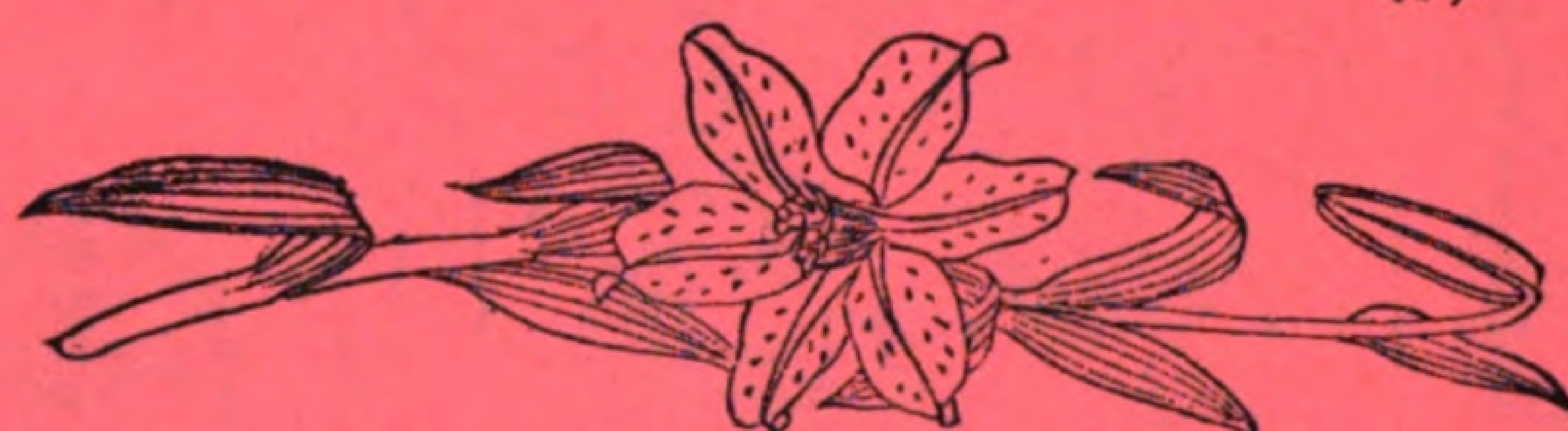
化粧界新美觀

東京京橋南傳馬町

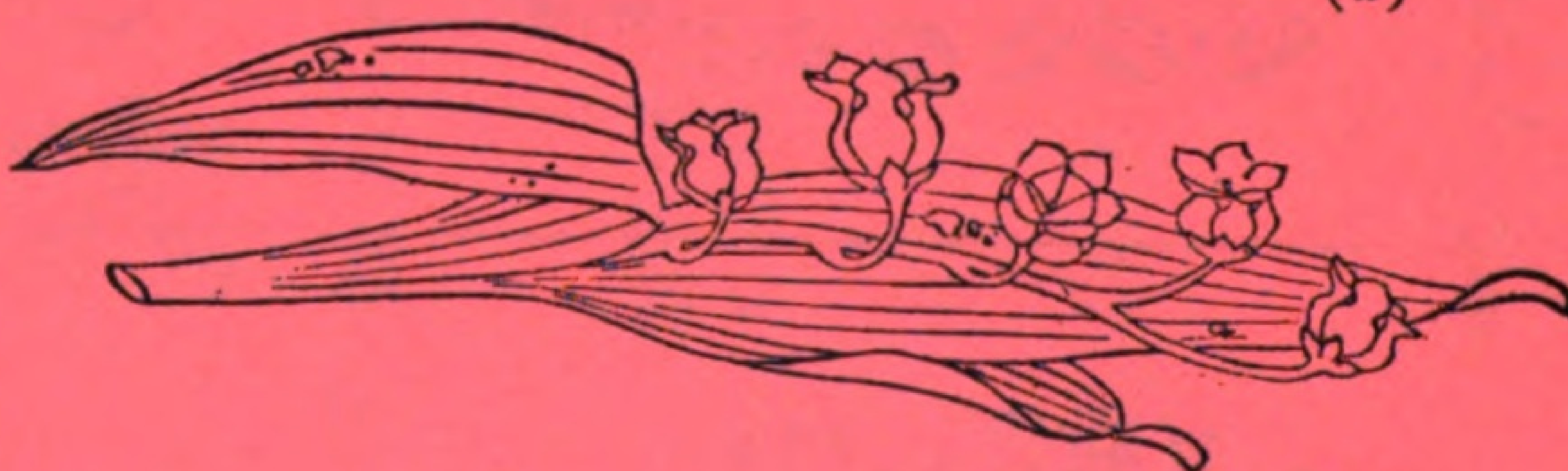
電話本局三十番三千番〇振替口座九二九三番

流行の横挿 大西白牡丹

(イ)



(ロ)



(ハ)



青葉の頃の束髪に召させ玉ふ横ざしの新形は本鼈甲又は四方張にてやさし氣なる草花を巧みに寫せし物にて中に此三種は最も御好み多き模様に御座候

(イ)本甲製百合花
横ざし　金拾参圓

(ロ)本甲製谷間の姫百合
横ざし　金拾参圓

(ハ)四方張なでしこ
横ざし　金四圓五拾銭





女(いの二)

花の籠



田中製版所三色版

婦人一生中に最も心配な事實

政治上實業上に外交の繁き良夫を持つ夫人と日々多數の嫖客に接する婦人は殊更注意せよ恐るべき難産と流産と不姙症は必ず來るべし

婦人は身體の構造上梅毒痳病に對し病毒の發源地となりて他人に感染せしめ又病毒の蕃殖地となりて自己の膣子宮を害し血の道、癪に苦むは婦人の持病と諦め腰より脚部へ冷る如く感ぜば婦人は冷へ込む天性と自覺して帶下、白帶下、赤帶下の惱むも冷込と速斷し他人の擧兒を羨むと共に我が子寳なきを嘆きながら之も例の冷込みと誤信して見當違の暖め藥等を內用する故遂に長引は畢竟誤療の結果と知るべし元來婦人の生殖器は天然的受身に構造せられ即ち人類の田畑なれば病菌の蕃殖するは當前にて結婚の機會に病菌侵入し其田畑を荒すゆゑ子宮血の道に惱み倍々荒せば荒す程其肉落ち身體の窶れるは實際惡き土地の田畑に滿足の農產なき道理なり婦人科學上婦人病の療法は局部の治療を第一義とし局處の外用する藥劑の要求は益急を告るに至る余は藥劑師にて衞生の天職上豈に傍觀するに忍びず積年苦心慘憺研究の末方今婦人科學の泰斗として臨床上實地の錬達一世を壓する獨乙伯林のフロインド博士の研究と其實驗に成る處方に則る藥液をして直接に婦人の局處に作用すると同時に吸收せられて其藥効を發揮すべく可要球（座藥にて內用藥にあらず）を調劑し幾多の婦人科醫に之が實驗を請めたるに子宮內膜炎にて下腹痛み常に帶下ありて白帶下又赤帶下に苦み腰より下腹へ筋張り更に胸先きへ差込み子宮糜爛して痛み、子宮出血して褌を汚染し、厭な處に惡臭ありて他に嫌れ又は燃へ立つ搔痒を起し搔ば痛む症、月經時の疼痛と月經過多に惱み或は痳毒性子宮病等の諸症に用ゆれば何も其の効力神速にして驚ろくべき顯著なりとの賞賛を受たり「可要球」は最新の學理に適合し最も親切なる良劑にて恰も田畑に完全の肥料を與ふる如き直接に其の藥効を顯すを以て婦人の姙娠すべき局部と田畑の道理を思ひ彼是と迷ふ事なく殊に婦人病には必ず「可要球」を外用して速に根治し給ふべし尚病毒の疑ある婦人は速に唯一丸を內用せば拭ふが如く其病毒を去り面白き程治療す故に良夫あれば相互に其病毒を驅除する事を忘るべからず

「可要球」定價三球入貳拾錢、八球入五拾錢、拾八球入壹圓、四拾球入貳圓

「唯一丸」定價三日分四拾錢、七日分八拾錢、十四日分壹圓五拾錢、三十日分參圓（いづれも內地遞送無料）

發行所 東京市本鄉區湯島天神表門中坂上

藥劑師 中西莊吉

振替貯金口座東京千五百番

女（ろの一）


ヴィノオリヤア會社
大英國皇室
撰抜御用品
HONI SOIT QUI MAL Y PENSE
DIEU ET MON DROIT
VINOLIA
日本代理店
ヴィノオリヤアクリーム
ヴィノオリヤア香水
ヴィノオリヤア白粉
ヴィノオリヤア歯磨
ヴィノオリヤア石鹸
交際場裡に名高き舶來のヴィノオリヤア製品を愛用せば起臥に爽快にして艶麗なり
VINOLIA POWDER
神戸、クローザー商會、
倫敦——巴里 紐育

女(ろの二)

石鹸一個の代金を節して本書を熟讀實行せば最幸福なる根本的の美人たるを得べきなり

最新美人法

一册送料共金廿七錢 振替送金は金廿八錢 切手代用は三錢を十枚

本書は醫學上藥學上の學理實際と幾多令孃令夫人の實驗とより成り然も何人にも實行しやすきを本旨として記述せしもの也。乞ふ世の雜書と同一視する勿れ。

白色法 醫學上より見たる白色法●色白くなる飲み藥●色白くなるつけ藥●實驗有效の白色法●色白くなる簡單なる方法●キメ細かにする法●日にやけるを防ぐ法●手の色を白くする法其他種々

美髮法 髮の毛を美しくする法●髮の毛をやわらかにする法●つやをよくする法●毛のぬけるを止める法●毛をのばす法●ふけをとる法●ちゞれ毛くせ毛薄毛赤毛白毛等をなほす最良法等其他種々

美顏法 愛嬌と愉快●顏を洗ふ最良の方法●油の多過ぎる顏と油のたらぬ顏●赤すぎる顏と青き顏との療法●顏を醜くする食物●しわのよらぬ法●齒を白くする法●ニキビそばかすホクロの療法等

治療法 やせる法こえる法●鼻高くする法●聲をよくする法●おしろいやけイボあざシモヤケわきがヒゼン田虫タコなまづ等の最良療法●毛をはやす法●赤鼻眉毛のさかさ毛手のあれを治する法其他

養生法 根本的美人となる平素の養生法●食物と美人との關係●充分に睡眠せよ●寢る時の心得と寢具●運動はかくの如く關係すべし●醜婦も此の如く常に注意せば亦美人に優る●婦人病と顏色の關係入浴中行ふべき美人法●此の如き化粧品は反つて恐るべき

化粧法 結果を來す●化粧品の撰擇法●おしろいのつけ方●鼻高く見する法●目を大きく見する法●唇を薄くす又は厚く見する法其他種々

服裝法 ●服裝を美しくする法●晝衣服の材料●衣服の洗濯●衣服の色●衣服の縞●衣服店にて染色縞柄を見る秘訣●此の如き模樣を縞柄とは甚しく美人を醜婦とす●帶のしめ方●前のあわせ方等種々

これ內客の大略のみ、眞に婦人の寶典也、眞に少女の必讀書也、御身の幸福を得べく一日も早く本書を讀め

發行所 東京神田錦町三ノ二 振替東京一六一八番 **學友社**

見よ●月經なき女子●病める婦人

▲勿驚……藥力最精實……効能確保……有効無害……



●本劑は専門博士が學理と實驗より發見せられたる物其主藥は最新唯一の通經藥にて**帝國大學**病院及各病院にて專用する最良藥なり二三月の**月經**閉止月經**滯**り經不順は一二劑にて必す流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歳になり月經なき人は二劑又毎月月經困難は三日分にて通經す

藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢

◎肥滿病新藥

（米國新輸入）

子供の折**美愛**と賞せられし人も年頃になりてよりぶと〳〵肉太りたる爲め上圖の如く**醜婦**となる人少なしとせず本劑は獨乙ベンツオルト氏の發見藥にて脂肪多き人●ぶと〳〵ふとり◎血太り◎肉太り◎酒太り◎水太り◎顏赤◎にきび◎ふき出物多きは輕症一二劑如何程の惡性も四劑分連服せば色は艶白となり誓て**美顏**窈窕たる美人となる事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

諸孃姉の福音



藥價	一劑一圓五十錢　二劑二圓九十錢　三劑四圓卅錢　四劑五圓半　送料十錢

發賣元 東京々橋中橋和泉町 振替第壹〇六七七番 **小宮愛生堂**

女（ろの三）


千代田香油
千代田香油は廿世紀式の新香料を配合して調製したるものなれば夙に淑女令嬢に愛用せられ高評嘖々たり
特製 金七十銭
大瓶 金三十五銭
中瓶 金二十五銭
小瓶 金十七銭
東京市馬喰町
山岸三之助
電話浪花三七九三


純白浮きスワン石鹸
純良なる家庭用浮石鹸
▲定價 二個纏(壹本) 廿二銭
製造所 英國ポルトサンライト市 レバー兄弟商會
日本輸入元 小林
特約大販賣
東京馬喰町四丁目
山岸三之助

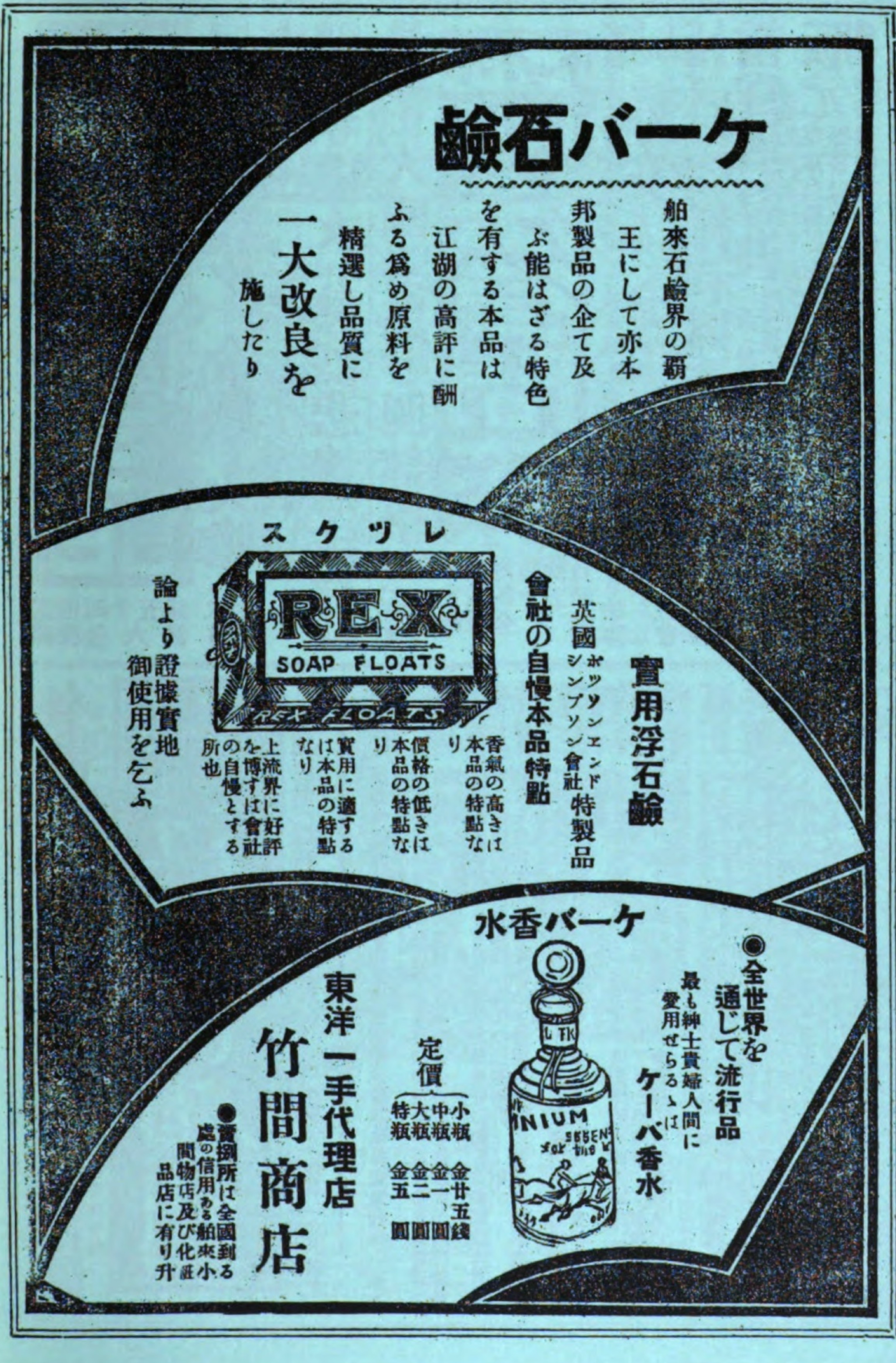
女(ろの四)

(泰西珍草花譜)

アマリース



女(はの一)



ケーバー石鹼
舶來石鹼界の覇王にして亦本邦製品の企て及ぶ能はざる特色を有する本品は江湖の高評に酬ふる爲め原料を精選し品質に一大改良を施したり
レツクス
REX
SOAP FLOATS
REX FLOATS
實用浮石鹼
英國ボツソンエンドシンプソン會社特製品
會社の自慢本品特點
香氣の高きは本品の特點なり
價格の低きは本品の特點なり
實用に適するは本品の特點なり
上流界に好評を博すは會社の自慢とする所也
論より證據實地御使用を乞ふ
ケーバー香水
●全世界を通じて流行品
最も紳士貴婦人間に愛用せらるゝはケーバ香水
定價
小瓶 金廿五錢
中瓶 金一圓
大瓶 金二圓
特瓶 金五圓
東洋一手代理店
竹間商店
●賣捌所は全國到る處の信用ある舶來小間物店及び化粧品店に有り升

得意



太田三郎筆

東京帝國大學文科大學講師 佐々木信綱先生著

宮内省御歌所寄人從七位 大口鯛二先生書

絶好の習字兼用 女子消息文範

(最新刊)

女子消息 女のゆきかひ

從來世に出でたる類書少なからずと雖も本書の如く完全なるものは稀なりと信ず即ち文は當代歌の大家佐々木信綱先生、書は御歌所の重鎮大口鯛二先生の筆になれるもの。習字兼用の女子消息文範として得難きの寶典なり。殊に裝釘は書肆の深く意を用ひし處。優美高尚にして机上を飾るに足る。願くば一本を備へて以て朝な夕な其の技を磨き給はんことを

定價金六拾錢
送料金六錢
和半紙裝頬判美本全一册

發行所 東京京橋區南鞘町一七 文泉堂
(振替口座東京二〇七六番)

女(にの二)

御婦人は本書を一讀するの義務あり

◀大好評再版▶

妊婦必讀 安産の心得

産科婦人科 櫻井病院長 醫學士 櫻井郁次郎先生序文

婦人科小兒科 吉田賢先生著

▲御婦人の一番大役はお産であります！

▲本書は月經閉止後の状態より産前産後の心得及出産當時の取扱方並に育兒法等に至る迄細大洩さず懇切且つ平易に詳述せられたるものにして御姙娠の方は勿論一般の家庭には是非一本を備えねばなりません

洋裝菊判頬美本
總ふりかな附
全一册
定價四十錢
郵税金六錢

賣捌 各地書林

發行所 東京市神田區錦町一ノ十四 宇宙堂

器械不要 **簡易複寫インキ**

蒟蒻版寒天版及び其他の印類又は器械いらず此インキ一瓶にて簡便迅速座上立どころに文書謄版數十百枚を印刷し得べし本品はすでに諸官衙及び郡區町村役場等の採用品たり

◎定價 二オンス堅裝 罐入送料共 金參拾錢 郵券代用壹割増

下谷坂本町二の廿四 **中村屋商店**

國民寶典 **實用家庭百科全書**

見本申込次第
進呈製本既成

東京 **精美堂**

肥滿病の人◎やせる藥

多血症●脂肪過多●中氣●酒ぶとり●便秘 凡てふとりすぎて**やせて中肉**美容となる奇藥 御困りの方二錢切手送れば詳報す

東京市小石川區第六天町十七番 **池田製藥部**

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇藥發明の爲め全治せり故に世の同病者を救ひたき志願に付望の方は郵券二錢封入にて御照會あれ

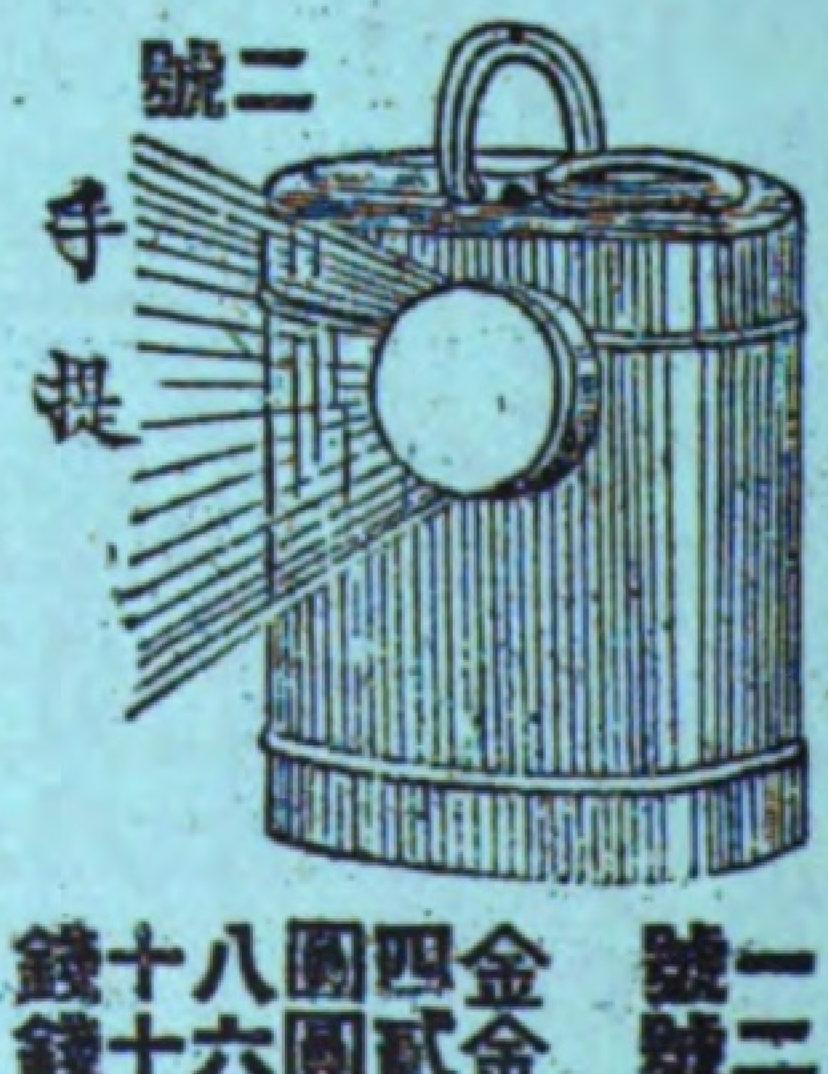
東京府大森入新井 川名助次郎

日本電業株式會社製造

實用携帶電燈 卸小賣 特約大販賣



鞄入電燈 (金參圓八十錢)



二號 手提

一號 金四圓八十錢
二號 金貳圓六十錢

◎本器ハ釦ヲ押セバ光ヲ發スル安全ナル輕便燈器ナリ
◎内部ノ藥品(電池ト云フ)減光シタル片ハ電池ノミ取替ヘレバ最初ノ光輝ヲ發ス
◎定價表ハ御申越次第送呈
◎弊店ハ卸賣ノ爲メ廉價且ツ品質ハ他ノ類似ノ高價品ニ比シ遙ニ優レリ



懐中形 探見形

懐中形 探見形 同價

御注文ハ前金ニ限ル御送金ハ爲替又ハ振替ニ切手代用ト代金引替ハ一割増

一號 壹圓六十五錢
二號 壹圓四十五錢
三號 壹圓二十五錢
四號探見形 九十錢

送料●内地ハ無料 目下●海外卅錢増 保險附ニテ送ル

寸法 一號懐中長サ四寸五分巾二寸五分一號探見長サ七寸五分徑一寸三分以下順次小トナル

特約販賣御望みに應ず

森商店

東京市神田區表神保町二番地

電話本局二千二十一番
振替東京二〇五三八番

悪筆は一生の損



速に入會して頗る能書家となるべし
本會獨特の特許速成通信教授の方法にて練習すれば如何なる悪筆にても最も短日にて上達すること全く機械的なり

▲本會書者兼講師
稻川雲谿先生
玉木愛石先生
小野鵞堂先生
外講師大家數拾名

▲見本 詳細會則無代進呈

帝國習字速成學會

東京本郷區大學正門前
電話下谷 三〇壹壹番
電話下谷 三貳一〇番

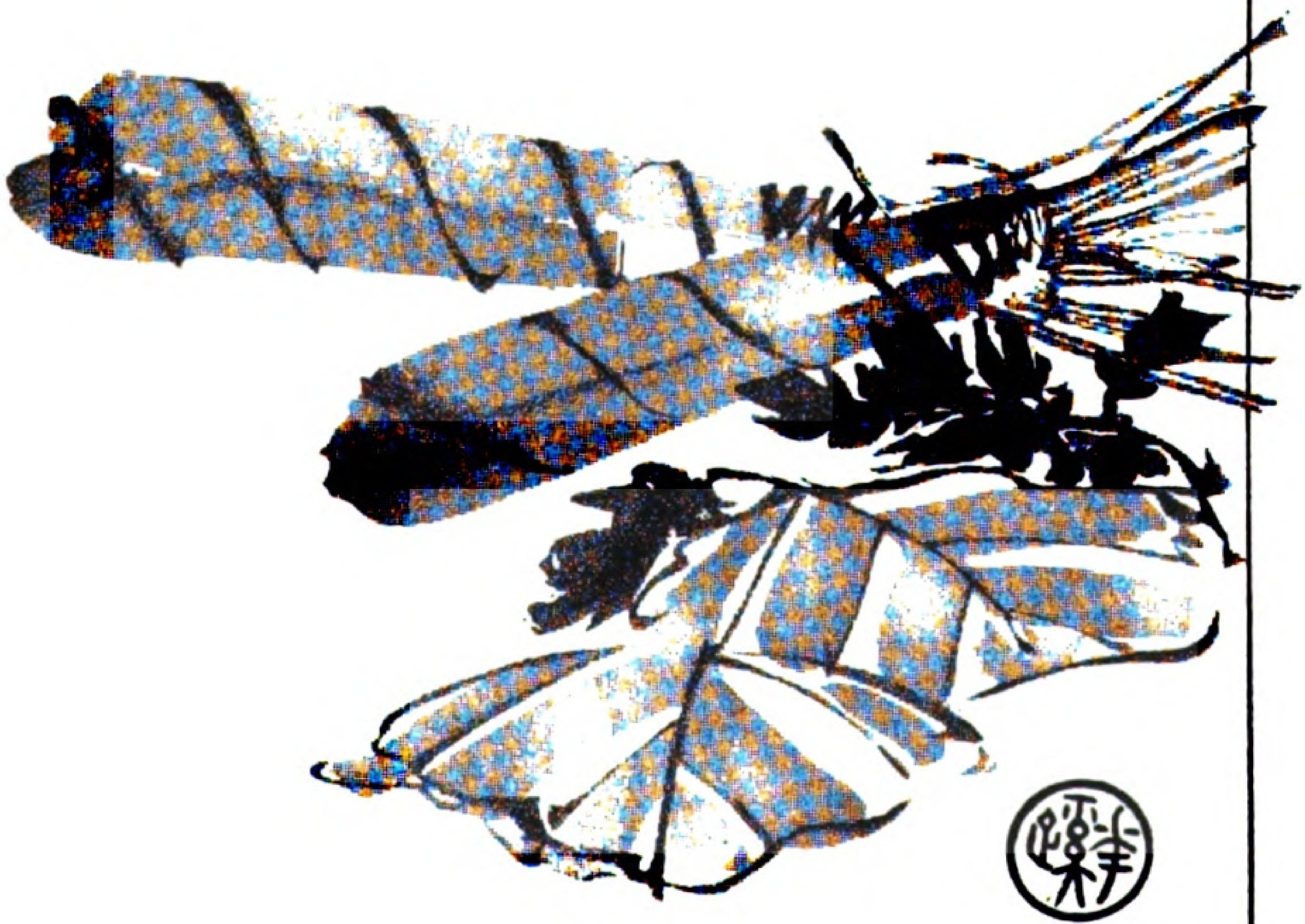
女(にの四)

裏庭



河崎蘭香筆

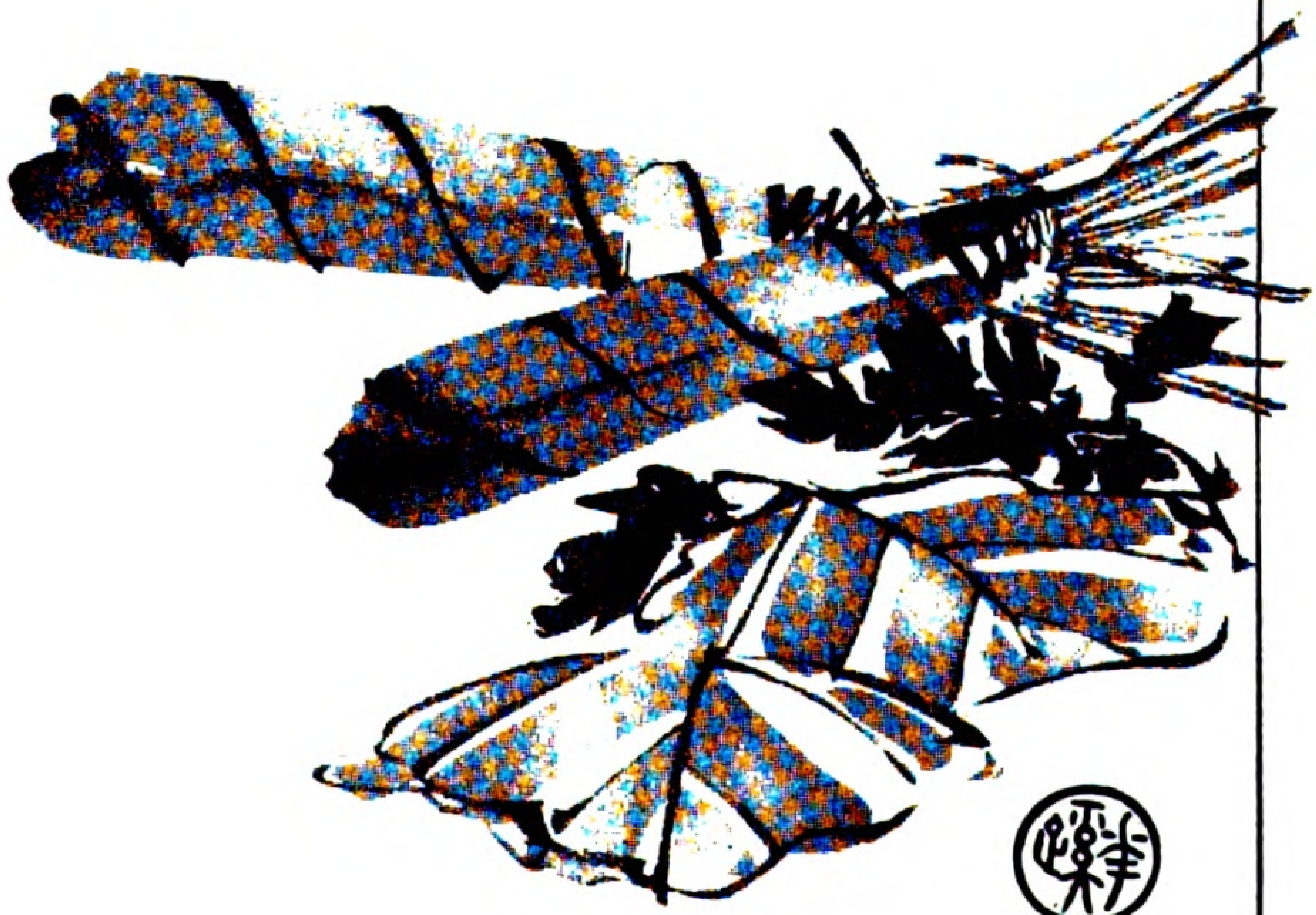
端午



跡見花蹊筆


買！
造花材料
東京日本橋區
横山町壹丁目
天野卯兵衛商店

端午



跡見花蹊筆



女へほの一二



毛はへ藥

最新發明

●奏効確實 使用簡便●

藥學の進步と多年の專門研究により必ず毛のはへる最新毛生法發見す其効驗如何に確著なるか諸大家の實見報告贊許等詳細は郵劵二錢封入照會あれ

東京日本橋通四丁目四番地

公仁藥院

隆鼻術（はなたかくするほう）

東京市九段下

神田今川小路二丁目十一番地

午後 夜間

和田耳鼻咽喉醫院

わきが

患者にて醫療賣藥有らゆる手を盡しても全治せざるの士女は獨逸醫學界の泰斗たるノート博士の最近發見のわきが根治劑『フレード』を用いて速に其苦痛を脱せられよ○藥價は輕症用八十錢重症用壹圓五十錢蔓性頑固用特製三圓送費十錢郵劵代用必ず二割增代金引換小包は一切謝斷：

東京市本鄉區東片町十五番地

電話下谷二五六九番
振替口座東京二〇七四三番

◉發賣元 市原製劑部

●診察時間朝七時より夜九時迄●

梅毒りんぢ疾わきが生殖器病神經衰弱症

●皮膚病あざほくろ

東京 淺草瓦町廿八 淺草橋通瓦町 電車停留場橫

中央醫院

生殖器病神經衰弱

記憶力減衰萎縮遺精早漏夢精發育不充分症等

梅毒・りん病・わきが・ぢ

橫根 下疳 皮膚病 諸病症

▲各自病狀を記し郵便切手六錢を封送せば其病を速に全治せしめ得る特效新藥の說明書を送る

東京市淺草區瓦町廿八淺草橋通瓦町電車停留場橫

中央藥院

●

圖書目錄

御入用の方は往復ハガキにて御申越次第即時送呈仕候

東京本町 博文館

男女 ちゞれ くせ毛

赤毛は何程の難毛も直に根本的矯正黑化良き艶の出る最新發見奇液を郵劵封入申込者は誓て美髮にして差上ます

東京麻布區材木町

岩阪澄子

女(ほの三三)


大學白粉は
大學は
最高の學府也
最上の化粧
料なり
若し博識を得んとせば
最高の學府に學び
美人たらんと欲せば宜しく
「大學白粉」を愛用せられよ
學術の淵叢たる大學の大家に因つ
て製煉せられたる「大學白粉」は眞
の婦人美を發揮する純正の無鉛白
粉にして、毫も鉛毒の恐なく他の
無鉛白粉の如く肌を荒らすことな
く良く伸びて乘りよくお召物の
衿に着ず、芳香頗る高尚なり

女學(ほの四)

名門の令嬢と新夫人







右圖　德大寺侯爵令孃　伊楚子

中圖　蜂須賀侯爵令孫　笛子（十四歲）

左圖　押小路子爵夫人　ゆか子

名流夫人







右圖　子爵山口十八氏夫人ぬい子

中圖　子爵奥平昌國氏夫人悦子

左圖　伯爵柳原義光氏夫人はな子

愈新學期は開始せられたり

女子大學講義

◎第一學年開始◎第二學年開始◎

本講義の新學年は頗る盛況を以て開始せられたり

本講義には女子大學の家政學科十八科目あり

本講義の講師は現代一流の女子教育家也

本講義は假名付き趣味豐富にて頗る平易に說けり

本講義によりて理想的家庭夫人となりたる令孃多し

愛孃を慈くしむ夫人は是非見本を讀まれよ

編輯所　小石川區目白臺　日本女子大學校櫻楓會

發行所　小石川區久堅町（電話番町九三二）　精美堂

世評よき月刊雜誌家庭は無代にて會員に配付す

本講義が如何に婦人界に愛讀せらるるかを知らんと欲せば

先づ見本を讀みて其の眞價を知るべし

見本は無代進呈す葉書にて申込みあれ

卒業二ヶ年會費は一ヶ月分金五拾錢也

現代婦人の思想を向上せしむるは本講義なり

婦人世界

五月 一日發行 五卷五號 一冊 十五錢

郵稅一錢五厘 半年分郵稅共一圓五錢 一年分二圓五錢

◎女學校を卒業して結婚する婦人に忠告す……大隈伯爵

◎日清戰爭の時衣服を賣つて駿馬を求めてくれた私の妻……比志島中將

◎乃木大將母堂の臨終に侍して感じた事……山口博士

◎私が外科手術を受けた時の實驗……村井弦齋

脚氣病の治療法發見さる……弦齋夫人

△脚氣は日本人の國民病なり今や効驗神の如き療法發見す詳細本誌▽

△米飯を常食とし味噌汁を食する家庭は直に實行し得べし詳細本號▽

◎子供は何ヶ月より副食物を始むべきか……加藤博士

◎侯爵薨去の時內親王殿下台臨の御模樣……佐佐木侯夫人

◎神風連に襲はれ姙娠六ヶ月の身で屋根より飛降りた時の話……與倉中佐夫人

◎婦人の芝居見物の利害……村井弦齋

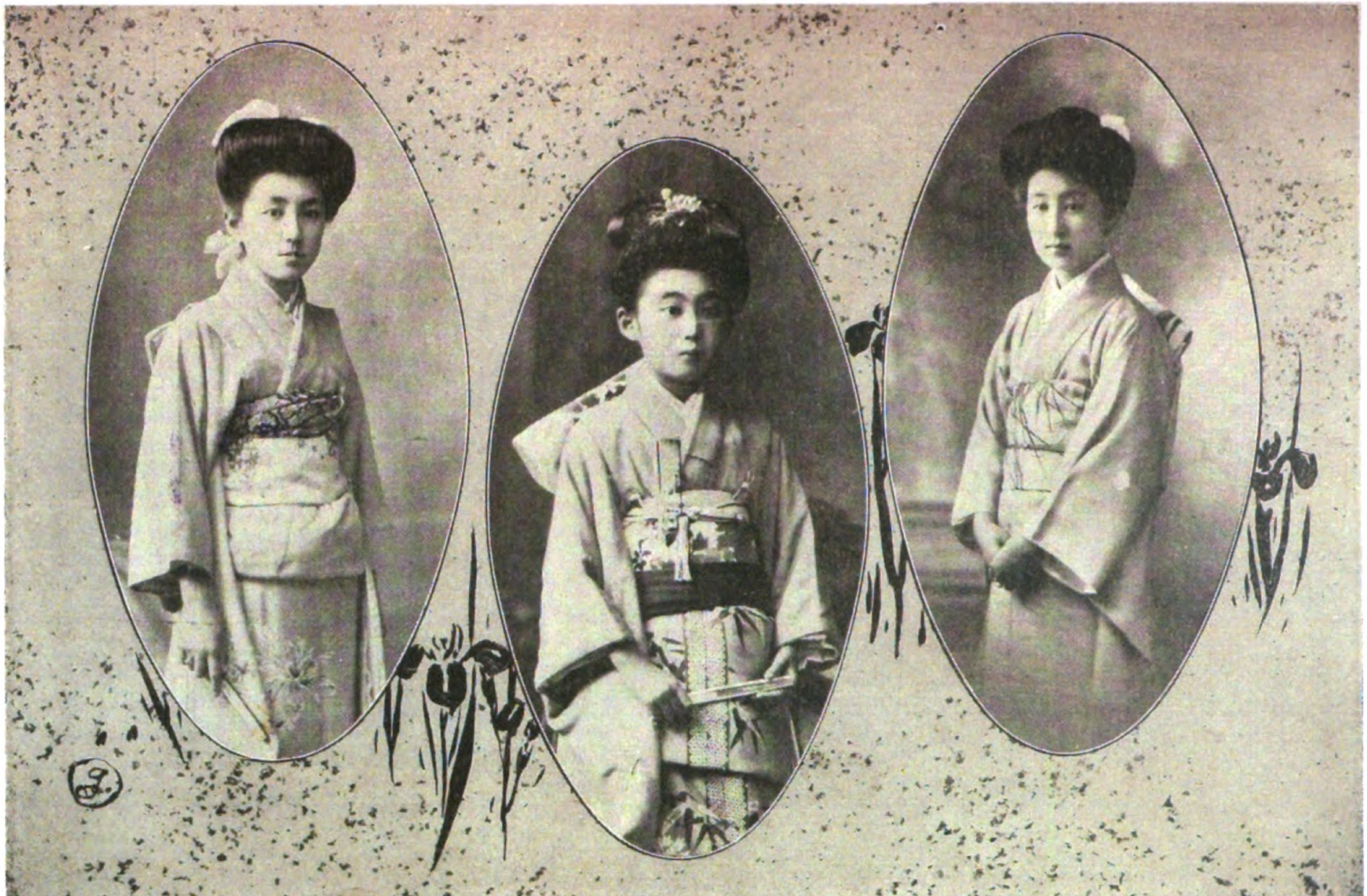
東京京橋南紺屋町 郵便貯金口座(參貳六番) 賣捌全國書店

實業之日本社

女(への三)


ネッスル
コンデンス・ミルク
ミルク・フード
育児に
必要なる
最良滋養品

令嬢かゞみ

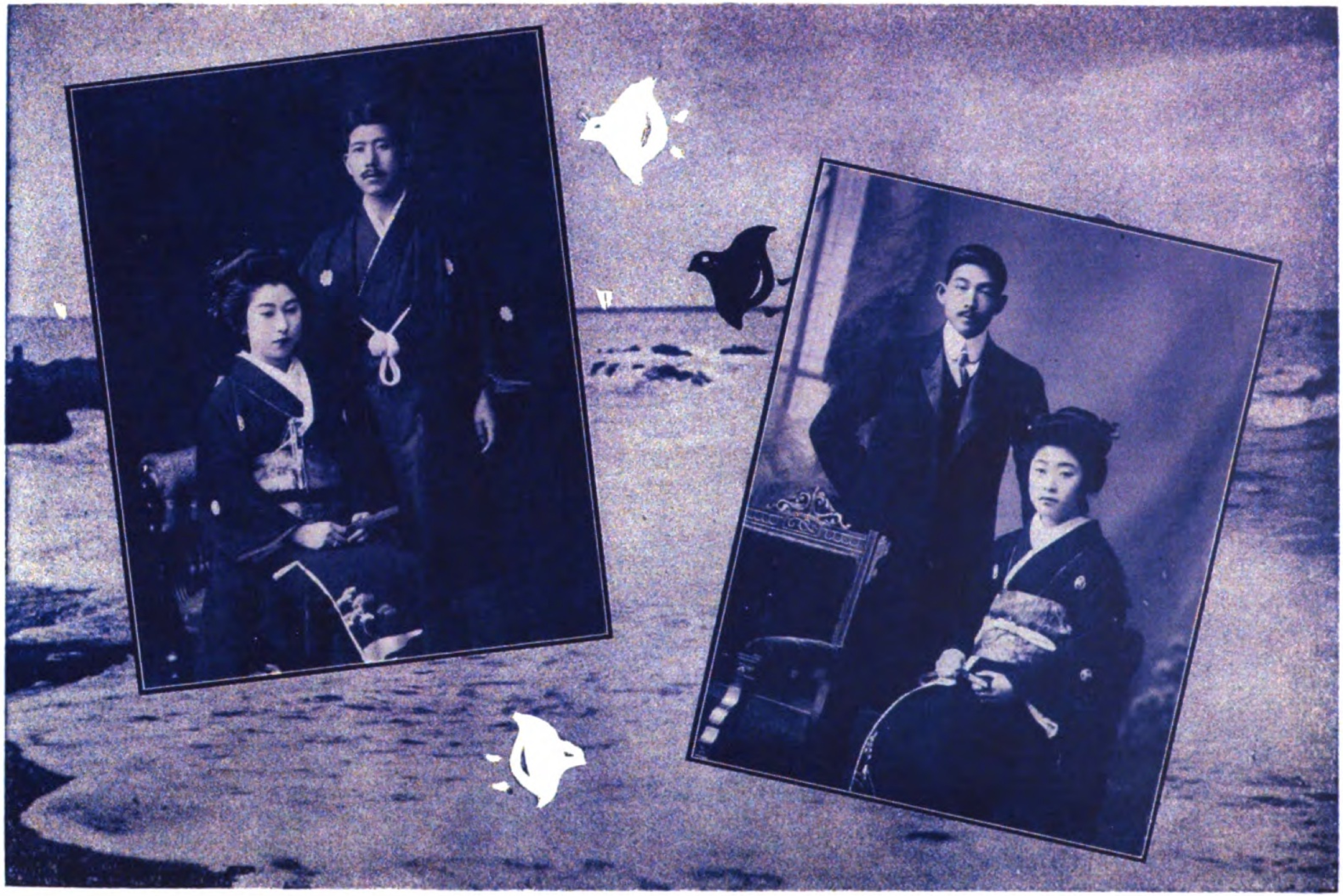


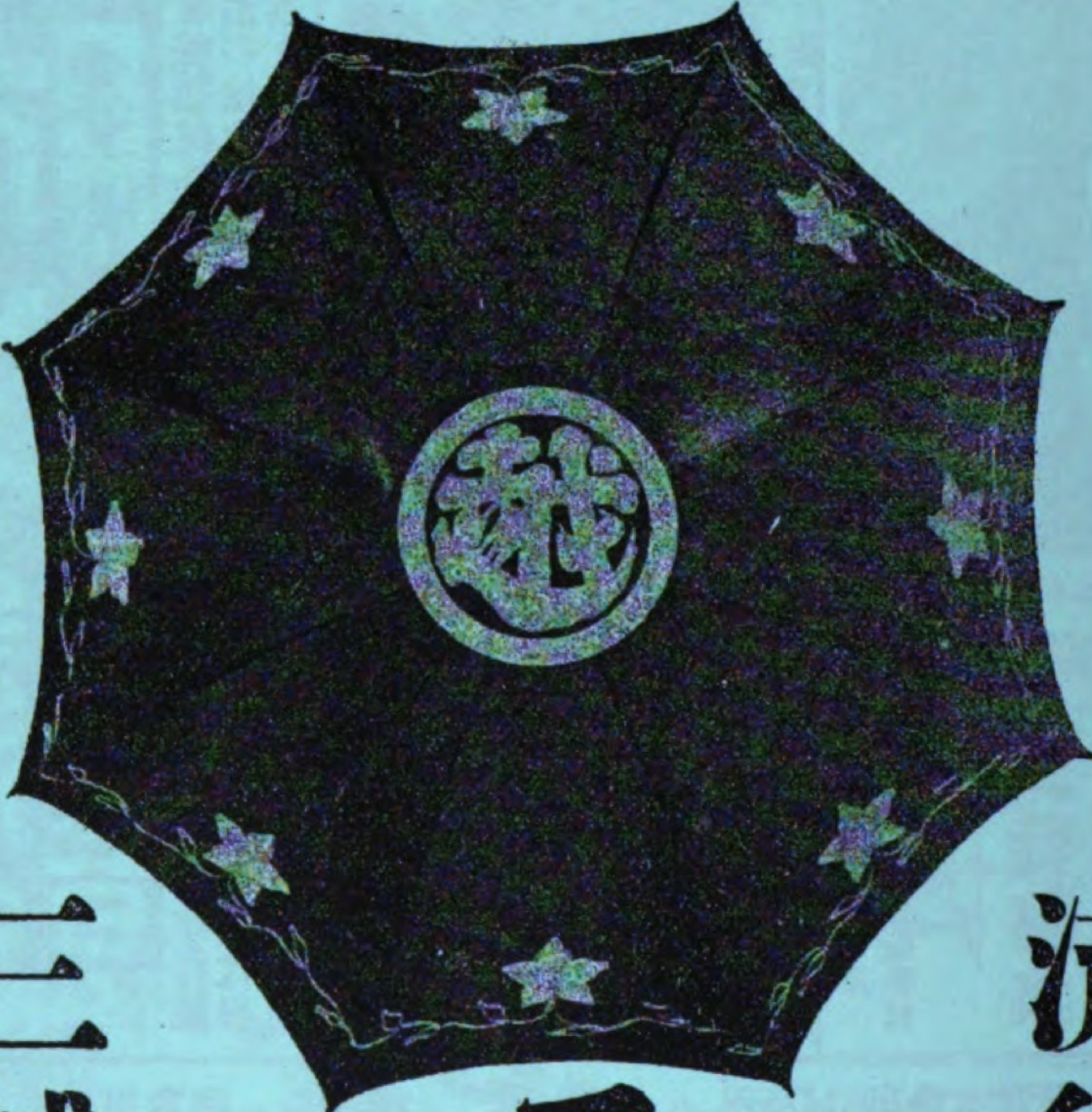
右圖　坂田龍子（銀行家坂田實氏令嬢二十歳）

中圖　郷華子（貿易商郷隆三郎氏令嬢十歳）

左圖　河浦じつゑ子（銀座吉澤商店主河浦謙一氏令嬢）

新婚旅行





流行の洋傘!!

本年流行の洋傘は御婦人向、紳士向き、何れも充分に取揃へ、陳列販賣仕候。
絹張り洋傘は三圓以上種々。

三越呉服店

東京市駿河町

此際澤山御注文のほど奉願上候。
三越の洋傘は價の廉くして品のよく、丈夫にして氣の利きたるが特色に候。

三越の洋傘!!

醫科大學藥學專攻　藥學得業士金澤巖著

肺病患者の福音

著者肺病全快の經驗と最近の學說に基き親切叮嚀に施治の法を詳述せし物也●郵劵二錢封入申込者に無代根本

●東京市下谷區上根岸町　衛生書院

●佛國土產の最新白色新劑



東京大森停車場上山王

色黑き、にきび、そばかす等にて困悶の士女よ本院獨得の文明的新秘法により速に圓滿なる幸福を得られよ如何に其効能の神秘なる論より證據郵劵二錢送れ美容のしるべ呈して教ゆ

愛隣藥院



東京神田裏猿樂町

東洋音樂學校

生徒募集

本科、特別科、及
本校及東京音樂學校
入學豫備科

ピアノ、オルガン
バイオリン、唱歌
其他樂器及理論

入學志願者は直接本校へ照會あれ

にきびとり化粧水

本品は有名なる獨逸專門大家の調配にして多年の經驗と最新の學理により精製せる化粧水なり常に本品を愛用すればいかなる吹出ものと雖ども二三瓶にて必治は實驗者の證明なり幸に御試用あらん事を乞御一報次第速に郵送す定價郵送料共一瓶三十錢（但郵便切手は一割增）

化粧水バビロン

發賣元　東京市本所區緑町三の二九　小林榮進堂

●本法は

女髮結師安部歌子女史

ちゞれもくせも
二大奇方劑
もはへうけあい

多年の實驗を經たる證明秘法劑にして是迄の使用者を悉く滿足せしめたる奇劑なり往復端書紹介詳報す

●東京市麴町區三番町六十七　濟世園

蹄鐵印　シャター リヨン　白赤葡萄酒

は藥用飲料並に食卓用として御進物に最も妙なり

●至る處に取次店あり

●本品は從來赤葡萄酒のみ發賣の處今回更に品質を精撰し最も純粹にして善良なる白葡萄酒をも輸入發賣仕り候に付御愛飲の上御稱贊あらんことを乞ふ



東京市本町三丁目
電本局長一四三五

鈴木洋酒店

女(その二)

藥學士 藤本理先生著述
正三位東久世通禧伯閣下題字

美顔秘法

三六版三十餘頁
洋装頗美本

本書は最も有益なる家庭の珍書として上流社會に高評を博したる皮膚の色黒きを白くし●ニキビそばかす顔の小じわわきがの療法及クリーム●白色劑の製法等なり
一部金十五錢特價提供郵税共金五錢切手にて申込あれ

新案特許「晴雨計」雨か天氣かを豫知する實用具一個三十五錢

申込所 東京大森局區内 八景坂 棚橋商店





毛髪くせ直し 男女 美髪水

一瓶貳拾錢 ◎地方送料二瓶拾參錢

▲美髪水の特効は毛髪の癖を直し其色艶を佳くす故に
▲之を用ふれば如何なる硬き髪でも柔かになり升から
▲島田でも丸髷でも束髪でもお湯で採ずに結はれ升
▲特に油氣なしのお孃さん方のお下髪には最も妙です
▲要するに癖の有無に拘らず男女とも必要の品で有升

製造 東京市麹町區一番町五番地（五番町電車停留場前）
發賣元 萬歳堂

婦人技藝材料

營業目録

袋物、造花、刺繍
摘ミ細工、果實、瓶細工
編物、器具并に材料

東京市本郷區弓町二丁目
倉持商店
電話下谷三五一三、振替貯金口座壹七壹壹

此切取を添へ御申越しの方へは美術技藝の栞並に定價表無代進呈す
（○女學世界五月號）

女（との三）


貴族御用
クラブ
洗粉
白粉
歯磨
日本三大化粧として
天下萬衆の賞讃を受けつゝあり

令嬢かゞみ



右側上より（１）小田原　江原かね子　（２）富山　漆間とき子　（３）芝　山地ふみ子　中央○芝　宮本鉄子

左側（１）麹町　壹岩とく子　（２）牛込　清司民子　（３）神田　間　昤子

クラスメート





本品は畏多くも
内親王殿下
の御用を辱す

高等香油
チエリーオイル
特効
ふけを去り髮を出しちゞれ、くせを直し毛の發育を補く
定價
大八拾五錢
中四拾五錢
小貳拾五錢

本品は佛國製にかゝる貴重なる香料を加香せし故佳香馥郁として香水匂袋の代用となるべし
煉製美顔料
フエスおしろい
定價｛金參拾五錢 金貳拾五錢

高等煉香油
チエリーポマード
特効
フケ取リツヤを出しチヾレクセ毛を直す
定價｛小金貳拾錢 中金參拾錢

發賣本舖
東京市日本橋區本町二丁目
高橋初次郎
特電話四一三番

化粧香水 プラチナ



八方美人の香水！

世に香水の數は山々あれど悉く一品一効で人の鼻を衝くだけの効能さい持つて居ないが此のプラチナ香水は

◉ハンカチーフに一二滴たらして持てば終日香氣を保ち

◉微温湯に滴らせば乳白の化粧水と變じ

◉顔を洗へばニキビ、ソバカス、吹出物を全治し

◉頭髮に塗抹すれば毛髮を養ひ香氣馥郁香油の代用をするのみならず髮のくせを直し赤毛白髮を防ぎます

故に人は本品を「八方美人香水」と云ふは尤なる次第である

定價壹瓶三十錢▼郵券代用一割増遞送無料

發賣元 東京日本橋横山町一丁目
近江屋 天野源七
電話浪花八六三番 振替口座五九三三番

女(ちの一)

穏健にして摯實優美にして高尚

婦人画報

五月一日發行 五月の卷 一冊廿五錢 郵税二錢 六冊税共壹圓五拾錢 十二冊税共二圓八拾八錢

書報は 婦人界の活きたる歴史

讀物は 至誠の籠る清き泉

書報

附錄 晩春の花 石川寅治筆 極彩色美人畫…

▼朝香宮殿下と富美宮殿下

▼御進級の各女王殿下

▼閑院宮三女王殿下と御成蹟

▼名家令嬢の茶の湯

▼女學館女子美術生徒の演じし活人畫

▼各女學校の優等卒業者と成蹟…

▼學習院女學部卒業生

▼結納物の色々 ▼各女學校の卒業生 ▼花見る人、水と女性

▼實踐女學校共立女子職業展覽會… ▲山脇、女子美術、麹町高女のバザー

▼緒方博士在職廿五年祝賀會

▼竹柏會大會 ▲婦人矯風會慈善園遊會…

▼名古屋共進會 ▼五月幟 ▼動物劇… ▼各女學校の卒業生 ▼名家の奥様…

▼少年裁判所 ▼令嬢鑑

讀物

女子と文藝…… 坪内雄藏

誤れる結婚の末路 井上哲次郎

英傑の士と婦人 井上友一

名を求めざるが婦人の本領 中島德藏

婦人に無くもがなと思はるゝ事 横山榮次

東京の女と京都の女 幸田露伴

恐るべき嬰兒の下痢症 弘田長

◎千家男爵夫人を訪ふ 婦人記者

◎女學生と臺所… 宮川壽美

◎外人通譯として演壇に立つ苦心…

◎東京名物◎◎五大將夫人

◎逝きし吾敎子 小野吉勝 ◎氣のきく女

◎島津惟久の夫人 遠山稲子 ◎筍料理…

◎大岡越前守と今日の家庭

◎女の手にて製造さるゝ煙草… 記者

◎出入商人の見たる奥様…

東京飯田町四の四 東京社 電話番町二三三九 振替口座一一八一八

女(ちの二)

皇孫殿下 賜台覧
韓國皇太子殿下
文學博士 上田萬年先生解説 名和永年書

日本歴史畫譚

全一册洋装四六判
美本舶來紙刷
密畫二百枚挿入
正價六拾五錢
郵税 八錢

天下第一の美しき**歴史畫本**出づ、上は天照大神の昔より下は伊藤博文公の暗殺に至るまで上下三千歳の著名の事蹟を、一々**美麗なる挿畫**を以て現はし、之に平易明快なる解説を加へたれば、讀んで面白く有益なばかりでなく、只一目見ただけでも、**其美しさ面白**さに、少年諸君は吃驚せらるゝであらう。學校の參考書としても、家庭に備へても、之程趣味深くして有益なるものは他にあるまい、**少年机上の珍寶、家庭團欒の材料**には必ず無くてはならぬもの、天下の少年諸君の愛觀を待つ。

●三越兒童博覧會場にて販賣致居候

ポケット日本外史

文學士 大町桂月先生校訂
全一册 正價金四拾錢 郵税六錢

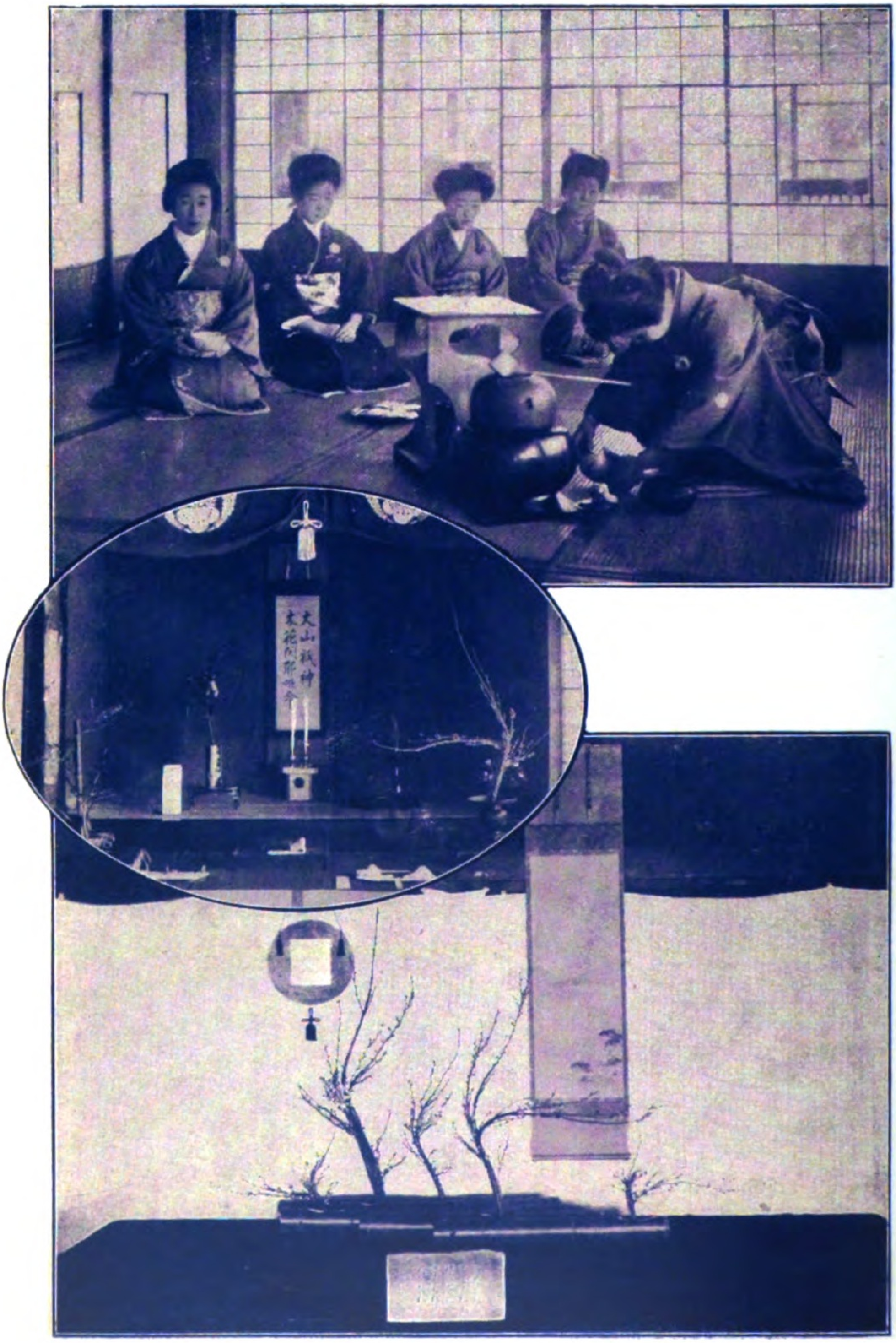
新體 實用書翰文

文學士 久保天隨先生著
全一册 正價金五拾八錢 郵税拾錢

發賣元 東京神田區錦町二丁目角 振替口座二百六十番 勉強堂書店

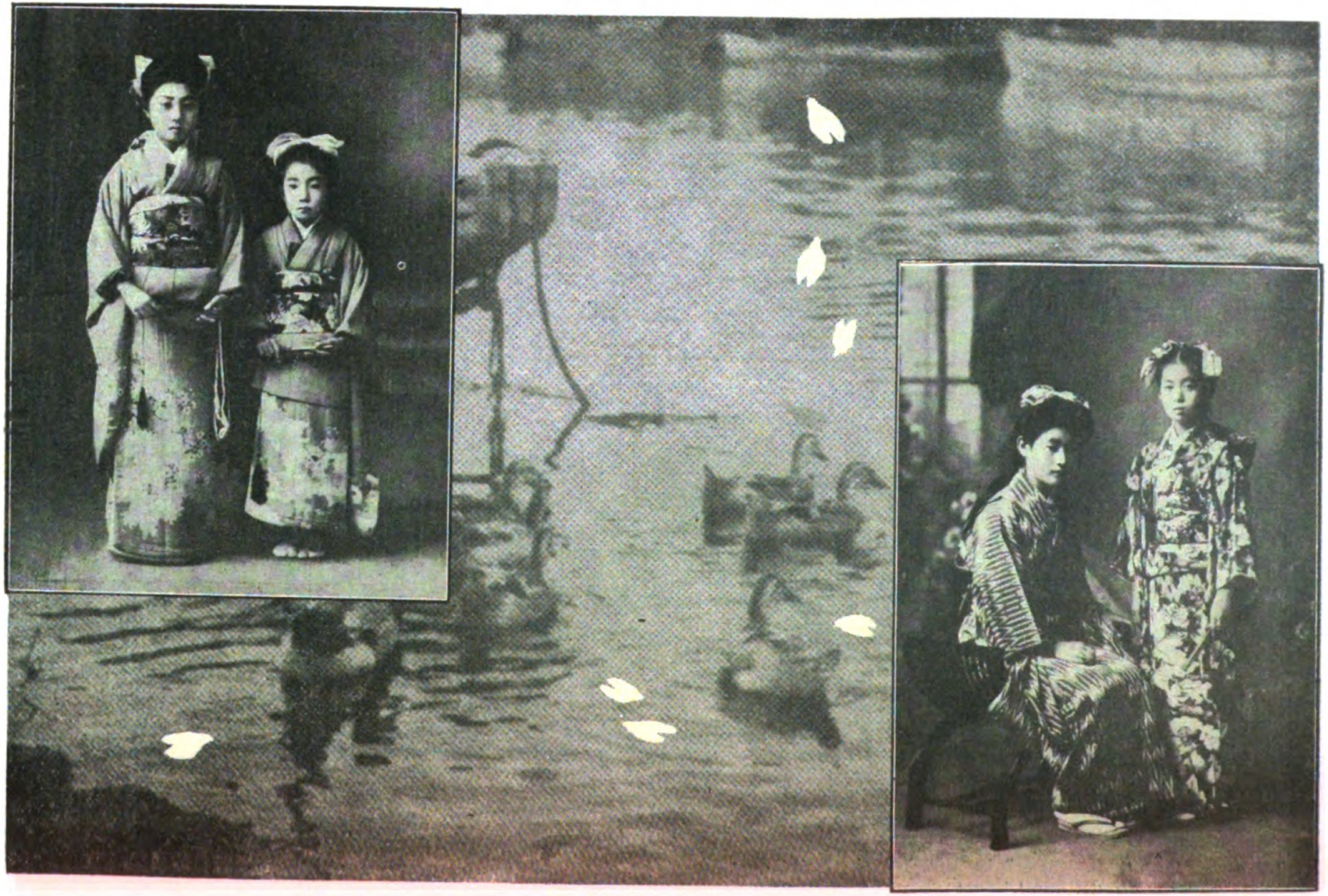
女(ちの四)

正派青山流生花會



近頃兩國橋畔東京美術倶樂部にて開催、上は餘興の千家裏法茶席　中は堀琴松園氏の活花．下は同流にのみ見ゝ花筏

姉妹



女(りの二)

第四回新學期開始

●入會の最好機は來れり

五月卅一日迄は入會金免除の特典あり

▲自宅に在りて業務の傍、高等女學校程度の學術技藝を修得せんと欲するものは速に本會に入れ、本會發行の實用女學講義錄は前記學課の外に我國家庭の事情に參酌して女子必須の諸學藝を遺憾なく講究せしむ。

▲會長 尾崎行雄氏自ら會務を監督し取扱親切也
▲講師 斯道に經驗深き專門大家拾數氏之に當る
▲組織 高女課程以外家政技藝等を加へ實用的なり
▲講義 言文一致書入り假名付きにて誰にも判る
▲質問 不明の處は何回にても自由に質問を許す
▲雜誌 會員にて講義錄の外機關雜誌を毎月進呈

實用女學講義錄

▲本會は中學講義錄を發行して成功せる深き經驗を基礎として新式の教授法により丁寧懇切に教授す、小學校卒業位の學力あらば何人にても容易に了解することを得べし

▲會員の詩歌文章俳句は添削して雜誌に掲載す
▲會費 全學期の會費は都會半月の學費も足る
▲入會 何時入會するも講義錄は第一號より送る
▲章票 會員には會員章、修業證、卒業證を送る
▲特典 此際至急入會者には入會金を免除すべし

●見本つき規則書申込次第無代進呈

講義錄第二號は五月一日發行す

東京神田區駿河臺

大日本國民中學會女學部

振替東京四二〇〇番、電話本局(三〇〇四番 三七〇七番)



女學世界

五月號

第拾巻第六號



私の妙齡時代

井深花子

▲新開地の綿摘

私の父（大島協悠）は備前天城の藩士でございました。城主の池田は陪臣でございますけれども、岡山の分家でしたから家格は良い方で、普通の陪臣では持つことの出來ぬ折紙を持て居とか申す話を子供の内に聞て居りました。唯今はもう城址に學校が在るばかりで昔の『俤』は少しも殘つて居ませんし、藩士も諸方へ離散いたして、維新の際農業に從事した人だけが殘つて居る位のものでございます。私の父は維新の際直ちに家祿を奉還して了つたのですが、其折藩主から五町歩ばかりの新開地を賜はりました。この新開地は蘆葦が一パイに繁つて居る島でしたから、父の獨力でこれを開墾するのには却々むづかしいのでした。處が工事を引受て成功の曉に地面を山分に爲やうと申す人がありましたので、これに委托いたし漸く綿を作る位の畑が出來たのでございます。併し父は鍬一つ握つたことのない人でしたから綿を作ると申しても小作人任せで細かしい見廻りもいたしませんから收益の實際は分らぬのでした。それに父は極溫柔な人で小作人が本年は氣候が惡いとか何か外れたとか申して言譯にまゐると先で申すのに氣をかけてこちらから同情する位で、姉なぞは『お父樣は何でも小作人の云ふことを御無理御尤と聞ていらつしやる、蔭で伺つて居ると本當に可笑くなる』とよく申して居りました。こんな風でしたから新開地の收益は何の足まいにもならぬ位なものでございました。私は幼年の折この新開地へ同胞達と綿摘に

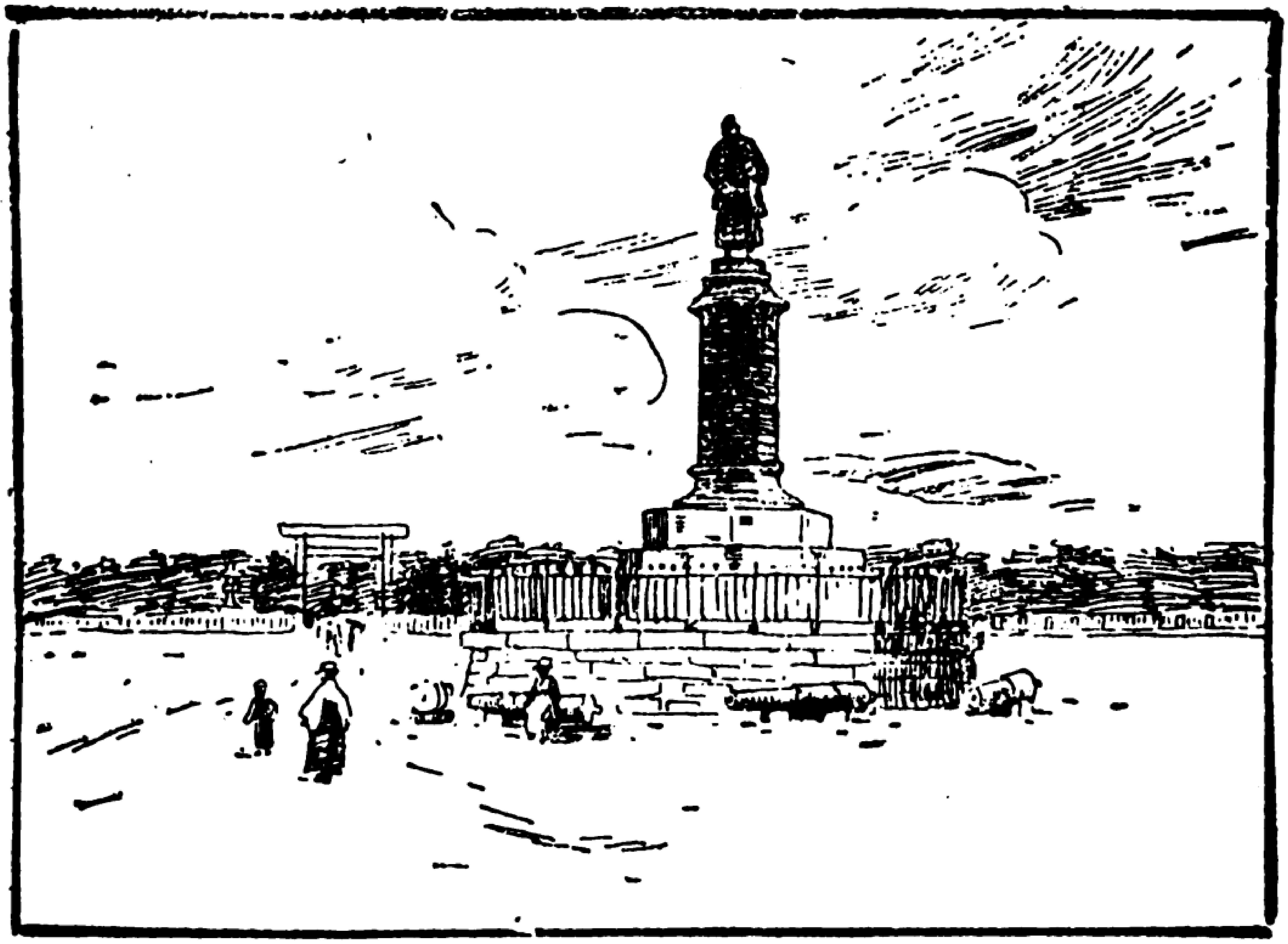
まゐつたことをかすかに覺えて居ります。

▲半途で小學を退く

私の母は儒者の家から出た人でしたから其頃の婦人にしては漢學の素養もあり極嚴格な武士氣質でございました。母は中風に罹り十三年間も病床に居りましたので姉の手一つでは看護から家事萬端が間に合兼、據ろなく私は十二歳で小學校を退き姉の手助をいたすことになりました。尤も其頃の小學程度は或科目に依ては唯今より高ふございまして、上等八級から國史略位教科書に入つて居りました、それに勉強次第で級を飛越と云ふことも出來ましたから就學年限の短い割には幾分か進んで居たのでせうが、受持の教師が私の退學を氣の毒がり種々心配してくれましたので退校後家事の隙を見てこの教師の許へ漢籍の稽古に通つて居りました。

▲老て見えた

其後私共一家は大津に居る兄の許へ引取られてまゐり私は十七歳まで家事に働らいて居りましたが、兄は職掌柄でもありませうが私の希望に同情して與れまして京都の女學校へ入るつもりでございましたところ。私は同志社の方へ入りたいと望んだのでございます。併し兄はその頃儒教主義の人でしたから同志社の方は不贊成で彼是入學の運びにいたりかねて居ます內神戶の女學院の給費生に世話しやうと云ふ人がありましたので、兄の意嚮に背いて學費を貰ふのも心苦しいと存じて居つた場合、丁度宜い機會だと思ひまして該校へまゐることに定ました。女學院の校長は私を餘程老成な婦人と看られて參り早々病氣の生徒の監督を爲て病院に連れ行ことを私に任かせられました。これは私が子供の內から家事を引受て居たゝめに俗事は年齡の割に慣て居り世帶じみて居たからでございませう。併し學校生活に慣れるに從がひ追々若返つたと見えまして、卒業時分にはお友達に大層若くなつたと申されました。



靖國社大村銅像（帝都百景の内）

▲重寶がられ乍ら勉學

私は小學を止めましてから殆んど六年間家事ばかりいたして居たのですが、算術とか理科だとか云ふ方は好であつた所爲か割合に忘れませんでしたので、(唯今でも頭腦の少し痛む折など算術のむづかしい問題を考へますと面白くつて氣分がよくなります)女學院の舍監は私を助敎につかつて與ました。それから他に字の上手な人が少かつたものと見え私のやうな惡筆でも書記につかはれました。こんなことや病生の世話なぞで可なり重寶がられながら學んで居りました。その代り他の生徒のやうに全科目を學ぶ暇はなかつたのですから習字や裁縫なぞは學ばない、その時間に學校の用向を勤めると云ふ風にいたしました。尤も裁縫は入學當時に試驗を受けた折及第しましたので敎師から學ばずともよいと言はれたのでした。

▲幾度か英語に挫折しかけた

英語の手ほどきには非常に困りました。何にいたせ十七にもなりましたものが十や十一位の生徒と一所にABCから習ふのですから却々難義な次第でございました。きまりが悪いのは扨置き年を取て居ますと頭腦が理窟ぽくなつて居ますからこれ〳〵の綴りで何故こんな音が出のであらうなぞと一寸した發音にも首をひねつて考へました、之れで却つて無心に覺える子供にかないませんので熟々厭になりいつそ廢て了うかと思つたことが幾度だか知れませんでした。處が清國に生れて孤兒となり十一歳の時アメリカの宣敎師に養はれ後この學校へ入つた婦人がありましてこの婦人が頻りに私を勵まし、決して廢てはならぬと一方ならず面倒を見てくれましたので私も一生懸命に勉强する氣になりました。一心と申すものは不思議なもので初の内は皆に後れて居たのが二年三年經ちます内にズーッと進歩して年下のものをズン〳〵追越て了ひました。其頃この校では語學より讀書の方が進んで居りまして卒業前には唯今見ても少々難しいと思ふ位の文明史なぞも讀みましたので、「マサチユーセッツ」へまゐつてからも大學の講義を聽く方はたんと困りませんでしたが、友達同志が食時の折なぞ話し合て居るのを聞て居ますと、今西の方の話が出かと思ふと直に東のことに變る不規則な早言葉が却々分り惡くて困りました。併し言葉の方は交際する内に自然と覺えられるものですから、讀書の力がついて居つた方が都合がよかつたのでございます。

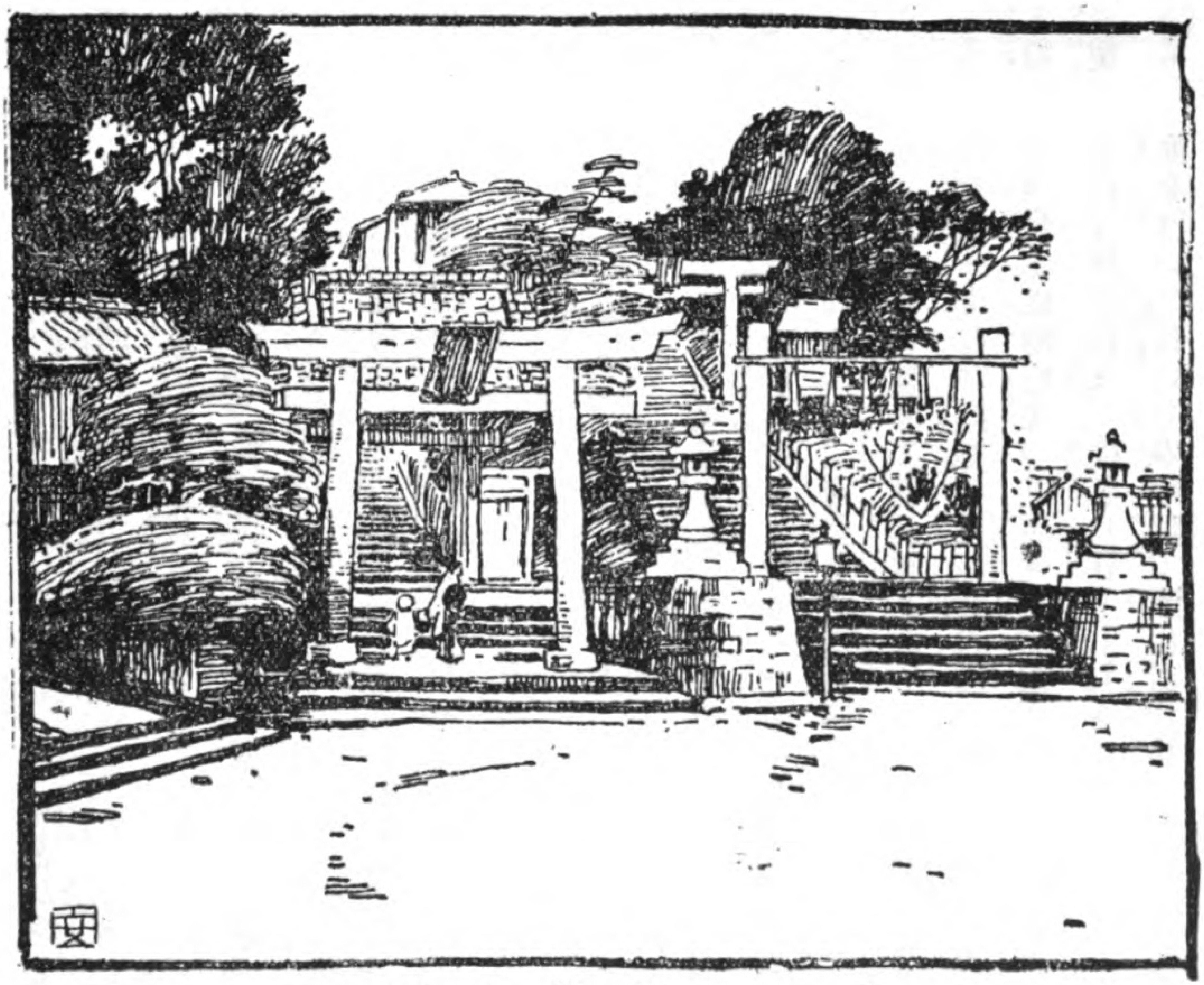
▲氣焰萬丈の文章

女學院に居た頃は作文に隨分身を入たものでした、その時代の女學生は寄とさわると女子の將來について議論を戰はしたり、完全なる女敎師養成策を研究したり、吾々は一致して師範校を設立しやうとか云ふやうな突拍子もない空想を語り合たもので、唯今の女學生の空想とは餘程違つて居りました。作文の敎師も主にこんな風の論文を生徒に作らしたもので、私なぞも心血を注いで長いものを書て出しました。何の論文でし

たか忘れましたが數十ページに渡る意見を書き立てました時、敎師が文章の中程のところへ『此處まで添削して鷄鳴を聞く』と朱書したことがございました。唯今の敎師は生徒の作文を直すのを面倒がる方もあるさうですが、その頃の敎師は熱心に添削して色々の批評を書入れたものでした。私共はその批評を見るのが樂しみで、又友達のを見やうとしたり見せまいと隱したり大騷ぎいたし合たものでございます。こんなに熱心に書いた文章もその後打捨て了ひましたから近頃は一寸感じたことさへ言ひ現はすことが出來ず、知人から『何か一つ論説をかいて下さい以前あんなにおやりでしたから』なぞと言れますと殆んど當惑して了ふのでございます。

▲英文添削の仕方

女學院では英和兩方の作文をいたしたのですが、日本の方は前申すやうな大袈裟な空想的の題



築土八幡社　（帝都百景の内）

が出ましたけれども、英の方は極簡單で美なぞと云ふ種類で、「茶は如何にして製するか」と云ふのが其頭の米國女子大學卒業試驗問題であつたと聞きました。空想に固まつた私共の頭腦にはこんな問題は餘り無味のやうで變に思はれたものです。而して英文の添削は教師が唯文法の間違を直すだけで、日本の教師のやうに自分の意見を挾んで作文の趣意を直すと云ふことはありません、善惡に係はらず生徒の思想をその儘に存して置くのでしたから、日本の文章とは餘程呼吸がちがひました。

▲逆さまの境遇

神戸女學院を六ケ年で卒業いたして後、鳥取の女學校で二年程敎へて居りました内、米國の大學の方へまゐられるやうになつたのですが、私の敎育の受け方は普通の方と反對でありました。丁度就學盛りに家事の經驗を積みそれから學校生活に移つたので先づ逆さまでございました。併し唯今になつて考へて見ますと子供の内の實地敎育が餘程修學思想を堅固にいたしたやうに思はれまして、逆さまの境遇が却つて有益であつたと存じます。尤も私は何時までも周圍の障害もなくゆつくりと學に就て居られたのですが、普通の方は二十歳になれば結婚と云ふ問題が起りますから矢張學問は早く修めて置かなければなりません。

何うも唯今の生徒は母校のことを深く思はぬ傾があるやうで、校費生なぞも相應に不平を申すものもあり以前の苦學生とは餘程違ふと云ふことも聞きました。誠に忌々しい次第と存じます。私は唯今でも母校の蔭恩は深く心に銘じて居り、母校のことに關しては及ばずながら盡力いたして萬分の一も報ずるつもりでございます。私は女學院時代から米國女子大學時代まですーつと附けて居つた日誌を唯今披いて見ますと、感想が同一徹であつたことが分ります。外國へまゐつたら華美な表面を見ないで實質の知識を探究しなければならぬと云ふ感想は始終變らなかつたので桑港へ着いたHの日記にもこれが書いてございました。

端午の節句料理

平　蕗、筍、燒豆腐、笠子、百合
椀　わらび、針魚、生椎茸
膾　ちぎり獨活、防風の根、鯵、ことぶき菜、生薑
汁　鯉の濃漿
猪口　青豌豆又はうづら豆
壺　ひらめ
燒物　鯛の鹽燒

右の煮方、茹で方は

○お平＝＝蕗は最初に茹で、皮を剝き、煮出しと砂糖とにて煮、然る後醬油にて煮るなり、
筍は糠にて茹で、煮出しと砂糖と味淋とにて煮、然る後醬油にて煮るなり
燒豆腐は斜に切り一寸茹で、味淋と酒と半々の分量にて煮、後醬油を入れて味をつけるなり
笠子は水にてよく洗ひ、味淋と醬油とにて煮るなり。

○椀＝＝蕨は灰汁にて茹で、灰汁の中に暫時浸し置き、後水にてよく洗ひて煮るなり。

○膾＝＝これは五色に作るなり、即ちちぎり獨活は白、防風の根は赤、鯵は鴇色、壽菜は青、生薑は黄、これにて五色となる、これを三杯酢にするなり。

○汁＝＝鯉を水にて丁寧に洗ひ、適宜に切り置き、田舍味噌を立てゝ最初より鯉を入れて煮るこの鯉こくは特に端午の節句に因みて作る事とす

○猪口＝＝青豌豆は始めザット茹で鹽、砂糖、味淋、水にて煮たる後、醬油をさすべし

○燒物＝＝これは鯛を鹽燒にするものなり

○壺＝＝鮃の身を摺鉢にてよく摺りつぶし、これに味醂と鷄卵の白身を入れて尚ほよく摺り椎茸などの煮たのを交ぜて蒸し置き、(これは椀に一つづゝ入れるならば其積りにて豫め其大さを見計らふべし)次に新らしき柏の葉をザット湯がきこれにて前の蒸したる肉をつゝみ、其上に山葵をあしらひ汁を餡かけとなす時は味極めてよろしきものなり





今日一日腹立てまじき事を家憲とせらるゝ岡田夫人

婦人記者

帝都の實業家にして佛教に歸依して居られる方も多いのですが、中にも岡田治衛武氏の如きは篤信家でございます、同氏夫人靜子女史は御良人と信仰趣味を同うせられ居常傍を離れず眷々服膺して居られるのですから、其お話も自然世俗の上に超越して居られ人を感化せらるゝこと一通りでございません。風の強い一日記者は西久保巴町のお邸に夫人をお尋ねしてその御經驗談を伺ひました。

▲私の家の晩餐

私共の晩餐は二時間より早く濟だことはございません。主人が御酒を頂くと申したところで僅か一合足らずでございますし、別段に珍味がある次第でもなし少い家族でこんなに食事が永くかゝるのは可笑いやうでございますが、これは主人が一日の中で一番の樂しみにいたして居る佛敎談が始るからでございます。主人は日曜でも休むことの出來ぬ多忙な身體でございますから毎朝床を離るゝと先第一に身を清め佛前に向ひ禮拜勤行し次に食事に就き夫より前夜よりの來翰新聞など一通り目をとほし外出かけに留守中の用事を黑板に記して參ります、私や書生達も又留守中の出來事や相談すべきことを黑板に記して置き主人が晩食に座りました時、悉皆これを報告することに定てございますので、これらの談話にも一寸暇が要るのですが、主人はこの俗用が濟だ後に佛敎を土臺といたした精神修養の講義を始め時のたつのも忘れて話すのでございます。主人も私も其日の出來事について原因や結果をきわめたり俗用の處置についての考へなぞを相談いたして居る内にいつしか佛敎の道理に歸著して了ひますの

で誠に興味が深うございます。而して主人は如何なる夜でも寢りに就く前の一時間は必ず佛法の經典を誦讀することが三十餘年の日課で之を缺かしたことはありません。これが何よりの快樂で一日の勞を悉皆忘れると申して居ります。

▲怖い事も苦になる事も無くなりました

主人は旅行の時などはよく佛像や經卷を携へることがありますので先年大阪から東京の或會社に轉任して來ました時などは「今度の社長は以前坊主であつたに違ひない」と云ふ社員の噂を車夫がよく聽いてまゐりました。尤も主人は代々佛敎篤信の家に生れ幼い時から此道を修めたのでございますから坊主と評されても良い位のものでございませう。併し私の生家は佛壇と先祖の位牌が有るばかりで別段深い信仰と申すものもなかつたのですから當家へ嫁りたてには朝夕佛壇の前に禮拜するのを、未だ十七やそこらで緣起の惡るい嫌なことのやうに感じました。それでも良人や姑が熱心に勤行されるので據なしに後の方から眞似をいたして居る内に段々良人の説法に耳を傾けるやうになり段々と信仰する樣にもなりまして今では佛敎を根據として家事萬端にこれを應用して行く樣になり無益の心配や煩悶が根切りになり世の中にこわい事もなければ又苦になる樣な事はちつともなくなりましたのは、全くこの佛敎のお影だと喜んで居ります。

▲今日一日腹立間敷事

主人は私の鏡へ「今日一日腹立まじきこと」と書た紙を張て置いて呉れます。忍の德は貴いものと知りながら兎角勘忍袋の緒が切れ易く、特に婦人は優しいやうで邪推や恨みの念がつよいものですが、朝鏡に向つた時この張札を見て一日だけはと感念いたせば辛抱が出來易いものでございます。而して翌日も又この通りに感念いたし毎日々々と積でまゐる内に自から習慣となつて忍耐力が強くなつてまゐるやうでございます。

下女達の鏡には私が『今日一日腹立間敷事』を張札いたして置ますが大分効能があるやうに思はれます。

▲下婢の宗教心

召使は男女とも相應に數多く使ひますが就中女の方は私の責任で殊に仲働や小間使は大抵見習にまゐつて居るもので、高等女學校卒業の婦人もございます。私共では召使達に佛教を奉ずるやうに强制はいたしませんが、精神修養のために每晩主人の說法席へ一同を呼んで傍聽いたさせて居ります。猶其上に一ヶ月二回近所の光明寺と云ふ寺を借り受け特に私方より講師

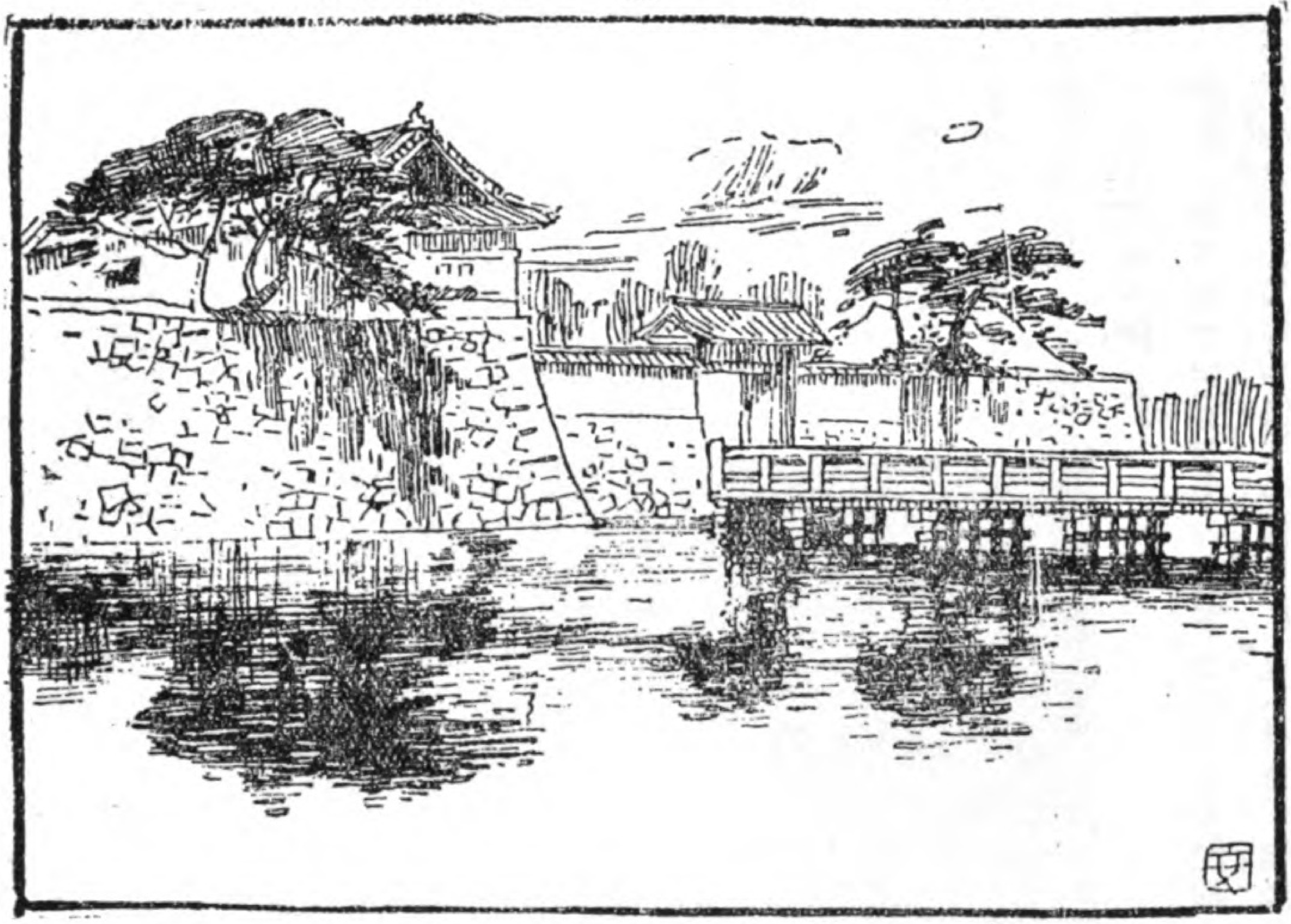


を聘して說教を致させ近傍の信者と共に佛教の道理を聽かせることにして居ります。召使は皆妙齡のものでございますが宗教の意味をよく解しまして陰日向なぞ少しもいたしませんし、朋輩爭ひをいたしませんので誠に臺所は靜かでございます。

▲信仰と子息の洋行

私の倅は十八歲の時米國へ留學いたし五年ばかり居りまして歸りましたが其時私のお友達の皆さんが獨り兒を遠方へお手放しになるは隨分お氣遣が增しませうと云れましたが私は身體は遠く隔てゝも親子共信仰さへ堅固であ

大手堀　(帝都百景の内)



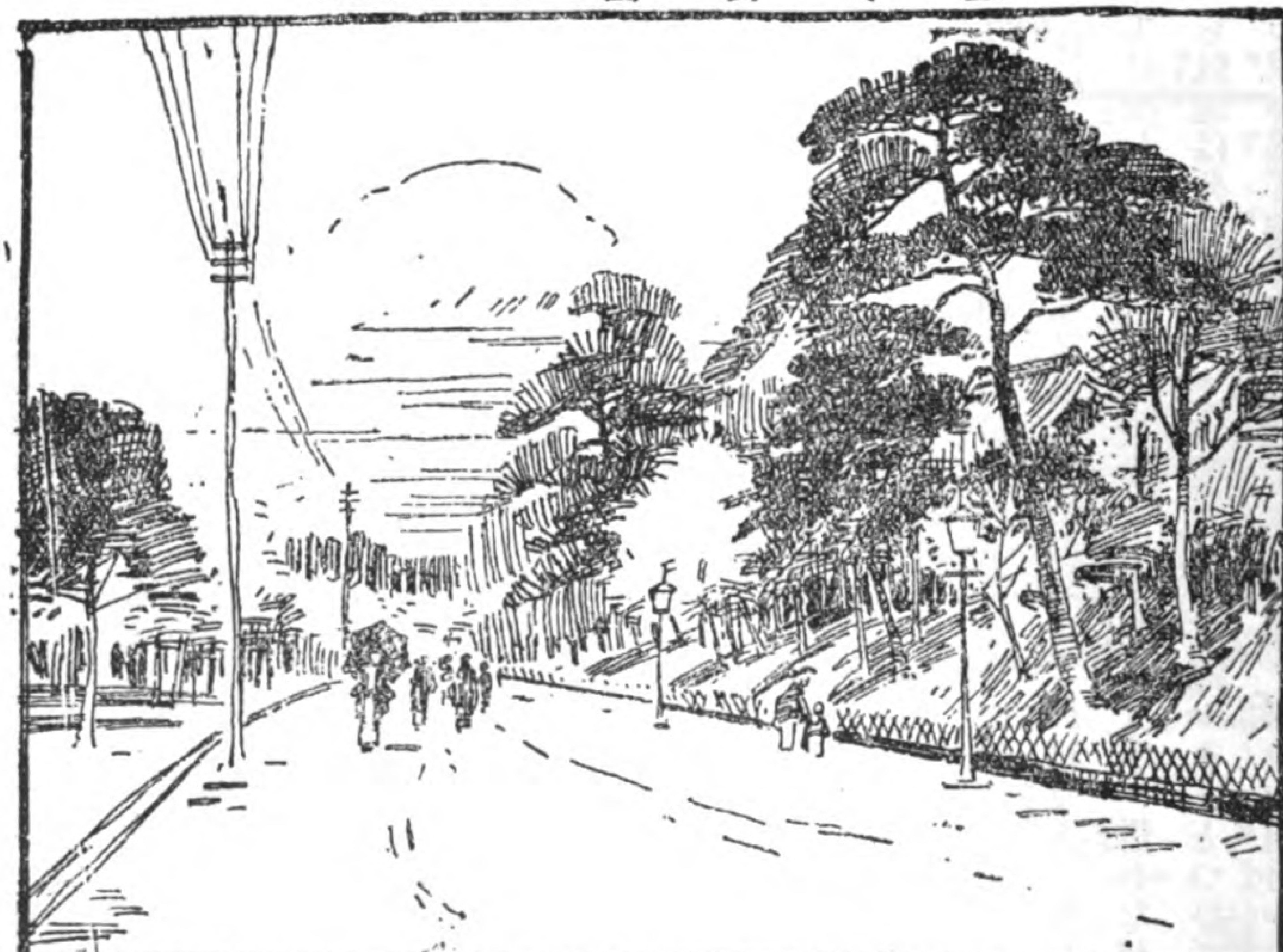
れば少しも心配はないと存じて居りました。この點は全く宗教のお蔭でございませう、出立の際、良人が絹地へ南無阿彌陀佛と書て軸に巻き小さい守袋へ入れて紐を付け伜の胸へかけまして、これを歸國の時まで肌身離さず着て居なさいと申し付けました。伜は五歳で大病にかゝつた際、『私は死で何處へ往の』と尋ねました位で宗教の方は遺傳的に心にかけて居りましたから父の命令通りに五年間守袋をかけ通して歸りました。併し在米中の手紙に、『僕の守袋を學友が見付て米國流の見解でそれは何だ、君の姆アの寫眞だらう、見せ玉へ〳〵とからかはれて困る』なぞと書いてございましたが是等は皆宗教の御蔭で愛兒に別れて居ても心を傷むる樣のことはありません。

▲夫婦の關係と他力主義

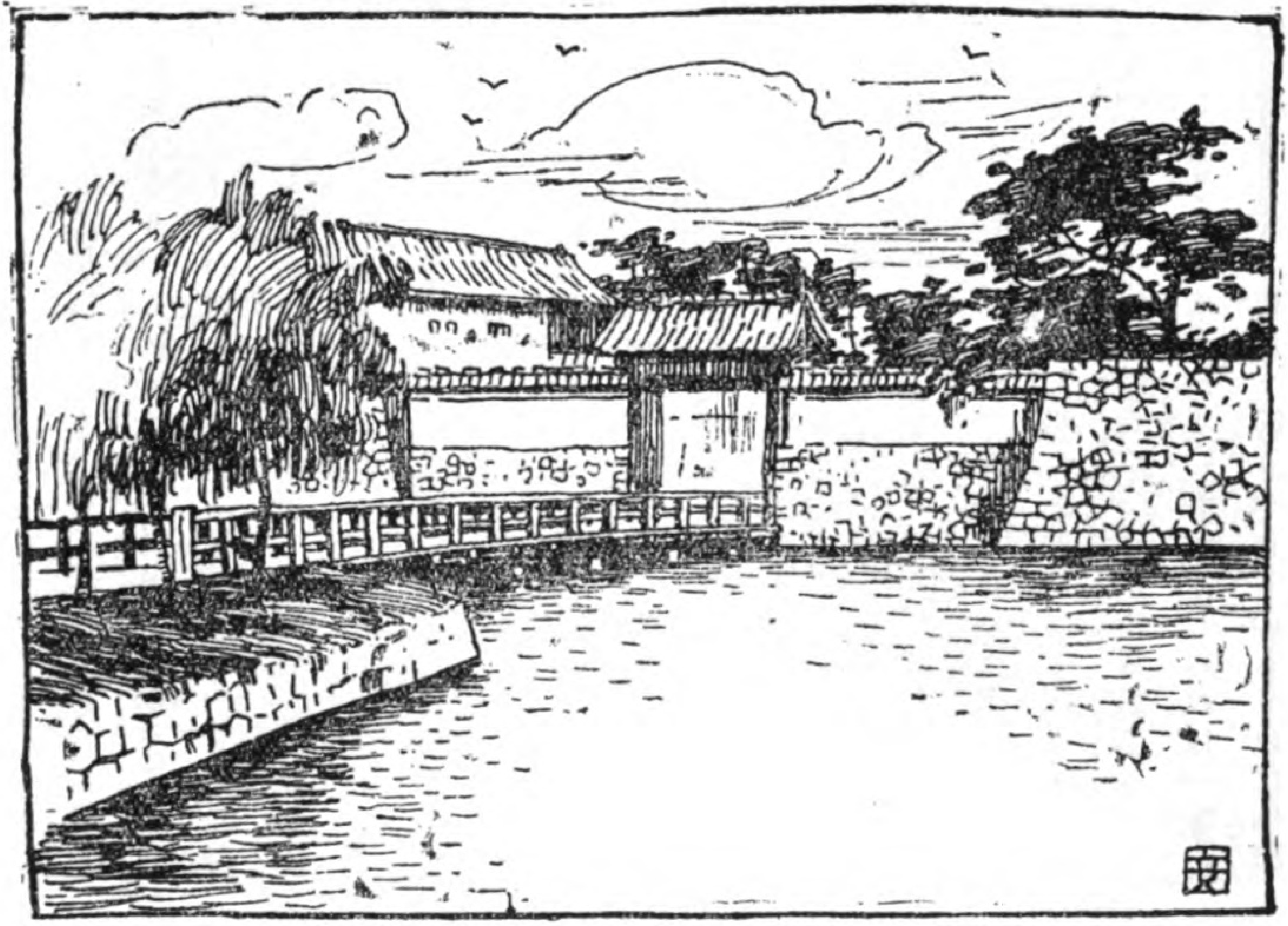
佛法には自力門と他力門の二つがありまして、自力と申す方は智惠高く氣根の能い人が自から修行もいたし觀念もして佛菩薩の悟りを開くと云ふやうなわけ、

又他力と云ふ方は氣根も鈍く世事に追れて專門に佛道修行も出來ぬやうな人が絕大無限の慈悲と智惠とを具へて居らるゝ佛陀の力らに身を任せて安心してその命を信仰し自己の計らひを交へずして佛菩薩の悟りを開かしてもらひ、現世も美しく渡らしてもらうと云ふやうなわけでございます。この二門共に深き道理のあることでどちらでも勿論目的は達せらるゝことでありますが、一家の內にも又自然にこの自力と他力の二つがあるやうに私は思はれます。それで自力がよいか、他力がよいかは別論といたしまして、我日本風の家庭特に夫婦の關係はどうしても他力主義でなければならぬと私は信じます。なぜなれば元來我國の結婚は最初から男女同權などゝ云ふやうな約束は言葉にも形にもありません、女は良人に從つて家庭を作ると云ふことが儀式の上にも誓ひの上にも明らかになつて居りまして古來『夫唱婦和』とか『三從貞順』とか申す敎訓もあるのですからどうしても妻が夫に順がはなければ一家は治らぬと存じます。果して從ふべきものとすれば何事

上野公園（帝都百景の內）



和田倉門　（帝都百景の内）



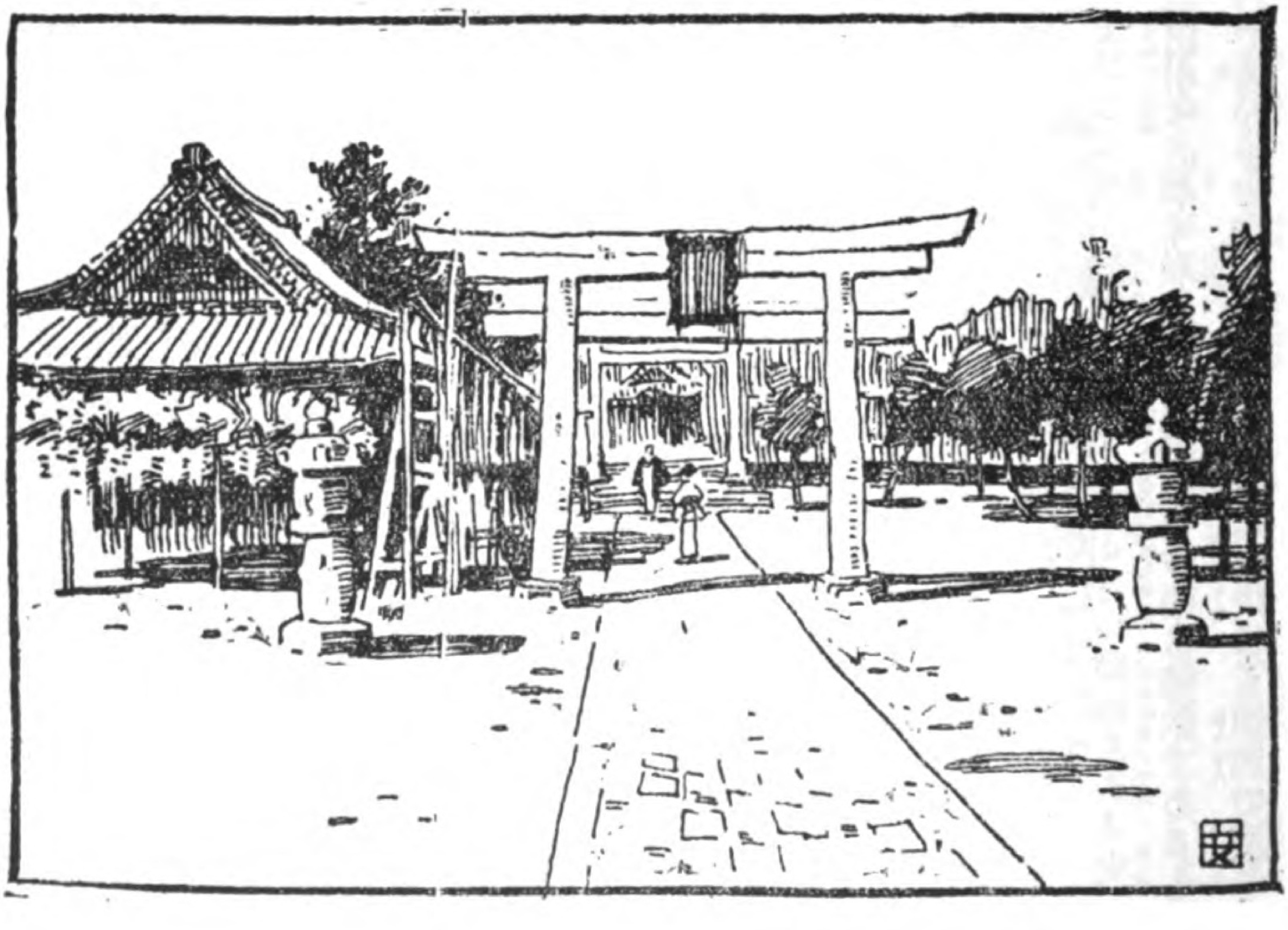
も快く良人の命に從がひ、良人を信仰して家政を助け一家の安全と繁榮とを計るのが眞實の道でありませう。扨さうなると妻たるものは第一に我と云ふことを捨なければなりません。已に身を任せ命に從ふと云ふ決心がつきましたらば我と云ふ心は要ません。又我を捨た以上は丸で捨るのがよいので、自分の都合のよい時は命に從ひ、都合の惡い時には命に從はぬと云ふやうな勝手我儘の順從では何の役にも立ますまい。サアさうなると『けれども』と云ふことを注意しなければなりません。

▲『けれども』が惡い

他人に對してならば彼我同權とか何とか理窟をくつ付て『けれども』の少し位出してもよいか知れませんが『けれども』と云ふ言葉は即ち我心でこれは良人に對しては少しでも出してならぬことゝ存じます。併しながら教理は分つて居りましても實際に臨みますとつひこの我が出て理窟が付けたくなります。誰々が自分を誹

つた、自分にも悪いところはあらう『けれども』此方にも少し理窟があるとか、良人の叱言は一應最もではある『けれども』此方にも云ひ分があるとか云ふ風に『けれども』と申す附句をいたすのは極宜しくないと毎々治衛武から聞ますが成程『けれども』を捨さへすれば虚心平氣に自己を省ることが出來、明月の如く清々しい心地になられるのでございませう。召使が廊下の眞中へ茶碗を置たのを主人が知らずに蹴飛して壞した時には主人は必ず『こんなところへ茶碗を置く奴があるか馬鹿ナ』と申しませうが、召使の方では『盲目ぢやなし眞中に茶碗のあるのが分らないのか下を見て歩くが良い』と、心の内で嘲笑ふでせう。又主人が眞中へ置た茶碗を召使が蹴飛した時には、主人が『盲目ぢやあるまい、其處に在るのが分らぬか』と叱る。召使は『置く奴が悪い』とつぶやきませう。些細な出來事についても彼我の理窟は如何でもつくものだと說法でよくこんな例を引れますが、我を捨ると申すことは却々容易なものではございません。

深川八幡社　（帝都百景の内）



併し赤の他人に向つて我が捨られぬと云ふのなら未しも同情を寄せられる場合もありませうが、妻が敬愛すべき良人に向ひ我心を交へ「けれども」なぞと自分の言行に理窟を付て對抗するやうではとても圓滿な樂は得られますまい。又假令口で言ずとも心で「けれども」と思ひながら順ふのは虚僞の服從で純粹の從順ではありません。眞實良人を敬愛するのなら心の底から純粹に從はなければなりません。尤も若し良人の行ひに惡いことでもあつた時は穩かに諫め、三度諫めて聽れぬ時は唯泣て從ふより外はないと存じます。諫めて聽れぬ時は逃出すと云ふやうな女では大和魂とは申されないかと存じます。つまり妻は「けれども」があれば家庭は冷かで風波の種子となります。「けれども」がなければ暖かで美しく樂しい一生が送られることゝ私は信じて居ります。

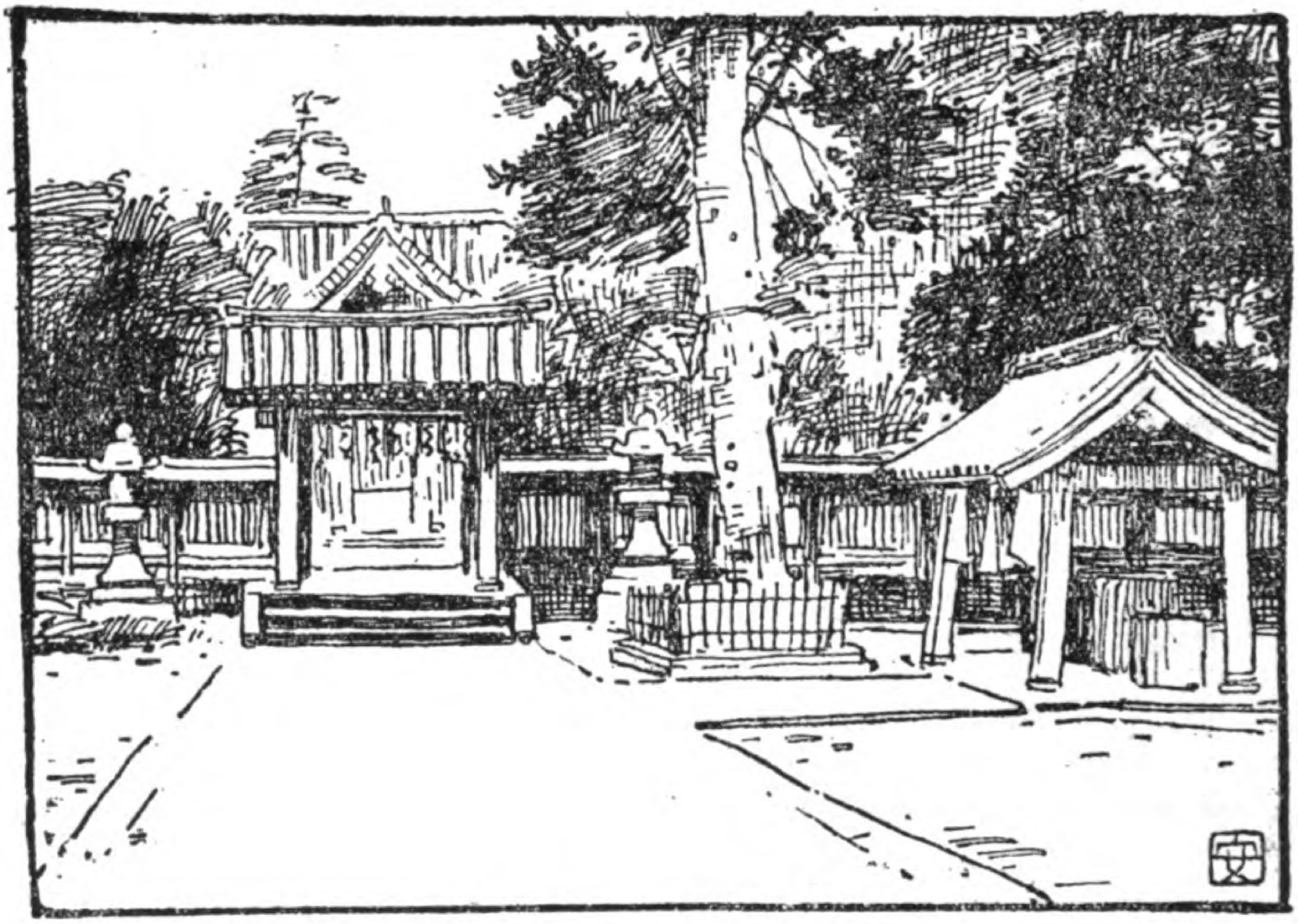
▲迷ひも深く悟りも立派で　ありし或る貴婦人

側室の愛に溺れた主人に虐待されて居た某貴婦人が怨恨の極自暴自棄に陥り、愛の敵を刺して恨を報ひ遂す乃に我身も果てゝ了うと決心して、毎夜剃刀を懐ろにして隙を窺て居られたさうで、其夫人は機會を待つ間にふと披き見し小冊子は中將姫の一代記。繼母と良人との違はあるが迫害に堪ゆる苦しさは我身も中將姫も同じことであると歎息しつゝ讀んで居る内に、姫の氣高き思想に感激すると共に迷へる貴婦人の頭腦に光明が閃きまして忽ち懐の剃刀を捨てゝ悟道に入られました。この夫人は今日熱心な信者となられましたが自身が本當の安心を得られたのは全く其主人の賜であると云はれて感謝して居られます。が中將姫の佛教信仰の力が今の世の婦人を悟らしむるは誠にありがたきことであります。

▲外國婦人との交際について

我田引水のやうですが煩悶病の妙藥は佛教であると信じて居ります。私の知己の婦人の中にも煩悶の極こ

日枝神社 （帝都百景の内）



の道に入れたお方は澤山ございますが、今日では心配がなくなつて間が拔たやうだと仰るくらゐでございます。まだこの年で縁起が惡いと仰る若い御婦人方も少しお聽になりましたら忘れ難い慰安と興味をお感じになりませう。又交際上から申しますと外國婦人と初對面の折握手と共に第一に彼から尋ねられるのは宗敎で此際上流婦人が私は無宗敎ですと答へられるやうでは大に信用を落す次第でございますから、平生宗敎思想を養はれることは必要かと存じます。私共が企てました善友會なぞもこの目的で會員は中流以上の婦人と定め講話を大内先生と私の良人とが致して居ります。又築地本願寺に開く令女敎會も上中流の婦人會でございますが例の衣裳競進會の弊を防ぐために出席者は綿服と規定してございます。また少々お話し致したい事もありますが今日は約束がありまして外出がけで時間がせまりましたから又他日更に悉しく御相談致すことゝして今日はこれで御免かうむります誠につまらぬ話しでお恥かしう存じます



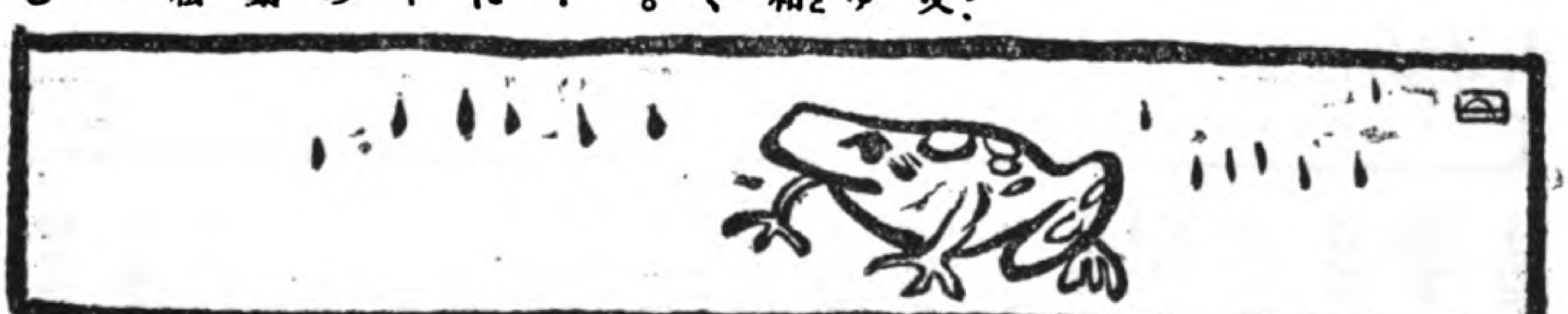
卒業後の見習奉公

なでしこ

「人を使ふ者は先使はれて見よ」との金言を服膺して厳しき父は我身を他家へ見習奉公に遣はすべく促がしたまひぬ若草萌ゆる三笠山のほとり、いとも閑靜なる學び屋に培はれし我等大和なでし子、師の君の惠の露にうるほひて四とせの月日首尾よく櫻の花の榮ゆる頃、卒業てふ證し文はなむけに世の中へ出でぬ。

青春の血の漲ぎる乙女、燃ゆるが如き上向心は……

されど慈愛深き兩親の「使ふ者は先づ使はれよ」てふ、仰に吾が胸の焔はあやぶく吹き消されて、學生生活の香まだ失せやらぬ花の四月十八日と云ふに、母に連れられて紅塵萬丈浪速の然る大家に見習として奉公すべく旅立つた。過ぎし日までは紫袴の裾長く少さき靴はきしめて、得意滿面、大道を濶歩した私僅か十日餘にして嘗つて吾が心にいやしと見し、下女生活に一年を過さんとはあゝ思はざりき、亂るゝ胸は麻の如く、いつし



か梅田へと汽車は着いた。

人繁き浪速ながらもこゝ船場はいづれも屈指の家並だけあつていと靜かであつた。

と見れば塀越に松の大木そびゆる立派なる構へ之ぞ私が御主人と仰ぐ家である。

さすがに酷い様でも母様は女、私をこの家に送りとゞけていざ別れの際、「餘り辛ひと思へば無理に辛抱せいでもよい、ほゞ様子が分つたらすぐおしらせ」と溢るゝ涙をそつとお袖にかくしていらつしつた。

當日はどうして寢られやう、喜憂交々まどろみかゝる私を搖り起す、聞き馴れぬ時計の四時を報じた時、私はそつと起き出て、枕頭にすわり込んで心地よく眠る朋輩の寢顔窺うて居た胸ははげしく波打つ。

夜はほのぼの明ける頃、召使一同は寢足らぬ顔して掃除にかゝる、私は疊、さやの間、上藏所を古參の人の見習ですました終つて朝御飯についた、どなたかのお古らしい四つ足の膳に折紙の箸入墨くろぐろと花としるされてある。冷たい御飯に黒い様な香の物、何してこんなもの咽喉へ通らう、御兩親が御覧になつたらどんなに思ひなさるであらうと思ふと、熱い涙がほろり。

七時頃髪結さんが來て長年結ひなれた束髪はこはされてビン付べつたり、一筋亂れぬ質素な蝶々に結ひかへられた、そして

行李の中の双子織の千筋の袷に赤氣のないめりんすと黒繻子の晝夜帶胸高にしめた、その時の心、何だか悲しかつた、昨日までのハイかつた風は何處へやら、ほんとに人は作り樣でどんなにでもなる、まるで吾家の婢にそつくりだ……。

おもへば我は今人生の花ざかり榮あへ處女時代、身のまはりに滿艦飾でもほどこして、人の羨望の的となられ得べきを、お春さんと云ふ女中に連れられて、旦那樣奥樣に御あいさつにいつた、「お上樣の前へ出る時はかうして前掛の端折らなければならぬ」と教へられる、その外戸襖のたて方や、お給仕の順序など繰り返し〳〵教はつた。

勝手なれぬまゝに花々と呼びまはされて、憂き月日を暮て用事なくして片時の間も身の自由にならぬをかこちつゝ、冷たい床に心ゆく計り泣いた。

御家内は、御夫婦に坊樣一人のお三人、召使は男女合して十名御商賣はなし、たゞその日〳〵を樂しく趣味多く御暮し遊ばせばよろしいとか、

されば私の仕事はまづ樂なものですが、嚴格なお袋だけに氣のやめる事甚だしい、二六時中只ハア〳〵として苦むばかり。

いつか娘を持てるよその母親の話に「他人樣の御飯たべさせましても家へ歸れば氣がゆるむので御座いませう、又候氣儘が出ましてね、ちつと娘らしく落付いてお針は致しませんし、



年の手前もあらうに、小さい弟をとらまへていぢめる、ほんとにいつまでも、ねんねで困ります、されど御暇いたゞきました時、朋輩に何か御世話になつたたつて持たしてやりました帶一筋上げたと申して居りますので、まあそれだけで氣がつけば結構だと笑うて居ります……」と。聞いた事もあるが成程他人の飯を喰べただけの事はあるとおもひました。

旦那樣は未だお若い東高等商業の出身だとか、日々の仕事は樂謡曲を御けいこ熱心に書見、又徒然に奥樣と圍碁遊ばして、樂しさうな笑聲。あゝ生存競爭の世の中にかく風流三昧にその日を暮らされるのは、これも祖先の餘徳かや、

いつぞや旦那樣のお話に「あゝ花、お前の家は、奈良奈良はほんとに靜かでよい處だ、幸ひ春日野に地面があるので別莊を建て樣としたが、千代か(奥樣)公園に鹿が澤山居るので恐ろしいと云ふからよしたよ」と仰言つた。

あゝこんなお家へ嫁いだ奥樣も幸福だとおもふ、奥樣と云へば、鴨川の水に産湯を遊ばしたからであらう、男でゝ輪廓のとゝのつたお顔は、あくまで白く、ぬれ鳥の樣なお髮を粋な根下り蝶々におそろへ遊ばし、絹物づくめの著作り、毎日退屈で困つていらつしやるが朝お目ざめ後、一時間の御化粧は日々の大仕事である。私いつかあのお時さんの針箱の上にあつた日記をふと盜み見した、始めの日見えの記に、かういふ事が書いてあ

つた。

「花ならば濃艷なる牡丹にたとへつべきか、二九の花盛りあゝ人繁き都にも得がたき嬢様……とは思ひきや、之れ六つの坊様ある「奥様なりとは」と何だか古めかしき感嘆の矢をはなつてありました、こゝに於て日頃衛生美人を以つて満足して居る私もいさゝか「美人なるかな」とかこちたくなる。

月の一日十五日は所謂別家の御禮受なさる日で、奥様は餘儀なく丸髷に遊ばす、いつも重くるしい丸髷なんか嫌だと仰言るがどうして蝶々なんかと較物にならない、第一大家の奥様として品位がある。

當日は私共も結立髪に薄化粧して、晴着にかへて間斷なく見ゆる御客様のお取次、白足袋チヨロ〱と小足でお座敷へお茶や御菓子を運びながら愛想をする。

御夫婦にお似合遊ばして色白のほつそりした、女子とも見まほしき坊様、毎日乳母を相手に二階のお部屋で、勸工場の様に玩具を陳列して遊んでいらつしやる。

鬼も十八年頃の者が四人居る、何れも濱花育ちだけあつて辛ひ勤めを辛いともおもはず働らいてゐる。

下働きのお竹さんは年増だけに、仲々しつかりしたものそれだけ又意地悪で年下の私達上女中四人は随分泣かされる。このお竹さん自分は、一がど臺所の古狸と心得てか、私達を三文の



價にも見てくれない、稍もするとしかりとばす、けれど此婆で、「竈の下の燃焼は、炭素水素が酸素と化合して發するのでござるの、お茶碗洗ふ水は水素と酸素との化合にて候の」と講義しても實際御飯を鹽梅よく仕かけたり、香の物刻む術はとても私達の及ぶところでない。

「まあ〱盲從して置きませうよ」と、三人同盟して臺所の女王様と奉つて居る。

頃は眞夏の八月、庭の植込緑の青葉に風もゆるがぬ暑くるしき、御夫婦と坊様、それに乳の人お菊さん、奥様のお實家の女中一人連れて濱寺に借別莊して避暑遊ばした。

御店には旦那様をたすけて家の整理なさる北口様、臺所には賄頭下女取締の河中様が控へて居られるので、氣儘は出來ないが、その中にもあくせくして御機嫌伺ふ世話いらぬので、暑さのみぎり私等は如何ほど氣保養が出來たでせう。

汗ににぢんだ身をさつと風呂に洗ひ流して、日頃は意氣合ふ四人、物干へと上る、三五の月はなくとも、近く博物場のアーク燈、あたりの青葉の茂みすゞしき許りに照して餘波は淡く私達の顔にもらし來る、晝の暄々しさ吸收したる夜氣はいと靜かに唯心齋橋通り通行する電車轟々の響き、本横堀川の巡航船がチヨキ〱と水切る聞ゆる許り涼しき風に面吹せつゝ秋にそつと忍せてある菓子取り出して誰憚るなく實の苦しみ語り合ふ。



雜記帳

與謝野晶子

×

○世間では未だ歌なんか作る人を見て羨む風がある樣ですね。さぞ氣樂で面白からうとか、又詩人と云ふ者は鴉に混つた孔雀の樣に特別に美しい人間であるとか云ふ誤解が除かれないからでせう。

○氣樂、此語は大變日本人に好かれる語ですけれど、其意味は、活動、努力、奮鬪を嫌つて、小成、姑息、無爲、苟安を望む退嬰消極の主義を本にし居りますから面白く思ひません。

○氣樂で實際歌が作れませうか。然う云ふ氣樂な量見の讀者が多いので從つて好い作家も出て參りません。歌にせよ長詩にせよ。いつ迄も甘い、呑氣な、獨合點の、薄片な物ばかり行れるのです。

○作家も亦氣樂な量見の人が多數です。作家仲間には詩人と云ふ名義を大層難有がる人達があります。其人達に限つて孔雀の樣に高く止り、一般人に向つて俗衆呼はりをするのですが、却て自分は一人前の教養ある『人』であるか何うかと云ふ反省が缺けて居ります。實際其人格を見ると甚だしい粗製品が多い。道學先生丈の知識も無く、自然科學者丈の實學も無く、農夫や商工業者丈の苦勞も經ずして、慢氣と衒氣と小さな虚名の慾とで堅めた畸形な人間が多い。其人達は空想を斥けて眞實の感を歌ふなどゝ標榜しますけれど、斥ける迄も無く初から空想が無いのではありませんか。眞實の感と云つても果して何があるでせう。貧しい淺薄な實感などよりも、僞りの感じでも宜しいから複雜で奧行のある面白い物の方が好いと思ひます。

○詩人自ら特別な人種だと誤解する所から、何事でも詩の題目にしようと思つて觀察する。丁度刑事巡査や下等な新聞記者が人生の出來事は皆犯罪だ、皆新聞種だと思つて觀察すると同樣、其れでは人生の眞實を味へるものでは無いでせう。

○詩人は餘りに自身の置場を狹めて居ます。專門家と云ふ窮窟な檻の內に自身を繫いで『人』と云ふ涯の無い廣場へ出ようと仕ません。其れも高い丘の上にでも据ゑられた檻なら少しは展望も出來て宜しいが、今日の短歌や口語詩の作者は暗い崖下の物置小屋で勝手な譫言を喋り散らす樣なものです。萬事を態々詩と云ふ歪んだ枠の中へ入れようとして取扱ふ。初から詩人の情調とか詩人の感覺とか云ふ物を鼻目鏡に掛けて宇宙人生に向はねば氣が濟まないらしいですね。

○詩の素質は何人にも有ります。或る人達に限つて特に詩人氣質とか云ふ物があらうとは思はれません。但し其素質には大小貧富がありますから、素質に富んだ者は詩を作り、然らぬ者は作らずに鑑賞者讀者となる丈の事です。

○私は謂ゆる詩人の階級をも其階級で作られた詩とも格別難有いとは思はない。實はもう貧弱な專門家の作には厭き厭きしました。其等の詩には珍奇な用語や技巧が目立つ許りで、殆ど新代の『人』としての自然な感激調色が出て居ません。從つて其等の作品は敎養ある『人』同志に理解される見込が無い。唯牛は牛づれ、作者と其れに雷同する低級な讀者との間で持て囃されるに過ぎないのです。私は敎養ある人間の豐富な新生活から叫び出された聲が聞きたくてなりません。

○又私自身も詩人と云ふ樣な檻から跳び出して、先づ何よりも『人』として派手に生きたい。歌なんか作れなくなつても可いから、潑剌たる、生甲斐のある日送りが仕たい。『人』としての樂みを享ける爲に自己を豐富に仕たい。而して若か自分にも歌ふべき事が心に湧いて來たなら改めて歌つて見たい。どうせ生甲斐ある日送りに藝術を缺く事は出來ないでせうから、自分で歌はねば他人の佳作を讀む側に廻りませう。自分で歌ふ

以上は拙い物は作らない積りです。

○之は世に示す爲で無く、私が私自身に與へる信書として認めました。

×

女（嬰を抱きながら）あなた、然う考へ込んで許り入らつしやらずに少し散歩でもなすつては何うです。

男（煙草を曲つた煙管につめながら）外は花見の人で雜踏するから煩い。おれは斯うして此先二三年徐と默つて居ようと思ふのだ。



女（鏡を見ながら）無不精ね、あなたは。以前はそんな方でも無かつたのに。

男（一寸目を閉ぢ、直ぐに開いて）お前とあの濱で逢初めた頃はと云ふのか。

女。さうよ。あの白い白い砂濱が好い曲線をして涯

も無く群青色の海に沿うてゐた、その濱で見たあなたは、鷗の様に又白鳥の様に若々しかつた事ね。

男（沈默）…………………

女（窓を見上げて）あれ、何處でせう、ヴァイオリンを彈くのは。——鬱金の櫻が散る様な氣持ね。

男、今日も東京は斯うした灰色の空で暮れるのだらう。

女、明日あたりは降るかも知れませんよ。態々どしや降りの日を撰つて、竹屋の渡しから向島へ花見に行つた事も有りましたッけね。堤の上は私等二人きり。二つの傘に積る花が芝居の様でしたわ。櫻は雨の日に限るッてあなたがお言ひでした。

男、あの頃の貧乏の方が未だ今の貧乏より呑氣だつたかも知れない。

女（髪を束ね終り、男の側の椅子に腰を掛けて）さうですとも。小兒は無かつたし……。

男、あの日、お前は上も下着もびしよ濡れになつて以來一枚も春着らしい物を有たないのぢや無いか。

女（一寸眉を顰め、忽ち快活な調子で）持つて來た物は有り丈質に入れて流しましたし、思切がいゝでせう。欲しければ之から時の流行の物を思ふ儘拵へますわ渦卷ももうぞッと仕ません。

男（少時沈默）お前は一人で甚くはしやぐぢや無いか。幸福だ。

女（微笑しつゝ）幸福ですか、何うですか。

男（女の顔を一寸見て）でも、お前の目には輝きがある。お前の頰と唇とは青醒めてゐるけれども、其の聲に勇氣がある。

女（少し憮然した調子で）わたしは何も知りませんの。みんなあれのお蔭ですわ。

男（輕く驚きて）あれッて何だね。

女（羞みつゝ）まだ御目に掛けませなんだのね。（立上ッて）明るく仕ませう。（電燈を捻る）ほら、あの書棚の横に石竹色の布を着せた物があるでせう。

男（前方を見詰めて）うむ。何だ、あれは。

女（つか／＼と歩み寄つて布を剝ぐ。大きなる硝子鐶の中に朱と黒と

斑の毒蛇一匹蟠局を卷き居る)
之ですよ、わたしに種々の力を告げて呉れるのは(罎の蓋を取つて蛇を摑み出し)わたしは何時もあなたに内所で斯う云ふ事をするの。(毒蛇の舌を吸ふ)

男(凝視めたるまゝ沈默)

×

わたしには珍しい事だ。小兒達を伴れて二町先のお茶の水の橋まで行つた。暖かい四月の初の午後で、澤山な男や女が通ッてゐた。わたしは熟々思つた。男の服裝は單純だけれども一人一人性格が異ふ。女は種々



の風をして居るけれども心持は大抵似寄つてゐる男の心の種類は百通とも二百通とも有つて涯の無い氣がする。女の心は多くて二十通位の物であらう。女は詰らない者だ。女が男に侮られぬ時代は何時來る事であらうか。

×

女は兎角人前で體裁の好い事を言ふ。心にも無い事を言ふ。男には其れが解らぬかも知れぬ。併し女同志からは其れがよく見え透いてあさましい又無用な事には口數を利

いて、必要な場合には明確した事を言はない。未だ御目に懸つた事は無いのですけれど、三宅花圃女史が何かの雜誌で同窓の故一葉女史を評して、意地の悪い人であつた事などを憚らずに書かれたのには敬服した事がありました。一葉さんの男のお友達は大抵一葉さんの美點許りを話されます。男の目には美點許りしか映らなかつたのかも知れません。

×

其筋の檢閲係は餘り圖書の檢閲許りして居るので神經衰弱に罹つて讀む物が皆怖ろしい秩序紊亂風俗壞亂に見えるらしい。而して新聞紙の收賄事件、五人斬、姦通沙汰、色魔、不良少年の記事や、實業雜誌週刊雜誌の人身攻撃などは神經衰弱の藥になるから、頻に愛讀して居る。斯う云ふ不健全な屬吏を相手にして發賣禁止を批難するのは大人氣ない。

氣の利いた、而して酔興な内務大臣が一人位現れて一切發賣禁止を廢める様な果斷な放任主義を取つたなら、屹度三日大臣で罷めさせられるには決つてゐるけれど、其人の名は不朽であらう。十年も經たぬ內、古い職員録でも見なければ曾て存在した事が解らなくなる様な伴食で終るより、然う云ふ酔興で試みる方が人として生甲斐がある様に思ふ。

發賣禁止が絶對に善いか悪いか。世の中に絶對の眞理と云ふ様な物が無い以上その斷言は出來ません。唯苛酷な禁止が永く續くと其反動に愉快な放任時代が來ると云ふ事丈は豫想が出來ます。未だ日本の發賣禁止は苛酷の度に達して居ません。隨分禁止されて國民の損失にならない物も多いぢやありませんか。

×

婦人雜誌の投書家の原稿を見ると、「記者さま、お見捨てなく載せて頂戴よ」と云ふ様な歯の浮く悪文が多い。女子の文章の拙いのは作者の天稟と教育とにも因りますが、大きな原因は新聞雜誌の執筆者の言語が大抵輕佻不謹愼で氣障である、其れを模ねるからだと思

ひます。だと云つて、今日模範になるべき紳士淑女の言語が何處にあると云へば大に答に困るのです。議會の速記錄で見ると國務大臣や兩院議員の言語の蕪雜で野卑なのに驚きます。佛蘭西などの樣に俳優の言語が標準になる時期も未だ遠い事でせう。大學敎授、文學美術家、貴婦人、然う云ふ社會から先づ言語に注意する運動が起り相なものですね。日本の女子が人前で伏目になつて心にも無い柔順を佯るのも、一つは立派な交際上の言語を持たないからでせう



×

武士道と云ふ物が日本にあるなら其れは平安朝の末皇室の衰微に附込んで當時の地方官が任地に永住し、諸國に割據して後世の大小名乃至幕府の礎地を作り、私に兵を養うて武者と稱した。其武

者が主人を保護する爲に格鬪したり腹を切つたりする一種の勇肌が武士道の根源です。皇室から云へば叛逆の道で、國民から云へば私黨の規約に過ぎません。源平以來德川氏まで武門の爲に何れ丈皇室が御苦みになつたか、何れ丈國民が迷惑しましたか、斯う云ふ事を考へずに、此の不祥な蠻道を今日に鼓吹するのは可笑しな事だと思ひます。如何に辯護する人が有つても歷史上の事實に見て武士道程非忠君非愛國な物は有りません。早い話が近頃武士道の標本の樣に言はれる赤穗四十七士の擧動などを見ても、私憤と殺伐とを以て終始して居る私鬪で、刑事問題、新聞の三面記事としてこそ興味があるもの〻、皇室の御爲で無い事は勿論、左倉宗吾、大鹽平八郎丈の公憤すら交つて居ない事件でせう。忠臣藏は國事犯で無いのです。其樣な武士道が何うして忠君愛國の基礎になりませう。殊に然う云ふ「腹切」や「殺人」の道を女學校で奬勵するなどは敎育者の氣が知れません。赤穗義士傳などは秩序紊亂で發賣を禁止すべき性質の物かと思ふ位です。

　忠君愛國主義の道德には立派な敎育勅語がある以上別に不祥な武士道などを借る必要は無い。敎育勅語は王道であり併せて民道である。之程立派な道德は一寸類が無い。陪臣の、無學野蠻な坂東武者など〻云ふ偏した階級から起つた武士道なんかは吝臭いぢやありませんか。又尙武の氣象を鼓吹する必要があるなら、立派な王道民道の上に神武帝の御事蹟や大久米氏物部氏の祖先の功業を例に引く方が堂々として居ないでせうか。自分は小兒達に何時でも武士の橫暴を極めない以前の國史の話を聞かせる事にして居ます。山內某細川某と云ふ大名の妻の話よりも、持統元明などの女帝が文藝を嗜まれたり、珂瑠皇子の養育に苦心遊ばしたり、奈良朝の花も實もある文明を助成せられたりした御事蹟を話す方がどれ位立派か知れません。

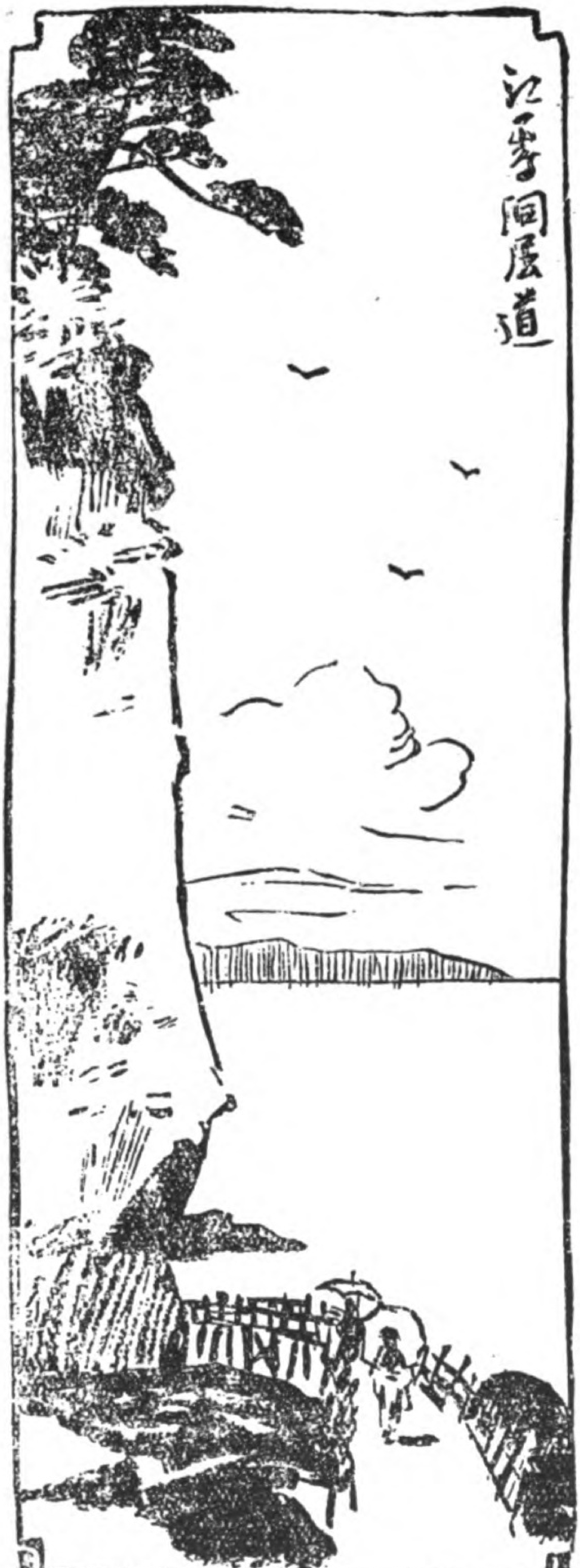
×

大崎の妙華園の歸りに電車で日比谷公園へ來た。わたしの伴れてゐる小兒等は手に手に大崎で採つた椿の

花を持つて居た。椿の花は公園にも咲いて居る。逢ふ人が皆小兒等の椿を見て妙な目付をする。わたしは公園の花を折つたと想はれてるのが厭さに其椿を捨てさせた。世間には折々斯う云ふ無駄な遠慮をせねばならぬ場合がある。わたしは良人の『わが指の甘きを嘗めて在る時も身の卑ければ人に嗤はる』と云ふ歌に想到つて一寸さびしくなつた。

×

長男や二男を誨へる間は、口數を利かす、叱らずに一言で暗示や反省を與へる樣に仕て來た。小兒が四人五人になつては、もう然ふ云ふ餘裕が無いので、自然小言を澤山云つたり頭から叱り附けたりする樣になつた。富んで居て一々保姆でも雇へる身分なら寛大な敎育も出來るでせうに。貧乏な國の政府が威嚇や壓制を用ゐるのも同じく餘裕が無いからでせう。




受附



煩悶者の相談相手となりて見たる世相の一面

綱島佳吉

△繰展られたる社會の縮圖

頼るに處もなく、訴ふるに人もないといふ不幸な境遇に在つて、遣瀬なく煩悶して居る世の憐むべき人々に幾分の慰安を與へ、及ばずながら之を光明に導いて遣りたいといふ婆心から、近頃私は一種の企てを始めましたが未だ幾らも日子を經ませぬけれども、不肖私ごときものをさへ信頼して日々門を叩き、衷情を吐露して慰藉を求めんとする人はなか〳〵尠くありません。それ等の人々の中には、自らの罪の繩に自らが縛められて永く闇黒の裡に悶えて來たといふ人もあれば、頼り難き人を頼りとしたが爲に、遂に失望と癒しがたき創痍を受けたといふ人もあり、或は悶え〳〵たけども、遂に光明を認めん由もなく、到底現世の痛苦に堪へ切れないから寧ろ死の安きに就かんと願ふ人もあり、其他親の爲に苦しむ子、子のために嘆く親、夫の爲に悶ゆる妻、妻のために悲しむ夫など樣々あつて、或人は金錢の爲に、ある人は名譽のために又或人は戀の爲に煩悶するので、世のあらゆる罪過、世のあらゆる醜惡、世のあらゆる悲哀がまざ〳〵と、自分の眼の前に繰展げられたやうな心地しました。

で之等の人々の佯らざる告白によつて、現代思想の幾分を考察する便も得ましたから、何れは之を統計的に考へて、纒つた私の意見をも發表したいと思ひますが、然し何分日も未だ淺くて十分の資料もなく、のみならず今日この貧弱な觀察によつて輕卒に斷案を下す

ことは甚だ早計であると思ひまするから、今は唯、私が今日まで多少人々を接見して得た感想の一部分丈を申上げます。

△物質的八分に精神的二分

私の會つた人々は、男子七分婦人三分といふ割合で、階級は多くは中流以下のやうでした。その煩悶の種類は大略物質上より來るものと、精神方面より生ずるものとに別つことが出來ますが、先づ前者が八分、後者が二分といふ比較になります。猶區分をすれば、他より受けた煩悶と、自分が生んだ煩悶とに別つことが出來ます。その中男子に最も多いのは金錢問題で、婦人に最も多いのは家庭問題であります。夫等の婦人の中には姑や良人にも告げずして密に私を訪れたものもあり、又夫婦共に來て、交互に涙を流しながら物語つて行つたものもあります。

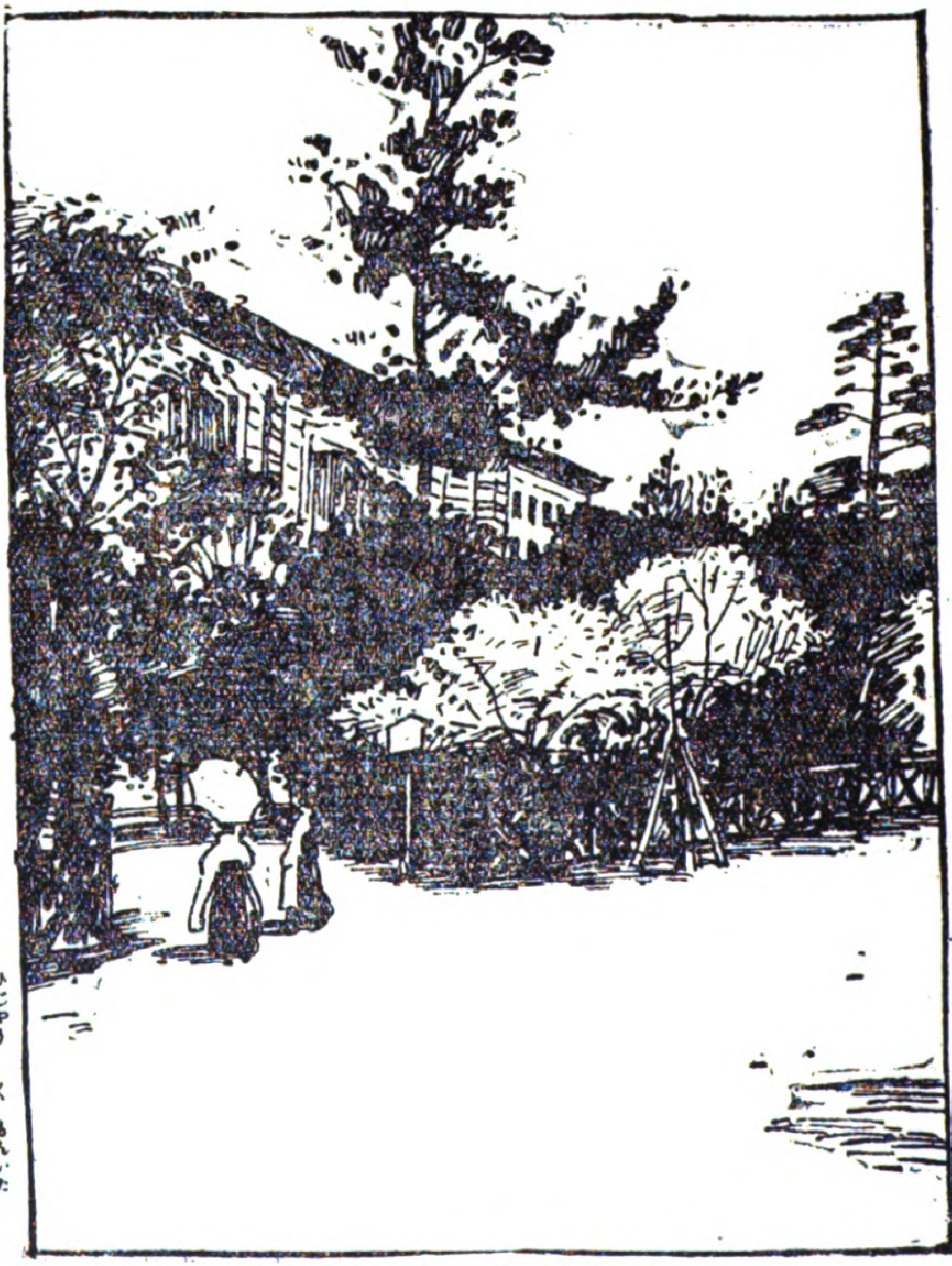
又一口に家庭問題と申しても、意地惡の姑に事へる嫁の苦みとか、放埒な夫を持つた細君の嘆きとか、或は互の心に何の變りはなくとも、唯身に迫る貧の苦みとか、さま〴〵な事情があります。然し孰れ人に明さば身の恥、家の恥、さりとて之を明さねば、訴へてしまはねば、弱い婦人には負ひ切れぬ痛苦の重荷、兎や角と迷ふて、いよ〳〵私の家を訪ねやうと心を定める迄には、一通りならぬ煩悶もあつたであらうと思ひます。

兎に角同情者と申した處で赤の他人、其の他人に骨肉や友人にさへ明し切れぬ胸の秘事、恥しき事、恐ろしき事、醜き事、すべてを暴露して物語らうといふのですから、苟にも洒落や、酔興で出來ることではないのです。

△悲しき犠牲美と今日の婦人

舊時代の婦人であれば、思餘ることも深く心に秘めて、假令思ひ死ぬる迄もこれを口には出しません。妻として夫に虐げられても、その胸の悲み悶へを深く包んで、己れ一人苦しむところに悲しい犠牲美を感じて

居たのでありますが、新時代の婦人は痛苦悲哀などを只一人忍ぶに堪へないで、悲みあれば之を外に、苦みあれば是を表にどうしても發表して了はなければ濟されないのです。然し之は人間本然の心理狀態で、かの心に憂ある人が慟哭して僅に思を晴し、胸に憤怒の情湧いた人が手を振り上げて他を擊て僅に心を癒すといふのと少しも異りはないのであります。所謂强者であるなれば、悲も忍び、憤も抑ゆることが出來ませうが、脆弱な婦人の心性としては、何れにか之を訴へ、何等かの慰安を得るにあらざれば到底已み得ないのであります。



帝國圖書館（上野公園）

そして人間は精神的の苦痛があるにしても、他に物質的の滿足が得られるならば、是によつて幾分前者の苦痛を慰めることが出來ますが、其の物質的の滿足が得られなくなると非常に苦悶致します。

私が此頃逢つた婦人の中にも姑や夫に大いなる不滿

を抱き、さま〴〵な家庭の痛苦に煩悶しながらも、兎に角日々の生活が障りなくやつて行けたので、ついそれに補はれて煩悶も紛らされて居たが、其内生活に困難を感じて來て、平素の悶の火は、忽ち茲に生活問題といふ油と相混じて、俄に炎々と燃え上つて來たのがありました。その遣瀬ない苦悶も慰めて呉れる人があれば、それに縋る道もありますが、頼るに處なく、訴へるに人なしといふ場合には、只一人輾々苦悶し、果は堪へ切れなくて或者は狂に、或者は死の甚しきにまで立到るのであります。

即ち精神上の苦痛は未だ忍ぶにも堪へるが、生活の壓迫は到底堪へ得られないのであります。

△死に得ざる苦悶の叫び

尤も中には唯單に、精神的苦悶の爲に、例へば戀を失つた婦人がその寂寥と痛恨に堪へ切れないで、遂に死とまで思詰めた人もありましたが、然し今日の婦人はなか〳〵自意識が勝つて居るから、盲目的に自殺するといふ事は容易にありません。私の宅へ參つた人などは悶えに悶え、苦みに苦んだ擧句、遂に自殺と決心して、既に刃を己が咽喉に擬せんとしたのでありますが、死と相面して初めて、死に對する恐怖と、己が罪過の反省に心戰き、身も打顫ひ、遂に刃を投げ捨てゝ泫然として泣いたさうであります。

自殺の罪惡なることは申すまでもありません。自殺の最も卑怯なる手段であることも申す迄もありません。けれども若し人が死によつてその深大なる苦痛から遁れ得られ、死に就く事が唯一の手段であると考へてなす事ならば、或は死といふことも其人に取つては必しも咎むべき事でないかも知れません。そして從容死に就き得る人は、その人としては何方かといへば幸福な方でありませうが、たゞ死を望んで、猶死に得ざる人、死を以て唯一の活路と信じつゝも敢てそれを果すことの出來ない人の苦悶の叫は實に悲痛の極みと申さねばなりません。

そこには世を呪ふ叫もありませう。徒らに自意識の

勝つた我身を自ら咒ふの聲もありませう。そして叫んでも哭しても遂にこの係蹄から脱し得ないのが今日の或一部の人の運命であります。

△譯もなく解決の着く煩悶

斯の如く殆ど数ふべからざる暗黒の裡に悶えて居る氣の毒な人もありますが、中には又お話にならぬ位な極些細な事件が因をなして煩悶が煩悶を生み、痛苦が痛苦を重ねるといふやうな人もあります之を例へば十字街頭に立つて、右に行かうか



左に行かうか、といふやうな極些細なことを深く考へ過ぎて居るのであります。このやうな人には、一寸後から肩を叩いて「お前さんの行く道はこちらである」と敎へてやればそれで解決が付くのであります。甚しきに至つては、自分の盡すべき事をも盡さずに居て、而して悶えて居る人があります。斯ういふ人は所謂一擧手一投足の勞を吝むといふもので少しく努力すれば光明に進む路は幾らもあるに關らず、その勞を

吝むが爲めに、或は努力の意氣が無いために、空しく暗黒の中に彷徨して居るのであります。この種の人は少しも同情するに足らないのですが、若しその人の意志の薄弱な爲めに、或は身體の健康が許さぬ爲めに、この努力が足らぬのであるとすれば、又同情すべき點がないでもありません。

近頃『新しい婦人の自覺』といふことを能く聞きます。これは大變喜ぶべきことでありますが、而かも徒らに自己の弱點のみを氣にかけ、自分の斯の如き纖弱さ力では迚も事を爲すに堪へぬといふ風に逡巡狐疑徒らに消極的に流れるのは、決して慶ぶべきことでありません。而も今日多くの人にその樣な傾向は免れ得ないのであります。

『知識多ければ憂多し』で、知識ある人は現世相を明らかに感ずることが出來るだけに、さま〴〵の煩悶の生ずるのは無理ならぬことでありませうが、能く〳〵注意しなければなりません。殊に婦人は喜悲共に感じ易いもので、弱い心は益々不運を生み、遂には其身を滅亡させる事が能くあるのであります。

△たゞ一滴同情の露の惠み

さて斯の如く黒闇々の窟の中に在る人々が、如何にかしてその暗黒より脱け出でんと藻掻き、右に行き左に行きしても遂に逃れるべき口に逢着し得ないとき、一點巖の隙間から光が輝いて居るのを發見したならば、その人々の喜悦は如何ばかりでありませう。

是に就ても望むのは、今の世に權威ある、信頼するに足る人々が、進んで是等不幸なる煩悶者の爲めに、慰藉者となり、指導者となられんことであります。深い煩悶に沈んだ人は、最早心の目が盲いて了まつて居るのですから、局外の人から見れば未だ多くの道が開けて居るにも關らず、煩悶者はそれに氣が付かないことが多いのであります。斯る時權威ある指導者が、只一言の助言を與ふれば、その人は救はれ得るのであります。野の草は枯れ萎れて居ても、一滴、たゞ一滴同情の露の惠みに逢へば甦り得るのであります。新時代に於て、家庭問題とか生活問題とかの中に、新らしく見るさま〴〵の餘弊の中に、多くの人々が沈淪し、惑溺し、やゝに荒廢して行く有樣を見ると、切實にこの助言者、相談相手の必要を認めるのであります。（談話要領）

米國婦人の觀察

在米 カンナス市　高橋宏雅

門松の裝飾、屠蘇の香、カルタの聲はないが今日は一月元旦に相違ない、午前は年始狀を書いて暮した午後から天氣晴朗、空に一點の雲もないから一人ぶらぶら散步に出掛けた、途中友人のH君に逢つて芝居見物は如何？　とさそはれて行つて見たが、米國の道德は斯樣な所で硏究が出來る。音樂の響と共に幕が開けば、成る程世評に僞りない、乳を隱し、半身裸體のコーラスガールが十五歲位を下に三十歲位を上にして二十人程跳廻つて居る、中にはタイト一枚で能く腰細の特長を示して居る、キスの歌舞を演ずる時は見物人席に態々足を運んでキスさせて呉れとの註文、物好きの男態々出てキスをする、米國キスの亂用も此處に至つて甚だしい。タイトの外裝は實に振つたもので、見物人の顏は丁度飴細工の人形が南風に出逢ふた樣に構造が一時に壞れる。だが了解に苦しむのは米國の習慣と道德である、婦人は裸足は勿論靴下丈でも出す事は禁物として知られて居るに、劇場に來て見ると女優は半股迄見物人に示すとは矛盾も甚しい、此演劇場は決して上等のものではないが、尙下等の劇場も開演せられて居るから堪つたものでない、ニューヨーク、シカゴの大都になると「男子のみ入場」と云ふ更らに一層下等な演劇が公開せられて立錐の餘地なき光景とは愕くの外はない。要するには一面の個人的道德が進んで公衆的道德の缺陷を證明する一例ではあるまいか？

二日、戶外を覘けば一面銀世界何となく正月の光景を表して居る、此れが今冬に於ける初雪、兒童は街頭に樂しくソリを走らせて遊んで居る、北隣の小兒は年中外に遊んで居る時が多い、家屋は只眠るに出來た位、母親は每朝粧飾してカルタ會に出掛けて賭博に夢中であるから子供が寒からうが飢えたらうが眠からうが、そんな事には頓着しない、だが小兒は結構安全に路頭で草木の生長する如く自然的に生育して居るとは

よくしたものである。午後平素親しく出入する未亡人を訪問する、と妻君が出て來た、何時も滿面に微笑を含で訪問者を迎ふるのが此妻君の美點である、僕を客間に案內し當年十歲の娘を呼んだ、少女は余を見るより可愛い音聲でハッピー、ニューエヤーと云ひながら小さな[illegible]らしい手を出して握手を求めた、少女の兄は目下東部某大學の豫科に入學中で妻君は此二人の子を充分敎育するべく全力を注いで居る、此れが唯一の希望で又唯一の光明である。暫くするとお母さんがピヤノをひき、少女が歌ふて僕を待遇した、自分は斯くの如き優待を受ける每に痛切に感ずるのは日本でも婦人が今一層進化して來客の饗應に注意して貰ひたいと思ふ、此所を辭して更らに他の知人を訪問する、ベルを鳴すと同時に戶が開かれ、暫くぶりですと申せば、もう忘れられたのかと心配して居つたとのあいさつで家內中よつて來て外套や帽子を分捕し、客間に導かれたすると一月の事とて來客の若い廂連中が客間に輪を描いて居つた、一月早々退却も出來ないから先づ自分の椅子を固守すべく度胸を据ゑた、妻君は一々紹介の勞を取られた、此廂中には既にお目に掛つた女學生もあれば僕と同年位の所謂オルド、ミスも見えた、妻君は今日は來客も澤山あり一方には新年でもあり何か日本話を聞かせて下さいとの注文である、弱つた注文と思案して居る間に、妻君は更らに「日本婦人に就て」と題を切出された、すると來客は皆「贊成々々」との同意の聲、外套を分捕されたので逃げるに逃げられず、全く捕虜の身、四方八方からゴーヘッドの催促の聲、致方なしに開口した。「斯樣な大きな問題を淺學無能の僕に註文するとは少し希望が大過ぎる、一體日本には平民華族と云ふ樣に社界に階級があるので自分は日本人でありながら日本婦人界の或一部を漸く覗いたに過ぎない。其覗いた範圍でも僕の拙劣なる英語では到底思ふ樣に說明する事は困難であると、辯解すれば隣席の一人曰く「日本人は相互に親密に交らないと云ふ事を承つて居るがこれは眞實か否か？」と質問を起したのでこれぞよき機會と思ふて一段熱心に論じた。

抑も日本では米國の如く男女の交際が自由でない、既に小學校時代から男女隔離の教育を受ける（田舍の小學校は經費の都合で同一建物の中で教育される男女の席は自ら區別せられて居る）男子が女友を得、女子が男友を求むる事は非常に困難であるが、其代り男子間に於ては隨分親しく交際をする、尙女子も女子間に於て骨肉の交りをして居るから其眞實は米國人の眼に映ずる外部の觀察とは雲泥の差がある、然るに男子



が女子を知り、女子が男子を知る機會の少ないのは一つの缺點であるが、同性間の友情は日本の方がむしろ深厚であると信ずる、今其一班としてたとへば或女子が店主より解雇せられて生活上に一大恐慌を來たした場合、其の女の友人等は只これを傍觀するのみで一片のパンだに心配して遣らうと思ふもの丶ないのは米國の通常である。されど日本人はそんなものではない胸中に燃ゆる程の熱情が湧いて居つても之を口にし又

形に於て示す事を爲ない、よしこれを爲したにしたところが其事は實に拙劣である、けれども之れが日本人間の交際にあつては習慣上普通の事で相互に理解して居るから何等の間違や誤解を招く事はない。然るに米國人は初對面の僕等にも表面上親切さうに同情ありげに心になきお世辭を口でドシ〳〵安賣りする態度ときたら日本の藝者がお客を待遇して、その歡心を買はんとするの態度である、殊に妻が終日職務に疲れた夫を慰むる上手さ加減と來たら實に大變なもので日本ならば芝居でなければ見られない圖である、或る家庭では晩餐後の皿洗は翌朝に延ばし夜間は夫の疲勞を慰むる爲めにいろ〳〵と工風して樂しく時を移すべく規程せられてある、此點に就ては吾々日本人は大に米國人から學ばねばならぬ」と說いたら、いづれも皆日本の婦人はそんなに無愛想なのかと不思議におもつた樣であつた。

三日、一日の職務終へて歸宿、晩餐の卓に向ふと、南隣の妻君が突然の來客に面喰つて、下女を走らせナイフ、フォーク三人前の拜借とは滑稽の至りである妻君芝居にでもお出掛の外裝ときたら實に振つたもので、帽子一個でも二百圓內外の高價、虛飾華美の用意は周到でも來客に具ふべきナイフ一本の買置がないとは皮層的華美の一面を知る好適例である。妻君二人の子あり、長男は俳優で次女は昨年兄の友人の同業者と結婚したが四五日前「妻は夫に不貞操」の廉を以て離緣を起訴され新聞の三面記事に上つてゐる、此家庭を思ふ每に母が家庭敎育上に及ぼす感化の偉大なるを悟つた。

四日、午後八時家禽共進會へ出掛けた、入口で五千弗の値札の掛つた雄鷄を見た時は千愕萬驚、日本の金にして一萬圓の鷄、世の中に一萬圓は愚か一錢の價値を爭ふ人間が山をなして居る今日、三貫目內外の鷄一羽が五千弗、而して此の鷄種の卵一個が二圓である。日本ではまだ親兄弟のために無垢の處女が一身を犧牲にして二百圓か三百圓の前借で三ヶ年乃至四ヶ年花柳の巷に泥水を飲むでゐるのではないか。

五日、今日は當宅に婦人のリーデング、グラブの會合が催された、此倶樂部は會員二十名を以て組織せられ、二週間毎に順次會員の宅に集合して世界の歴史が研究せらるゝのである、會員はいづれも皆頭に霜を戴いた老婦人であるを知らば實に米國中流社會の婦人の卓越せる思想、頼母敷き心掛を羨望せずには居られない。歴史といつても家庭に密接の關係ある宗教史、敎育史及美術史を中心として居るのである。今回は和蘭國の教育史を研究し初めたので、當



宅の老母は次回迄に和蘭國小學校の起原及發達の徑路を調べる事を擔任したので百科全書にはないから市立圖書館へ杖を曳いて熱心に和蘭史を繙いて居る、次の回には此の報告を得て會員は各々意見を陳べて研究するのである、我日本でも一家の主婦たらんとするものは宜しく此種の會合を組織せられん事を希望する。

六日、夕方事務所から歸路、途中で電車に乘つたら夫婦者が同車した。良人は見るも氣の毒な跛で、おまけに極く矮小な男である、妻君は反

對に丈高で隨分不釣合の夫婦である、生憎空席が一つよりないので妻君は坐つたものゝ夫は側らに片足で立たねばならぬ、立つのみなら心配は少ないが、右の手に妻君の手鞄をかゝへ、左手に少しの買物を持つて其上電車の震動に注意を拂はねばならぬとは米國男子の生涯も思遣らるゝ、一體人並以上の妻君が自分が坐つて不具者の夫に物品を持たせて立たせて、それで滿足が出來るのかしら、男子は斯く泣して婦人を助け保護せねばならぬのであらうか。又婦人は斯くの如き不具者に助けられて有難く感ずるのであらうか。

　歸宿すると當家のオールド、ミスの友人が五名來て談話に花を咲かせて居つた、自分は紹介せられたので據なく應接間に入つて晩婚者の面相を研究すべく搖椅子に凭れた。いづこも同じ、店晒物は外觀が惡い賣れ殘つたのもその結果かと思ふと實に氣の毒でならぬ。特に米國の如き物質的の國では女子に取つては顔面の構造が結婚の一大要件であり、男子に取つては貢金の多少が結婚の唯一條件となるのであるから堪らない。年はいづれも僕の大姉株で三十の坂二つ三つもこしたものも見受けられた、徒らに晩婚説を主張して獨身をつゞけたのではないから座談は結婚談で持切つて居つた、自分は默つて拜聽するのみでこの問題に對して冷淡に構へて居るから日本に歸ればきつと可愛い方が待つてゐるに相違ないと攻撃された。

　オールド、ミス某は僕に、米國に獨身者の多い原因に對する意見を承りたいとの註文、だが之れを吐露するには米國人の短所を言はねばならぬ、然るに白人は短所を指摘せらるゝのが大禁物、一度素破抜くと百年の友情も一時に冷めてしまう。彼等は耶蘇敎が唯一の宗敎と信じ共和政體が最良の國體と誇り、腰細が至上の美風と自慢する所謂自己至上主義者である、其結果何んでも自分のもの程善いものはない樣に考へ、妄りに自分の家族、家門を賞賛する。今日の米國人は貢金崇拜、自利自慾、特に女子は我儘で手前勝手の論を主張し、自惚心が強く、賞むれば附上り、こなせば角を生して立腹する。婦人の多くは結婚すれば進んで山

海の珍味を食ひ、華美の服裝を着、山水優美の風景を眺めて暮す事が出來る如くに考へ、困苦を共にするの勇氣がない、要するに結婚に對する希望が過大である其結果男女の交際が自由であつても結婚が少ない、少ない結婚者中から離緣が多いから其先は推して知るべし（尤も女子の職業が多く獨立自活の出來得るも大理由である。）斯樣な事を洩したら早速袋だゝきにされそうであるからまづ／＼默つてしまつた。

七日、今朝は華氏の零下十度でかなり寒い、白人の高身は煙突の如く、僕の低い鼻は竈口の如く、上顎下顎の喧嘩で音樂が彈せられ、相互の談話が凍りさうであると申さば北極附近を彷徨いて居つたクックも同情せずには居れまい。昨日中溶けた雪が、夜中の嚴寒で再び凍つたのであるから中々一歩を運ぶも油斷は出來ぬ、滑つて轉んで更らに尻で滑る婦人もあるから危險千萬。

晝飯の時郵便局迄往く途中同事務所に在勤の同僚Ｃ君が妻君とぶら／＼散歩して居るのを見た、過日鄕里に歸省して結婚し妻君携帶の上歸つて來て大得意の時代、丁度子供に玩物を預けた樣に無茶に珍しくつて、嬉しくつて可愛くつて堪らないのだ。彼等は每日正午僅かに一時間の休みを利用して下町を散步して居る、妻君は態々散步するべく御苦勞樣にも下町迄御出張。腕を組んで步調を並べて活步する姿は日本であつたら鴛鴦夫婦の酷評が免れないが米國ではこれが模範的夫婦、米國は實に夫婦本位である。夫婦本位の家庭を見ると氣の毒なのは子供である、生れ落ちると直ちに不自然にも牛乳飼育で母親の溫かい乳首に縋る事は出來ない、米國でも此れは一つの社會問題となつて居るらしいが外貌の美を徒らに尊ぶ惡習が深く染込んだ今日では一二の局外者が騷いでも馬耳東風に過ぎない、實母を見分ける事の出來ない赤坊でも、神經あり感覺あるから、冷たい護謨口をすゝるのと心ある母親の溫かい乳をすゝるのとは自然識別さるゝだらう、母親に於ても自分の乳をくれるのと牛乳の當飼とでは自然赤子に對する愛情に差が生ずる。さう思ふと吾々日本人が有する親子の眞の情合は米國人には理解出來ぬ。

一週間の献立

つぼすみれ

△月曜日

(1)甘鯛の葛たゝき　(2)ほうれん草のスープ
(3)うどのからし和へ

(1)あま鯛を三枚におろし程よき切身になし、葛粉をふり敲きて胡麻油にて揚げるなり、表面狐色になりたるを度とし新聞紙の上にてよく油氣を去りて皿にとり嫁菜のゆでしをそろへ切りて付合せとなし　わさび醤油にて食す

(2)先づ牛肉を人數に應じて鍋に入れ　切りたる大根と共に三時間程湯煮して（水より）ざつとこし、別にほうれん草の葉丈うでゝ庖丁にて細に刻み、擂鉢にてよく擂り、前のスープにてのばしどろ〳〵の汁となし鍋に入れて沸かし胡椒と食鹽にて味をつけ葛を少しときて入れ其中へ牛肉・大根、尚他にフランス豆の湯煮せしもの、人參なども共に入れスープ皿に盛る、

(3)うどを小口より斜に切り沸湯にてザツトゆで煮出しと　醤油少々砂糖にて、味をつけかき置きしからしと酢少々とにて和へるなり、尚レモン液一二滴おとす時は一層の美味をそふるなり

△火曜日

(1)白魚のあんかけ　(2)ハムエツグ　(3)あかへの甘煮

(1)白魚を生のまゝ玉子の白みと共にかきまぜ葛粉　をつなぎに入れ一塊りづゝにまろくし蒸しあげて之を椀に盛り其上より餡をかくべし、餡は煮出しの中に醤　油少しからめにさして煮置き、其汁にて吉野葛をとき文火にかけて煮かへすべし濃さはとろりとなる程を度とし、盛りたる上にかけておろし山葵をのせて出す

(2)ハムを水にて一時間程ゆで熱き中に皮をすきとり、小口より薄く切りフライパンにバタを熔かしてハムの兩面を焼き皿に取り其鍋に　玉子をおとし小量の胡椒をふり半　熟に焼けたる時ハムの上に上せ卓上にソースと共に出すべし

(3)少　き貝の目に切り鹽水にて洗ひ沸湯にてザツトゆで味淋にて煮、別に竹の子をゆで小く切り煮出しと味淋にて煮、甘味のよくつきし頃醤油をさし右のあかへを共に入れるなり

△水曜日

(1)鯛のそぼろかけ大根　(2)海老サラダ　(3)菊どうふ

(1)鯛の切身を細かにたゝき、味淋と醤油と等分に入れて煮て器に取り其汁に三勺程の醤油を加へて大根の面取りに切りたるをよく煮、其鉢に盛りたる上に細かに刻みし鯛をふりかけて其上に青のりをもみ　かけて出す

(2)先づ海老を鹽湯にて廿分間程ゆで、皮と頭をさり縦に二に切り別に萵苣を調理して摘み切り皿の上に並べ其上に右の海老を　のせ皿の周圍には殻を飾として並べサラダソースを肉の上にかけて食す。

(3)とうふの水を切り一寸五分四方位に切り二本のはしを横におきて二切おき位に縦横にとうふに庖丁を入れる　但下まで切りおとさぬ事、切る時は酢を庖丁につけ乍ら切ればとうふくづれざるなり別に甘汁を仕立て、右の菊花どうふを入れ眞中に赤とうがらしの皮を　一分厚さに切り洗いて椀に盛りしとうふの上におくべし

△木曜日

(1)カレイのフライ　(2)甘酢かけ、せんうど、赤貝
(3)あぶらげの千鳥煮

(1)カレイをよく洗ひこけと頭と尾を去りメリケン粉をつけ玉子の黄のときし中に入れて再び粉をつけ次にパン粉をふりかけて、フライパンにヘットの煮立ち居る中に入れ両面の狐色になるまでよくあげ裏返して再びあげ、皿に取りポテトのうすく切りしものを殘りのヘットにていため皿にうつし鹽、胡椒をそひて出す、

(2)うどを一寸二分位に切りせんにうちて水にはなしおく、赤貝をザットゆでうすく庖丁にてそぎ鹽をふりかけてよく洗ひ水をきり前のうどゝ共に皿にうつし味淋一合を五勺に煮つめ、さめて後酢二勺醤油少々さして皿にもる

(3)油揚豆腐の一方を開き其中へ小海老せんに切りたる胡蘿蔔、薄く小き蓮根、小切の慈姑等をまぜつめこみ味淋砂糖醤油にて文火で氣ながに煮る

△金曜日

(1)小田巻むし　(2)メンチビーフ　(3)竹の子胡麻酢和へ

(1)玉子二杯に濃き冷えし煮出し三杯と中杯の醤油を加へよくかきまぜうらごしにかけて茶碗の中へはゆでたる饂飩を醤油にて下洗ひして其他椎茸みつば鷄肉慈姑等共に入れ最後に前の汁をかけて蒸すなり

(2)牛肉のすぢをとり細く切りてよくたゝき後細く平くまるめ其上に鹽胡椒を少々ふりかけ一寸おさえてヘットにてよくいたむべし　別にキャベツを三分位の幅に切り熱湯をかけて水氣をきり皿のはじにつける、ソースをかけて食す

(3)竹の子のゆでし柔かき處をうすく切り胡蘿蔔を細きせんにうら松茸をうすくそぎ酢につけおく別に白瀧を砂糖醤油にて下煮し白胡麻を擂り砂糖醤油をよき程にまぜ右の品々を共にあへるなり

△土曜日

(1)鯛どうふ　(2)牛肉包み玉子　(3)黄味酢あへ

(1)鯛の肉をよく擂り卵と葛粉をまぜて　繫となし、煮汁にてゆるめ鉢に入れ蒸籠にてむし上げ適宜に切り葛あんかけにして香味には山葵　からしなどをそふ

(2)ひき肉をよくすり後四角に平くのして其上にゆでし玉子に　かたくりの粉をつけてならべ巻きて蒸すなり後程よく切りて　味淋醤油にて煮るなり

(3)ゆでし玉子の白味を庖丁を入れてのぞき　黄味をうらごしにかけ味淋と酢と等分にせし汁にて溶き鹽少々を加へおくべし、其中へ白味をせん

にうち、鱈の子を細かに切り背開きにせし小ゑびなどをまぜ上よりけんちんにかけ、打ちせしうどをふりかけてすゝむ

△日曜日

(1)泡雪玉子　(2)くわゐ金鍔　(3)白魚のてんぷら
(4)鯛のそぎ身ソースかけ　(5)アップルスノー

(1)玉子二三の白味ばかりを鉢に取り茶せんにて泡立て、煮汁に味淋と醤油を加へ煮立ちたる露の中に杓子にかけて一すくひつゝ別々に入れ少時にして固まりたるを椀に盛り海草、春菊などをそふべし

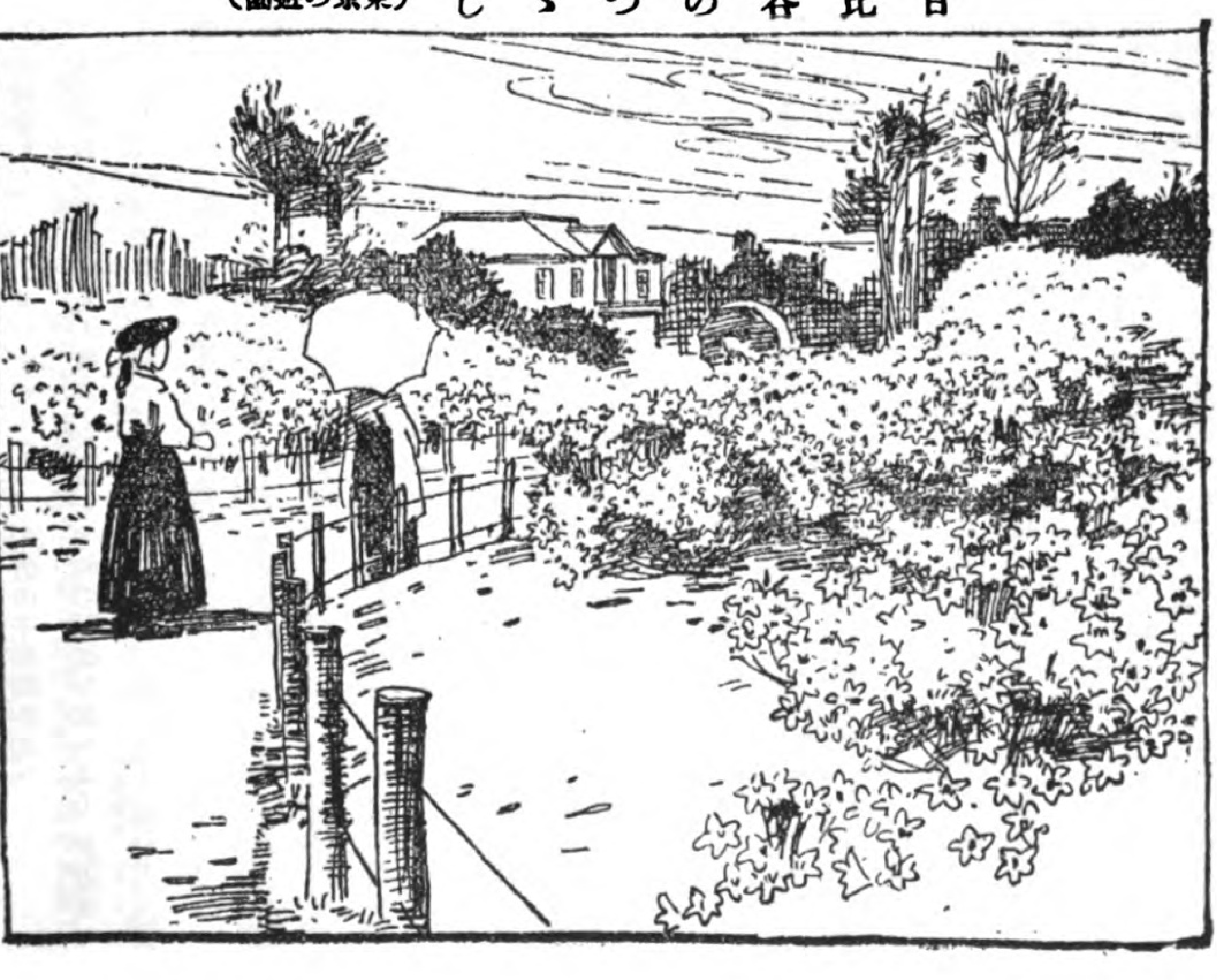
(2)くわゐの皮をとりよくゆでゝ鍋にざらめを水にとかし中に入れ少時煮て又味淋五勺を加へ煮立ちたらば下す別にさつま芋の皮をとり二分位に切り水につけあくをぬき後ゆでうらごしにかけざらめをよく水にとかしたる中に入れ鹽を少し加へ程よき甘味にしてくわゐをまぜる

(3)露物に用ひし玉子の黄味にメリケン粉を練り合せ白魚をくるみて胡麻油にて揚げる　春菊の葉をのこりの粉にくるみ揚げてつけ合す。

(4)鯛の皮を去り肉をうすくそぎ板に鹽をふり紙をしき其上にそぎ身を並べ上に紙をしき鹽をふり手水をふり一時間も經なば紙を取り水洗ひして皿に盛り萵苣を共につけ合せレモン水をおとしソースをかける。

(5)林檎三個を皮のまゝ廿分間程蒸す時は柔になる、之を皿に取りホークにて皮と核とを去り別に卵子の白味を充分に泡立て鹽少し加へ兩者を一緒にして暫時向かきまぜる時は林檎はどろ〳〵になる之に砂糖大匙二杯とミルク二杯とを加へ珈琲器に盛りてすゝむ

日比谷のつゝじ（東京の遊園）





スヰートホーム

内藤千代子

△晩餐會

いよ／＼當日となつた。母様がお留守なので困るけれど、また都合いゝこともある。お約束通り小林の小母さんは雪ちやんをつれて、お手傳ひに來てくだすつた。白の料理前掛胸高に、女四人が臺所での大立まはり、煮る、燒く、ゆでる、蒸す、漉す叩く、大體出來上つたのはもう午後三時、あとは小母さんときよに任せて、化粧室に入る。雪ちやんも呼んできれいにお化粧して上げた。

私、着物はどれにしようかしら、しばらく考へて見たが、あの大きな絣のお召縮緬に帯は緋繻珍、藤納戸色紋羽二重の羽織をはをる。



お座敷を見まはりに行つて、昨日活けた早咲の牡丹に一寸手入れしてると「御免、」

「はい、」出て見たら案の通りの本庄先生、もう腰かけでお靴の紐を解いて被居る。ふと振り仰ぎ

「や、」

「入らつしやい。先登第一……」

帽子を受け取り、オーバコートを脱がせて上げて、先に立つ。

「篤麿君は？」

座につくや早く、敷島を吸ひつけられた。

「えゝお友達を迎ひに行つてまだ……」

チラと顔見合せてにつこり。雪ちやんはお茶とお菓子を、襖のかげからそつと差出す、先生のお好な黄味時雨、挾んで出すとお掌に受けて、ぢつと見詰めてゐらつしやる。

今日はとりわけうつくしく、お髮にもカールがかゝつて……。

「今夜こそね、是非願ひますよ、えゝ先生、」

「は、何です、」

「しらばつくれてまア。あれを、」

床の間のヴアイオリンに振りむいて

「ちやアんとお道具もまゐつて居りますわ、」

「いや、恐れ入ります。どうも、夫人、ちと酷ですねえ、」

頭かき〳〵。

そのうち篤樣が本田さんと小松原さんを連れて、歸つてゐらした、つゞいて酒井中尉が來る、お京さんも見えた、笑聲は室にあふれた。少し過つてからお文さんも桃代樣と清夫さん（桃代樣の弟の中學生）とはお揃ひでお出になつた。各自の前に置かれた九個の茶碗からは、甘い紅茶の香が、あたゝかさうな湯氣と共にあたりに散じる。

まア一郎さんはどうしたんでせう、また熱でも出たんぢやないかしら、雪ちやんを迎ひに上げて見やう……と思ひ〳〵茶の間の方へ出て來ると「姉さん」と勝手口から飛び上つて來たのはその人だ、あやうく鉢合


宮内省御用達
内外國金銀
名譽賞牌受領
米國アラスカ、ユーコン
太平洋博覧會に於て
名譽大賞牌受領
最上醤油之元祖
開業貳百六拾六年
上
千葉縣銚子町
醸造元 濱口合名會社
電話銚子二十一番

新輸入美容料 肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても平素之を用ゆれば漸次肉體**純白色に變化**し肌を滑にし皺を伸しあれ及吹出物を治し艶美の容貌となる驚くべき効果を有す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の美容新劑價並製壹圓廿錢特別製壹圓八拾錢

飲んで色白くなる世界唯一輸入新藥

飲んで色白くなる特効新藥 サーサパリラ

價壹劑貳圓七拾錢參劑七圓五拾錢五劑拾貳圓貳拾錢也

英國ロンドン「パーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる**清血劑**にして頑强なる皮膚病、猛惡なる慢性梅毒、瘡毒リウマチス等の病毒及び男女體內の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の內服水劑なり(注意)從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり(今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候)色白新劑と「サーサパリラ」と內外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

色白特効 ペーアス石鹼

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

此石鹼は**世界第一等**の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を揭げん**皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質**を治するは此石鹼獨特の靈効なり且つ此石鹼は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薰るは館主の實驗保證する所なり乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する內國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む)

血塊流下 通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も迅速安全に**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を連用せば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず完全に流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**確實顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑及び以上各藥の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭 根治確證新發見藥

從來醫療賣藥其他百方手を盡し到底不治の難症と斷念せる腋臭患者に速に當館新發見の根治藥を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に脫せよ、いか程重き慢性わきがにても本劑を用ゆれば**誓って根治**することを確證す殊に本劑にて一旦全治せば決して再發或は他病に變ずる患ひ無く生涯再び用藥を要せず是れ他にありふれたる類藥と異なる處の本劑一種獨特の靈効なり患者よ速に此根治的新藥を一試して世人の嫌忌せる病根を斷絶せよ實に不思議の新發見奇劑なり▲根治的謝狀山の如し來り見よ示す▲(藥價)輕症根治分藥價送料共六拾錢▲重症根治分同上壹圓貳拾錢▲頑固慢性症根治分同上貳圓參拾錢▲切手代用は必ず二割增しの事▲着金即刻送藥す

以上五藥**專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**

女（めの三）

太陽　第拾六卷第七號　定期増刊

新法令

附 第廿六回帝國議會史

洋裝四六倍判 紙數二百六十頁　定價金三十錢郵税（本號に限り）八錢

我國議會ありて以來、茲に二拾有六回の開會を見る、政府に官吏増俸及税制の一部整理案あり、民間に地租輕減論あり、政府議會爲めに或は大に衝突せんとしたるも、兩者の妥協により、危機を轉じて終に事無きを得たり、通過せる法律案に關税定率改正法、地租、營業税、織物税、砂糖税、登錄税、通行税等の各種税法改正法、外國人の土地所有法等あり、今此等諸法律と共に昨夏『新法令』發刊後既往一年間に發布せられたる重要諸法規を編纂し、茲に又新に『新法令』を發行す、勅令に省令に訓令告示の小なるものに至るまで、其重要なるものは皆捃摭採錄を怠らざる所なり、殊に皇室令として公布せられたる皇族身分令、皇室親族令の如きは、帝國々民の必ず精讀すべきもの、皆收めて此中に在り、加ふるに『第二十六回帝國議會史』は、例によりて快筆妙文、縱に横に、帝國議會の行動を評して擒縱自在、讀去り讀來りて興味津々、政治財政に注意し、法の庇護に頼らんとするものは、座右一本を缺くべからざるなり。

五月十五日發行

東京 博文館

世界無比
最新發明藥

あざ

入墨は廿日 ほくろ
そばかす、なまず
いぼは拾日
目に必ず美麗に除去す

ろこと保險附新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も痕跡を殘さず無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひで美質を完うせよ來館者へ天然の美質は山の如き全治者の感謝状及び除去したるあざ、ほくろ、そばかすいぼ等の實物なを示すべし實に世界唯一の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なます、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送附すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割増し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを適用とす）着金即刻小包郵送す

●らい病根治新劑

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多研究を重ね數千患者の實驗に徵し苦辛經營の末今回始て完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる漢法舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來ふり傳へられたる血統病或は不治症等の謬説に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絶し生涯永久の榮華を完ふせよ、輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す。

藥價送料共壹劑五圓拾錢特別製拾圓拾錢

●毛の必ず生る確證藥

本劑は米國醫學博士の發明に依り學理實驗に徵したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はゝにうけけの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、まゆげ口ひげの薄き人、其他に毛なき人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮蒼々と發生する特効あること確證す本劑は從來ありふれたる種々雜多の毛はゑ藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらず實に天地月鼈の大差あるに付猝に玉石混同視すること勿れ

藥價特別製分五圓卅錢▲大瓶貳圓卅錢▲中瓶壹圓廿錢

●奏効確證美容新劑 やせる藥

本劑（藥名ニードチリン錠）は學理實驗に徵したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり。酒ぶとり。あぶらぶとり。顏赤くほてり。のぼせ症。卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脱し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

壹劑分價送料共參圓廿錢貳劑分六圓廿錢特別製分九圓拾錢着金即刻送藥す

●美(うつく)き聲(こゑ)の出(で)る新藥(しんやく)

▲藥名……ウエーヌス

▲聲美くしくして…淑女は窈窕たり▲聲麗しくして男子に威嚴あり▲聲は人格を高尚ならしむる要素なり…謠曲家、演説家、音樂家、藝人は聲音即ち其人の生命なり。發聲藥は古來世に甚だ多し然れども其確効あるものは恐らくは疑はし、獨り此「ウエーヌス」の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發する方法を自得せり。「ウエーヌス」は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑なり。特別製分を服すれば直に充分なる美聲を發することを確證す。

價送料共壹劑分壹圓拾五錢特別製參圓廿五錢

腦病を根治し記臆力を増進する靈劑

滋醫
回答
記臆増進丸

本劑は獨逸大醫スクリーボルト氏の新處方に基き醫學的の元理に徵し多年實驗の上其奏効確實なるを認め今回發賣するに至りし前代未發の新劑なり故に本劑を服すれば腦病、神經病を根本的に根治し精神爽快智力活潑となり記臆力大に増進し人世百般の見聞更に忘るゝことなきに至る驚くべき峻烈なる特効ありて如何程の健忘者記臆力缺乏者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記臆力大に増進すること容易て確證する所なり論より證據實試一番速に其卓絶顯著なる奇効を知れ

（藥價）七週分四圓五拾錢五週分三圓六拾錢參週分二圓三拾錢壹週分八拾錢（送料）各拾錢宛

以上六藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

（ぬの五）



▽小說 ではどんなもの（古洞畫）…………塚原澁柿

▽脚本 カンデ井ダ（春汀畫）…………中村春雨

▽小說 暗（春帆畫）…………長谷川時雨女史

▽小說 二つの悲劇（淸方畫）…………廣津和郞

▽喜劇脚本 巧すぎる人（義德畫）…………金子紫草

以上は五月號の本欄にして、一讀三嘆に値せざるものなし、次に雜錄欄にては**演藝界**最も振ひ**岡鬼太郎**氏が、當座帳は、眞に折紙附の逸品と稱せらる、其他落語界、講談界、義太夫界等の趨勢を窺ひ得べきもの、本欄を措て他にあるべからず、倘ほ**活社會**、**長廣舌**、**忙中閑**等本誌獨得の讀物たるべく**百花園**に在りては**懸賞俳句**の選評を新派舊派の諸大家に依囑し、以て斯道研究者を滿足せしむる外、**狂句狂歌**の飄逸なる、**情歌端唄**の洒脫なる、**小品文**の簡潔なる、**一口噺**の輕妙なる、倘且**滑稽問答**に至つては、奇絕妙絕他に匹儔を見ず、最後の**雜題**の如きは每回新材料を提供して我が國文學遊戲のいかに多趣多樣なるかを示せり。

文藝俱樂部

明治四十三年五月一日發行　東京本町　博文館

菊判本文三百廿頁　日繪精巧木版數十度刷錦繪

三色版寫眞版…………婉麗花の如き者十數枚

正價貳拾五錢　郵稅貳錢五厘

女(ハの八)

せ、額をおさへながら、
「まアおそいのねえ、一郎さん、何うしたの、」
「今夜カルタをしませんか、姉さん、カルタを、」
息を切つて居る。
「カルタ……」
「先刻東京から友人が來たんです。其奴がカルタ狂だもんだから、早速若月君と始めたがね、セームゲームでね、さア終り一枚つてとこで、何うしても勝負がつかないのさ、三番が三番とも。で一ッ姉さんに願ひたいと云ふことになつて――。え、姉さん、來てくれませんか、」
「まア一郎さん、厭だわねえ、兄さんのお誕生日を忘れちやつたんですか、うちぢや先刻から貴下を待つて居るんですよ、」
「アッ兄様の？　左様だつけなア、」
「いやだわねえ、この人。飛んだことになるところだつた。何うなさる氣、困るぢやありませんか、」
「ぢや今日は駄目ですね、」
「カルタですか、何時でも厭とは云ひませんけれど、どうも今夜はね、今夜でなくつちやいけないの」、
「木村、明日は早く歸京と云つてるんですもの、困つたなア、」
「困りますねえ、私だつて、一郎さんが來てくれなくつちや……。あゝぢや斯うしたらどう、お二人を引張つていらつしやいな、直ぐにね。間があつたら合戰もやりますから。ね、來て下さるでせう、その木村さんとかも、」
「連れて來てもいゝんですか、え、姉さん、」
「結構よ、大勢の方が賑やかで……。あゝ本田さんも被居しやるから丁度いゝ。あの方讀み役がお上手なのよ。何しろ早く出直してゐらつしやい、先刻から待ちくたぶれて居るんですから……乾度よ、待ぼけさせるときゝませんよ」
「大丈夫、夕飯食はぬうちで宜かつたね、……さようなら、」
「あ、一郎さん、一郎さん、」

心附いて呼び返し、今夜は他にお客樣もあることですから、お召を替えていらつしやい、と云ふと

「え、何、」

「否ね、着物を着替えてゐらつしやいと云つたの、オホヽヽ、そんなに綻を切つてさ、今度縫つて上げませう……ほんとにそのお羽織なんてありませんよ、だから貴下方は破戒禪僧のやうだなんて云はれるんですよ、バンカラもいゝでせうけれど、あまり過ぎると卒業してから、學士のお役がつとまりませんよ」

「何とでも云ひ給へ」

足駄ガラ〳〵

「都の空に東風吹きて、春の呼吸をもたらせば、東台花の蕾深み……」

先生は洋服でいらつしやるのが、窮窟さうでならないから、こちらへお呼び申して氣の毒がるのを打けし篤樣のお召をお着せ申す、ワイシャツの上なので少しゆきが短かいが、よくお似合遊ばすこと。うつかりすると良人と間違へさうだ、ホホヽヽヽ。

すらり並んだ皆さんの、いづれ劣らぬ花あやめ、繪のやうな高島田に結げて、初音納戸の無地お召に包むやさしい肩を、白茶の糸錦の矢の字がのぞくお文さん空色の二尺の袂をひいて、ローマの前髪思ふさまちゞらせた、ハイカラな桃代樣、お京さんは廂髪で黒縮緬のお羽織、こぼれ出る緋縮緬の振も艶めかしく、流石鵠沼美人と音にきこえた煙草屋の看板娘。

お京さんには因縁淺からざる酒井中尉、お羽織と對の大島召して、ねづみ縮緬の襦袢のお袖、カイゼル式のお髭をピンとさせ、澄ましてゐらつしやるが、どうも輜重兵中尉とあつては、あんまり振るひもしない。折から門内に下駄音みだれる、私は急いで玄關に立つた。

「まアよくお出下さいました。さアどうぞ。さ、一郎さん、貴下早くお上んなさいなね、」

「姉さん、これが僕の親友木村君です、」

「お初にお目に掛ります。お待ち申して居りましたのよ、よくお出下さいまして。さ、どうぞ。あら先生も

何ですねえ、」

「金子さん」鳥打帽子を脱りながら若月先生（本庄先生の御同僚）

「僕なんかお邪魔とは思ひましたが、野川君が承知んので……」

「左様でせうよ、どうせ私の手料理なんか、お口よごしでお氣の毒様でございます、が、まアどうぞ、」



「これは猛烈ですな、ハス君がついてると思つて、金子さんは馬鹿に氣が強くなつた、ハヽヽヽ」

何て憎らしい口を利く人だらう。皆さんに御紹介して無理に三人を座布團の上におしすゑた。

「まア一郎さん、仕立下しね、あら、お待ちなさい、少しぢつとして……」

まだしつけのまゝなのをとつて上げる。だから貴下は可愛いつてのよ、ほんとに罪はないのねえ。

まづ白銀の空氣ランプ、銷光火室のまはりに聯珠の瓔珞うつくしきを中央に點し、大きなチャブ卓を二ツならべて、やがて御馳走は運び出された。

ビールを拔く、祝盃が上げられる。お京さんはかういふ席のとりなしなど巧妙なもの、私も一生懸命になつて應じたが、ともすればせめ落されてコップを突き出され、これが飲めなきや滿座の中へ、その丸髷頭を下げてお叩頭なさい、などゝ亂暴な……。

何さま青春の血氣に燃ゆる男子である、天をつかんず氣焔萬丈、いづれも負けずに名論卓說、果ては試驗の失敗談やら、勉強の滑稽やら、よく語り、且つ笑ひ盛んに食ひ、御婦人連をのぞくの外は、お口取やお燒物まで驚く程平らげた。何よりの滿足よ、食後には林檎をおすゝめする。と、

不器用な手つきにメスを執つて剝き始めた小松原さんが、案の如く指先を切つて了つた。沙時と見えてぶつと血がふき出す、大さわぎ。やつと私しが懷紙をさいて結はいて上げる、まア男のくせに和らかいお手だこと。オホヽヽ、だからLの字は……、兼やすに袖すり合す朝の雨や、文科の君は優肩にして……。

＊　＊　＊　＊　＊

いなむを無理に引張り出され、とう〳〵木村さんと對座させられた。

若月先生はお京さんと相望む。

すなはち二十五枚づゝの持札。一郎さんはじめ十何名の自稱審判官は、首を揃へて見物して居る。

もう仕方がないわ、私はするりと羽織を脫いだ、木村さんもその黑木綿の紋附を片隅におしやつて、飛白

の布子を着ぶくれた脊を丸く曲め乍ら、札を並べて待つ間さへ少しも動せず耽讀して居られる。色は淺黒いが、血色の好い、眼のぱつちりと可愛い方だ、お頭の恰好がよくも花輪さんに似て……まことAさんもかくやとばかり、思はずほゝ笑まれたが、

「宜しう、どうぞお手やはらかに……」

と頭を下げると



「否、僕こそ、」

眞面目で少しかたくなる。

本田さんはしばらく見まはして

「ちや始めます、いいですか、ええ一枚は空を讀みまして」

咳嗽ばらひ一ッ、

さて朗々と讀み行くにつれ、火花を散らす激戰は始まつた。木村さんお若いにも似ず、取方の鮮かさ、エットッ、ハッ、バタン、ドタン、札は翩々と天井までも

舞ひ上り、その手の早さ、間髪を入れない、愉快の、面白いの、と云ふ程度は過ぎて了つて、私は無暗に身が震へる、まるで夢中で殆んど神經的に手が働らく位なもの、齒をくひしばつて居たがお得意の「夜をこめて」「瀬を速み、」を飛ばされたのに氣くぢけ、「高砂」「逢見て」「契りきな」と見苦しくもつゝけさま、半ばから憤然として陣を立て直し、一上一下遂に最終まで戰をつゞけたが「かくとだに」をさながら電光石火の早技、はつとさけんだ聲もろとも、木村さんの指はすでに私の札を三尺あまりもはね飛ばして居た。拍手喝采わるるが如し。

ほつと息を吐いて顏をあげるとまあ木村さん、玉の汗を紅潮した頰に瀧とたらして、手帕をさぐりながら

「奥さんはえらいんですね、驚きました。あのハッと云ふ一聲、肺腑をつらぬく……」

本田さんまでが

「實にきれいな勝負でしたね、女と云ふものはいくら上手に成つても、兎角取方のきたないもんだが……、夫人のは模範的です、物凄いやうだつた……」

「まア、もう澤山。上つちやいますわ、ホヽヽヽ」

若月先生透かさず

「金子さん、一番願ひませうか、え、」

進み出る。頭を振つて

「ホヽヽ、御免、こはい、こはい、どうぞもう……。それより木村さんと如何です、こゝで勝負をおつけ遊ばせな、お手並を拜見したうございますわ。あ、いまお京さんとはいかゞでした、」

「元より問題になりません、ハハヽヽヽ」

「だから先生、」

お京さんが口惜しがつて、

「どうせ先生と私ぢや虎と三毛猫ぐらゐの段違ひですよ、だのにこんな女なんか相手にするのに、片肌脫ぎなんかになつて……、あんまり御大層ぢやありませか、ねえ、」

「否、小敵と見てあなどるべからず……」

「まア憎らしい！」

「オホヽヽ、ぢやお京さんには負けた罰として、一つお願ひしませう。――雪ちやん、」
手早くカルタ札をかたよせて、次の間から三味線を持つて來させ、
「さア、お京さん。――ねえ皆さん、」
「贊成、贊成、」
パチパチ。
「何か意氣なものを一つ、ね、さ、お京さん、」
式の如く二三度辭退するを、手で制して、强いると笑ひながら指をなめ〳〵取り上げた。お京さんの清元と云へば、尋常科時代からの評判もの、今ではお師匠樣も一目おくとか。チトン、ツトンと調子を合せる。みんな視線をあつめて靜まりかへつた。
「霞の衣、衣紋坂、衣紋つくらふ初會に、袂ゆたかに大門の、花の江戸町、京町や……チチヽリチンツン……」
三筋の糸の撥さばき、透き通るやうな美音の北州、藤色の半襟から眞白く拔け出して居る首を一寸かしげて、くつきりとその富士額の細面、濃く紅を含んだくちびる、長い揉み上げ、お京さんはどう見ても清元式だ。銀杏返しにお召の羽織でもぞろりと引かけて、猫を相手の境遇など似合さうに思はれる、切角だが中尉夫人には少し不向ぢやないかしら
酒井中尉と二人を見くらべて、伏目になつたまゝ妙な事を想像して居ると
「御苦勞、御苦勞……」
拍手は急霰の如く湧き立つた。はつと我にかへる、一曲こゝに了るのであつた。
お次は本庄先生が自慢のお手並、ガラにもない「梅の春」。併し面白く拜聽した。
奥さんは十三絃を、と八方からせめ立てられたが、幸か不幸か私のお琴、折も折とて昨日床の間からぶつ倒れ、重傷をおふて了つたんですもの。いさゝか殘念のやうでもあるが、かへつてこの方が花だつかも知れない。
桃代樣にもぜひ一曲、と願つたら、妾ヴアイオリン

は嫌ひなんですから、と素氣ない御挨拶。

したら本田さんが、只ぢや面白くないから電信戯をやらうと有仰る、若月先生と二人手つきして御説明が初まつた。私は桃代様と顔見合せて、では女は女同士くみませうとの發言も多數決で否決され、抽籤で定めると犇めいた。

結局、私の組は、本田さんに本庄先生お文さん酒井中尉小松原さん木村さん。向ふは篤様一郎さん桃代様お京さん若月先生清夫さん雪ちやん、末席にはきよが侍べつた。

對ひ合つて並んで坐る。これで拳を打つて負けた方の組のものはみんな藝をやるのださうな。お互に後に手をまはし、相手の人に見えないやうにして、何を出さうかと相談する、本田さんが私の小指を握つた。私は本庄先生に傳へた、本庄さんはお文さんに、成る程電信だ。

「さアよしか、一ち二ノ三ッ、」

手をつき出す。向ふは鐵砲、此方は狐、本田さん頭をかいたが、きよが一人まちがへて手をまご〳〵させて居たと云ふので、本庄先生が異議を申立てると、若月さん、むきになつて逆襲する。ホヽヽ、ぢやヂャンケンできめませう、さ、ジャンケン、チッチ、石なしヂャン……。やつぱりアイコよ石なしヂャン、あどうしても篤様の方だ。

若月先生の皿まはし、大喝采。篤様の吟聲に一郎さんの劒舞、清夫さんの袴を脱がせて裾短かにハきこなし白手拭の後鉢卷、たすき十字にあやどつて、心張棒の刀をぬぎかざし立ち舞ふ。

清夫さんは涼しい聲で、慶應の應援歌を歌ふ。フレーフレー、フレー、ワセダッ、とみんな交せつ返して大さわぎ。

「オシヨロ高島及びもないが……」

桃代様の追分とは素敵だ。

お京さんは三味線を取つてトコトットトヽ、ヽ、

「自由氣まゝに成るならば、金の生る木を庭に植ゑ、思ふお人を膝元に、世間知らずで暮したい……」


室町三丁目まで

まア振つてる、それが貴女の心意氣、お安くないのねえ？　雪ちやん手拭ひの南瓜かぶり、じん〳〵ばしおりして

「權兵衞が種蒔きや、からすがほじくる、ア三度に一度は……」

とをどり出す、涙の出る程笑つて了つた。十六にもなつて一向體面のない子。きよは臺所へにげて行つた

「實に〳〵花の友人は他生の緣と云ひながら我等も同じその心、ところも山路の友なれや、見もせぬ人よ花の友……」

本田さんの觀世流、木村さんは新體詩の朗吟。

酒井中尉てひどいこと

「そばと團子を一緒に食へば、柳と手まりの賭場が出る……」

小松原さんの野毛の山、鐵砲かついておッぴいひやらりこ、今まで俯いて眼鏡の曇りばかし氣にして居らした方が……と可笑しくてならぬ。

本庄先生口笛で「おのが姿を花と見て、」とやる、お文さんはとんぼのやうに頭を光らせて、お雛樣然と控へたまゝ何と云つても遊ばさない。それや無理さ奥さんが先に立つてやらないのだもの。せめて立てられて

「アンデス山は幾千里、カ、オの實がなる、金がなるお前も明治の男なら、そんな小島にや居られまい、トヽタ、ヽ」

と云つてやつたら、はゝア耳が痛いね、と大わらひであつた。

皆さんなか〳〵の藝人だが、しまひにはだん〳〵隱し藝の材料もなくなつて、君が代が始まる、米國の國歌を歌ふ、ハイカラ節が出る、「雪の進軍」をどなる。「綠もぞ濃き柏葉の」を合唱する、金盥を叩く、ヨーイノ〳〵デッカンショー。

「丹波篠山鳳鳴の塾で……」

「ヤア、コリヤ〳〵、」

私はたまらずそつと座を外して茶の間にかくれた。先刻無理に強いられたビールの名殘、鼓動の高まつた胸を抱いて、しばらくそこへつゝ俯して了ふ。頰がほ

てつて〳〵、ア、苦しい。
夢心地にざんざめく聲をきゝ乍ら、ウト〳〵してると不意に
「あつ熱つ、あつゝガランバッシャン、わあつ、あつツ」
たゞならぬ悲鳴と物音、すはと飛び上りさま夢中で障子を引開けた。

＊　＊　＊　＊　＊

「えらい事をやつつけちやつたもんだね、おかげでお汁粉を食べそくなつた。ねえ、姉さん、もうお砂糖を入れたんだらう、損だなア、」
「汁粉の代りに面白い芝居です。ハヽヽおさん君の顔に一面ポツ〳〵と、餡のはねてたとこが宜かつたね、腦の鈴なり……ハヽヽヽヽ」
「漱石ぢやあるまいし？――オホヽヽほんとにまるで血の池のやうでしたわねえ、木村さんさぞ吃驚なすつたでせう、私まア……」
小松原さんも笑ひながら
「死ぬ樣な聲を出したんですもの。僕アあんまりあはてゝ飛び出すはづみに、誰かと衝突しましたね、何誰でした」
「あら、お文さんでせう、まアこんなに……」
鏝で展したやうな高髷が、やゝ傾むき掛つて居るのを直して上げる。お兩人は顏から火を出された。
「きよはやけどをしやせんかね、可愛想に……。あんまり一同に見られたもんだから、とう〳〵泣き出して了つて……」
いまの汁粉鍋轉覆のうはさとり〳〵。ほんとに吃驚させられて了つたんだもの。
「奥樣、もうあれを持つて參りまして、宜しうございますか、」
雪ちやんが叮嚀に手をつく。
「はアどうぞ。きよはどうしました」
「いま着物を着替へて居ます。ポツン〳〵はねたとこだけ、赤くふくれましたよ、あぶないことでしたねえ」
オホヽヽヽハヽヽヽヽ

いれ直したる玉露の香り高く、みかん、煎餅、おまんじゆう、たちまち山崩れ、城おちいりかけた折しも

「奥様、小野さんと中山さんから、お迎へが見えましてございます、」

しつかりした監督者もない家、若い方ばかりのこの騒ぎの中へお大切なお嬢様を・・・止せばよかつたと少し心配になつたとこであつたから、強いても引止ず、三人を玄關へ送り出した。

お座敷ではまたもやどつと笑ひ聲。

「勝つたがエー・・・・」

* * * * * *

ならば一晩遊び明かしても、だけれど左様もならず皆さんが座を立たれたのは一時半、あまり晩いから本庄先生は、無理にお泊め申すことにきめた。

私も門まで出る。

「失敬、」

「さようなら、」

「夫人、」と口々、

「お京さんを送つて上げて頂戴な」

とおすゝめしたので篤様も先生も御一緒にぞろ〳〵ワヤ〳〵とにぎやかな一群。

高い下駄音が三ッの提灯と共に、だん〳〵遠ざかる・・・・。

「人生イ・・・男子と生れてすべからく――、妻をめとらば、百合子夫人を得べしイ・・・・何ぞ・・・・・・」

あれ、若月先生だわ、にくらしい。

左右の袂に胸を抱へて、くるりきびすを返す門内は玄關から颯と一巾、赤い灯が小砂利に流れ、笑を含んだ雪ちやんがランプ片手、式臺に立つて居た。



談叢

青年の生活難

現代の青年には意氣地が無い、元氣が無い高遠な理想を有して居る者が無いと云つて世の先輩は慨嘆する、成る程物質文明の影響や近代思潮の變遷と共に一面に於て青年は確かに墮落して意氣地が無くなつた若い人の心は宛ら老人のやうな心に變つて仕舞つた、然し之は到底一面の觀察に過ぎないので青年の爲に辯護するならば現代の青年は頗る眞面目になつた、大いに考へる樣になつたと云ふ事が出來るだらう、即ち自意識が大いに發達して來たのである。

老人が自分の書生時代には玄關番をして居ても志を治國平天下に致し望を大臣參議に懸けて居たと自慢をするならば、現代の青年は其樣な愚かな夢を見て居る事は出來ぬと云つて之を嘲笑するだらう、實際昔は往々此夢が實現されたのであつたが、今日に於ては到底之が實現せらるゝ樣な機會は無のである今日書生から一躍して大臣にならう杯と云ふ樣な理想は、小學校の生徒でも夢見て居ない、之は時世の變遷で如何とも致し方が無いのであるが、然らば何故に現代青年の意氣が消沈して眞



面目に考へる樣になつたかと云ふと、それは全く生活の壓迫である、實に生活と云ふ一事實は殆んど今の青年の多くの心を支配して居る總べての物と云つて可い、今の青年は此の壓迫から免れる事は出來ない、試みに小中學校の生徒を捉へて將來の目的を聞いて見ると多くは卒業後の生活難を思つて極めて實世間的の職業を選擇する最も單純である可き少年の腦裡にも、早く生活と云ふ一大事實が深刻な印象を留めて居る、玆に於て自意識の精神が著しく發達して其の結果は極端な個人主義となり深く且つ眞面目に事を考へる樣になる、而して之を一面から見ると意氣銷沈元氣沮喪無理想と見られるのである

若し生活と云ふ事實が其れ程迄に現代青年の心を煩はして居るなら、何故日本より遙かに生活程度が高い西洋諸國の青年が意氣旺んに、且つ快活であるかと反問する人があるかも知れないが、夫れは西洋と日本とは大いに生活狀態を異にして居るからだ、日本では封建時代の遺風として今日でも尚は家族本位の生活をして居て、新に社會に出た青年は自活すると同時に、親子兄弟をも自己の双肩に荷つて生活しなければならない、是は青年に取つて重大な責任で且つ又非常な苦痛である、所が西洋では各獨立で、親は親自ら衣食し、子は子自ら生活を支へれば宜いのであるから、例へ生活が困難でも比較的青年の心を煩はす事は少い、如何に生活が困難でも單に自活の道を附るだけ

ならば夫れ程意氣を沮喪せしむる心配はない譯である。

家族本位の生活と云ふ事は決して嫌ふべき事ではない、之が若し完全に實行されたなら、一種の樂園で、これ程結構な事はないのであるが、然し從來日本に行はれて來た樣な形式では到底將來の實行は望まれないのである、故に若し何所迄も家族本位の生活を維持しやうとするなら、福澤先生の云はれた所謂獨立獨行の精神を各自に體して生活す可きであると思ふ、都會に生活する者は田舍に生活する者より 比較的獨立的生活を送る者が多い、其れは都會に於ける生活の波が田舍より一層荒いからで、恰かも支那や朝鮮に於ける生活が日本に比して更らに家族的であると同樣である、少年青年の元氣沮喪を憂ふる者があるなら家族並びに學校等で其の修養に心すべきである、親が子供の卒業ばかりを當にして教育する樣では、子供の跼蹐するのを心配しても無駄な事である、教育者も徒らに實科主義を説くのを廢め世の成功を説く人も内的方面から 成功を鼓吹して貰ひ度い。(竹越與三郎氏)

江戸趣味と女

東京の女の美は、春から夏にかけて殊によく發揮されるのである、此江戸趣味の美即ち「粹」と云ふものは過去二三世紀の間江戸人が研究し助長し來つたもので 獨り東京の女のみに見らるゝものである。然し之が果して眞に東京の女獨得のものであつて、他の企及すべき處のもので無いかと問はるゝと、必ずしも左樣とは限らぬ、凡て東京と云はず何處の都會に生活して居ても、殊に感情の鋭敏な女性は四圍の刺戟の爲めに一層五官凡てがデリケートになる、之れは全く都會生活と云ふものが「自然」から遠ざかつて居るからで田舍の人でも都會に生活して居ると自から都會的の趣味を解する樣に同化されて仕舞ふ、例令ば淸元とか常磐津とか長唄とかに就て見ても 東京化した人は眞の趣味を汲み取る事が出來る樣になる、要するに都會の空氣は女性を多感的にして「澁み」『イナス』「意氣」などゝ云ふ微妙な感や、又色彩の點に就ても多感的にする、 從つて贅澤な美的生活者となつて懶惰に陷る弊がある、又眞面目に生活の意義を考へない樣になる、田舍の空氣は之れに反して茫漠としてゐる多感的な東京の女の女性的なのに比較して男性的な趣がある、色彩が單純である、感が鈍いがこれ丈け堅實である、 東京の女に深き生活の意美が伴はぬのに反して 田舍の女は深き生活の意義を認めて居る換言すれば 江戸ッ子趣味は東京の空氣の感化であつて東京の女に非れば解らぬと云ふ趣味では無い、田舍の女であつても東京生活をすれば自ら感化されることで、たゞ深酷な都會の刺擊に因て江戸ッ子と云ふ色彩は 發揮されるものであると思ふ。(島崎藤村氏)



學校教育と結婚

女子には結婚といふのがあつて、教育はこの結婚と衝突して教育も潰れゝば結婚も潰れるといふやうな事のあるのは 嘆かはしいものだ、この點は十分家庭に於て熟考して貰ひたい。女子には教育が必要だ、獨らお裁縫や御飯拵が上手に出來ても子供が世間に立つて行く前途に就きその嗜好や學問の程度や 其れ等を推量るやうでなくては立派なお母さんではない、然るに女學校の一二年生時分から結婚するものが少くない、學識も十分ないうちから家庭で引つこ拔いて了ふのだから 實際本人に取つては同情に堪へぬ次第だ、また三年生四年生時分恰ど十五六歳といふ頃だ、この年頃になると如何したものか一年生二年生時代で學科の優れてゐたものが三年生に入ると がらりと落ちて了ふ、第一運動で判る、一年生二年生の生徒は暇さへあれば活潑に運動してゐる、血色もよく身體もズン／＼發達するが三年生四年生になると 比較的くすんで了ふやうになる傾きがあつて、先づ運動もしないし何か斯う物を思ふやうな風であるから隨つて身體の發達は止つてゐる、チト込み入つた學科になると沁み／＼と聽いてゐない、空想に耽るのだ、これが非常に惡い、三年生四年生時代はまだ／＼空想に耽つてゐる時期でない。まだ早いのである。 これは一部の家庭が斯くせしめるのではないかと思ふ、「お嫁入りも近づいてゐるのにそんな荒つぽいことはよしなさい、チト女らしくおなりなさい」とか窘められるから只おとなしくなつて お嫁入りのことばかり思うてゐて、偶良人に對することや舅姑に事ふるをなどの話があるとそれは喜んで聽く、こゝが大に疑問のところである、 折角女子教育を授かるべく來て中途にして柔弱になり空想に耽る、あの生徒は實におとなしいなどゝ云はれる者は必ず裏面に於て、思はしいことが伴うてゐる、學生中はどちらかといふと淡泊過ぎると思ふ生徒が卒業後家庭の人となると 却て良人に優しく子供の薫陶方も好いこれは經驗上判つてゐる、家庭にあつて女子教育の根本をよく熟考して學校へ通はせて 戴きたいと思ふのである。（大阪夕陽丘女學校長伊賀駒吉氏）



日本婦人の不行儀

日本婦人が小用を耐えることが出來ず、一日の中に幾度も／＼便所に通ふと云ふことは 確かに不行儀千萬な惡い習慣と云つて宜い、例へば宴會なり、其他會合の席に列する貴婦人方でも三時間と小用を耐へて居ることが出來ないではありませぬか、此間も某所に招かれて往つて見て居ると、餘興の幕合に綺羅な飾つた令孃や貴夫人がぞろ／＼と、席を立たれる何處に往かれるのかと見て居ると、皆便所への通路へ向はれるのです、何うも

不體裁極つた話ではありませんか、或人は多人數集會の所では便所に往つて高價な香水を撒布した手巾から 床しい香を四方八面に放つのを、此上もない自慢として居るとは以ての外の心得違ひで、あの不體裁を西洋人が見たら何と思ふで有りませうか獨逸邊で學生がビーヤホールに入つて 盛に鯨飲をすると度々小用に立つとはあるが、西洋の婦人が、 他處へ往つて矢鱈に便所に通ふなどゝ云ふことは恐らく見ない圖である、小用を耐えて居られんと云ふのは一つの惡い習慣であります、決して身體の組織が違ふのではないのだから妻や娘にも此事に就て 始終叱言を言つて居ります。一體人間と云ふものは一晝夜に三度小用を足せばそれで充分なものです、それ故幼少の時から然う云ふ習慣を附けさへすれば、何でもないことであるのに、 それを阿母さんが先頭になつて、無暗に小用に立つて見せるから子供も見やう見眞似で、終に寸時も耐えて居られぬやうな習慣になるのです、餘處にお客に往くときは、 お湯や冷水をがぶ〱飲まず、家を出るときに小用に往つてお行儀良くしてお在なさいと云ふことを小さい中から敎へ込むのが大切であります、今僅かに奥さんやお孃さんに向つて 貴女は無暗に小用に往つては可けませぬと眞向から攻撃したら、或は體裁を害するやうなことがないとも保し難いが、それとても一體日本人は一日の飲量が多過ぎるから幾分でも之を節するやうに注意すれば、三度往く所は二度で濟むやうになります、外國婦人と入り交つて舞踏會に出で、或は音樂會などに列しながら外國人は秩序整然として堂々たるに拘はらず、日本人はこそ〱と立つて便所の通路に押合をする、之を見る人の感じは何うであるか、些細なことのやうであるが、關係の及ぶ所はなか〱大變な問題であると、私は常に歎息して居るのであります。(北里醫學博士)



日本婦人の缺點

日本髮の結ひ方を見ると髮を强く引張つて之を元結で締め、髻の間に小枕様のものを押し込んで其上に簪を挿す、根掛をかける、又丸髷となると笄と云ふを當てる、而して髮は梳油とかビンツケとか香油だと云ふものをこて〱と塗り付けて屹と結び上げられるのであるから、毛根は塗り塞がれ頭部の皮膚は重量に壓されて居るから局所が貧血する樣になる、皮膚の蒸發は妨げられる爲めに頭痛を起こして氣分が塞いで來る、頭の體溫で油が醗酵して臭氣を發する、毛髮が引張れて脱け落ちると云ふことになるのである、それに中剃を爲るといふ事は西洋人に見ない習慣だが日本婦人は少し中剃りが伸びると逆上を起し中剃のところから禿かゝるのである是等に就ての衞生法を考ふるは婦人の急務である。

兄の看病と母の保養

故子規氏令妹　正岡りつ子

十年あまりの住居は古りたれど、ありし世の面影消ゆる由しなく、世は憂き節多き呉竹の根岸の里に、年老ひし母君とたゞ二人、今も猶思出の涙に咽ばるゝ亡き正岡子規氏の妹君りつ子の君を訪ひました。八疊の座敷へ通ると、先づ目に付くは右手の壁間に懸けられた故子規氏の面影で、横顔の像は亡き人を宛然に偲ばせて、恰も生ある人の如く思はせます。りつ子の君は其の下に、つゝましく坐られて、言葉少なながらも、色々思出の數々を語られました。

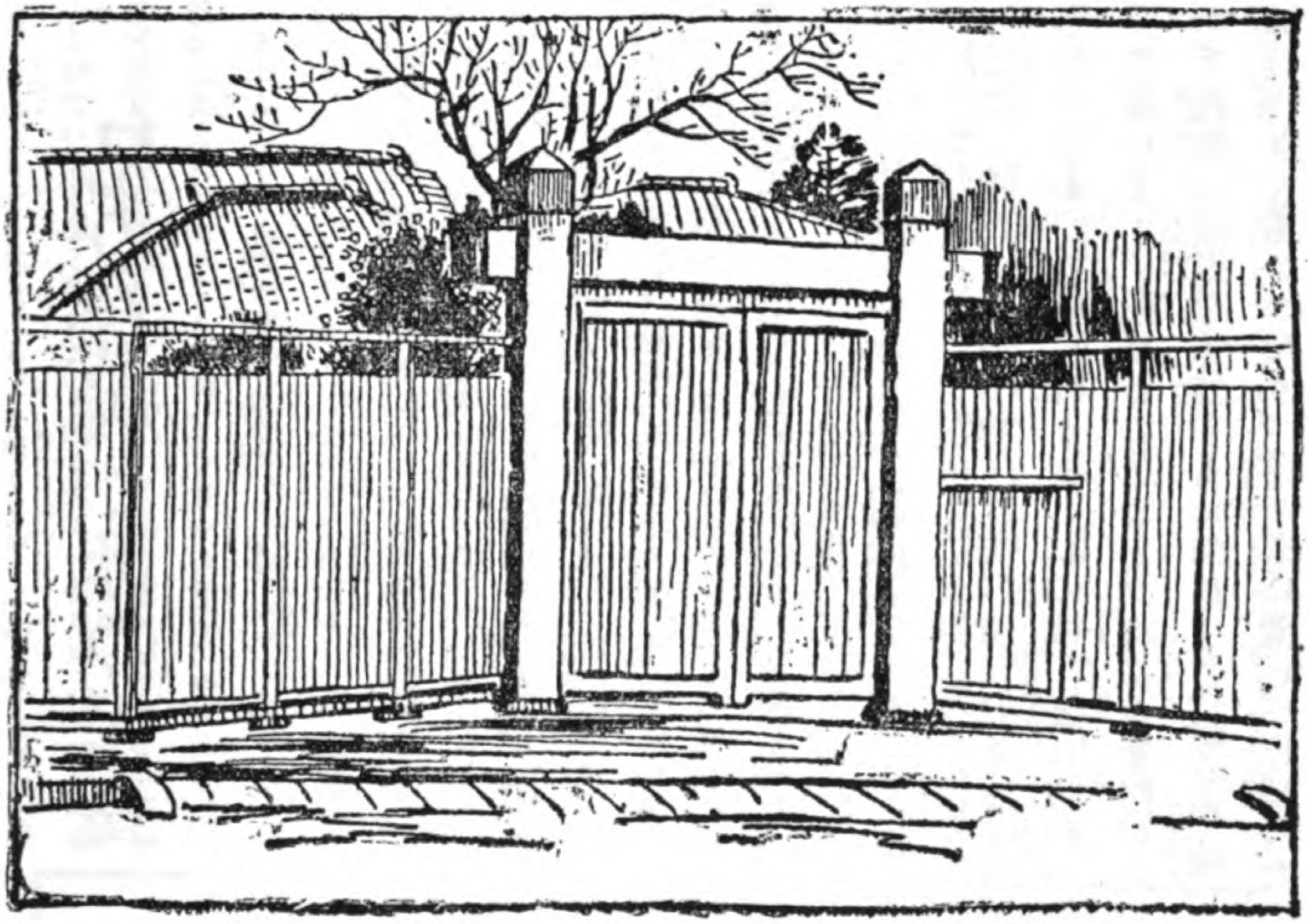
△苦しみと不自由の一生

兄は一體若い中から餘り丈夫な方ではありませんでしたが、あの病氣に罹りましたのは丁度日清戰爭の頃でございます。從軍して居ました時に血を咯いたか何かで内地へ引返して參りましたが、それから引續いて、快つたり、惡かつたり、遂々床に就いて仕舞つたのでございます。昨日今日のやうに思はれますが、早いもので、兄が死にましてからもう滿九年になります。まことに不幸な人でして、彼是四五年の間べつたり床に就いたきり、讀むことゝ筆を取ることゝの外にこれといふ樂もございませず、苦しみと不自由のうちに死んで行きました。

今から思ひますと、あゝもすれば可かつた斯うもして慰めてあげれば可かつたと思ふことも、その頃はいたらぬ勝で、充分な看病も出來なかつたのが何より殘念でございます。

△母と共に途方に暮る

その頃の家内は母と兄と私と三人でございます。私と母とは二十五年の暮まで郷里の松山の方に居りましたが、未だ兄が病氣になりませぬ時分に、兄もそろそろ社會へ出て仕事するやうになれば、書生時代とは違つて獨りでは何かと不自由でありませうし、それに家を二つに分けて置くといふのも不經濟でございますか



名家の邸宅　（平田內相私宅）

ら、兄の勸に從つて世帶を一つにすることにいたしたのでございます。

鄉里に居ました頃から家計も裕な方ではありませんから、私は唯小學校を出たばかり、學問もございませず、まるきり田舍者なのでございます。

その田舍者が東京に出て參りまして間もなく、只一人と賴る兄に病はれたのですから、母も私も全く途方に暮れました。然し兄の友人の方や、世話をいたした人々が皆始終力を添えて下さいますので、兎に角過して行けたのでございます。

△機嫌のよい時と惡るい時

何しろ兄の病氣は體の自由が利かないといふのですから、兎角肝が強くて、それに體の痛の烈しい時などでございますと、どなたに對しても當り散すといふ風で、傍に居てもハラ〳〵いたしました。時には體が痛い〳〵と云つて悶えた擧句、子供のやうにワイ〳〵泣くこともございました。

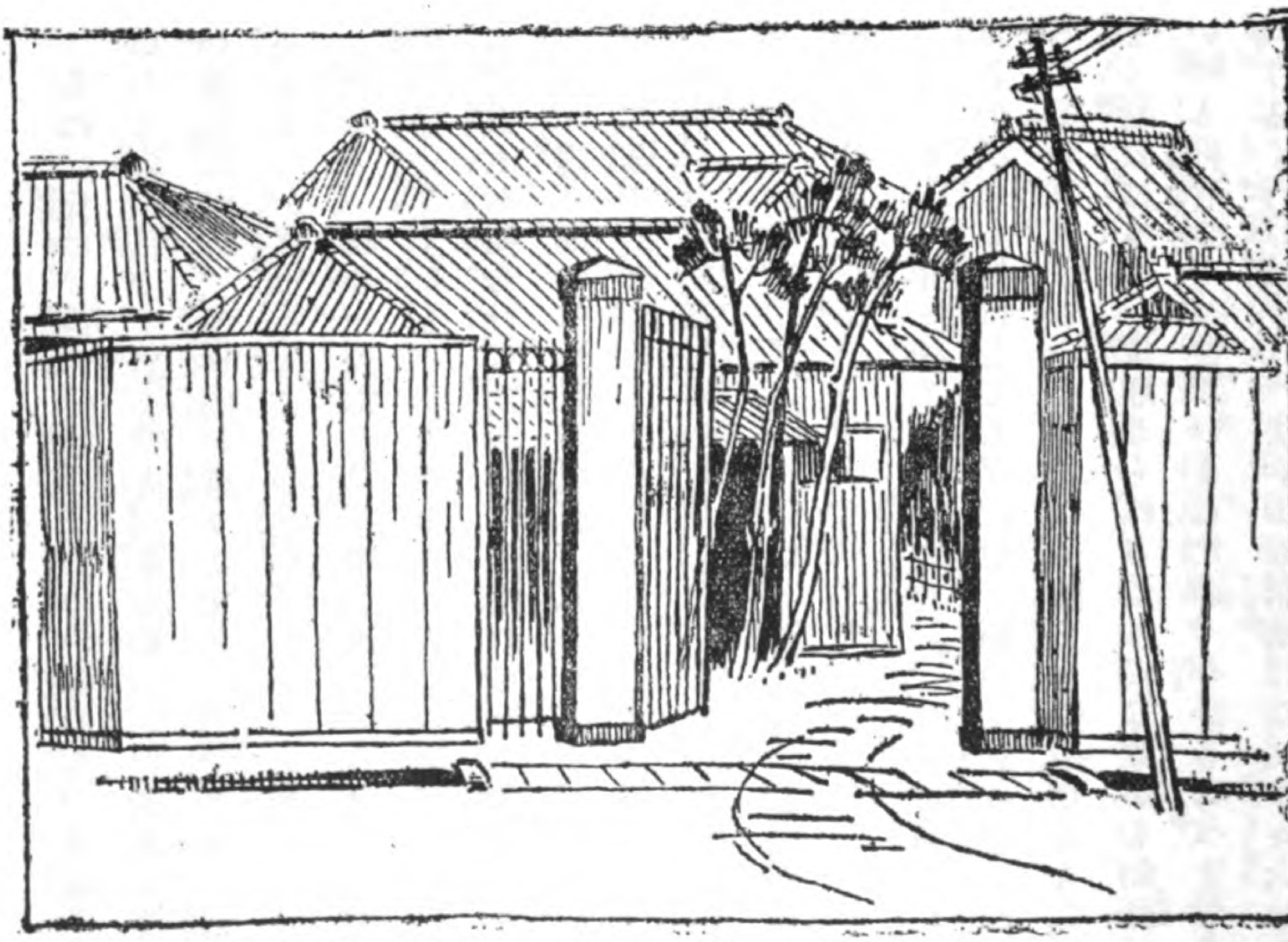
然し機嫌の好い時は、非常に快よさ相に人様ともお話いたしますし、退屈まぎらしに、お隣りの娘さん達を相手にして繪など描いて樂しんで居ることもございました。

私も、成べく病人のことであるから、氣に逆はぬやうにと思ひまして、始終枕元に附き切りで、出來るだけ慰めるやうにいたしましたが、時に氣に喰はぬことなどありますと『お前などにはもう相手になら ん！』などゝ怒り出しました。

それでも矢張り肉身のことでございますから、看護婦などより私達に世話されるのが快いと見えまして死ぬ少し前などは、藥の世話から繃帶の捲き更えなどすつかり私にさせました。

△財布を叩いて草花を買ふ

何を申しても繃帶は身體に六卷きからいたすのでございますから、餘程氣を付けていたしませぬと、迂かり痛身に觸れると、それは苦しい目に會はせてしまひ



名家の邸宅　(後藤遞相邸)

ます。

初めの中はどうも不馴れで、兄によく叱られましたが、毎日いたして居る中に馴れて參りまして、終ひには兄も私がいたすのを喜んで呉れる位でございました

その合間々々には、母と交り合つて新聞を讀んで聞かせましたり、地方から送つて參ります俳句を、兄が一々選んで部分けしたのを私が淸書いたしました。

俳句を選むことゝ、新聞に原稿を送るこゝとは毎日缺しませんでしたので、書きましたものは私がいつも新聞社へ持つて參りました。

新聞社は神田でございますので、神田へ參ります時はいつも、歸りに何を買つて來て呉れ、彼を買つて來て呉れと頼みます。

私も何か兄の氣に入るものをと思つて、美味さうなものや、珍らしい草花などがありますと、無い財布を叩いても買つて來るやうにいたして居りました。

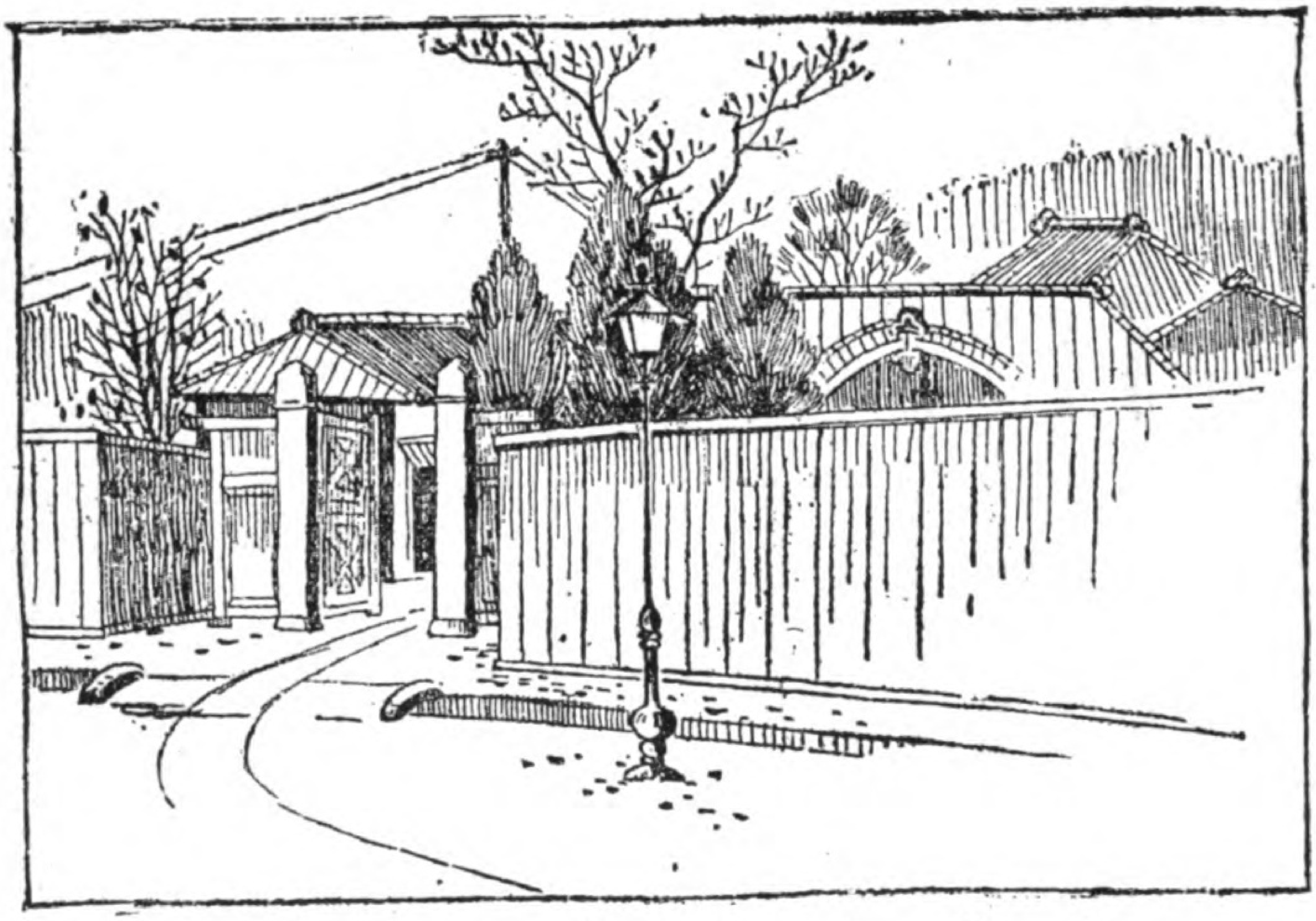
△遣る瀨なき兄の退屈を想ふ

それに兄は、毎日の新聞に假令十行でも、自分の書いたものが載つて居ますと、甚く喜ぶといふ風でございましたから、朝新聞が參りますと、第一それを兄に見せるのが私にも何よりの樂みでございました。

夜など、時々一度消した洋燈を又點けさせまして夜中に書見をするといふやうなこともございましたので私共もお附合ひに落着いて眠られぬ時もございましたが、遣る瀨のない兄の退屈を思ひますと、私共は辛いとも思ひませんでした。

全く私共は兄の病氣さへ癒つて呉れますればそれでよろしいので、又この病氣が不治のものとは夢にも思ひませんでした。

どうかして早く快くして上げたい、せめて自由に出歩きが出來る位にしてあげたいと願つて居りました。その頃お世話下さいました、佐藤三吉先生なども『うまく行けばもう一度起きられるやうになるかも知れない』と仰有つてゞございましたが、今から考へますと『うまく行けば……』といふお言葉には『中々六かし



名家の邸宅　（本野大使邸）

い』といふ意味があつたのでございませう。果して病氣は月日重るに連れ惡くなりまして、だんだん體の自由さへ利かなくなりました。仕舞には筆を持つことさへ六かしくなりましたのでございます。

△『病床六尺』が書けなくなる

丁度死ぬる前頃、もうすつかり身體が動かなくなりまして、寢返りにも非常に難儀でございましたので、兄の望みで、床の脇の疊へ麻の布切を環のやうに縫ひ付けまして、それに手をかけて寢返りするやうにいたしました。

然しそれでも未だ不自由で、右から左へ寢返るのに氣永に三四十分もかゝつた始末でございました。

もうさうなりますと、兄も死ぬるといふことを覺悟して居たものと見え、その頃新聞に出して居りました『病床六尺』が書けなくなる頃には、俺も死ぬのだらう、俺が死んでも葬式は極質素にしろ、戒名など長たらしいものは付ける必要が無い。棺の側でお通夜を

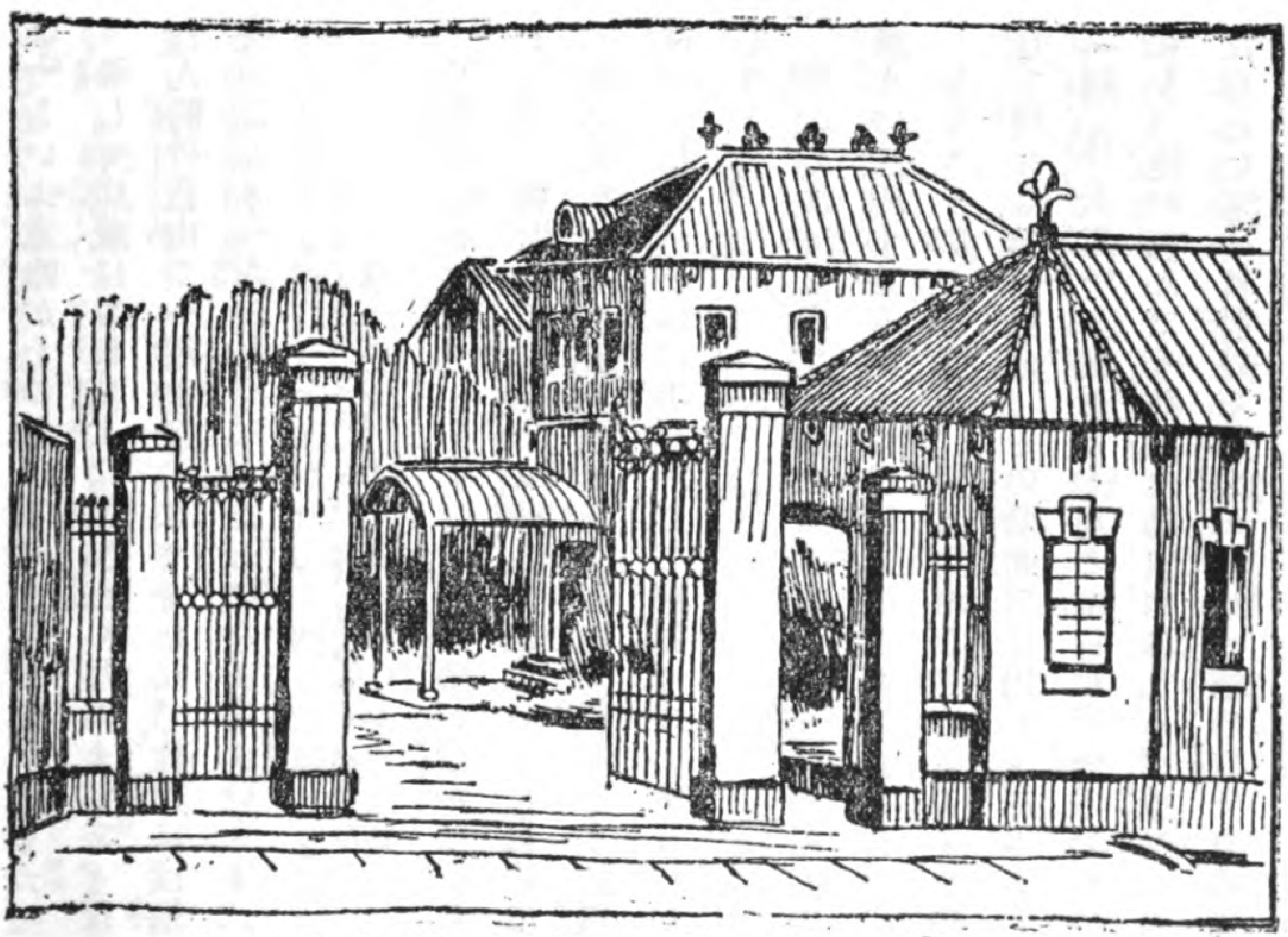
するにしても空涙は無用だから、大きな聲で呑氣に笑話をするが可いなど丶申して居りました。

私共も全く心細ふございました。私の身はたとひどうなりましても少しも厭ひはいたしませんが、今兄が亡くなりましては頼りにいたしてゐた母がどんなにか力を落しませうと思ひますと、どうかして今一度癒る法は無いものかと、いろ〳〵思ひましたが、甲斐もございませんでした。

△『糸瓜咲いて』の述懐

三十五年の九月十八日でございました、朝頃から容體が急に變りましたので、若しものことがあつてはと碧梧桐さんや、高濱さんなどにも通知しますと、間もなく碧梧桐さんが見えて、兄の枕元へ近寄り『どうかな』と聞きましたが、その聲も聞えませぬのか、たゞ左の手を四五度動したばかりで靜に仰向いて寢て居ました。

私は何か書きたいのであらうと思ひまして、板に



名家の邸宅　（寺内陸相邸）

唐紙の貼り付けてありますのを取つて兄に渡しますと兄が左の手で板の左の下の方を持ちますから、私は上の方を持添えて居ますと、いきなり板の中央へ、『糸瓜咲いて』とすら〳〵と書き、少し下げて、又『痰のつまりし』と書きました。そしてさも大仕事をしたやうにぐつたりとして筆を出しますから、碧梧桐さんがその筆に墨をたつぷり染ませて又病人へ渡しますと、やがて、『佛かな。』と書き添えました。碧梧桐さんも心配さうに吐息さるゝ、私も何かしら悲しくなつて、思はず涙がハラ〳〵と零れました。

兄は何を書き終りますと投げるやうに筆を捨てゝ、横を向きざま二三度續けて咳をしましたが、どうしても痰が切れませぬので如何にも苦しさうでした。

△母に對するせめてもの心盡し

その日はそれで事も無く濟みましたが、翌十九日でございます、朝起きて母が兄の蚊帳の中を見ますと、如何にも物靜に寢入つて居ますので、何心なく體に手を當てゝ見ますと冷たくなつて居ますといふ騒ぎ。縱し額の方には未だ少し溫みがありましたので皆が切りに兄の名を呼びましたが、もう駄目でございました。それが丁度この室でございます。私共も早く父には死に別れ、兄でも生きて居てくれましたら、母も先づ安樂に行けましたでせうが、その兄にさへ死なれて丁ひましたのですから、母にはほんとに氣の毒でございます。國には親戚も無いではございませんが、私の生きて居ります内は、私が養ふが當然でございますから只今では先づ誰方のお手も借りずに母だけは私が養つて居ります。

因に曰ふ、りつ子の君は明治三十五年、兄君が亡くなられた後を女の手一つで母君を養ひ上げやうとの健氣な覺悟から、進んで女子職業學校に入り、十六七の小娘たちと机を並べての修業も敢て心とせず遂に目出度く、其處を卒業されて、今は同校に教職を取つて居られますが、在學中も、我身の憂は深く包んで、いつもニコ〳〵として居られ、同窓の友どちからは、『阿母さん〳〵』と戯れに慕ひ寄らるるを心から嬉しと迎えて、誠心籠めた親切は、今も同窓の人々の忘れ得ぬ處ださうでございます。

私の見た京都

赤松梢子

○蒲團着て寢たる姿の東山、其なだらかな三十六峯が、悠々と圍ッて、北は遙に比叡愛宕の雄々しい嶺を眺むる京都市、四十萬の住民の大部分は格子造りに布暖簾の仲買か、又は諸方の仕入店等ですから、繁華な通りは割合に少うございます、けれども其等仲買店の集りである中京邊は、町並が美々しく揃つて何れも大家ばかり、算盤片手の大取引もなか〳〵目覺しく思へるのでございます。

○併し商業の方は割合に振はないで反つて美術工藝の方が盛でございます。つまり一刻千金を爭ふと云ふの懸引よりは、靜に心膽を練つて作り出す手工の方に秀でゐる譯で、西陣織物、淸水の陶器、漆器に彫刻に、京都を代表する物產と云へば皆精巧を極めた美術品でございます、從つて畫家彫刻家美術の大家は中々多ございますが、商業で成功した人は誠に少いやうに覺えます。

○おしなべて京都人は優柔、不斷膽の小さい弱腰の、丹二郎式に出來上つた好男子が多くて、殊に大店の主人となると、商業は總て番頭任せ、帳尻の怪しいのも氣かつかないで一途に先祖傳來の風を失はないやうに考へて、日々に進みゆく世



界をさへ知らない坊ちやん育ちなのが重だそうでございます。

○斯樣な人々ですから遊藝は非常に盛で御座いまして、女ならば茶の湯、活花、琴の一曲位知らない者は全く人中に出られない位で、男と雖能に、仕舞に、それ〳〵一つ位の藝は隱してゐるのでございます。琴はすべて生田流で、茶ノ湯は裏千家、活花は池の坊などが最も流行してをります、能は片山、大江の家元に各々立派な能樂堂を建てやんごとなき方々も數多弟子入をしてゐらつしやる。

○京美人とか申して女の美しいのは京都の特長ですが、さう皆が皆まで人形だちの花のやうな顏ばかりだと云ふ譯にはまゐりません、けれどもくつきりと垢ぬけのした上に、立居が何となくやさしく、臈たけてゐますから、自然より以上に美しく見えるのかも知れません。

○中流以上の家庭では娘を物學びの外なるべく戶外へ出さない樣にします、中にも古風な家では女を學校へなぞやると、お轉婆になるとか云つてたか〳〵高等小學位でよして、後は家庭で出來るだけ內輪におとなしく、昔の女大學を的にして育て上げるんですから、當今の女學生なんかとはまるで異います。

○ですから嫁づいても姑を理窟でやり込めたり、夫と意見の衝突をすると云ふな事は夢にもなく、服從が女の務と考へて

舅姑に仕へ夫を扶ける所は見上げた者でございます、けれども衣服を着飾り度くて耐らないのが京女の特性です。

○それゆゑ娘でも年寄でも、一度呉服屋の陳列棚に立つと、只もう無闇と欲しくなつて、つい前後の考もなく買つて終ふ、そして電光のやうな流行をおうて、外出でもするときは見違へるやうな装をしてゆくと云ふ具合で、陰では非常に苦しい思をするのです、嫁入の荷でも極下等で三荷、普通が七荷ですから、娘の五六人も持つた人は、それこそ大變、うつかりしてゐると身代かぎりをします。

○扨こんなに遊藝に耽り、衣服に大枚な金を投じながら、日常の生活は又思の外で、錢を皆越さぬ江戸つ子氣質とはまるで反對、衣類こそ飾りますが其他は至つて質素に五厘の錢も割てつかふといふやうにします。

○食物は極粗末な物で、日常のお總菜はすべて當季の野菜類ですまし、僅に朔日に一度赤飯に尾頭の付たものを食する位な事ですが、其でも大勢の奉公人を使ふ家だと、生魚では高くついて大變ですから、お定まりの乾魚が棒鱈、鰊位な所でございます、御食も純粋の日本米を喰ふ家は數へる程で、多くは支那米を混ぜるか、又脚氣症の多い地ですから麥飯の家が主でありまして、よくまあれでと思ふ位粗食に甘じてをります。



○京都の習慣として朝餐は皆一様にお粥を食べますが、先日も路傍で小僧が爭そつてをりますのに「お前ところのお粥は黒豆が浮いてる故、其でそないに弱蟲や」なんて云ておりました黒豆と云ふのは粥の薄さに眼球が映るんださうで、まさかと思はれますが、實の處穿つてゐますから、寧ろ滑稽でございます、つまり外見さへ多少繕ろつて置けば、内部はどんなでも構はないと云ふのが一般の習ひらしうございます。

○言語は例の悠長な京都辯、軽い爽やかな東京辯に比べれば、何だかだらしのない物言ひで、男子等には全く不似合でございます。

○又名詞の上には何でも皆御の字をかぶせます。豆腐(おかべ)杓子(おしやもじ)帶(おもじ)南瓜(おかぼ)大根(おだい)煎餅おせん。

○それから夕月涼しき夏の夕なぞには稚い女の兒の群が輪を作つてしほらしい聲で唄をうたつてをります。

○時は春風徐に吹く四月十三日、花の名所の嵯峨嵐山に觀櫻の遊を兼れて、十三歳になる子供持つ親は虚空藏菩薩に智惠貰に詣でまする芭蕉の句にも「子ども見よ櫻の月も十三夜」と云ふのがありまして古くからの習慣だと見えます、女子ならば其十三詣りの當日は、娘の晴の日で、華美を極めた三枚襲れに京にしきの帶を胸高にしめ、玉の簪にダイヤの指輪、

蓮歩の運びに燦然ときらめいて、京都式の濃化粧の麗しさ、其が何十人と云ふ數ですから、花の美に人の美に、只々眼もくらむ許でございます。

○盂蘭盆八月十六日、洛東如意ケ嶽に大文字を點しますが、昔から精靈の送り火に弘法大師が書かれたとも、又例年時が丁度旱魃に當るから、雨乞の爲にするのだとも傳へられてゐますが、皇居のあつた時代、世々の帝が紫宸殿の御庭に御賞美あらせらるべき御慰みとして點したものでございませう。

○物價は總別東京より二割位は安うございます、野菜類等も岡崎聖護院等がすつかり田圃だつた頃は、非常に安價で、胡瓜なんか一錢に三四十本も買へたと申しますが、唯今はなかなかさうはまゐりません、高價なのは魚類で、一尺位の鯛が普通一圓七八十錢、不漁の時は二圓を越すと云ふ調子ですから、雇人共の口へ入らないのも尤です、一體に金儲が少いところから働くよりは儉ましくする方が利方だと云ふ、何から何まで消極的な土地でございます。

釜山の風俗

さゝふね

○一たいにしのぎよい處で暑中にても夜中より曉にかけては



掛物なしには休まれぬ位で冬は又有名な三寒四温と申して三日の寒には思切寒く洗濯など致しても干すと其まゝ凍つて仕舞ますが其三日を我慢すれば凡四日程は何ともいはれぬ心地のよい春の様な温さがつゞきます其時を待つて一度に洗濯物や外の用を致しますこんな風にくりかへし〳〵冬を過しますが三寒のつらさも四温の心地よさに苦にもならず割合に樂に暮します。

○風俗と申しても各國人の集まり故とても内地の様にきまつた風のあらうはずはありませんが然し對州藩の勢力のあつた昔から三代も土着の人もあり此處で生れて内地を知らぬ者は三十代の人にも多いので、自然釜山を古郷として暮す人が多くあります、人氣は極をだやかで誠に暮しよい所です、流行などは東京に比べて二三年はたしかにおくれて居ります、此頃までは丸たぼの束髪など見たくてもありませんでした、上流の婦人がたま〳〵歸國して内地の風を見て參り、致しましても目に立つて人の話の種になる許りで、誰あつて眞似いたす者もありません、そんな風故盛裝の貴婦人が足袋のそゝけたのは愚、鼻緒の心の出た下駄をはいて居つても格別笑ふ者もない呑氣さ、藝者なども一切大阪式で意氣な仇姿は見られません。

○名勝舊跡のうちよく人の參る處は釜山驛の大が草梁と

申して支那人町のある處で其次の釜山鎭といふ處に小西行長の築いた古城跡のあるのと夫より三里許りで東萊府と申して温泉場があります今少し遠方へ出ますと矢張り京釜線の密陽といふ處で洛東江の鮎狩りなども面白相です市中の遊山と申ますと極少くて酒造家福田氏の別邸(向陽園)の花見、水源地近傍の摘草位でかやうの處も土着の人は滅多に參りませんから、樂しみはやはり芝居などで、これは釜山座と申すのが一つ美麗で新しく誰方でも參られますが、あとのは極極下等で安い事も安い故町の者などは皆その方へ行きます、重に新派で不如歸、己が罪などいつも大入だ相です、活動寫眞もあります、今一つ可笑事は小學校の運動會に父兄其他の見物が重詰や一升德利をさげて行き、運動場の傍らにて酒宴を開く事です、中には見る方はお留守にして大聲を出し騷ぐ人もあります。

○税金の關係上内地の物は餘程高く土地出來の米豆などは安く砂糖も白一斤十一二錢で買はれます、以前は野菜不足で高價の代り魚はほとんど無價の樣だつた相ですが今は朝夕の連絡船にて參ります上日本の百姓も餘程入り込つくり出しますので內地とたいした相違はなくなりましたが魚の方は韓內地深く氷詰で行く樣になりましてから大變高くなつたと永く居る人に申します、けれどもまださかりには鯖一尾、東京にて廿



五錢位の物)三錢位で買はれ鯛なども下等社會の人でも朝夕の總菜に致します日用品は元より吳服、家具、其外何でも大抵此處で調ひますが、すべて大阪仕込で雜貨でも東京から仕入る家はたゞ一軒しか有ません、夫から市中を離れた韓人町からチョンガー(未婚者)が春は木の芽、ふき、わらび、夏より冬にかけては漬菜、栗、大根又は海草、貝類など其時時の物を背負い賣りに參ります、是は思切つて直ぎりますので安く買はれます、彼等は日本人の女さへ見れば貴賤老若の差別なしにおかみさんと申します、其實聲はみな木の芽なら(きのめがあすか〱)と呼びあるきます、たまには韓人の女も參りますが、これはみな頭にのせて若布ならば(若布さそう〱)と申して步きます、言葉はチョンガーの方は大抵日本語が通じるので便利でございます。

○名物と申しては何も是ぞといふほどの物はありません、一たい韓人の手で出來ろ物は何もないのでよく日本土産に人の求める朝鮮飴もみな日本人の手で出來るのです、たゞ蛤だけは內地では見られぬ大さで、實に見事な物でございます、終りに朝鮮語を一つ二つと申上ます。

チョンゴミ(美麗)ナップン(きたなき又は惡しき)コカマブツ(有難う)カマイツソ(待て)オナラ(來れ)チョッコン(少し)これは日本人同志の話にも常用語になつて居ります。



女學生間の新流行

都より故山の友へ現時の潮をしらせて遣はせるふみ

上原綾子

彌代さんお久振りのおたより嬉しく〳〵拜見しましたまあお城山の八重櫻が滿開ですつてね、あゝなつかしいわ私も故鄕が……、

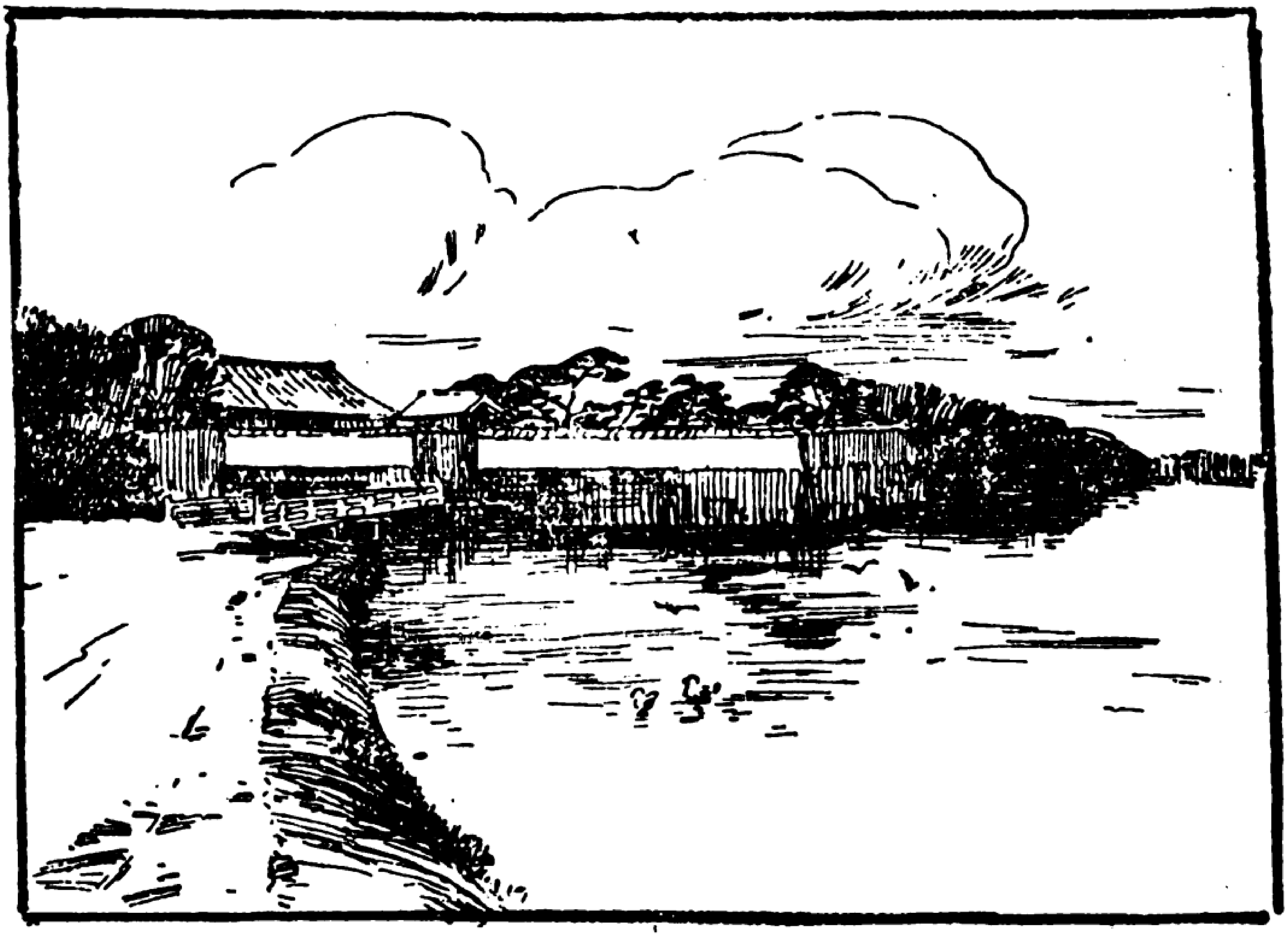
おふみの中に香きこめてあつた花瓣ねえ、あれを唇にあてゝ心ゆくまで故山の春の香をなつかしみながら、私の魂は昨夜更くるまで兩人してよく芹を摘んで遊んだ瀨戸の名無し川緣をさまよひましたのよ、紅葉する秋の夕も捨て難いけれど私はそれよりも猶一しほ天主閣に薄紫の雲がかゝつてるあの濃艷な城山一帶の八重櫻に夕陽映ゆる春が好きだつたのですものねえ。來年の此頃はいくとせぶりかで故山の春にあこがれる事が出來るかと思へば殘惜しい都の一とせながら、月日の流れのおそさを怨みたい樣な氣さへしますのよ……

……。

まあいやな彌代さん!!!

「さらでだにねたきばかり美しき君の猶榮え添ゆる都ぶりの御よそほひ、いか許り御めざましう……」なんかつてあんな冷かしは眞つ平よ、私は矢張り昔のまゝの綾ですわ、なか〳〵どうしてハイカラなどとは思ひもよらぬこと、式日用の紋服さへ先づ彌代さんと御對に葡萄色に染めた乳母が手織の太織紬で滿足してますのよ、

あのおたづねの女學生間の新流行つてねどんな風なことを書いたら可いんだか——たとへ解つてもこんなにぶい觀察眼でにらみはした位ぢやア迚も華の都の精と謳はれる女學生間の新流行なんて氣の利いたところを捉へる譯にはゆきませんけれど仲好の彌代さんが



濱離宮

折角のおたづね故まあ氣付いたふし〴〵を書きつけてみませうその代り順序も何もメチヤ〳〵たゞ思ひつくまゝの出鱈目ですからどうぞ其のおつもりで……。

△

女學校も三年位までの人は大抵前髮を思切りふくらませた油氣無しのお下げ髮に五吋巾ぐらゐの派手なリボンでもかけて子供つぽくしますけれど四年五年と追追卒業間近になりますと矢張り大抵は束髮に變つてしまひます樣に、尤も學習院をはじめ他校にも上品な唐人髷に白丈長といふ日本風の好みも少數はありますけれど、心づかひ無しに勝手な御轉婆のできる束髮の方がお互樣に重寶ですものね……

御承知のクヰーンマガレット式、通稱マガレット（私の演說は大分むづかしいんですよホヽヽ）で一しきりは猫も杓子もと大流行だつた型も今では古くなりましたから當節の流行と云つたらまあどうしてもルイザ卷ウヰンナ卷、ジヨセフイン卷などでせうね、

ルイザ卷

前髪は高めに思切り張らせて横とうしろとは心もち、つめ加減に、そして根はズット上にあげてたゞグルグルと卷きますの、それも五六年前に流行つた二〇三高地式とかの樣に高くなるのは忌みますから、なるだけ平つたく大きくいたしますのよ、この卷き樣は大層むづかしくもない代りには全體としての格好が一寸これで呼吸ものです……、リボンも花もさゝない方がさつぱりしますからまあ十八九から廿二三位までの上品向でせう、いやみが無くて私大好き無論前も横も櫛はさゝないので、強ひて裝飾がほしければ後に品質の上等な目に立たないたぼ櫛か大きなたぼ止でもいたしますのよ…左の方にリボンをさすのは「婚約ある人」のしるしになりますさうです。

ウヰンナ卷

前髪を耳のズットうしろあたりから深くわけてヘヤロールなり拔け毛なりで細いしんを入れ顔に似合ふ程にふくらみを見せて前髪だけ元結でしばりそこでまた小前髪を取つて根のグラ〳〵しない樣にいたします、そしてその前髪の毛とうしろに殘した髪とを一緒にして三ツ編みにし、それを直ぐ上へ持つて來て髪の先は前髪の中へ突込んでかくしてしまひ、大きなヘヤピンで止めて置きますと一寸ハイカラな好い恰好ですわ、昨秋までもてはやされた「ローマ」に似て、より新しく上手に結へば大層氣取つて居りますのよこれは前櫛をさした方が可いでせう…ウヰンナの何とかいふ美しい女優が常に好んで結つた髪だとか聞きました。若いかたに似合ふ髪です、

ジヨセフイン卷

前髪は低くつぶす心もちで横もあまりふくらまさず根も極く低くいたしますの、そして根を結んだ先の髪はいろ〳〵にくゆらせてグヂヤ〳〵とまるめて、まるで衿の中に落つこちさうに卷きますだけ目に立たない

横櫛を二枚と、もし前櫛もさしたければ嶺の廣いアイヴオリーか何かのを‥‥。

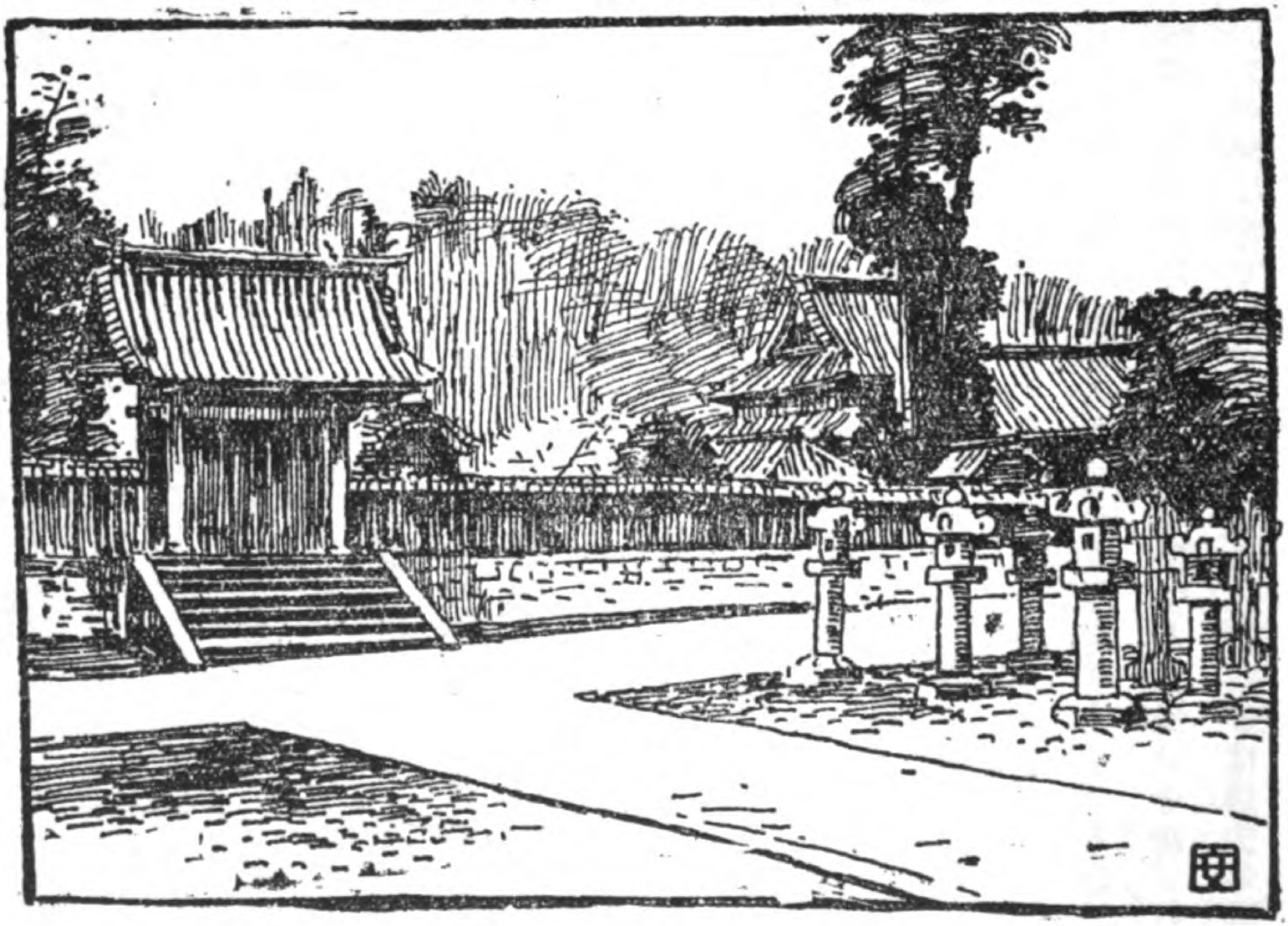
骨の折れない結び樣の代りには大層バタ臭くみえますのよ、それ故宗敎學校などではこんな風に卷く方が多い樣に思はれますわそして眼鏡をかけた人にはよく似合ふ髮だと存じますのよ。

總體に當節ではなる可く人目に立たない樣な裝飾をするのがしやれてるとかつて話です。櫛なども蝶貝だの寶石入（これは擬造品をいふのですが）なんぞより、あつさりしたので品質の上等な方が流行つて居るとかこれは三枝の店員の話でした。金蒔繪などは猶更のこと、氣の利いた人はピンを苦心して撰ぶといふことですわ、

尤も燃える樣な眞紅のひなげしやアネモネなどの造花をたゞ一輪さしたのも若い人達には惡くはないものよ、ねえ、左へ花をさすとミセスだつて笑はれますのよ。

△

芝靈屋德川廟　（帝都百景の內）



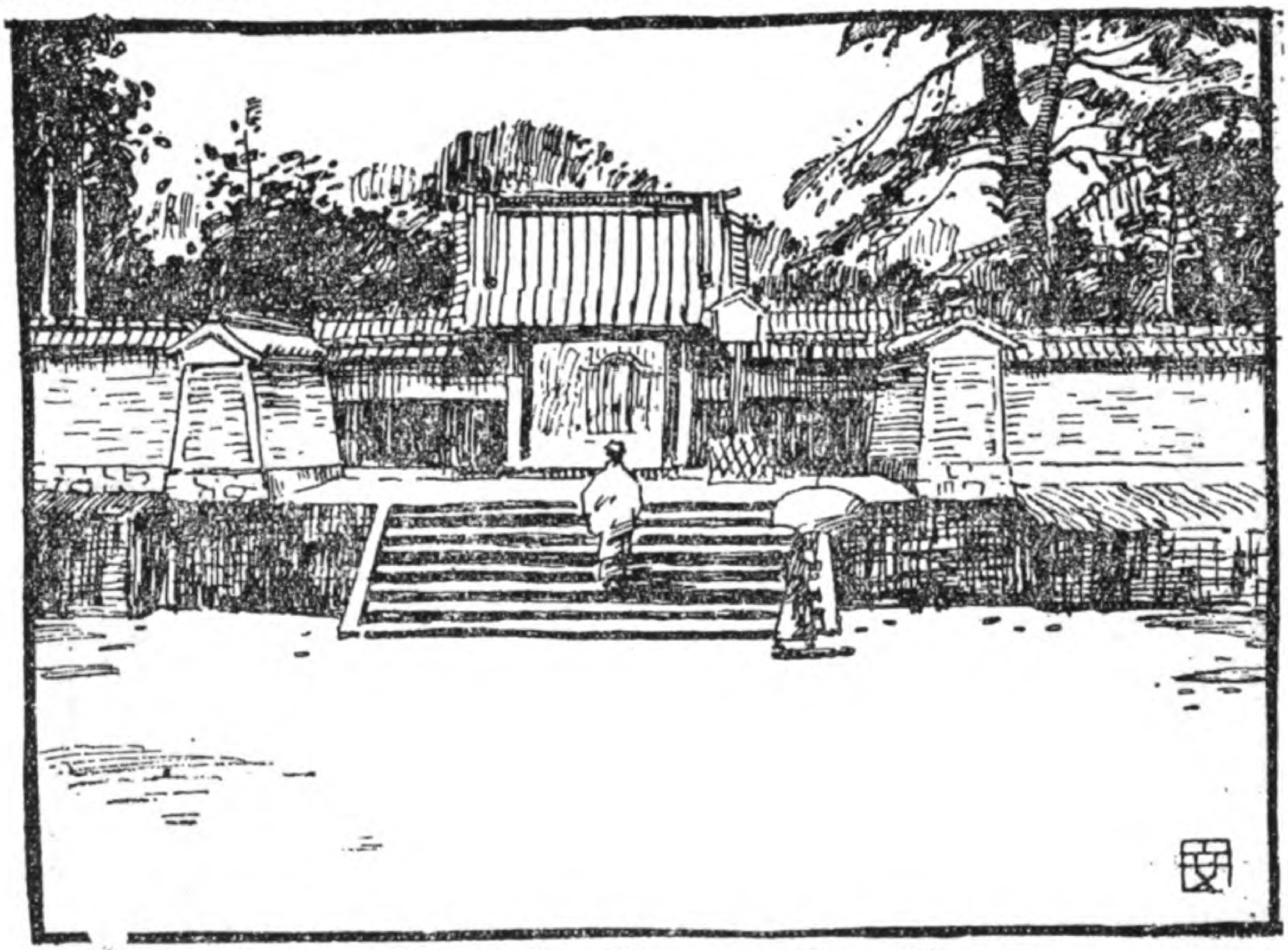
身のまはりは戊申詔書以來何處の學校でも質素に質素につて注意があるさうですけれどお互樣に若い女のことですもの社會を彩る若い女のことですもの手織木綿や双子縞など着てる人は澤山はありませんわ、大抵ふだん着が銘仙か米琉ぐらゐ、それも皆さん思切り大柄なのばかり、私みたいな椋鳥さんでもこの節では秩父ぐらゐ羽織らなければきまりが惡くて歩けませんのよ、つまりはたから左樣させられてしまふのですわね、

袴の地合はカシミヤが一般ですけれど色合は紺、海老茶、お納戸ねづみなどさま〴〵よ、オリーヴや濃茶などは物好きな人がポツ〳〵用ひますぐらゐそれにしても袴といへば紫繻子に限つたもの丶樣に思はれたお互の姉樣達の時代に比べれば隨分變つて來たものねえ、學習院では琥珀を召す方が澤山あつたさうですけれど乃木院長の御就任當時、卒業式のお振袖と共に固くお差止めになつた爲め現今では他の學校の贅澤な連中に用ひられるばかり……でも花の雲湧く春四月帝大のボートレースなどに行くかたは大抵シユツ〳〵と音のする樣なのをめしてゐらつしやるのよ。

それからまだ一般の流行とまではゆきませんけれど一寸目新しいと思ふのはあの袴の後紐のねえ、丁度袖でかくれる脇のあたりへ共色かさもなくば目立たない色絲で淡白した刺繍――たとへば孔雀の羽とか蘆の葉とかクローヴアーなど――をしますの、つまり地質の方で贅澤ができない處からこんなことを思ひ付いたものでせうねえなか〳〵しやれてますわ、尤もこれは右とか左とか片脇に限りますのよ兩脇となるとしつこ過ぎて厭味ですから……、

それにあの後のかざりもねえ、一頃よく細いリボンだのレースだのを通す人もありましたけれど却つて野暮だからと云つて昨年あたりからは以前の樣に太白を通す方が多い樣ですわどうしてもあの方が上品ねえ、

ふだん持の時計は極く小形の銀側片ガラス、そして無論薄手のでアラビア數字のを持つ人が多いとか、打紐やリボンなどで袴の紐にくゝり付けたのは過去の事



上野兩大師　（帝都百景の内）

で當節は細い銀の首かけ鎖が非常に優勢ですつて……ホヽヽ、これは私が一々調べてまはつたのぢや有りません丸嘉の店員からの受賣よ、いふまでもなく盛裝用としてはプラチナ交りのゴールド、チエーンに寶石入の金梨地などいろ〳〵贅澤なものもありませうけれど……、

一ころは女教師も女生徒も白衿を重ねるのが流行りましたけれどまた二三年このかたは禮服の時の他はあまり白衿は用ひない様に思はれましてよ

クリーム、草柳、褪紅クリームなど一般に薄色のうづら縮緬か何かに、あつさりした染模様のをなさる方が多いかと思ひます、刺繍はあまり贅澤ですから學生には過ぎますものね、古いものか何かなら格別、ふだんに刺繍入をかけてる女學生はあまり東京でもみかけませんわ、

パラソルも一概には云へませんけれど總じてあかるい色のを持つ人が實際多い様子よ、日比谷の花園などに立つて見て居ますと白茶・とき色、水色と、いろさ

まぐ\/\の華やかなパラソルが東と西に行きちがひ、すれちがひ、ほんとにもう花よりも美しいと見とれる時さへありますくらゐ、けれどもそれは各自が顔色や衣服、帯などゝ相談の上でなければ……、私みたいな黒ン坊はどうしてもダークブリユーとかネビブリユーとかの方が好いかと思ひます、たとへ新流行でなくとも……、純白レース付のお傘の主はとうかゞひ奉れば牛蒡の白和へよろしくのお顔がニユーッとあらはれたり何ぞ餘り振るつて居ますものねえホヽヽ

昨夏歸省した折私の持つて居ました白地格子縞のおぼえてゐらしつて？もうことしはあんな品はすたれてしまひましたのですつて。

廣く縁をとつたものや刺繍入（ヌカラぬひ）などで、柄は白色の極く長いのが新流行だとか……學生の身ではあまり贅澤すぎると思はれます様なものばかりよ……それからあの絵日傘――いつか彌代さんのお祖母様が京土産だとて兩人にお對に下すつた様な美しい絵日傘――ねえ、あれがまたボツ\/\流行りさうだつて三越で云つてましたわ、けれど袴の裾を高い靴の踵で蹴て歩く人達には似合はしくない様ね彌代さんあなたのおぼしめしは？

△

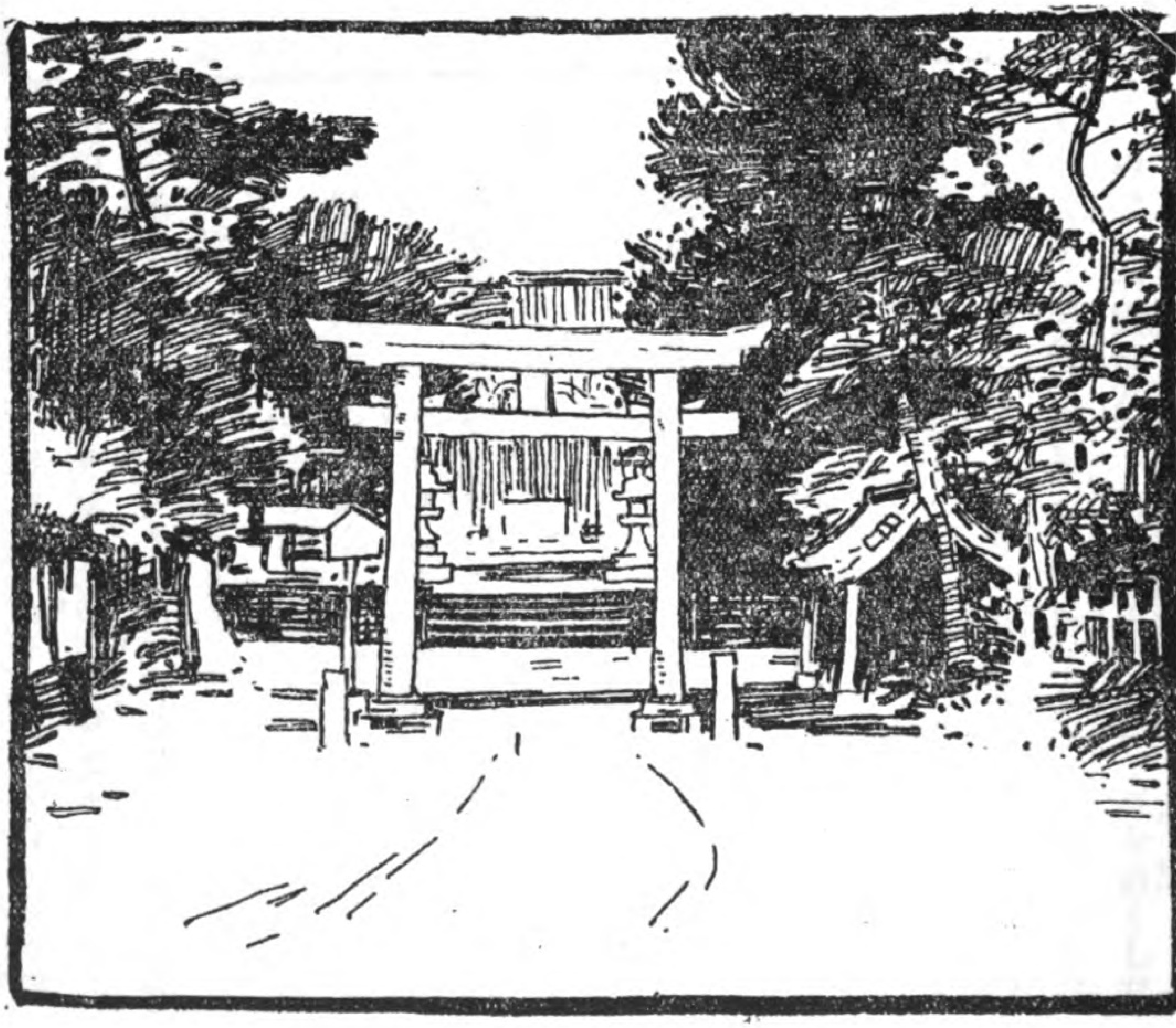
絹ハンカチも冬は兎に角これから追々翠葉そよぐ初夏にかけてはどうしても刺繍入かドロンオークの白麻布に限ります様ね

そして香水はなる可くしつこくないヘリオトロープまたはホワイトローズ、リリー、オブ、ヴアレーなどを淡くしませて置く位が可いわね、盛装の時なら長襦袢の脊筋と帯上げのしんとに香水吹きで少しふきますとホンノリと云ひしれぬ好い香りがしますことね、衿だの袖口だのに、ブン\/\する程しませるのは當地ではオノボリサンつて笑はれますの、オノボリサンの意味は手取早く云へばまあ田舍者つていふ様な譯……隨分失敬だわつて此の間も學校で云ひましたら

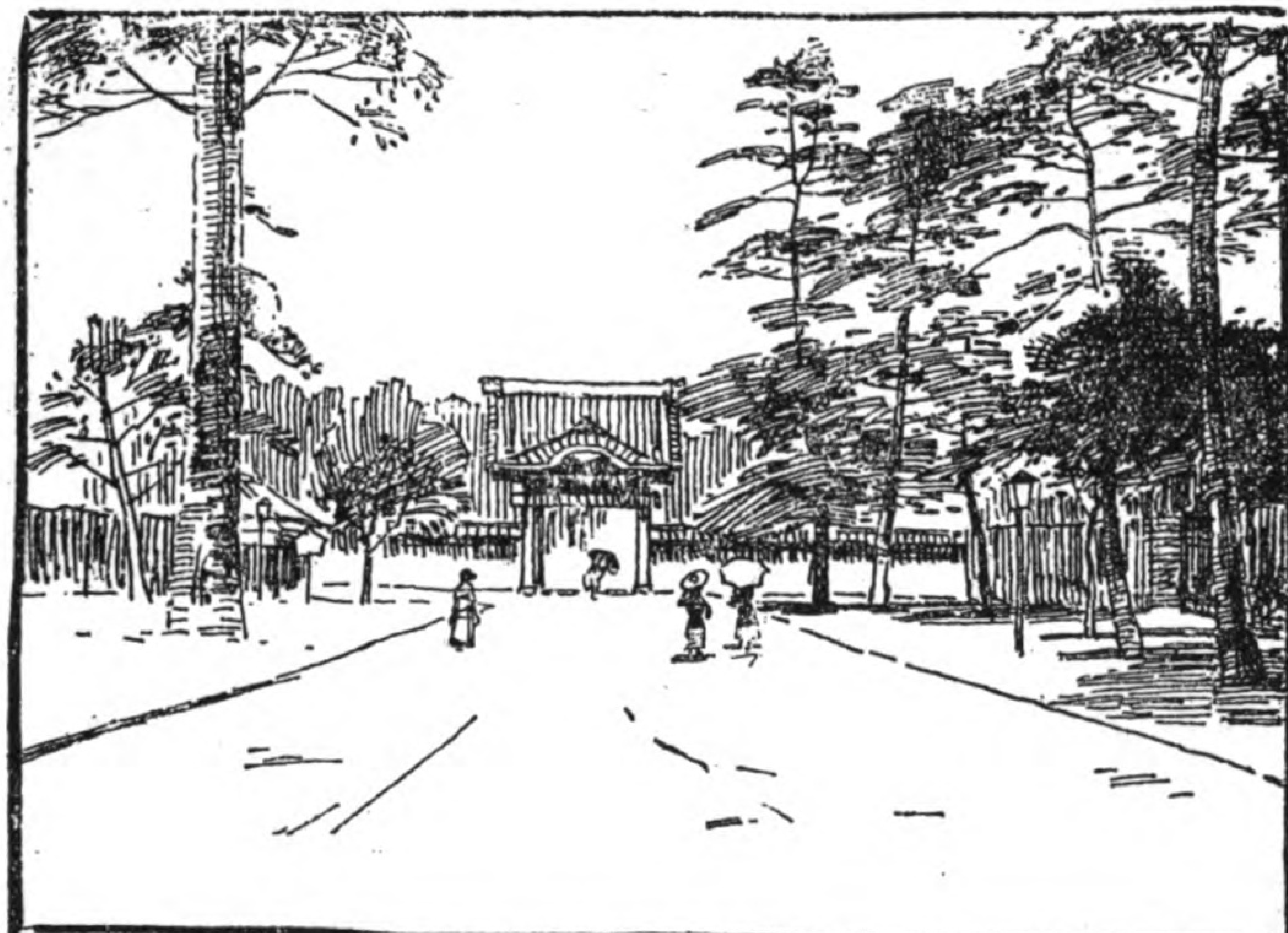
「そんなにひらけない事を云ふから矢つ張りオノボリ

サンの仲間なのよ」ですつて。
「ぢやア口のわるいのが江戸ッ子なのね」つて云ひ返してやりましたのよ私…。
まだ衿先の折り方、帶のしめかた（欽子結び）などいろ〳〵新しい流行もありますけれどあまり永くなりますから又にしますわ、あゝあのちよいと…今の欽子結びつていふのねえ、これはいつも女學世界でおなじみの日向欽子夫人ね、あの方のお帶のしめかたが好い格好なのでその結びかたをまねて欽子結びつていふので御座いますつてお美しいかたね。
オヤお話がとんだ方角へそれてしまつて…まあ私つまらないことばかり、降る春雨のなが〳〵と、さぞ御退屈だつたでせう
「こんなことなんかわざ〳〵聞かさなくたつてとつくの昔に知つてるわ」と彌代さんがおつしやるのを承知で書いた私は隨分罪

向島水神（帝都百景の内）



小石川傳通院（帝都百景の內）



が深いわね彌代さん御免あそばせね、その代り來年歸國の折りにはどつさりお土產持つてゆきますわ、エ？鬼が笑ふつて？ホヽヽ、まああてにしないで待つてゐらつしやい、

今フトこんな句が浮びました、

幾すぢは銀の色してよき人の
　衣もぬふらし春雨の糸

お祖母樣はじめお母樣にも須賀江さん露さんなどにもどうぞよろしく〳〵、清ちやんにもどうぞきつと……。

さらば

卯の花づき
なかば

小雨ふる窓の下にて
綾より

おなつかしき
彌代さまへ
まゐらす、

漸く流行を來せる美爪術

婦人化粧師　莊司直子

▲支那と安南のお方の爪

お客さま方から承はりますと、支那や安南の貴族方は、指の爪を三寸も五寸も長くお生やしになり、常々之を大切に保護いたして居らるゝさうであります。中にも、袋などお拵へになつて、それを被せて、風に當てません樣にして居らるゝ方も有ると申します。その、爪を長く生やされました樣を、寫眞や繪で拜見いたしますと、中には、羊の角のやうに、さきが圓く卷かりましたのなども見えます。

爪が長くては、何仕事も出來ません。この、何仕事も致さぬといふのが、大層な見榮になるのださうであります。妙な風俗でございますのね。

▲和洋人と爪

が、わが國の方や、西洋諸國の方は、爪を長くしたり、爪うらの汚れて色ついて居りますなどは、どなたも遠慮なされて居りまする。西洋人の中でも、特に亞米利加合衆國のお方は、たゞ爪を生やしませんばかりでなく、色々と、爪に手入れを加へまして、其の形狀、其の色つやを、綺麗にいたして居りまする。マニキユールといふのが即ちこれであります。手前方では、之を理爪術と申して居りますが、或るお客さまは、髮ならば理髮もよろしいが、爪に理爪はをかしいから、美爪術がよくあるまいかと、仰せられました。以下、美爪術と申しまするのは、このマニキユールのことでございます。

▲米國で美爪術を受けた實驗

宅へ時々お出になるお客さま——殿方が、アメリカから英國の方へお廻はりになりましてお歸りになりましたが、先日お見えになりました節、あちらで美爪術をお受けなさいましたお話がございました。

米國が、一等流行いたして居りますさうで、ワナメーカーなど申しますパテートメントストーアでは、大抵、店内に美爪場を開きまして、婦人方に施術して居らるゝさうであります。

ニューヨークの或る店内で、十五六人の客、極狭く仕切りまして、一間に一人づゝ、施術して貰ッて居りますのを、御覽になりましたので、御冗談半分に、「どうです、私にもやッてくれませんか」と仰有りますと――施術師は亦殘らず婦人でありますが、――愛嬌笑ひをなされまして、「婦人方ばかり施術して居りますから……」と申されます。『男子だッて差支無いでせうから、一寸聞いていらッしやい』と申しますと、その中の一人が「そんなら一寸」と申して奥へ參りました、やがて主任とか部長とかいふ者に、聞いて來ました風でありましたが「お宜しうございますッて」と笑ひながら答へましたので、「そうれごらん」と仰有ッて、施術を受けられましたが、皆快濶に、きやッ〳〵と笑ひながら、一々やッてくれましたさうであります。

▲流行の爪の形

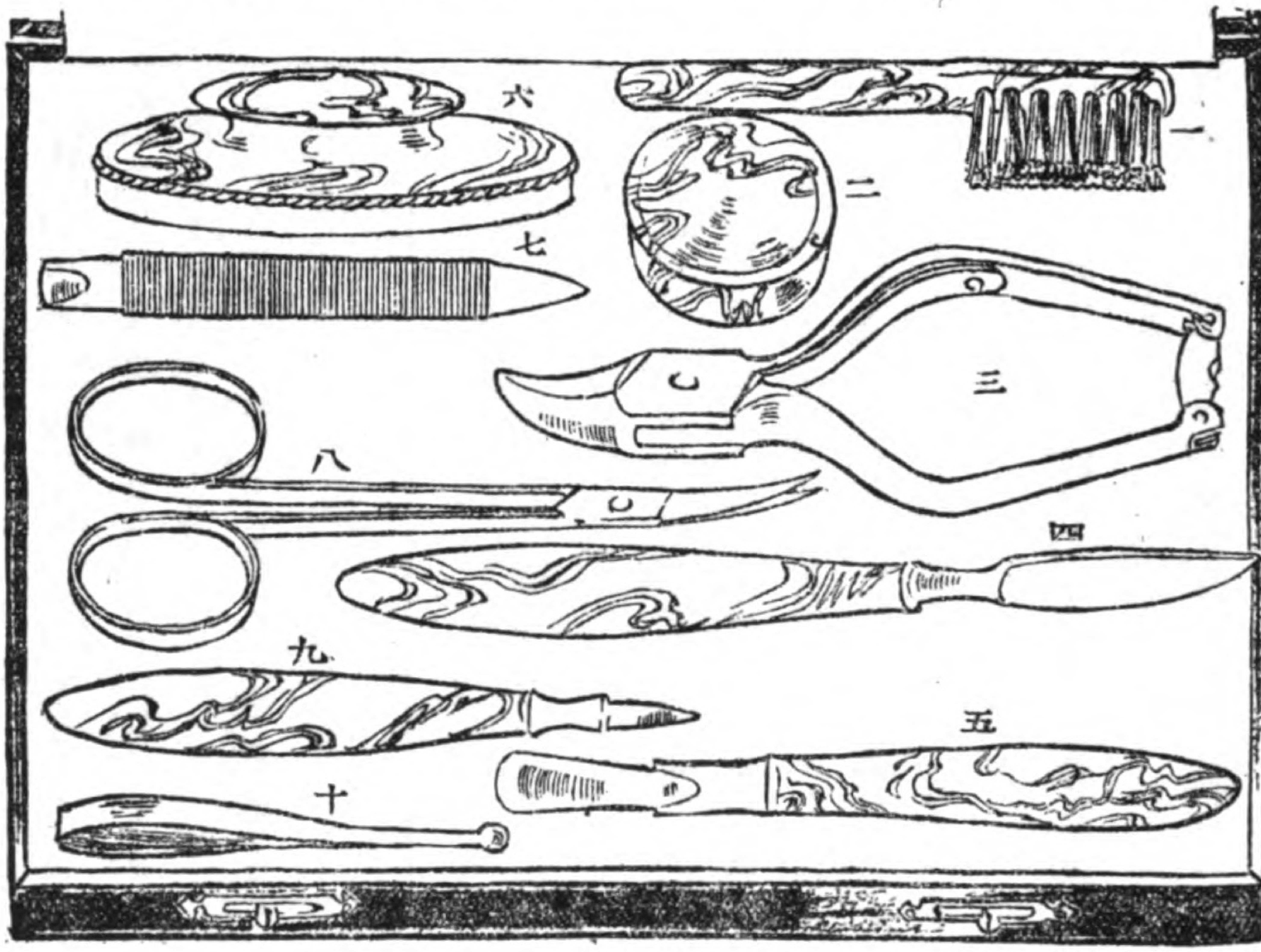
その時、「形は何型にいたしませう」と訊きますので「一等流行てをる型にして下さい、何でもよいから」と仰有りますと、御婦人の靴の尖に似ました、細く尖ッた形に作られましたさうであります。時の流行、人人の好みで、尖りめにしましたり、圓みにしましたり色々に仕上げますのであります。そして、料金はあちらの五十仙であッたさうです。

▲美爪用具の一斑

記者いふ、こゝに、美爪術に用ひます小道具の、概説をいたしておきませう。

圖に出しましたのは、ほんの一例でありまして、品數はこれより多いのも、又少いのもありますし、形狀も、多少は違つて居ります。又、簡單なのは、この中の二、六、七、八位で間に合せて居ります。此の節では、莊司理髮店でも、三越呉服店でも販賣して居ります。

圖は、十種の小道具を、箱に納れました様で、箱蓋だけは略



しました。

一、小ブラシ。歯磨ブラシのもつと小さい形。光澤粉をつけたり拂つたりするもの。柄は、他のものと共に、セルロイドか象牙。

二、光澤粉。こちらの磨き粉に類した鑛物性の粉を納れおくセルロイド製肉入様のもの。之を爪甲に塗りてこすれば光澤を發す。

三、爪とり。爪とり剪刀の一種で刃が彎曲して居りますので爪は自ら圓く切れます。柄のさきの小金物を外しますと、中部のバネの力で、柄はもッと開きます。たゞ、剪刀が小さいのにバネが強過ぎますので、日本風の剪刀よりは、使ひにくい様であります。

四、小刀。生際の贅肉などを掘りて、清めますもの。

五、根起し。眞書筆の鞘を二つに割りました様に、樋の形の尖をなせるもの。刃無し。生へ際を、これにて起し、境なきちんと作る。

六、爪磨き。鹿のなめし革を張ッた爪すり。爪甲をすッて光澤を出すもの。

七、やすり。うら表に、疎密二種のやすりなり。一端は五の尖に似て、根を起すべく、他端は刃の無き小刀に依て、生際

を清むべく、爪うらの汚れを清むべきもの。
八、剪刀、刄さき極めて細く薄く、且つ一方に反ツてる。生際のそゝくれ等を取るによろしい。
九、よごれ浚ひ。刄の無い小刀に似、すべて爪甲爪背のよごれを掘り清むるもの。
十、耳かきと毛ぬき。　以上

▲美爪法の順序

私が、美爪術の看板を出しましたのは、四十年の春からでございます。初めは、横濱の外人に就いて傳習いたしました。實地施術の順序方法は、只お話しだけでは、くどくなりますだけで、お分りにくゝございませうから、實地をやつてお目にかけませう。その方が口不調法な私には、却つて助かりますから。一本だけ仕上げて見ませう。

(1) 施術の前に、石鹼湯の中へ、指さきを五分間ばかりつけておきます。

(2) 次に、此の小さい房楊子見たいなもので、レモン水を爪全部にぬります。

(3) 次に、根おし(圖解五)で、根際をおして、大きく申しますと、肉を起し離すやうに致します。併し、これは、深くいたしますと、爪の爲めに宜しくございませんさうでありますから、手前方では、ほんの乾肉屑の着いて居りますのを離す位に止め、深くはいたしません。

(4) 次に、根や脇の生へ際のよごれを、小刀(四圖)で切りとりましたら、浚ひ(九圖)で浚ひましたり、小剪刀(八圖)でそゝくれのさきを剪み去つたりいたします。

(5) 次に尖を剪み切ります。どの樣な形にも、この時にできます。

(6) 次に尖をやすり(七圖)で仕上げます。うら表目の細さが違ひますから、無論疎い方をさきに使ひまして、次に仕上げを使ひます。同じ鋼鐵製でしても、薄手と厚手とありますが、どうも厚手の方は、使ひにくくございます。此の道具箱には見えませんが、この外

に仕上げ用の紙鑢がございます。矢張り疎いの細かいのとなつてをります。此の二色の鑢を使ひますと、もう此の通りすべ〳〵いたします。切り立ての樣でありません。

(7) 次に爪うらのよごれを消めます。圖中の七か九でほるのでございます。

(8) 次に、又レモン水をぬります。

(9) 次に小ブラシ(一)で、光澤粉(二)をちよッぽり付けまして、爪甲を磨きます。そして又このブラシですッかり拂ひ落します。此の光澤粉は、金剛粉など丶名づけまして、色も白、桃色など幾色もございますが、原料は皆一色でございます。香水香油に着色あると同じうございます。

(10) 次に又三度目のレモン水をつけます。

(11) 次に、發光液と申すのを又ちよッぽり着けますこれが結構な光澤を出すのであります。

(12) 次に、紅を爪甲に點じます。

(13) 次に、磨き(六)で磨きまして仕上げであります。

すると此の通り、ルビー色に光澤が出まして、施術しません爪をお比べになりますと知れますが、全く器量が別に見える樣になります。

△施術なさる丶方々

一本の爪に、この樣に十數たびの手數が掛ります、それを十本皆やりますのですから、中々時間と手數が掛ります。料金ですか、只今では五十錢づ丶頂いて居ります。

私の看板を出しました頃には、たまに洋行がへりの奥さまなどが、お見えになります位に過ぎませんでしたが、此頃は、ぼつ〳〵お見えになる方もございます。音樂をおやりになる方には殊に宜しいさうで、時々お見えになる方もございます。

どうも、お話が下手でございますから、これ丈でいまだ十分お分りになりますまい。

結婚後の修養法

藤生貞子

△學校時代の才媛の行末

婦人が學校を出て結婚いたしますと、從來習得した學問はすつかり、遠ざかつて、其內追々子供でも出來ますと、知らず〳〵家事にかまけて、遂には殆ど元の無學に返り、學んだ學問は些とも活用することが出來ずに終るといふ話は隨分世間に尠くございません。

學校を出る時は、一かどの才媛などゝ噂された方が一旦家庭の人となると、意氣地もなく境遇や事情に支配されて、案外平々凡々な婦人になつて了ふのが多いのでございます。これでは折角三年なり、四年なり學問をした甲斐が無いばかりでなく、寧ろ幾らかの費用の掛けた丈けが損な位でございませう。

今日の時勢は、最早婦人たりとも無學では立ち行かれなくなりました。即ち婦人の敎育は社會一般の要求であると共に、婦人自身の要求でゝもあるのであります。男子がその補助者としての婦人に敎育を要求するばかりでなく、婦人自身も自己が社會に生存する要素として敎育の必要を認めて居るのでございます。

そしてこの敎育といふのは申すまでもなく智識を增し、思想を高め、品位を磨き、子の母として、人の妻として勝れた婦人に成らん爲めであるにも關らず、多くの婦人が唯、學校の爲めの學問といふ風で、一度學校の門を出て了まひますと、殆ど總てを拋つて顧みないといふのは、大變な心得違ではなからうかと存じます然しこれは一槪に婦人ばかりが惡いとも申されません。家庭の事情とか、境遇とかその他いろ〳〵の障害があつて、婦人を斯くならしめるのでありませうが、倘ほ斯くならしめるに就ては三つの大きな原因があります。

△暇が無いとは卑怯な申譯

第一は申すまでもなく、その本人に心掛が無いとい

ふことでございます。即ち學校を出ると、もうそれで役目は濟んだやうに思つて了つて、その後進んで研究しやうなどは愚か、從來習ひ覺えたことの復習さへ心掛けない方が多いのでございます。そしてさういふ方のお話を聞きますと、定つて暇が無いからと申されますが、それは暇が無いのでなくて、暇をお拵へなさらないのでございます。尤も妻として、母としてはいろいろ雜多の用も多いでございませう。取紛れて居てはつい書物など展げて見る折も無いでございませうが、然し人間が如何に忙しいと申しても一日に三十分や一時間の暇の無いことはございますまい。暇の無いといふのはつまり億劫にお考へなさるからです。必しも更まつて机に向つて書物を讀まねばならぬわけはなく、そこは何うにでもなるのでございます。又心掛さへあらば造次顚沛、何一つとして學問にならぬことは無いもので、假に友達同志の話にしても、他人の召物やお髮の噂をする暇があつたならば、切めて音樂のお話でもするとか、詰らぬ芝居の話をする代りに、學校で覺えた面白い歷史とか理科のお話でもするやうにしたら餘程見聞を廣めやうと思ひます。一寸傍で聞きましても、二人寄つて他人の陰口をして居るよりも、些とした庭の花に就ても、

「まあ美しい花ですこと、此花は何と申すのでございますか、これが雄蕋で、これが雌蕋でしたね」など丶お話し合つて居る方がどんなにか床しいでございませう。唯にその人品が偲ばれるのみならず、さういふ方は必ず思想も高く、智識も廣い、所謂向上的な婦人であるやうに思はれます。

研究、と考へるから事が面倒になりますが、これが修養である、人間が食事をして生きて居るやうに、知識の糧を求めるのであるといふ風に考へて、常に注意を怠らぬならば、必しも暇なきを嘆くには及びません。

△良人としては亂暴な言葉

第二には兩親なり、良人の方なりの指導が宜しきを得ないといふことであります。

只今でも少し舊式な家庭になれば、學校を出ました嫁が書物でも讀んで居りますと、『學校出だといふ氣でお嫁に來てまで書見をする』と申して斥ける舅姑御達もございますが、これは論にもならぬ愚かな考でございます。或は『書物など讀んで居るよりお芋の煮轉しでも氣を付けろ』などゝ申される良人方が世間には多ふございます。尤もこれは家政に疎い學校出の婦人に對する非難でゝもございませうが、良人としては少し乱暴なお言葉では無からうかと存じます。家政の忽にすべからざるは申すまでもございませんが、さりとて斯樣な一概なお言



葉の爲めに、偶々讀書でもしやうといふ婦人の志を摧いて了まふのは誠に殘念なことでございます。どうかさういふ事のないやうにと世の良人たる方に望みます。

婦人は誠に弱い、他から刺擊され易いものでございます。殊に人の妻となつた婦人は、殆どその一言一行が夫の刺擊から出づると申してもよい位でございます。その弱點を知つて、良人たる方が、修養の忽にすべからざることを時に觸れ物に當つて諭されましたならば、如何なる不注意な婦人でも知らず〳〵その方に心を止めるやうにならうと思ふのでございます。

△無益な謙遜、愚なる遠慮

第三には社會に間違つた非難が多いといふことでございます。

常に修養に心掛けて居らるゝ婦人が少しでも學問じみたことを申さうものなら、世間は直ぐに生意氣だのお轉婆だの、お先走りだのと散々な惡口を申します。婦人が常々學問にも志したい、有益な話もしたいと思つて居りましても、迂つかり口を開くと直ぐ右の樣な非難を受けますから、大抵の婦人はつい〳〵引込思案になつて了ひます。

修養とか研究とか申すことはどうしても人々が交際いたして居る中に、お互に知識の交換を圖るやうにいたさなければならないのですが、何かと申すと直ぐ世間の口があるものですから、それも出來ないのでございます。

それ故一寸した話が、「貴女これお出來になりますか」と尋ねますと、それがよし自分に出來ることであつても、大抵の婦人は「出來ません」と申されます。出來ぬといふのを名譽に考へて居られるのではないかと思はれる位であります。然し滿足に出來ぬことを、出來ますと大きな口を利いてこそお先走りともお轉婆とも言はれませうが、出來るから出來ると申すに何の差支がございませう。これは無益な謙遜と申すもので今日迄の婦人はいざ知らず、今後の婦人、苟にも向上を望まるゝ婦人は、斯樣な愚な遠慮は無用になさるがよからうと存じます。

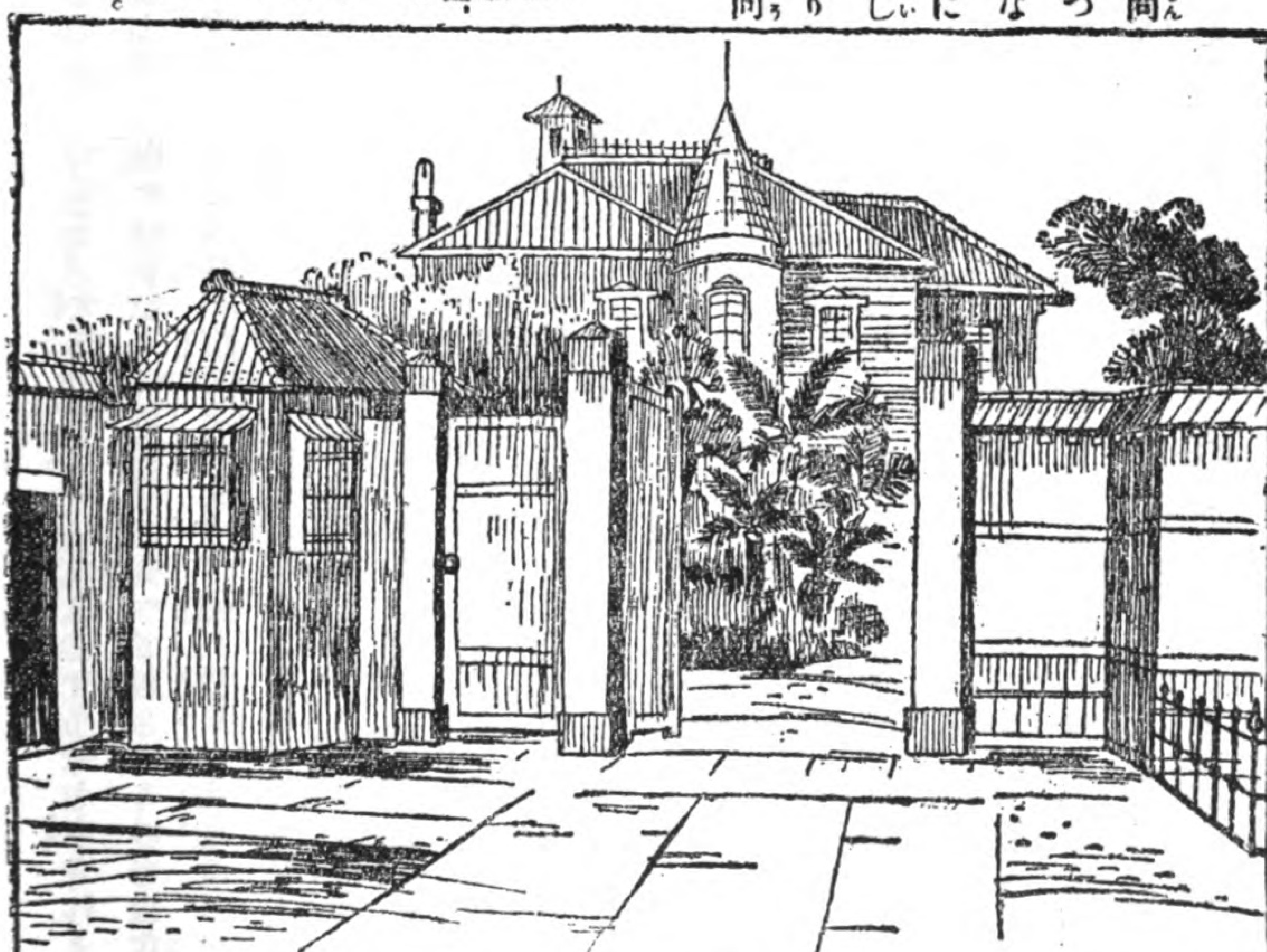
西洋の婦人などは、元々思想の相違もありませうが決して斯樣な愚な謙遜はいたしません。「ピアノを一つお聽せ下さい」とお頼みすると、日本の婦人ならば、「迚も不調法で駄目でございます」と尻込みされる處ですが、西洋の婦人は、自信があれば元氣よく立つて彈かれます。若し出來なければ「此處が分りませんが如何すれば可いでせう」と臆するところなく人に質して自分も學ばうといたします。日常のかうした些細な事にも氣を付けて研究しやうといふ心がありますから

總てに向上發展が望まれるのでございます。

要するに結婚後の婦人が、從來學校で學んだ學問を活用し、猶進んで向上しやうといたすには、先づ本人の心掛が第一に必要であることは申すまでもなく、その良人たり親たる方も之を導き勵ますやうに心され、且また世間の方々も、進取的な婦人に對して一種の嫉妬心から出るやうなお轉婆とかお先走りとか申す非難をお愼み下さるならば、必ず婦人の向上的精神を助長することが出來ると思ひます。

▲新流行の指環は昨年よりは少し變つて來て、從來のゴタ〳〵と寶石を入れた腕の細いものは廢たれ、極めて淡白した、二匁前後の物が最も流行し、價格も十圓前後から二十圓位のものが能く掛けて居る、此等の指環には花とか浪とかの彫刻を施し花ならば蓮・浪ならば月と云ふ樣な所に一寸寶石を入れてある、が今年の流行は寶石と云つても殆ど皆眞珠で其の他の物は餘り入らない、尤も令孃向にはルビーを配偶つた物も可なり出て居る樣である。

▲流行の時計鎖此も昨年とは少し變つて來て居る、即ち頸から掛るのよりも單鎖――即ち胸から持ける短い物が今年の流行となつて居る、鎖にも矢張り寶石を配偶た物が多い樣であるが、主としてプラチナを配偶ひ其の中に眞珠を入れたもので、價格も長いのは四五十圓前後である鎖になると殆ど半額で立派なものがある加之、單鎖は從前の鎖の樣に餘り槃々しくないから氣持が好い。



高田愼三氏邸（湯島三組町）



枕の艸紙

一宮きよ

○鳥は

千鳥、駒鳥。こと處の物なれど秦吉間いとあはれ也人の云ふらん事をまねぶらんよ。姿醜き鳥には、ぺんぎん鳥、禿鷲、駝鳥、火喰鳥いと恐ろし。鴛鴦こそ姿優なれ、清げなる池の岩の上に美はしき一番の翼乾し居るに眼閉ち羽の下に口をこめ小さき聲立てゝ鳴きたるいとをかし。信天翁は何となく賢からず見ゆ。また椋鳥も藪野椋十の縁者の樣にてされたる名にはあらじ、動物園等の水鳥多く容れたる檻の前に久しく立ち、諸鳥の振舞見てあるに、ふとさる鳥に似し人思ひ出すことあり、鷲見ては體痩せ、面蒼白く、顳顬のあたりに筋見え、さゝやかなる事にも怒る眼付の唯ならぬ人を思ひ出しつ。黒き鷲はお三に似通いたる樣覺ゆ。唇厚く、胴の邊、醜きばかり肥え、凄まじき聲立て、十一文もあらむ足もて泳ぎ歩くよ。

鳥ならぬ鳥には月給とり、筆とり、草とり、ひとりいと佗し、靜けき春の朝日いと紅々と障子に映りて、鐵瓶の湯氣の靜に立上る六疊の机の前に座して留守居するに、ふと戸口に音せしに出で見れば、何物もあらざりけり。かゝる時ふと訪ね來る人もあるらむ心地して乙女心の何となく騷ぐ事もあるよ。

賤し女の揚足とりもさる事ながら、かけとり、借金とりまたなくにくし。廿二日に我夫より受けし若干の金秘藏せしも束の間、七日とたゝぬ内に殘りなく取りもて行く。豫て拂ひし殘金にて、これ〳〵の物買はんなど心積りして樂しみ居しに、月末となれば思はず、入用嵩みて我望も水泡となりし折は掛とり分けて憎し。

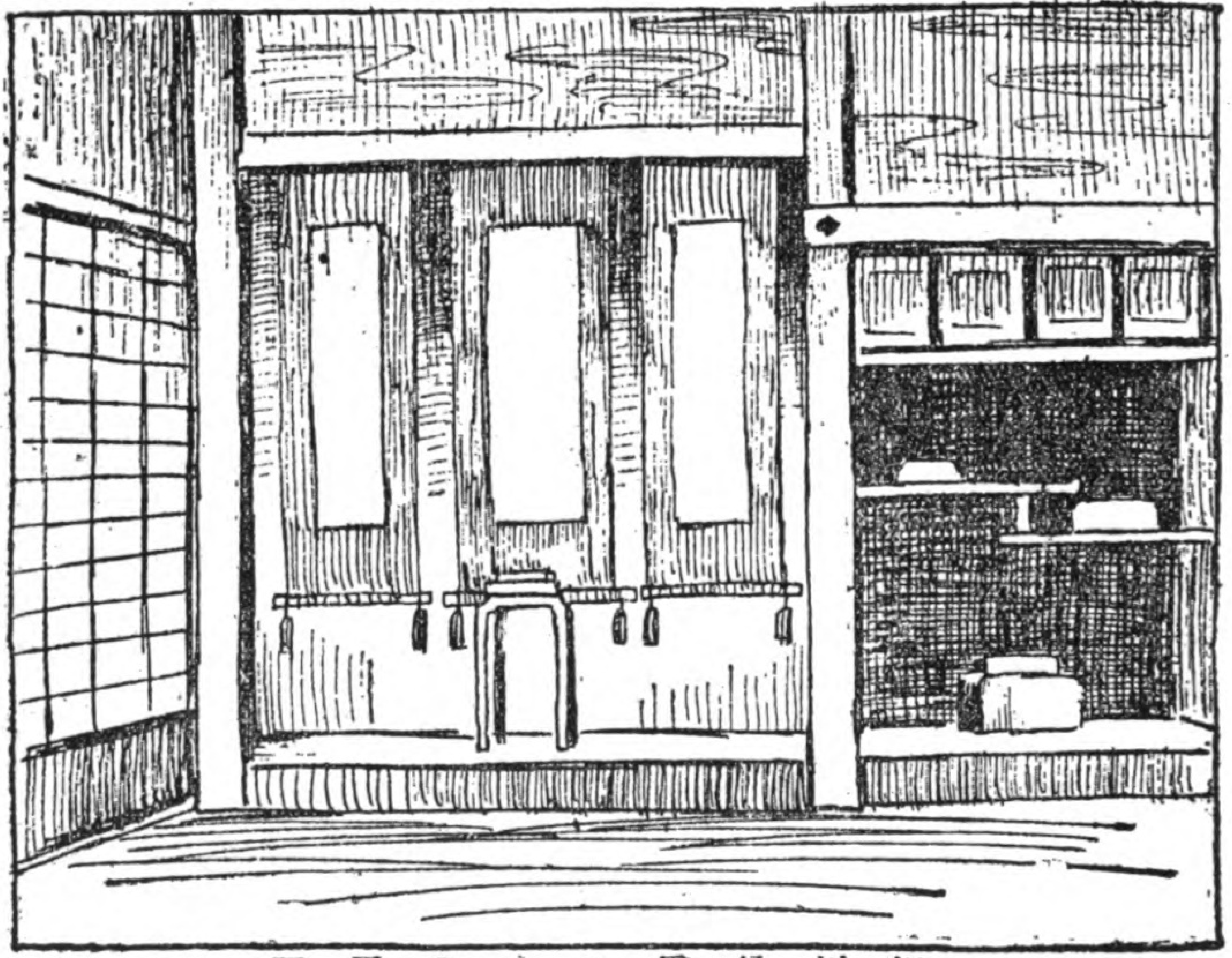
○蟲は

すゞむし、松蟲。蝶は美はしけれど其前身毛蟲ときては何となく恐ろし。蜘蛛も恐ろし、春の夜など友の家訪ひ燈火圍み、若き女の笑ひさゞめく時、何處よりか、はひ出でし一匹の蜘蛛、ふと一人の見出して、あれ蜘蛛よと云へばきやつ、、、と云ひて誰も〳〵立つ、「あれ其方に」と云へば慄へながら飛びのくに、餘り騷しければ、そと覗きに來し友の弟なる中學生、「れでー」の危難を救ふ中世の「ないと、えらんと」の樣にて走り來て、寒さに、し走りもせぬ蟲を矢庭にとつて押へつ。「これ此通りなど云ひて雙の掌の中に入れ得意げに打ちふりなどするに、姉なる人、怖えながら「可怖からずや」と問へば「蜘蛛はおろか、蜥蜴、蛇にても摑む」と誇らしげに云ひたるは憎し。軈て、「あゝ恐ろしかりし」など言ひて元の座に就き互に人の周章樣を笑ふも興あり。

○恥しきもの

初めて身持になりたる時。買物せしに持合少し足らぬ時。二三人連にて道歩める折、見知らぬ若き人に道問はれたる時、されど今の世の娘はさる事なし。

都にある時郷里より知人訪ね來たるいと恥し。東京辯に成り澄したる我身に容赦なく國訛にて話しかけ、締なき大聲あげて打笑ひ、また友等に遇はゞ管々しき挨拶し黃なる齒出して我身の事話すに、穴あらば入りたき心地こそすれ。況して見物の案内賴むと云へば、詮方なく行くに汚れたる綿ネルの首卷まき懷手し、肩より袋などかけ、驚の眼見はりつゝ、「あれよ鐵道馬車が馬なしにて動くよ、屋根の上の棒は何ぞ。見よ、見よ、あの馬車なるは誰か。大臣か。あれ魂消ぬ、音もなく後より來りしは車なりしか、これぞ、ごむ輪の車よな」等只管驚きたる。電車に乘ずれば吊したる革持にぎらざればよろ〳〵とよろめき傍なる人の上に倒れかゝり、濟まぬ濟まぬと挨拶するに車中の人皆此方見


細川侯爵夫人の居間

たる、我顔より火出づ心地す」

他人に我寫眞見らるゝは何となく恥し、日本一の美人等云はれて新聞に連載せられし方々、如何に恥しかりつらむ。されど今の世は花嫁花婿と云はれて、新聞の凄まじき寫眞版に載るを憧憬るゝ人もありと云ひ侍ればいかゞ。花ならば無花果か、苔の花。花嫁と申せど花の樣なるいと少し。況して印刷の惡しさは眼こと樣につき鼻怪しう曲りて口惜しきこと限なし。婿君は何處、花嫁は何處出など、文の道は愚、茶、琴、華の諸藝にも秀で給へる才媛とかなん。轢死水死せし若き女の皆美人なるかぎり日比谷大神宮は常久に常久に才子佳人緣結び給ふらんとさる口惡なる京童は申しゝか。」

女の名はありふれたるぞよき。生れし時は初の女なりければ父親よろこびて、あれかこれかと考へし果は櫻子、環子、瑠璃子などつけたる、人に名問はるゝ度に我親怨むらむ。まして我面は、人にも增して黒きに玉子等言ひたる。黒水晶の玉よと人の笑ふをきくは恥

がし。よき名には小夜子、夏子、秋子、冬子、涼子、澄子、節子。あぐりは異様にていとをかしく人にも早く覺えらるゝとくあり。歌子、何となくなまめけり。

○覺束なきもの

投書の發表を待つ間、判檢事辯護士の試驗。留守居の時夫よりなりとて見知らぬ使出で來たるに物など、うかと渡したる。我子の惡しき事せしに身の爲と思ひ心にもなく手ひどく打懲せしに出て行きて遲く迄歸り來ぬ。さては冬の夜中に眼醒めしに戶締せしや、いなや覺なき時。また我家を留守にして外出せし途にて、ふと晝買ひ求めし肴の蓋するを忘れしに心附きたる時

○可愛ゆきもの

金絲雀の子。親はにくけれど鼠の子もいと可愛ゆしふと物置の道具出せしに箱の隅などに襤褸、藁にて造りし圓やかなる巢の內に小さきもの五つ六つ、ひゝと押し合ひ、今棄てらるゝ身とも知らず親の乳求むる樣にうごめきたる。菫の花。クリスマスカード。稚兒の眼醒めし時の面は別けて可愛ゆし。夜具の襟より、頭少し出し活々せし眼にて四方を見廻し、未だ眼醒めぬ妹の頰一寸突き等して笑みたる、軈て昨夜、もらいし玩具の事思ひ出して、むく〳〵と起き、母親傍に居ねば丸々としたる足も露に、ネル等の薄き寢卷一つにて、捕へむとする程面白がりて飛歩きたるいとをかし。

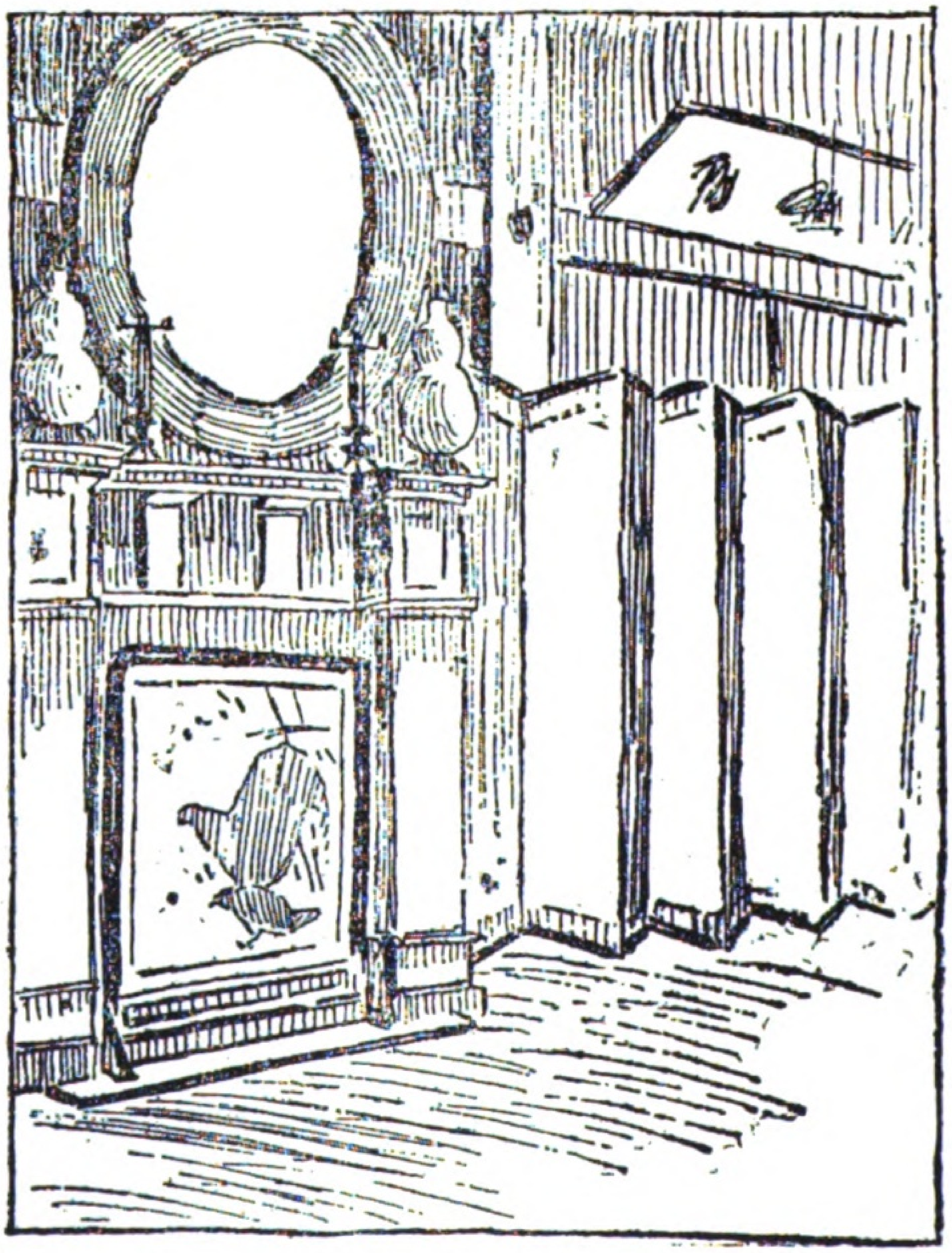
○女の職業は

會社員、女子判任官、女醫、女教師、女詩人、音樂家いと多かり。下女も職業とや云ふべき、恐ろしき迄肥りて一口噺の「ひろいん」となるは罪なくてよけれど、井戶端にて我主人の事惡し樣に云ひ、小言など言へば鬼提灯に火點したらん樣の顏して物も云はず、前に奉公せし家の事言ふ。あるは針持たすれば、ふら〳〵と舟漕ぎ初め、鼻より怪しき物出したるはいと凄まじ。成るは難けれど女醫いとよし、金緣の眼鏡かけいと愼ましげに病氣見舞ひたる。

されど女詩人こそよけれ、「東助や、新平と云ふ人は文學を知らず――」等歌作りて世の人にも賞められ崇められつるは羨まし。音樂家もいとゆかし。電燈まばゆき壇上に、禮服着て立現はるゝ姿の、色白く、大形のリボンは、さし出したる廂に國旗の樣にて翻りつ。滿場の視線皆其人の眼口に集れど遠ければ鼻筋もよく通りて見ゆるは目出度しや、軈て拍手も止みぬれば、歌ひ出でし肉聲のまたなく妙なるいとをかし。

女敎師の廿にもならぬに早先生と呼びかけられ、子供には姉母の如く慕はれて何にもあれ先生にさへ聞かば分ると思はれたるいとよし、されど女學校の國語の先生の、やがて年とりぬれば、我獨り物知り顔にて雜誌見ても「今の若き者の何云ふぞ。などて夫の事を、ハズと書き、ラブ等と誇らしげに言ふ。此處見よ、假名遣の誤多き事を」と賢しげに嘆息し給へるまたなくにくし。

秋元子爵夫人の居間



若き人妻の暇なればとてふと學校等に出で初めの内は唯小使の端にと思ひし給料を終には一角の心宛にする樣なりつ、さるに子生れ辭職して、最早收入の道も止りぬれば、僅ばかりの贅澤に馴れし身の、暫が程はいとゞ苦しかるらむ。

職業は神聖なりとか申し侍れど電話交換手いと凄まじ、晝はひねもす、マスクとか申す恐ろしき物着て、もし／＼とひた云ひに云ひたるよ。

〇口惜しきもの

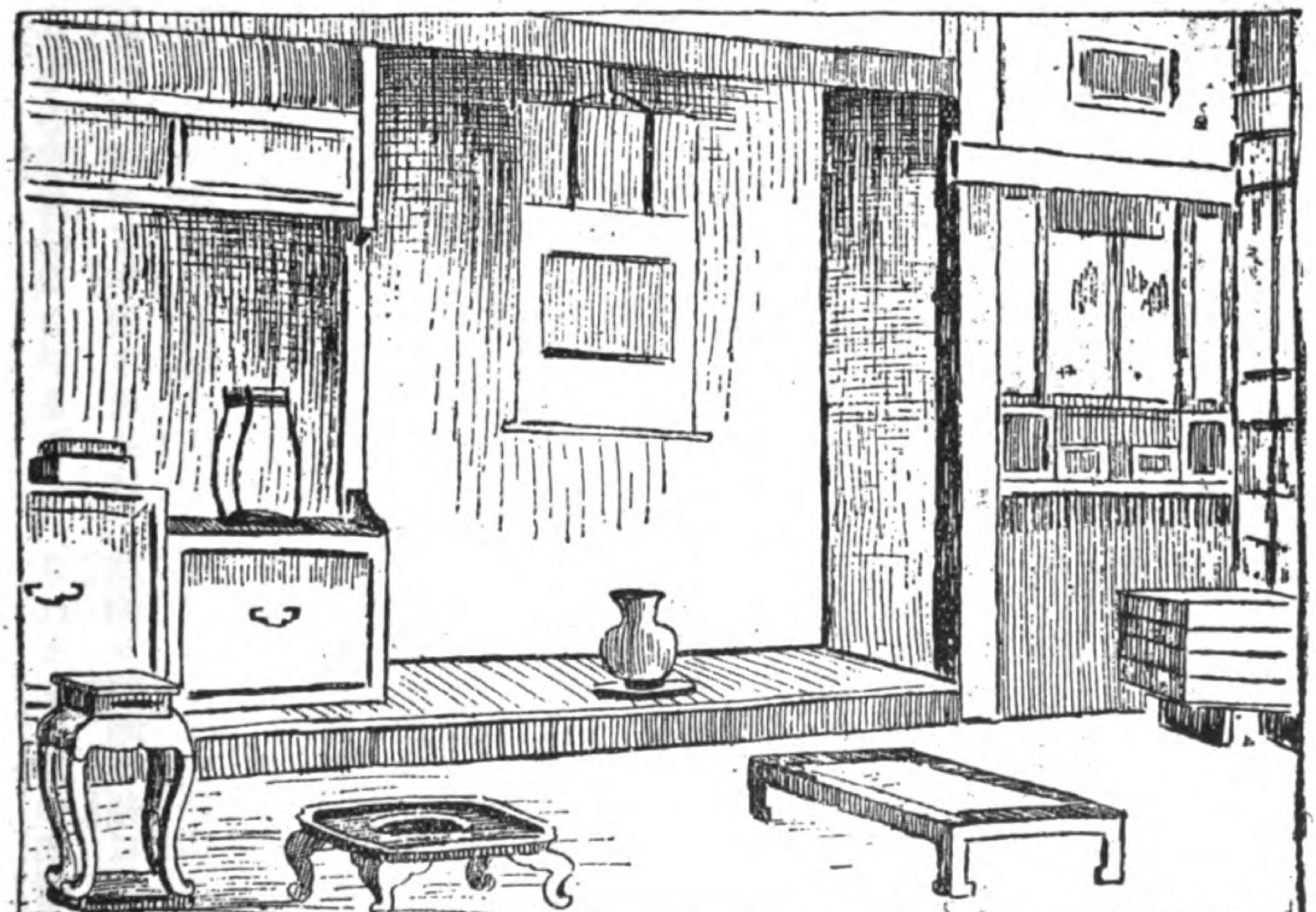
考物の答送りし後ふと誤せしに氣づきたる。人に出す葉書細々と清げに書きしに、表をかへせば逆になり居たる。一枚同志になりたる加留多ぬかれたる。

〇きたなげなるもの

猫の物食ふ振。人前にて蚤とらんと懐に手入れたる鼻より黒きもの出したる。もの食べて後、妻楊子にて歯せゝり賤しげなる音さす人。頭垢多く浮びたる頭。いづれも汚げなれど「肉の香」等書き、あるは〇〇多く入れたる小説こそきたなげなれ。」

七つ八つの頃なりしか。従弟なる一つ年上の子我家に來し事あり、互に又なき友として遊びしに或日ふと庭なる椋の木の下にて爭初め、急に悲しくなりたれば

大倉家螺細の間



金子子爵夫人の居間



袂、顔に押しあて泣き出しつ、其子心配げに我面を覗き込みて斷云ふに益々悲しくなりて、ひゝとばかり、右より覗けば左に、左より覗けば右に顔そむけ果は傍の木見出して其幹にひしと倚り樣、我鼻荒き木の皮にすりつけ〳〵泣しが。軈て從兄もしく〳〵と同じ向側に立ちて泣き初めつ。かくて日暮るゝ迄二人は拳眼に押し入れ〳〵涙搾りて立ち、終に母なる人出で來て二人を家の中に連れ入れしが、見れば從兄の眼赤く、鼻赤く、頬も怪しげに輝きたり。暫くは流石に物を言はざりしが夕餐濟ませし頃より其人の又なく慕はしくなりしよ。

○花は

かあねしゐよん。一重の櫻。ひやしんす。蕾の内なる福壽草、莖長くのびて咲きたるはいとわろし。人の本借りし時計らず見出でたる花いとしほらし。

○湖

洞庭湖。みしがん湖。中禪寺湖。死海は名をきくだに恐ろし。

○山は

新高山。あるぷす山。

○心ときめきするもの

戀の味覺え初めし頃、さる家の前通り門の內そと覗き少し行き過ぎしに、向より其人の事もなげに步み來たる。また歌留多會には味方同志となり計らず名覺えし人の、其後我名頻にきゝ居給ひし事など、友の口より聽くに少し紅くなりて、「噓よ噓よ」と云へど何となく氣にかゝりて心ときめく。

さては身內の人の我家に來合はせたる時、友どち出で來て疑深き眼つきもて其人を見しか、後にて「あの方は？」等云ふに「身內の人」と事なげに答ふれば「さう」と云ひて互に笑みかはしたるは、人わろし。かゝれば其後その人と面合はすだに恥しく、前に出でゝも情なげの素振と、其人の話など出づれば心にもなく言ひけなしつ。されど別るゝ時は流石に殘惜く、などて物も言ひ、我眞心をも示さゞりしやと悔めど詮なく、二三日が程はその事のみ思ひ續けしが。されど乙女心の變り安さは暫にして何も何も忘れはてぬ。」

外國婦人の流行こそいと心得えね。おどろ〳〵しき鳥の羽つけ重たげなる帽子着たる。犬等に寶石入の頸輪はめ、夫を夫と思はざる。あるは我面に皺よればとて眠る時牛肉あつる等きくさへ恐ろし。まして蜥蜴飼ひ馴して連れあるく貴婦人の心こそ怪しけれ。

（以下續出）



摘草

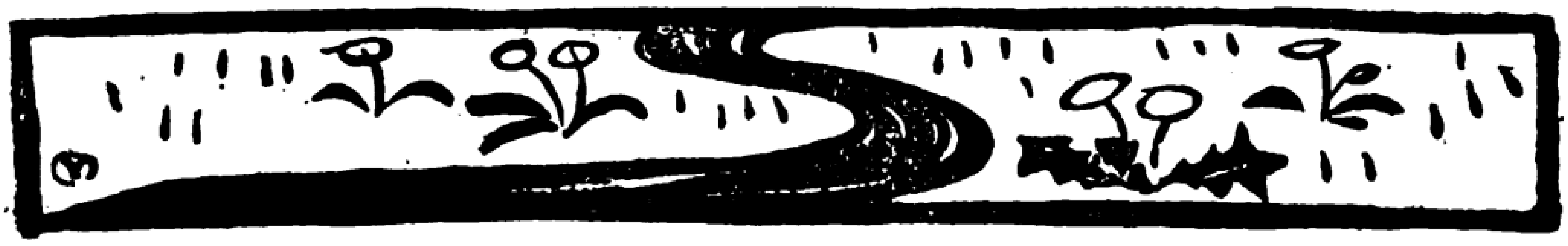
里の女

南山の高峯には、白きものそこゝに殘るも、冬枯の淋しき野邊は早や去りて、若草にほやかにおそざきの梅紅白取まぜてふくらかにほゝ笑み床しき香春風のおくり來るもかぐはしく、玉なまろばす鶯の歌もいと、長閑なり、ポカ／＼とさす春の日に、やくるをいとふ娘心は、花の都の姫様方も山家そだちの賤の女も人情いかでかはるべき、日傘にかへたる手拭もて面をおほひ袖なき羽織、しりきれ草履、右手に庖丁、左手に手籠、そのつむ草もさまざまなり、芹に芡に、嫁菜につくし、くわんぞ、あさつき、山葵の葉田の面に田螺拾ふあれば、小川に蜆拾ふあり、美しき聲してうたふ歌は、

花の三月雛様の節句、夫婦／＼にかざられて、
前にお花を立てられて、おもひ切餅よもぎ餅。

○摘草料理を書きそへれば

柔かき山葵の若葉をよく洗ひ、水氣を去り、徳物に入れ、熱湯をそゝぎ、蓋をなし、力を入れてよくふり、水氣を去り、お醤油をかけて出す、又たくはへ置くには、ざつと鹽漬になし、後醤油に味淋を少し和したる中に漬込み、密閉し置く、麴漬になすもよし、くわんぞ、あさつきは酢味噌合になし、ねぎに似たる味あり、芹はゐざり芹とて、谷川の岸、田の畔などに生じ、根太く、葉短く、少し赤色なるも、うでれば青くなり、香氣味共によし。



○山遊び

春も中ばすぎぬれば、八面の山々緑の幔引き廻したる如く、峯の白雪の、絹美しくいたゞきて、かすみの中は茫然と立ちたる様、繪に見る富士に異ならず、深山の木々も花かざり諸々の鳥歌ひつ舞ひつ岸を洗ふて走り行く、谷の清水も春の愉快を歌ふ心地す、東の空に日は高けれど此處はまた、谷合の露もまだひぬ細道を鞋、甲掛、脚絆に手おひ、ナアもて作りしコンゴてふ、袋代用の入物横負ひ幅廣の前掛すそはしをりて、あるはつみ、あるはむしるその獲物は、山椒、たらのめ、おこぎ、薇つゞいて出る蕨、ほーこー、甘菜りようぶ、苺、土栗、さては足元よりたつ山鳥の卵に至るまで手あたり次第にあさりつゝ、

「ちよいと薇蕨さん、お前はなぜに屈んでる、
私しや姑にくまれて、それで屈んで居るわいな
やがて、しどらになつたなら枝もつきませよ
ロリヤせものびる。」

どう／＼とおつる谷の白瀧に程よく和するも面白く、やがて已が影法師の頭ふまるゝを、懐中時計の代用に晝食事、菜の花…

の咲き揃う遠き里の野見渡して廣らかなる草毛氈の上に、うち開くわりごの竹皮、豆粉にぎりに和布にぎりは青と黄の色どりよく野菜にしめの二品三品、玉子燒までそへあるは母様の心づくし山海の珍味にもまして美味しくもまた嬉しけれ。

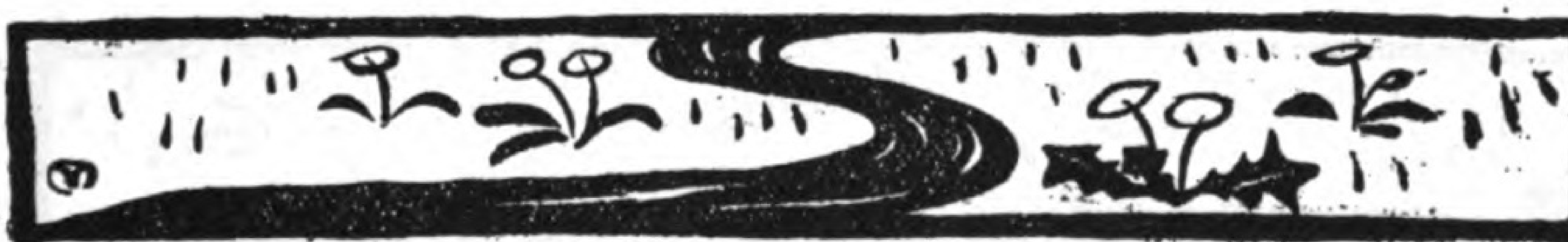
○山土産の料理

たらの芽とおこぎの芽とは、胡麻味噌合になし、たらはうどに似たる味あり、共に香氣よし、りようぶの芽は、飯を作る、茶に似たるよき香氣あり、甘茶は、にしめになす、其名の如く甘き味あり、ほうこは、餅を作る、つちぐりは松露に似たる、小いさき玉なり、土の中に生じお吸物にしめ、うま煮などになす上品なり、春の苺は下り苺とて、二尺ばかりのつるになり、黄金の玉をつけたる様に、黄色にじゆくし甘味つよく西洋苺も及ばぬ味あり。

薇、蕨は、室の下の方まで柔く、ゆがき置き、日々の料理になす雪國なれば、之等の野菜物は、鹽漬、又は、陰ぼしにして冬のおかずにたくはへ置なり。

○山上り

天然の築山に人手を加へし霧島の株、數十本の花紅とび桃色八重一重などとり〴〵に今を盛りと咲き亂れたる様、緋緞子の幕た



れたる如く、燃ゆるやうなる緑の色美しき松が枝に縱横むじんにからみたる藤蔓の紫の房美くしく、お池の水に僅かばかり頭をもたげたる若葉は滑ならねども水晶の水玉をのせてゆら〳〵。緋鯉まごひの勢よく鰭をそろへて泳ぐも愉快なり。舊暦四月二十四日は山上りとて、親しいともだち親戚など打ちよりて花咲く山或は又、見はらしよき二階座敷等にてさゝやかなる宴會を開く大人も子供も樂しき日なり。折りから今年は花もよければ樂しき今日のむしろを我が築山にひらく事となり、料理は各自携へ來れば二三の品を用意して待つまほどなく、午後三時ごろともなれば參霧島打、小學校の正帽、やかんあたまおばこ丸髷、お下げ蝶蝶などだん〳〵に集へ來たり、用意の道具運ばせて、野風呂に火を起すあり、臨時竈代用に石をならべてつくるあり、お酒溫めるあり吸物つくるあり、奥も廚も隔なき山上に毛布しきならべ廿數人大小の男女座を定め、一枚板の青天井のつしりと高きも氣持よく、若葉栄ゆる樫の木の梢をもるゝ大電燈の燦爛たるひかりを斜にあびるも心地よし。瀧の音を琴三絃として山鳩の歌も面白く下げ置かされ重とり〴〵に打ち開けば、何れも郷の晴れ料理とりかはしくみかはし思ひ〳〵の談笑に花をさかせ、或は又野立て取り出しそよ吹く松風の音と共にお茶會を開くもあり、子供等は山あさりなすかと見ればかくれんぼ遊びに餘念なく一日を樂しくくらすなり。



病める妻

翠葉

暁のひいやりとした風が肩のあたりに身にしむと私はふと眼がさめた。昨夜眠りしなに一枚戸を明けて置いた所の障子が暗の中にうつすりとかすかに見える。病人だけれど夜も晝も濁つた空氣を吸ふてはいけないからと燈火は堅く醫師から禁められてあるので必要の場合丈マッチを枕元に置いてつける筈だがよく眠るのでまだ一度も使つた事はない。

あたりはひつそりとして物静かないつもの犬の遠吠も聞えないで、ざわ〳〵と松吹く風の音ばかり片男波のあたりにひゞく。

私は仰臥いたまゝ眼をつぶつてつく〴〵と身のこし方を考へる。あゝ何といふ拙い運命であらう。世の中に有りあまる程用のある若い身空で毎日かうぶら〳〵遊んで居る口惜しさ。併しまだ私は病氣だから致し方がないやうなものゝ御自分はどこもお悪るくはないのに病人のお附合として永らく御不自由を忍んで下さる旦那様實にすまない。それも半年や一年といふぢやなしもう三年にもなるものを嘗て一度も不平らしい事は仰しやらずいつも心から慰めて下すつて十分氣を永く心丈夫に養生して早く直つてくれよとのやさしいお詞あゝけれど不治といふ形容詞をかぶせられた此重患何と満足なお答が出來やう。

叔父様の言ひ草ぢやないが世の中におれが一人の女といふぢやなし。どんなに可愛い女房ぢやとて心配も大抵にして置いてつと自分の氣をはらしてはどうぢやと仰しやるのもさら〳〵無理はない。それに其時はさからひも遊ばさず。笑つておすましになつて私の心のすむやうに下宿住ひの日記までつけて送つて下さる其

寛大なお志あゝ勿體ないかしらと思はれる。此寒いのに何で志願してまで滿洲あたりへお出掛になつたらう。皆私の病氣をよくしてやらうとの思召からお醫者樣のお進めと外國へ行くに俸給がふえるから滋養物の一つもよけいに取られようからつて私は其お詞を伺つた時は一夜泣き明した。あゝ此旦那樣のお志丈でも私の病氣はよくならねはならぬ筈。私はきつとよくなつて見せる。肺結核であらうが何であらうが心の持ち樣一つだ。外の病氣で死んだ人が一度此病にかゝつて直つたらしい形跡のあるのは僅かな學說だといふのだもの。其人は別に高いお藥を飲んだといふではなし自然に直つたやうなものの千百人の內一人でも、さういふ例があるとすれば私も亦是非其一人の內に入らなくつては。かう考にふけつてる內に夜があけた名草山の頂から氣持のいゝ旭がパッとさすと玉津島神社の森の烏も鳴きやんだ。

いつの間に起きたのだらう。婆は朝食の準備して牛乳も溫つた樣子盥水でしぼつた西洋手拭をさげて笑ひながら入つて來た。

「奥樣けふは御氣分は如何で御座います。」

「アゝ別に變らないがいゝ安排に此四五日は盜汗もすつかりとれた樣だ。」

「それはまあ御結構で御座います。」

表には頻りに水を汲み上る音がする私は此音をきくと羨ましくてたまらない。毎朝五時頃から起きて手のちぎれるやうな冷い水できのふ取つて來た海苔を作るのだが、亭主も嫁も殊に若い花嫁など夫の汲み上る水でたゝいた海苔をすゝぐ其嬉しさうな顏樂しさうに笑ひながら働き睦しく語らひながら共かせぎする羨ましさ。手鍋さげてもとは此事だらう。夕顏棚の下すゞみ、げに人生の快樂は夫婦和合一家團欒のそれにまされるものはないとほんによくもいふた詞である。私も此贅澤な衣服や富や名譽はいらないからあのやうに夫の片腕となつて苦も樂も共にして見たい。

處女時代にはどこ一つ患つたこともなく保險に入つた時などは女ながらも五尺二寸十四貫目の立派な體格

それ故衛生美人の稱號を奉られて殊更に私の丸い顔や低い鼻をほめられた樣なそしられた樣な氣持さへしたものを、六年後の今日此姿は何であらう。我ながら愛憎がつきるのによくまあ夫は早く死ねと仰しやらないこと。骨と皮といはうか。人の三倍も滋養物を食べてるのに益益やせるばかり。きのふもかけて見ると丁度十貫五百目。ほんに風が吹いたらたふれさう。けれど心は反比例に中


月見草

中慥なもの。たから一層自分で苦しまなければならぬ。こんな病になる位ならなぜ發狂をしなかつたらう。さすれば自分には何の苦しみもなかつたらう。

併し私今は患疾をこぼす時でない。あの總海樣に來て入らした松村の奥樣のことを思へばまだ〳〵幸福、御病症は私よりもずつと〳〵輕いのにお姑樣がこんな嫁は置かれないとて無理な御離緣、旦那樣も一人子の悲しさやはり家の爲に妻

の愛を犠牲にして涙を振つてお去りなすつたとやら。勿論お里はお物持で之からどんな御養生でも出來るけれど病氣中でも第一に便りになるのはやはり夫だもの御兩親がどんなにお慰めになつたとてそりやまた別なもの。丈夫な人さへ戀の痛手には無い病でも引起さうといふ位まして半死半生の病人をや近頃はめつきり御衰弱なすつた樣だ。あの方のは初期だのに早くお直りになればいゝが。

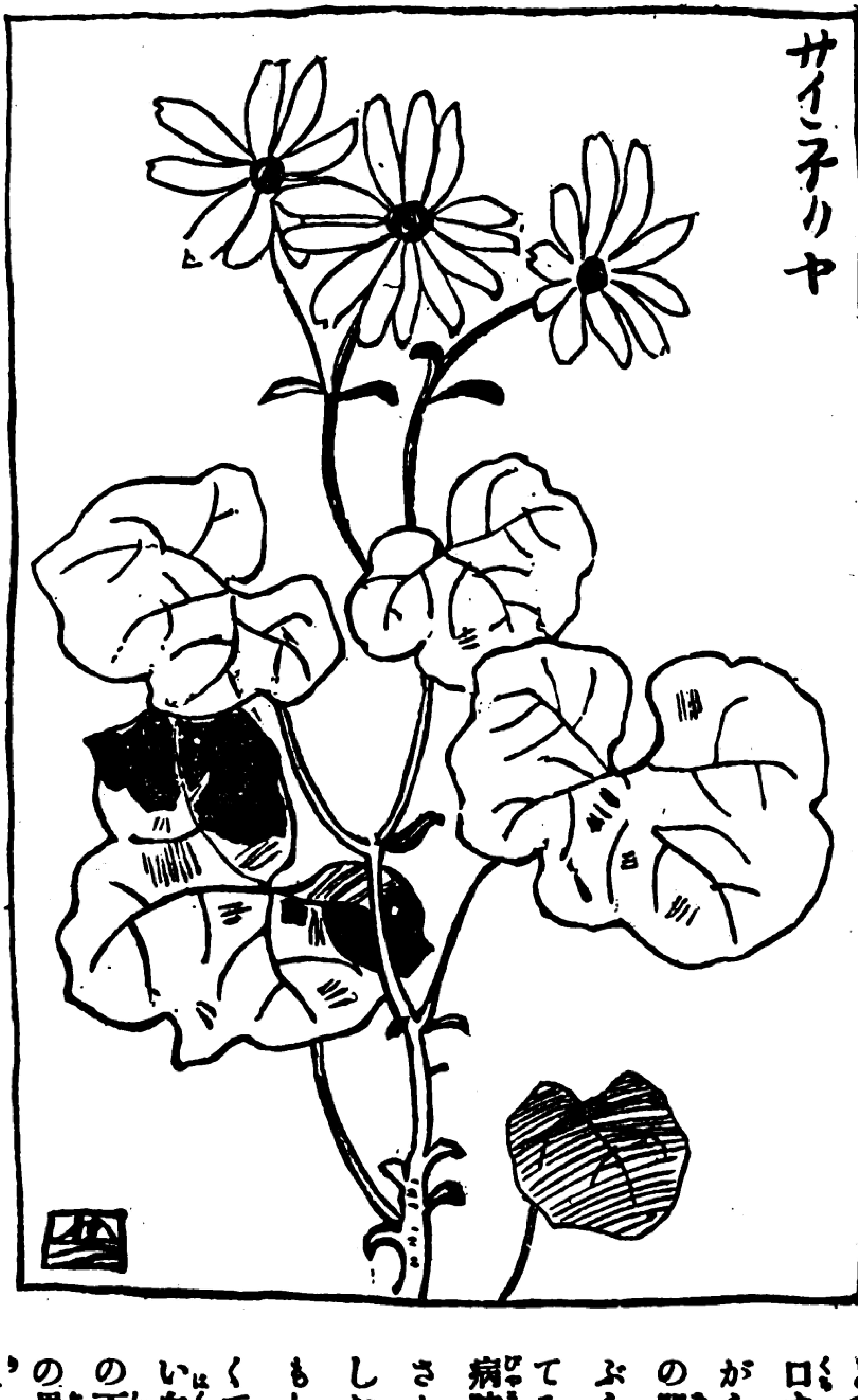
其事を思つたら私はずつと〳〵幸福だ兄樣の御宅にお出遊ばすお姑樣も時々親切に御見舞下さる其度に早くよくなつて歸つてやつて下さいよ秀夫も不自由で可愛相だからと私は此お詞をきくといつも涙がこぼれる。それに旦那樣はあの通りおやさしいし病氣は誰もなりたくてなるものぢやない。時のまわり合せでなつたものは仕方がないから出來る丈手を盡して早くよくなれと仰しやる。里の御兩親はまた肉親ですもの。それは〳〵もう御自分達が身代りになつても直してやりたいと迄のお志あゝ私は此皆樣の親切に對して丈でも。きつと〳〵よくなると信じてる。

朝食後ぶら〳〵と濱へ出た。風があつてもさすがに春の日。暖かくつて氣持がいゝ。隣の家鴨に草をやつて暫く眺めてると此町に誰れ一人ぶら〳〵遊んでるものはない所へ。私が來てから丁度四ヶ月になるのだから。そこらの子供はもうすつかりなついてしまつて。奥樣お早うと挨拶する、濱へ行かないのといへば皆喜んでぞろ〳〵とついて來る此町の習慣で兩親は皆海に出て働くから十歲位の女の子は大抵弟妹を負つてお守をするので中々一人は遊ばせてくれない。少しせの低い子供になると脊の子供の方大きい位だのに上手にあやして負つたり抱いたりおしつこもやればすかしもする。私は此年になつてまだお人形さんより外に抱いた事のないのを此十歲の子供に對して實に恥かしく思つた。

三斷橋を渡つて下り松の所に休んで居ると、丁度干潮になつてるので一羽の鶴は紀三井寺の傍迄も遊びにいつてる。芝邊屋の方から三十人位の觀光の一隊が

來た皆五六十の老人ばかり疊なしの齒入下駄をはいて毛繻子の洋傘を持つてる。そうして私が二回も休まなければ得上らぬ坂を誰も〳〵走り上つた聞けば昨夜は高野山で泊つたとやら、老いて益々盛といはうか私は其元氣に驚いた。

そこらはあまり塵がひどくなつたので一人で不老橋を渡つて片男波の方にゆく。



和歌のうらにしほみちくれはかたをなみ
　あし邊をさしてたつ鳴わたる

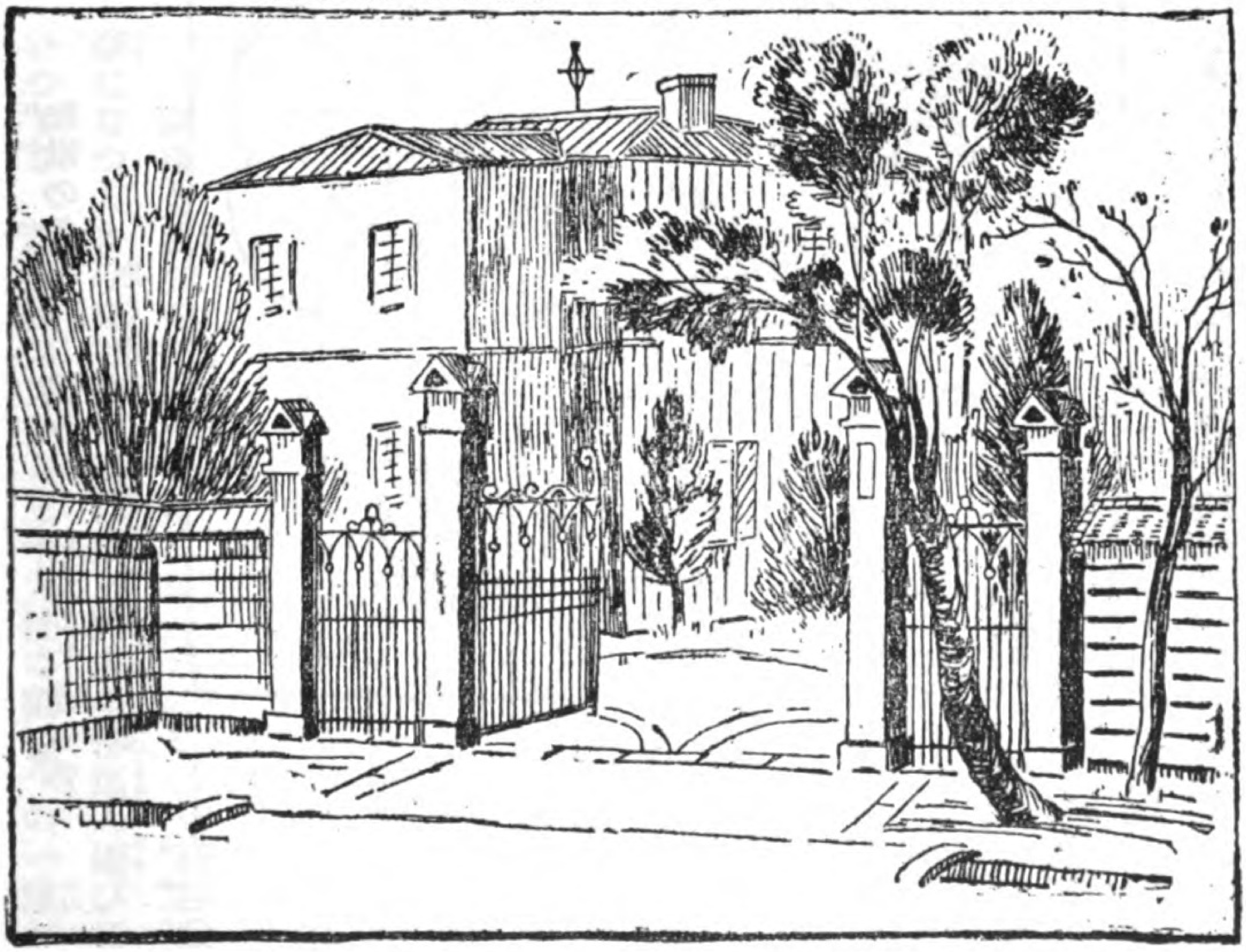
との古歌を口ずさみながら、老松の間をぶらぶら散歩してると同じ病院の赤城さんが入らした。あゝもしも病なくて此淋しい白砂青松の下に妙齡の男女唯二人むつまじく語らへりとせんか。實に只事でないであらう。けれ

ど共に〳〵薄命に泣くの人同氣相求め同病相憐むとか砂にまろび草に臥して語らふとも天地に對して少しもやましいことはない。否やましいといふよりもむしろ其樣な青春の世の歡樂を語らう元氣がないのだ。今月死せんか今年死せんかとの懸念ある身には死其もの以外何の考もないのだ。

けれど不幸にして此唯一の友にも別れなければならぬ運命に接した。自らの心に潔白なりとはいへけがれたる世の人にはいらざるうたがひの基となるのも是非がないであらう。夫ある身の只一言でもさる、いまわしい噂をたてられなば。養生が却て何になるかもしれない。不義の名を負いて生きるよりは芳ばしき貞節の美名をかぶつて死する方私は望む所であるから近日こゝを引上る都合にした。併し私が歸れば此病友はどんなに力を落すであらうか。

▲手の化粧　髮、顏、服裝等の夫々美飾さるゝと共に最も眼立つものは雙手の皮膚の美醜であるされば着服の前に雙手をホンピアンクリーム石鹼で丁寧に洗ひ爪の掃除は美爪術として別に記す)クリームを薄く引いて水白粉を塗り熱湯で蒸したタオルで暫時手を蒸した後ライラク水を附け浮出せる白粉を雙手で摩擦して取るのである。

西陸軍大將邸　（麻布三河臺町）



久留米の風俗

南筑女史

市街は町幅も狹く、一體に沈んだ乘氣のしない心地ですが數年前十八師團建設といふ興奮劑を得て漸う活氣付いて來ました。數代前の賢主義源公といふが大に奢侈を戒め勤儉をすゝめられましてから、以來一層質朴で極く眞面目な土地柄となりましたが、餘り度を過した故か、住民の多くが進取の氣象に乏しくなり、工業であれ商業であれ、進歩の跡が見えない樣です、割合に女の方が氣が勝つて居ります、宅に出入の酒屋の亭主はいつもぐづ〳〵してはお神さんから叱られ指圖をされて居ます。こんなのは例になりませんけど、皆樣御存じの久留米絣の發明者井上傳女は、それは〳〵勝氣だつたさうで、七十を越してからでも中々、利かぬ氣の實の孫さへ隨分泣く目をしたといふ事です、それから一般に蓄財の念には大層富んで居りまして、各自その稼業に精出して貯蓄を怠りませんから、自然生計も豐かですで少し餘裕が出來ると樂隱居を氣取り儉約に徒食し、穩やかに一生を送るといふ風が見えます、產業　としては例の久留米絣が一等です、本場丈けあつて絣織の盛んな事は驚く程で、至る處大きな絣商が軒を列れ、組合の織工場、個人の機織場分大仕掛に遣つてをります、商賣は下手此地で氣になるのは客に對する商人の態度で一體に不親切で威張つた樣な隨分無愛想です、土地の者は慣れて何ともありますまいが他から來たものは、こんな旗のたつことはありませんでも近頃は氣が注いたと見えて商店改良會といふ組合が出來て各自商ひ振りを改めて來ました。

それから人力車なども夜は早く仕事を止めて坐り込んで終ひますから、他から遲くでも歸らうものならとんだ難儀を見なけりやなりません返り車にあつても中々乘せうとは申しません、頼めばやつと佛頂面してのせます、是も他國人に不快を與へる一つです。

市の教育は中學商業學校女學校を始め幼稚園も二つ許りは備つてをります、小學校の教授法などは優れて、全國模範小學校の中に撰ばれたのさへ御座います。藩治時代から尙武の風は盛んで擊劍や槍術で名高い人は隨分出ましたとか、今も此風が殘つて柔道擊劍等が盛んで、中學校商學業校は固より小學校迄元氣の好い氣合の聲が道場を洩れて聞えます、縣立の女學校內にも薙刀が隨意科として入つて居ります。又夏分は水泳が盛んで、筑後川の流れを渡つて瀨へ上げるのですから、皆達者なものです、いつか新聞にも載つて居ましたが寒中此流れを切つて每日通學して居たのはこゝの明善校の生徒でした。

どこやらに未だ藩治時代の俤が殘つてゝ質素、堅い所があります、四季の更衣でも袷衣は三月の節句から、單衣は水天宮樣からといふ樣に定つて居るのです。今でこそ、綿入の綿入羽織のと着ますけれど、以前は冬も袷衣(下流の者は單衣に一寸綿をつけた物)で通し綿入なんか着てやうものなら「彼人は布子どら着てから」ときも〳〵柔弱者か嘲り

者かの樣に嗜つたものです。然し今ではもう自由で、夏ショール掛けても大ひさしを出してもそれ程驚かない位になりました。

當地では子供の初正月には男子には大きな破魔弓、女兒なら、大羽子板を親類知己から祝つて遣ります、受けた方は、それ等を家の目立つ所に美しう飾りつけて、愛兒の行末を祝つてやります、節句には幟りと雛を、是は何處でも同樣でせう。次に初誕生日が來ると「おかちん餅」といつて祝ひの餅を搗き、然して籠に包み、子供には紋付を着飾らせ、新らしい草鞋をはかせ、扨て禮服つけた產婆が赤兒の手を取り扶けて「お前百迄わしや九十九迄共に白髮の生へる迄」と節面白う謠ひ乍ら、その籠の上から餅を踏ませます（此餅は後に小さく切つて方々へ配ります）それから、机の上に載せてあるものを取らせます、それは男ならば、刀劍とか筆硯算盤等、女なら、尺、鋏、筆、算盤等それ／＼日用道具なのせてあるのです。子供は無意味に其中のどれかをつかみます、その物が後來上手になるのださうです。女兒が七歳になれば「いもじかき」といつて當の六月朔日に、湯卷を新らしく拵らへ近所へ配り物をしたり又は人を招待して祝ひます、祝儀としては縮緬とかメリンスとかを三尺六尺宛 相應に贈ります。結婚風俗の內で不思議に思ひますのは昔から「嫁ぬすみ」といつて當人同志が望んでも女の方の兩 親が許さない時、又一方で許り欲しがつても女の承知せぬ時などには、その女の外出の折を、ねらつて、男の方の知人朋友等が欺いて、さらつて來ます。すると先方では、もうちやんと、祝言の用意がして、あるので、否應いはさず式を擧げて終ひ、濟んだ後で、親許へ知らせます、斯うなれば仕方がない。親許でも大分はゆるします、中には嫁入支度が出來なくて近所の手前を繕ふため、先方と談合の上、わざと盜まれた振をするのもあるさうで是は昔は大變盛んだつたさうです。

頭痛の看護

頭痛の原因は種々あるが神經衰弱又はヒステリーに罹つて居る患者には時々起り勝ちであり、又た婦人には月經前に頭痛するのはお定りと云つても宜い、子宮が曲つて便秘する者にも起ることがある、其の他精神の感動即ち怒り悲むと云ふ場合にも起るが通例である、で、病氣は原因を除くが第一の療法である、概して痛む時に手當としては先づ暗い室に靜かに寢かし、顏の赤くなる症ならば氷 囊で冷し其と反對に青くなる症ならば茹た蒟蒻を西洋手拭又は此に似たる布巾に包んで能く溫めやり、場合に依ては小糠を囊に入れ、熱き湯に入れたるを絞つて溫めてやるのもよろしい、簡短な藥劑はメントールを額の邊に塗ると、顏の赤くなる症には臭素ナトリユーム三、瓦、苦味丁幾三、瓦、水百瓦を一日三回食後に飮ませること、今一つ素人でも出來る塗劑は單舍一瓦とメマリン十瓦とを混ぜて顳顬に貼るので之相當の効用はある、要するに安靜にして上衝を避けるやうにし、下劑又は灌 腸に依つて腹中を空虛にし置くのも家庭療法の一つである。

賣り切れざる内本日直ちに購入あれ

婦女界

五月一日第三號　定價一冊拾五錢　郵税一錢五厘　一年十二冊郵税共一圓七十五錢

◎東宮妃殿下の御修養◎三皇孫殿下の御學事　田尻博士

◎家政の巧拙は直ちに塵溜箱に現はる

▲廿二歳の時落生を脊負ひて國難を山中に避け涙を揮て苦諫した私の娘時代

▲御殿女中から豆腐屋のかみさんとなりて共稼の成功 實驗

▲適當な嫁を得んが爲め再婚を決した私の經驗…喜悅孝子

▲女子將來の進路は文學と社會事業…女子大學校教頭 麻生正藏

◎空中飛行機に駕して二度まで英佛海峽を横斷せし

◎五十餘人の書生を養成した苦心　仁尾繁子

大附録〔躑躅〕

二頁大三色版　滿谷國四郎筆

◎婚約後三十二年后宮中奉仕の女官と結婚式を擧ぐる予の心事

◎容色の變つた爲め離縁された前後の悔恨…豊島せつ子

▲家庭の不和が原因で罪惡を犯し遂に斷頭臺上の人たりしも不思議に助かつた私の實驗

▲時代の變遷に伴ふ日本室の裝飾 巖谷小波　▲田園生活の幸福 櫻井博士

▲女傑廣岡淺子刀自　▲衣裳の着こなし　▲髪の手當法

▲貴婦人の交際ぶり　▲鐵道院の女子雇員　▲應急手當

◎何時も腹に子が居るものと覺悟せよ…　村上博士

◎桂總理大臣の家庭◎端午の節句の料理

女（その一）

發兌　東京神田表神保町　振替東京一三五番　同文館　電話本局特四三七　電話本局一五三九　賣捌 各地書林

―▲見よ＝讀め▼―

少年少女の讀物として

大好評を博せし

本書は第九版を發行す

西川三五郎編

學校
家庭

兒童百話

▲洋裝頗美本全壹册●紙數二百卅餘頁（送金は便宜上郵便切手代用諾す）

▲木版密畫挿入●價廿八錢●郵税四錢

この本は第一に子供の敎育に適切なる古今東西のお伽話、寓話、傳説の中より最も趣味あり最も有益なるもの約百種を撰びて之を編述したるものなれば少年諸君の讀物として極く面白く家庭に於ては訓話の種本となし小學校にては話方敎授の資料として無二の良書なり

發兌元　東京神田區松下町十三　文盛館

マクス、オーレル氏原著

桐生悠々君摘譯

婦人國

全一册　洋裝三六版上製　紙數約三百頁　正價四拾五錢　郵税六錢

マクス、オーレル氏の文は簡潔にして辛辣加ふるに奇警なる觀察を以てして滑稽百出人の頤を解く蓋し一代の奇才也本書は即ち同氏の著に就き戀と女とに關し趣味あり且つ實益ある部分をのみ摘譯せるもの人類の根本的二大本能に關して日常を警醒するの訓言所在指を屈するの遑なし未婚者も讀むべく既婚者も讀むべく家庭の平和を期して社會の進歩を欲する者に於て特に然りとす



文（その二）

文學博士坪內逍遙君序　文學博士上田萬年君序

文學士 佐々醒雪君著

俗曲評釋

近世三百年の歌謠、俗曲中の名篇は悉くこゝに網羅せられたり、著者は現代唯一の俗曲研究家にして且つ頗る近世の文藝に精し、況や各篇近代の風俗に精通せる諸方が百方考證を重ねたる艶麗なる挿畫あり乞ふ、世間の片々たる評釋書とは同一視せられざらんことを

第一編 江戸長唄

全一册　四六判洋裝總布　美本挿畫十數葉　定價五拾五錢　郵税金六錢

杵屋が一流は俗曲中の上品なるものとして今や中流以上の家庭にも入れり世人は道成寺といひ草摺引といひ勸進帳といふ名をのみ熟知すべししかもその構造や變遷や意義や總て茫乎として捕捉し得ざるにあらずやこれ等が「專ら專門家や通人側の專有に歸して新代とまるきり沒交渉となり行かんとすることは我國樂の前途の爲恐くは容易ならぬ損失らし」とは坪內博士が本書の爲めの一節なり新代の文藝に關與するもの亦一讀せざるべからず

第二編 箏唄

全一册　四六判洋裝總布　美本挿畫十數葉　定價五拾五錢　郵税金六錢　【新刊】

琴曲の註釋は古來屢々上梓せられたり然もよくその眞相の說明を盡して餘蘊なきものは獨り本書なるべし殊に平易通俗の文を以て組唄の全曲及び生田流山田流の名曲を丁寧親切に註解したれば婦女童幼にも難解の患なかるべく苟も箏唄を學ぶ者琴歌を聞くものは一本を備へざるべからず且つや箏の組歌は我邦の歌謠史中最も特色ある者にして中古の今樣より生れ出でゝ明治の新體詩の祖たりとすれば本書は亦蓋し新詩人の一顧に値するに足るべし

第三編 河東

全一册　四六判洋裝總布　美本挿畫十數葉　定價五拾五錢　郵税金六錢　【近刊】

江戸文藝を知る者は團十郎が助六の名を記憶せん、助六の名を知るものは河東節を忘るべからざるなり團十郎と助六と河東節と、これ江戸隨一の名物にして而して河東節は實に近世歌謠の粹として蜀山人の激賞せし所今著者は江戸時代に對する蘊蓄を傾倒して俗曲の至粹を評隲する者世間の讀書子豈等閑に附して可ならんや

續刊……▼第四編 上方唄　▼第五編 常磐津　▼第六編 端唄

發兌元　東京日本橋本町三丁目　博文館

女(ゑの四)

新撰名勝地誌

全部十二冊

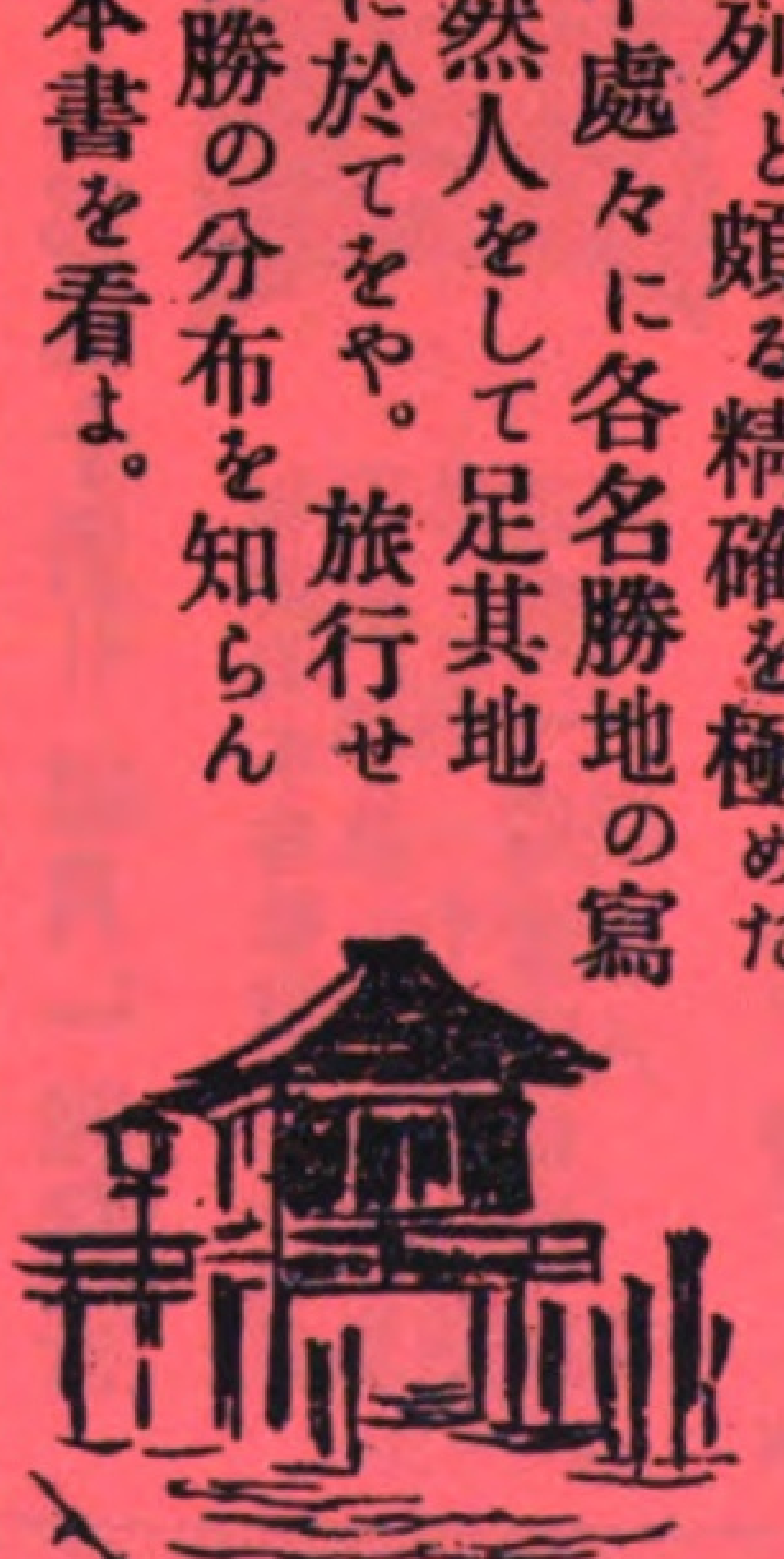
田山花袋君編

巻一 畿内

續刊

第二 ▲東海道西部
第三 ▲東海道東部
第四 ▲東山道西部
第五 ▲東山道東部
第六 ▲北陸道
第七 ▲山陽道
第八 ▲山陰道
第九 ▲南海道
第十 ▲西海道
第十一 ▲北海道樺太
第十二 ▲臺灣琉球

本書は日本全國に於ける名勝を半は地誌的に、半は案内記的に記述せんことを企てたるものにして、全部十二巻より成る。其特色を謂へば、交通路に由りて名勝を記したること其一也。産業沿革にも出來得る限り注意を拂ひたること其二也。つとめて新しき材料に由りてこれを記したること其三也。旅行者の伴侶たらしめんが爲めに紙質を精選し、装釘を堅牢ならしめたる其四也。ことにその最も特色と稱すべきは、編者の足跡殆と海内に遍ねく、殘山剩水と雖も訪はざるなく、探らざるなく、從つて其記述と排列と頗る精確を極めたること是也。況んや編中處々に各名勝地の寫眞數十葉を挿入し、宛然人をして足其地を蹈むの思ひあらしむるに於てをや。旅行せんとするもの、各地の名勝の分布を知らんと欲するものは、來つて本書を看よ。



毎編
洋装四六判
總クロース
紙數約五百頁
正價六拾錢
郵税十錢

東京本町
博文館
振替口座東京二四〇番

女へるの五、

當代第一流の女子教育家編著

家庭百科全書

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尙ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、動もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には槪ね理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尙に過ぐるか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に敎師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須ゐざることながら、人ごとに家庭に敎師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭敎師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人敎育の缺點を補はんと欲するなり。

全部五十册——毎月一回發行

和裝美本◉紙數各三百頁
石版彩色口繪一葉
挿畫十數個
正價一册金四拾五錢
郵稅一册金八錢

第一編 新家庭訓 三輪田高等女學校長 三輪田眞佐子女史著
第二編 四季料理 宮中臣民割烹料理師範 大日本割烹學會々長 石井泰次郎君著
第三編 裁縫指南 女子高等師範學校敎授 喜多見佐喜子女史著
第四編 和洋菓子製法 東京治庖會講師 龜井まき子女史著
第五編 茶道と香道 水原翠香女史著
第六編 諸流生花指南 琴松園文雅君 松幸齋理常君 共著
第七編 育兒の務 醫學士 田村貞策君 朝夷孤舟君 共著
第八編 簡易治療法 新潟縣高田高等女學校敎諭 藤井靜子女史著

第十一編 婦人の生理と衞生 青山學院敎授 牧野濤子女史著
第十二編 敎育お伽噺 少年世界記者 木村小舟君著
第十三編 女德の養成 前田長太君著
第十四編 家屋と庭園 內山正如君著
第十五編 魚鳥家畜の飼養 農業世界記者 鹿野化骨君著
第十六編 女子作文法 遠藤ふみ子女史 松崎ふく子女史 共著
第十七編 子女の敎養 私立高等女學校長 棚橋絢子女史著
第十八編 家庭の趣味 文學士 大森兜山君著

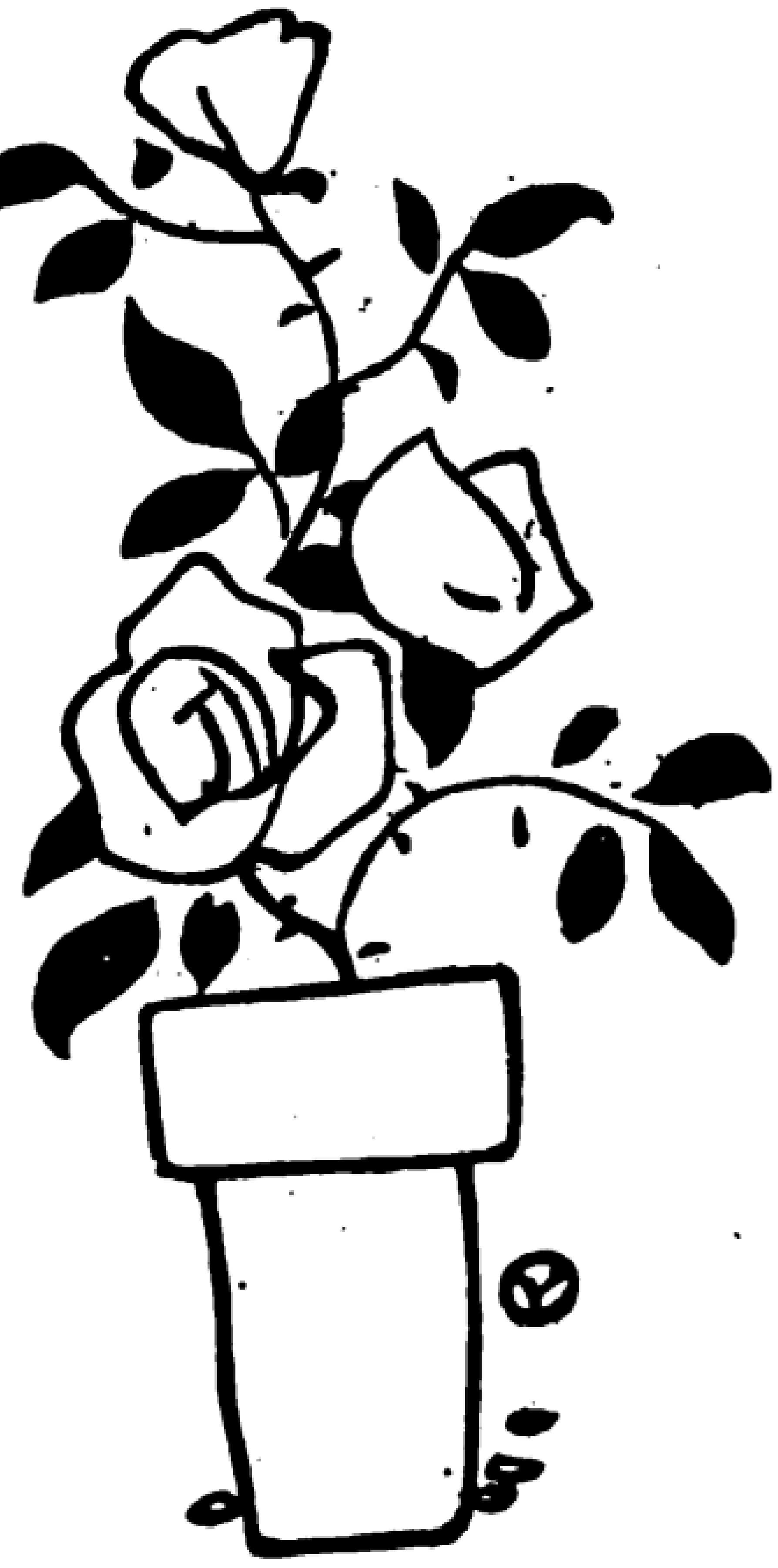
販賣用電話 本局二六二〇

發兌元 博文館

東京日本橋

女（その六）

婦女必讀の大全書



呪はれたる寮舎生活

三保野純子

日本歴史が四時に済んだ。平素の様に北風がピューピュー向ふから吹いて來るのに閉口しながら寮へ歸つた。お部屋の障子をガラリとあけると、思はず机に身を投げかけた。斯うして疲れて歸つて來ても、誰れ一人言葉を掛けてくれる者もなければ、眼に觸れる美しい物があるではなし、黄色い壁も綠色の机掛も只同じ日暮の光が射して居る許りである。

あゝ誰か居たらと私は思ふ。二十四人の同胞――と口には云ふが――それが一軒の家に居ながらどうして斯様に冷かだらう、二十四人の心はみんな美しく飾られて他所行きで交つて居るからである。だから何事でも日出の一字で行はれてゆくのだ。あの人が病氣になつた、看護してやらねばならぬ。修養會である空涙を流しても覺醒したらしく見せかけねばならぬ。と、萬事此の通りである。

だから私が淋しい顔をして居ても、「おやどうなすつたの?」とこれが最大の慰藉の言葉である。甚だしくなると、「そんな不愉快な顔をしては他人に對して失禮だ。」と來る。失禮! 厭な言葉だと思ふ。世の中に何がうるさいと云つて禮儀程うるさいものはない。誠のない禮儀程厭ふべきものはない。寮舎の空氣は何だ虚禮で滿ちて居るではないか。總ての行爲は虚だ僞だ。若い女の自由を奪はれ青春の華やかな時代を此の小天地に幽せられて、誰が滿足するであらう。苟くも木石でない限りは人には木のはしの樣に卑められる僧侶ですら、戀には胸を躍らせる習ひではないか。敎育と云ふ箍を嵌められて動きのとれぬ彼等が、朝な夕ないかに修養を說き人格を叫んだとて、其熱に燃ゆる若き血

沙が何を意味するかを悟つたならば、事實の爭ふべからざることは明かである。併し彼等は表面を繕つて居る、牢獄の樣な寮舍生活を神の國と云ひ、理想的家庭と讃美して居る。私はもう其の聲を聞き飽きた。まざまざと裏の見え透いた言葉のあやに、眩惑される樣な時代は過ぎたのだ。

自分が今、心の底から切望して止まないのは、一皮剝いた赤裸々の態度である。眞底から溢れ出た情の泉である。形式に囚はれず、あらゆる虛飾を捨てゝ、飽くまでも處女心の美しさを見せ合はふと云ふのである熱しきつた青春の血を——靈を——躍らせて、互ひの胸の秘言を囁き合ふまでの美はしき交り！ 私はこれより外に望もない。しかもそれをこの荒涼たるライフの中から見つけ出さうと思ふのは、砂礫の中からダイヤモンドを探し出すより、より以上難事かも知れぬ。それにしても、何故皆は、この不自然な狀態に滿足して居られるのだらう？

ふと、湯殿の重いガラス戸を開ける音がした。と思ふと廊下に力のある咳拂ひの聲がして、

「洗濯物を早くお取りこみなさい。」

と甲高い聲で怒鳴つた者がある。寮監だなと私は頷いた。あれも不自然な一人だ。彼等は人の妻となるべく餘りに多く學んだ。人の師となるべく餘りに僅かを悟つた。彼等は自ら駿馬を以て任じて居るから痴漢に添ふ樣な愚かな事をせぬ。然し時には丸髷姿の舊友を見て三十面に白粉も塗りかねない。だから若い少女を、猜疑嫉妬の眼で見て、彼等をいびることを唯一の愉快として居るのだ。今の世に淸少が生きて居たら、「凄まじきもの」の中に、必ず老嬢と云ふ一項を加へる事と、私は信じて疑はない。

臺所の方から俄かに、烈しいヘットの臭氣がして來た。食堂に茶碗をふせる音が、一々手に取る樣に聞こえる。氣が附いて見るともう眞暗だ。瓦斯を點けるのも面倒だから、暗い中におつと頰杖をついて居た。

おゝ京子さんはどんなだらう？ 今日はまだお見舞に行かなかつたが、少しは善い方か知ら、揃ひも揃つ

て冷やかな氷の様な人の中でも、あの方ばかりは妙になつかしい。あの方を見ると何となく、惹き付けられる様な感じがする。が、それかと云つて、別に優しくされるでもなし、否むしろ京子さんは滅多に笑顔も見せない方だ。過去——御互に好きな花を云ひ合つた時京子さんは水仙花だと云つた。水仙花！ いかにも其通りである。京子さんの象徴となる花は水仙を措いて他にはあるまい。あの冬ざれの刃の様な風をうけて、淋しく微笑む水仙の花、それその凛とした趣きは京子さんならでは見られまいと思ふ。はつきりと輝いた黒眼勝ちの瞳——浮き出た様に白い横顔を生際の線が弓形の輪廓を取つた美しさは、嘗て見た繪畫彫刻の中にもなかつた。

この荒みはてた曠野の様なライフの中にも、紫の一本は匂ふかと思へば、必ゆくまで其の花の香に酔ひたいと願ふのは人情であらう。私が京子さんを慕はしく思ふのも他に目的があるのではない、真底からの親しき交り、たゞこれだけの望であつた。然しこの単純な望も境遇は容易に許さないと云ふ事を、初めて、悟つて自分は無限の失望を感じたのである。個人の自由を絶對に認めない寮舎生活に於ては、一方に深き交りを許さない。だから私が京子さんと親しく交らうと望むのは、既に一の罪悪視されるのである。共同の平和を破るものと断定される。私は今や精神界の自由をも束縛される身となつた



併し、如何に團體的なれ、共同的なれと強ひたところで、私が京子さんに對する愛は唯一の物である。他に向つて總花的に振り撒く様なシカク廉價な物ではない。だからこれが爲めに、如何なる壓制如何なる迫害を加へられやうとも、寮規とあれ

ば潔く服從する。が、最後の目的は京子さんにある。京子さんさへ私の微衷を認めてくれるならば、如何なる苦痛をも甘んじて受けやう。こゝに至つて私は悲觀せざるを得ぬ。他人の虚僞に慣れた京子さんは、果して私の誠意を認めてくれるであらうか？ 一顧の價値もなきものと見過してしまひはせぬか？ 徒らに微笑む事すら敢てせぬ京子さんは、今以つて容易に胸の琴線の響を傳へぬものを……噫々落漠たる生活私は到底堪へられぬ。いつその事、國へ歸らうか、歸去來！ 歸去來！ 否々、うらぶれの子は、錦を着ねば故山へは歸られぬ――。

突然けたゝましい鈴の音がしたので、はつとして身を起した。もう夕飯かと思ふと又いやな氣持になる。趣味係の一人なる私は、食卓の談話と云ふ重荷を負ふて居るからである。日曜と云ふ字がどこまでも附きまとつて居る身は、心にもない笑ひ話をするためには食物の味もわからずに濟ます時さへある。

暫くは、梯子を下りる足音、障子をあけたてする音が續いたが、間もなく椅子を引寄せる音やお櫃の蓋をとる音も聞こえた。私はおつと部屋に潜んで居て、凡そ二十分位經つてからそろ〳〵と出て行つた。華れがましい瓦斯の光りに、皆が物を食べる樣が殊更賤しげに見える。ちやうど、物理の教師の失策談か何かで騷がしく笑ひ興じて居たので、好い幸ひだと思つて隅の方に默つて腰掛けた。何時も意地惡く話しかける寮監の巨眼にも觸れないので嬉しかつた。お菜は私の大嫌ひなとろゝ、これには情なかつたが無理に一膳食べてしまふと、もう他の人は濟んでしまつて各自に外へ出て行つた。それから後片附けの當番に取りかゝる、食堂の整理はあとの二人に任せて、下女を相手に流しで洗物をした。くだらない話をするのでも下女の方が氣が置けなくて好い。どこまでも私は僻み根性だと見える。やがてすつかり片附いたので自習の鐘を鳴らして私達は部屋に歸つた。讃美歌やヴアイオリンや賑やかな笑聲が一時にひつそりとなつて、思ひ〳〵に、本を抱へては食堂へ出て行く。同室の田村さんは會があつ

たので今歸つて來てすぐ臺所へ御飯たべに行つた。今の時間にと思つて二階の京子さんのお部屋へ行く。
「御免遊ばせ。」
「ゐらつしやい。」
すうと障子を明ると、布團の上に坐つて厚いメリンスの搔卷に凭れた京子さんは、手にした婦人畫報を閉ぢて輕く微笑んだ。狹い額に後れ毛がはらく〜とかゝつて居る。
「如何ですか？　おやもう熱がすつかり取れて？　いゝわね。鎌倉へは何日ゐらつしやるの？」
「明日の朝行かうと思つて、」
「まあ明日？　隨分酷いのね今迄何とも仰しやらないで、」
「だつて直ぐ歸るのですもの。」
「でも——貴女がゐらつしやらなければ、私どんなに淋しいでせう、お部屋が分れた時だつてあんなに心細



かつたのですのに……貴女は本當に冷淡なのね。」
「えゝ私は昔つから冷淡よ。」
濟ましていらつしやるのが憎らしい。併しこれが普通だらう。何故と云へば、私が尊い學資の一部分を裂いて此の前の日曜に神田から買つて來た林檎が、手も付かずに枕下に並べてあるのだもの。
「純子さん、貴女遊びにいらつしやいな、土曜から日曜へかけてね。」
「鎌倉へですか！」と私は意外な感じに打たれた。京子さんの此の言葉には少しもお世辭つ氣がない事を私は信じる。だから冷淡だと云つた前言を取消したくなつた。
「えゝ。必然行きます。」
私が笑つて答へた時、窓の外にはざあーッと雨の音がした。庭の乙女椿も散るだらう——。

「雨が降つてもゐらつしやるの？」と、念を押すと「ええ」と仰つしやる。いつそ槍でも降ればいゝと祈りながら、好い加減に辭して外へ出た。暗い廊下を歩む時京子さんの咳が聞こえてふと足を止めた。雨は益々烈しく降つて居る。

○

願はくば海となる迄降れよと祈つた甲斐もなく、一夜の中に名殘なく晴れた。塵も止めぬ紺青の空の美しさ、蘭香寮の前の紅梅は二ッ三ッ蕾を破つた。面窶れがして清方の繪の樣な京子さんは、

「御機嫌よう！」

の、聲に送られて靜かに車を新橋に走らせた。私は保證人への外出辭を懷にして電車でやはり新橋へと行く。時間が切迫したので血眼になつて馳けこむと、恰も京子さんが待合室を出るところ、

「まあ！　純子さん！」

二人は暫く無言であつた。プラットホームをやはり無言のまゝ歩んで、京子さんは横須賀行きの二等に乘る窓下に立つ私を見て、言葉少なに、

「きつといらつしやいな。」

或はこれが永い別になるかも知れぬ。然し私は只、今の瞬間を樂しむより外なかつた。あゝ汽車が動いた。

「左樣なら」

「左樣なら」

京子さんの動かぬ瞳は忽ちに曇つた。露ならぬ露は其眼に溢れて……あゝ私は眞に蘇生の思がした。つれなき人の涙を見るのは其笑顏より嬉しい事を、しみ〴〵胸に味はつたのである。渇望し切つた眞情の涙は、今我が前に——落ち來つた。




晴れの夜

世話女房日記

さと子

△月曜日　晴

下女を返したので忙しいけれども却つて掃除萬端自分の思ふ樣になつて臺所などもきちんと片附いた樣に思ふそれに電話を引たから買物などの場合には取り寄せる事が出來るし子供達なども其氣になつて學校行の仕度なんかずん〳〵各自にして居る、人は依賴心が大禁物

主人は例に依つてバンクへ

子供等は學校に行つた留守洗濯日では無いが明日の天氣も當にならぬので良人の襯衣や子供等の足袋を洗ふ自慢ぢや無いがお母さんのくせに昨年の夏一つ橋の教育會で宮川すみ子先生の家事講習で洗濯の講習を受けて以來出入の西洋洗濯屋が舌をまくうまくなつた

晝食はたつた一人何があつたつておいしくもなし

國から到來の粕漬でお茶漬がさら〳〵都つて飯

の襦袢を縫ふ三時に良人の着物を坦熨へかけて將棄に火鉢の火を見て置いて夕食の仕度にかゝる衣服はよいが人間は食物が大事だ食ふや食はずにお召や羽二重着て何になるとは主人の主義

夕方から風が出たので暖い樣にとライスカレーに

ほうれん草海老巻玉子豆腐ほろ吹大根の簡單な手料理でも心をこめた鹽加減樂しい食卓に其日の四方山話し

夕食後子供等と面白さうに話して居られた主人は書齋へ花子はもう胡蝶の夢路富子は明日のおさらへ

自分は縫かけの紙縫

九時に茶を入れて持ていつた時に國の母樣から來た手紙の内にお前のもあつたよとお家流のなつかしい筆の跡直ぐ其場でよんでしまふ別に變りない時候の見舞とはいへなか〳〵に有難い涙がこぼれる

長火鉢の下に火が多いから實豆をかけて置く

これで私等の生涯の一日も樂しく暮れたわけである

△火曜日　曇後雨

ほんとに私の天氣豫報は氣象臺以上でせうと大笑ひ皆々來ていつた後今日は茶碗や皿數の厭汁素なする

御手作り御自慢の大根をお國風の切り干しにするために一人頭でかち〳〵とやつて見る幸ひにして爪も切らずにすむ

御佛前樣の花が大分萎れて居るので水仙と取り換へて何となく氣が清々とする

子供二人に夫婦暮しで女中を使つて居た時には別にひまなとも思はなかつたが今になつて考へて見ると人頼みは實にいけないものそして自分は病氣がちであつたが立働きをして見ると身も心も輕々と家庭へ福が舞ひ込む樣に思はれる

それに給金は二圓半で年三十圓でも食料や心附を加算するとどうしても百圓たらずの益となるので十年の考へをして見るとざつと富子の嫁入仕度も出來ると申も今泣むだに過した其日が惜しい樣な氣がする

郵便が來たおや〳〵住田さんが御結婚をなす

つたお知せ一つは主人へ朝鮮の弟から先日少しも音信が無いと仰しやつて御出になつたから御安心なさるであらう

子供等にはドーナッツケークをこしらへて置く

今日は白魚の吸物鯛の貴味噌かけ雑菜はお芋と蕗を煮付て鶉豆の煮たのを出して置く

品が少ないけれ共御辛抱をといへばいや結構女中が居なくて多忙だらうがこちらにも其考へがあるから苦しくなければやつて行つて御覧とやさしくいつて下さる

舊友の住田さんの結婚話しをするとどうせ女のすたるやぼはないさと大笑ひ

子供等の寝た後お母様への御返事を認む

△水曜日　晴

昨日一日閉ぢこんで置た雪戸すつかり開け放して氣持よくさしこむ太陽をあく迄も入れ後掃除をする

書齋の柱に懸つて居る扇子を新のに代いて置くこれは私の先生が自畫讃のである

子供等には好きな芝海老の玉子とじをこしらへておく

花子夕方から少々發熱の様に思はれる故いつもより暖くして寝ませる

富子の御清書なか〳〵よく出來たのねとほめてやればこぼれる様な笑みを林檎の頬に見せて居る

これが私しの爲めにはならぬなかの子‥‥

どうして憎まれよう天使の様な此子‥‥

旦那様がよく仰しやる通りこれも此世の約束事だ僕は家庭の圓満なのが何より原動力だとよろこんで下さるあゝ考へて見れば他所の奥様方は身に何の不自由はなくても主人の身持に氣禁氣苦勞ほんとに私は幸福な女

九時頃に御歸りになつたが

福引で取つたと仰しやつて竹皮包み‥‥

内には焼た大福が十ばかりおや〳〵とおどろく顔御覧になつて夫婦げんくわの原因だとさと呵々大笑

△木曜日　晴

毎日々々髪を結ぶのも時がかゝる故欠し振りで髷にする何だか自分ながら氣がさしてならぬ

午前中は雑務が來たり掃除や何かで仕事も出來なかつたが午後に先日求めて置た富子のメリンスの被布を縫ひにかゝる

出來上つたら花子と二人で寫眞を採らせて國のお父様へ御贈り申つもり

今晩はノッペイにオムレツ水菜の煮びたしそれに主人には味の素で一寸魚旗餅のお吸物をつける

何を上ても結構々々といつて御出になる

自分のたしなみが悪くてきらした手甲のひゞを御覧になつてとう〳〵本職を發揮したれいや御苦勞々々

私は日記を記して買物帖を調べて今晩は別に何にも用をせず春といつてもまだうすら寒いので火鉢抱へて明日の献立の瞑想ほんとに世話女房は忙がしいもの

社會觀察

京都の女

京わらべ

「我帝國の公園と海の外まで聞えたる花の都の京都市は何處を見てもよき所」と學校生徒の唱歌の通り、山紫に水清く、何處を見ても繪のやうな所ばかりです。かういふ所に育つた婦人ですから、如何に優美に、如何に高尚な趣味をもつて居るだらうか、きつと生れながら詩質をそなへて居るであらうと思はれますが、行つて見ると意外にも俗氣滿々、まことに平凡なのには驚かすに居られません。

△趣　味（着物本位）

最も大阪人のやうに我利々々主義ばかりではなく、なか／＼お人柄な處もありますが、着物の事になると全く狂氣のやうです。大阪女の芝居きちがひとほんによいコントラストです。

まあ試に京の女に何が一番樂しみかと聞いて御覽なさい、「べゝこしらへるの」と答へます、彼等唯一の驕りは美衣にあるのです。ですから一かどの家の娘でも他家の縫物などの内職をして、所謂ヘソクリをこしらへ、一枚でも着物のふえるのを樂しみとして居ます。それですから京都では誰さんがお嫁に行くといふと、ハスはどんな人と聞くばかりに、お仕度は何荷と聞きます。萬事かういふ風ですから、京都では立派な着物を着てさへ居れば、なか／＼巾がきくので、時におもしろい滑稽を演じる事があります。日本一の祭禮として有名な彼の祇園會の時なんか、山鉾の通行する處は市中目貫の町で、非常に雜踏しますから、田舍者などはちよつと見物場所に困るのですが、立派に着飾てさへ居れば、店先きに立て居ても少しもとがめぬのみか「まあこちらへおかけやす」と例のお世辭の一つも云て呉れます、ところがかすり位を着て立て御覽な

さい「あんたはんちよつとそこを明けて置いてもらひまへんと内の者が拜めまへん」と直に放逐されてしまひます。子供同志でもまた其通りです。お正月の事でした、五つを頭に三つ位の女の子が五六人門前で遊んでゐました、何がさてお正月のことゝて母樣御丹精の晴衣を着飾つて、睦しさうに遊ぶのでしたが、其中の一人が銘仙の縞ものを着て居つたのです。すると子供のくせにどうでせう、皆が申合せた樣に其の兒には口もきゝません。どうするかと猶見て居ますと、其ののけ者にされた兒はサッサと歸つて行きますから、可愛さうに泣いて居るんだらうと思つて居ますと、暫くすると其兒がこんどは友禪縮緬と着替て出て來ました皆の子供は前と打て替つて仲よく遊びました。斯く迄とは思ひませんでしたのに、此の樣を見て私はなる程と感じました。私が家を借らうとしました時友に貸し家を見に行くには盛裝をせよと申しますから、何故ときゝますと矢張り初見參の衣服によつて事の成否がきまるからと申しました。何から何まで着物本位これでは迚も着倒れの汚名をすゝぐ事はできません。

さてそんなら如何に立派なものを着るのかといひますと、西陣といふ本家をひかへて居るだけあつて、隨分流行の魁もいたしますが、十中七八迄はあまり感心する樣なものはないようです。

ある書物に

「寛文の昔四代將軍の御時、江戸と京都の町人の妻が衣裳くらべをしようとて日を期して丸山に會見することゝなりしが、京の女は、江戸より來る人ならば京の景色ぞ珍らしからんとて、名工を選び緋綸子に金銀五彩の色糸もて洛中名所の圖をいと精緻に縫はせぬ、かくて定めの日となりしかば、京中こぞりて見物す、京の女はかの衣裳を着て今日を晴れとつくり立てたるなれば、見る目もまばゆきばかり、光り輝き美しさ言葉に盡し難きに、江戸の女は唯黑羽二重に南天の裾模樣ある染小袖をきたりければ、さして珍らしとも見えず、一二を云ふ迄もなく京の方勝ちなりと京童のいひあへるを、さりとてはる〳〵

來ながら、あまりに本意なき事とよく目を止むるに南天の實は八九分位の珊瑚珠を半分にくだきて縫ひつけたるものなりければ、遂に江戸の勝ちとなりけり」

とありました。これは昔の物語りですが、實によく兩都の婦人氣質をあらはして居ると思ひます、一言にしていふと京都の女は、見えのよいのを好む風があります、例へば小紋縮めんだと思つて居ると、古いお召を染直したのであつたり、羽二重更紗のお下着と見えるのが、銘仙縞の生れ替りであつたり、また私共の名を知らない樣な結構なものゝ裏が、五十三つぎのもあり、浦島さんなんかのも少なくありません、帯でも結目に出る處だけよい切れをはぎますし、襦袢の袖に玄關や門口のつゐのが澤山あります、實に苦心慘澹の狀があり〳〵見えます、これも矢張り染物の本場丈けあつて、技術が進むにつれて自然かういふ風になるのでもありませうが、あまりに心の見えすく樣に思ひます彼等の生命とたのむ衣服のことですから、研究に研究をつんだ結果ですが、着物のきこなし、色の配合などの見立ての上手なこと、たしかに一頭地をぬいて居ます、それでは其の丹精した着物をきて名所舊蹟でも探ぐるのかといひますと、どうして〳〵決してそんな事はありません、京の女はどちらかと云へば引込主義で十九にもなつた娘でも、あの名高い嵐山や高雄を知らない人さへある位、たま〳〵來るのがお彼岸詣りか、お芝居行き、それも一年に二度三度ばかり、着物は全く箪笥のお守り、時々出して引かけて見るのが最上の樂しみとはさてもさてもと申す外ございません。

△氣質（お茶漬の意味）

東男に京女郎と申して、京の女には美人が多うございます、けれども當世流の丸ぽちやで、活氣に滿ちたといふのよりは、十八世紀式の瓜實顔の上品な方で從つて表情の乏しい、まるで人形の樣な人が多うございます。しかし口先きはなか〳〵うまいもので「まあさうどすかいな、あんたはんしんどおすやろに、そ

れは〱ごくらうさん……」どんな人にでも叮嚀になめる様なものいひ、他國人には異樣に聞えますが、たしかに一種人をチャームする力を持つて居ます。けれどもまたあまり叮嚀すぎて可笑しい事もあります。いつでしたか或家へ用事があつて參りましたところが、折節主人が不在で、妻君に要領を話して傳言を頼みますと、「あーさいでござりますかどう申されますか存じませんが、歸られましたらさやう申し傳へます」と出られて痛み入りました。いくら叮嚀なのがよいと申して他人に對して自分の夫に敬語をつけるのは、失禮ではありませんか、しかし京都ではこれが普通になつて居ます。兎に角流石千年の帝都の地とて、何となく優にやさしいひゞきがあつて、表情の缺陷を補ふて餘りあります。ところがそれがまた京のお茶漬とやら申して有名なので、愛想がよいからと云つて決して心を許されないのださうです。お茶漬と申すのは、まあかうなんです。或家を訪問するとしませう、用談がすんでさあ歸るといふ段になると、門口迄出てゐるのにまあよろしいではございませんか、何にもございませんけれどお茶漬でも……と只今仕度いたしましたとうぞどうぞとそれは〱……手を取らぬばかりに申ます、折角の志だからとそれを眞にうけて止まつてゞも御覽なさい、さあ臺所は大騷動……實は何の用意もないのを、ちよつとお世辭を云つたのですもの……こんなに見えすいた事でもうまくあやなすのを京のお茶漬と申すのです。上方では心にもないお世辭をいふとそれまたお茶漬がはじまつたと申す位です。京都はまことにつまゝしい所で餘程の大家でなくてはお茶漬どころかお菓子さへ出す家はありません。お茶でもお客毎に一々入れては不經濟だから、香煎を貯へて置いてお湯をついでは上からプッ〱とふりかけて出す位に細い注意をして居ります、こんな風ですから婦人のつまやかな事といつたら大變なもので、靑物などでも何處そこの八百屋が安いといへば、いくら道が遠くてもわざわざ買ひに行きます、洗湯でも競爭の結果マッチ一つ景物をすると、忽ち大繁昌を來たすと申位、他は押

して知るべしです。

△迷信（引越の方避）

男女を問はず京都の人は御幣かつぎでございます、弘法大師、天神樣をはじめとして、厄除、方避、安產縁切り、腫物の地藏と數へ切れない程の神佛に詣り人の多い事〳〵、此所程のところはありますまい、また女は相性だとか年廻りだとか、曰く九星、曰く手の筋とよく色々なことを知てゐます、結婚などの時には第一の條件としてこれが持ち出されるので、八白と九紫は合はないとか、五黃は氣強いとか、やかましい事です、引越しでもするには先づ方角を見て惡るい方を避けて家を探します、若し注文の方角に家がなくて惡い方にある場合には、方避けと云つて一旦目的の地から方のよい場所にうつり、或は主人だけが親類などに方避して一月もたつてからはじめて注文の家に移ると申す樣に、なか〳〵大そうなのでございます。こんなにするにも係はらず肺病患者は傳染病者の住んだ家でも一向おかまひましとは、不思議ちやございませんか、流石に古い都は古いだけ何にもかも大いに古いやうです。

△家庭敎育

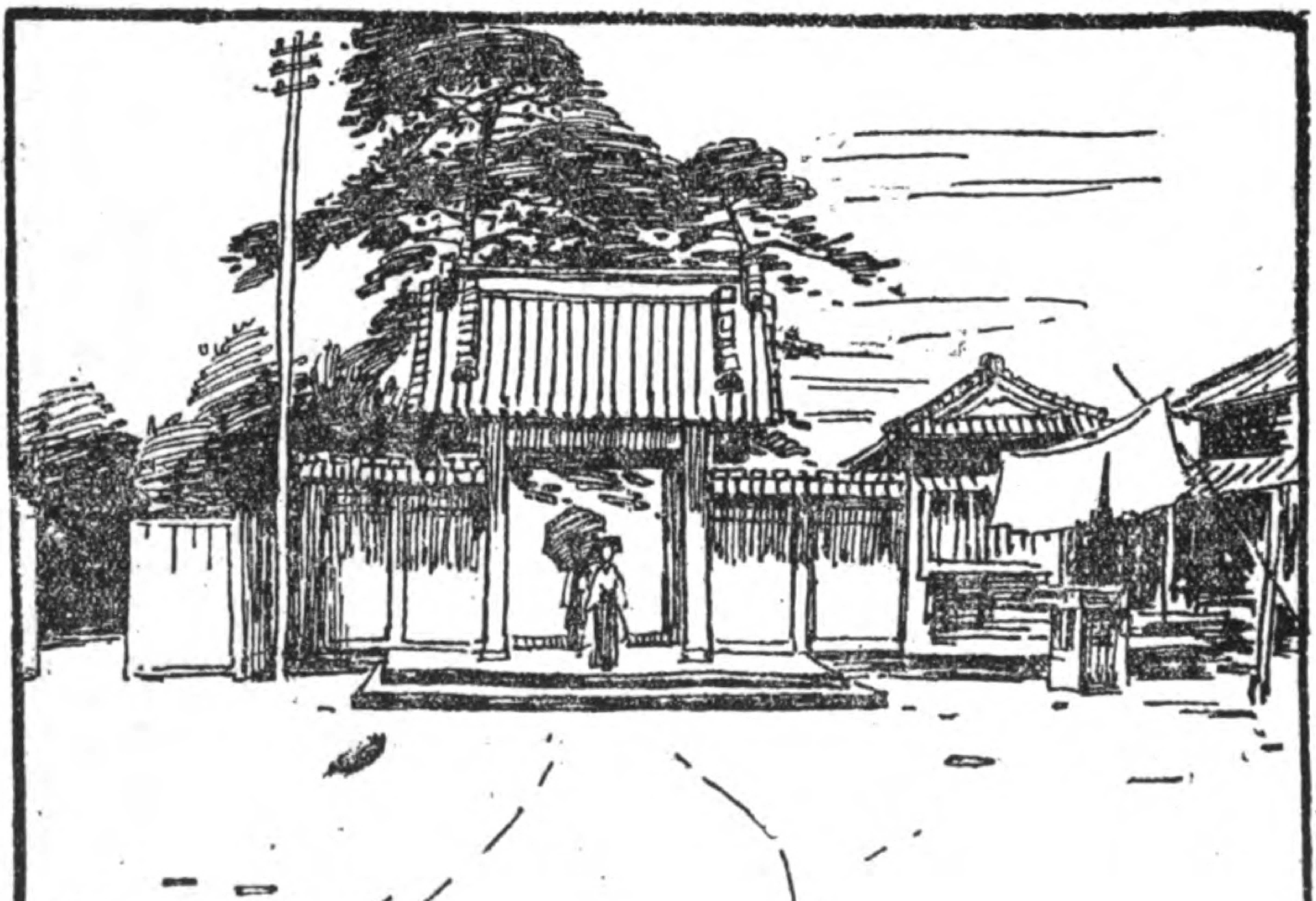
中流以上は女學校へ出しますが中流や以下にありますと小學校を卒業するのを待かねて裁縫をならひにやります、さうして二年程は家事と裁縫を敎へまして、嫁入前の一年か一年半を鹽踏みと稱して大丸三井などいふ大家へ女中奉公にやります、其うちによい緣を求めてかたづけるといふ風になつてゐますが、此の鹽ふみといふのは全く服從のおけいこのやうに感じられます、かくして服從を根本として躾られた女ですから、結婚してからでも唯命これ從ふといふ風で、如何な侮辱をうけても甘んじて居ます、其意氣地なさつたら、傍で見て居ても齒がゆい樣ですけれど、家庭は至極圓滿であります。下流は何處でも同じ事で賤業婦になるものがまことに多くございます。

△女學生

女學生といつても矢張り周圍に感化されて陰氣な方で、幾分か文明の風が加味されたと申す位、迚も〳〵東京などの樣にハイカッタ氣のきいたといふ風はありません、其かはり又極おとなしい初心な所があつて、あぶなげのない全く地方的なのは此所の特長だとうれしく思ひます、其れもその筈、夜會服を乘せた馬車も通らなければ、ゴールドづくめの貴婦人を多く見ませんから、虛榮心を挑發される事が少ないからでもありませう。

要するに三都の女の中一番呑氣なのは京の女だらうと思ひます。

演說會とか音樂會とか多人數の婦人が一堂に會合し既に席も定まつて音樂なり演說なりが始まつて居ると云ふ處へ、遲れ馳せに參會した婦人を係の人が前の方の空席へ案內すると、十中の九まで其婦人は逡巡して殊更列席者の間を避け成るべく隅の方へ、下の方へと席を取りに懸ります、これは一面に甚だ謙遜の樣でありますが其爲めに場內の靜肅を破り規律を亂す事は一通りではありませぬ、案內の通り速かに着席せぬのは係員に取つてどの位困る事か知れませぬ、斯う云ふ場合に日本の婦人は最う少し泰然自若たる態度が欲しいものです。



高輪泉岳寺

笑話

○好い思ひつき

栃木　瀬津榛子

リングははめたし、寒さは寒し、手袋を持つたまゝもじ〱して居るのを、それとさとつた小間使、「お嬢様、お手袋の上にお指輪おはめ遊ばしたらいかゞですか」、(秀逸)

○ペスト來る

堺　中川幸子

若者「横濱はペストが來たので大騒ぎです」、老人「矢ッ張り昔しの浦賀へ來たペルリと同じ樣なものなんでせうね」、

○瓢箪の用途

大阪　林　壽子

教師「皆さん、瓢箪は何にするものですか」、生徒「老人の目鏡だと思ひます」、教師「何故ですか」、生徒「今朝家の祖父さんが瓢箪をもつて行かないと花は見られないと言ひましたから」、(秀逸)

○社長の親切

静岡　清子

甲紳士「君、あの今プラットホームで會つた老人は誰だい？君の社長なのを見て、ひどく喜んで居たが、大變親切さうな人だね」。乙紳士「喜ぶ筈さ、あれア僕が加入して居る生命保險會社の社長だもの」、(秀逸)

○姑に行く積り

信州　菊菁

御向ふの姑さんが嫁いぢりをするといふ話を聞いて居た時子「ねえ母さん、あたしは御嫁にいかないで、お姑さんに行くわ」、(秀逸)

○遠目がきかない

小石川　高橋春江

甲「君はそんなに目の近くへ本をつけて讀むが、近眼かね」、乙「いやどうして、近眼どころか、遠目がきかないで困つてしまつた」、

○呼鈴

丹後　金林けい

客「御免下さい」、家人「ハイどうか門の呼鈴を御押し下さい」、

○おばあさんの頓智

土佐　双葉子

ある田舎のおばあさんが車に乗らうとして下駄をぬきかけたから、「お老母様、下駄でお乗りなすつてよいのですよ」といふと、愛嬌よく「なにかうして乗らぬと年寄はとかく危くつてね」、

○電車中の滑稽

本郷　きよし

赤んばうをおぶつた女、電車の中で赤んばうに泣かれたので、いゝ思ひつきと思つたのか、例の車掌のひつぱるチン〱のつなを、ホーラチンチン〱とやつた、赤んばうの泣くのはヒヨとやんだが、電車も又急にとまつたので、車中の人皆なゴロ〱ッとシヨーヤたなしとなつた、

○新橋です

本郷　小谷瀬生

電車々掌が「京橋！お降りの方は有りませんか」と呼ぶと、田舎の人は「私は新橋で御座います」と言つて丁寧にお辭儀をしました、

○ねづみのおひげ

大阪　笑蓉

ねづみを交番へ持つて行く途中で、花子「兄ちやん、此ねづみは男だわ」、太郎「なぜだい」、花子「だつておひげがあるもの」、太郎「ウム、さうださうだ」、

○芝居のおきゆう

徳島　斎藤ふじ子

母「美代ちやん、母さんはね、これからおきゆうをすゑに行くから、おとなしくして待つて居らつしやいよ」、美代子「あら母さん、お芝居にもおきゆうがあるの」。



韓人の產を見た記

犬飼たき子

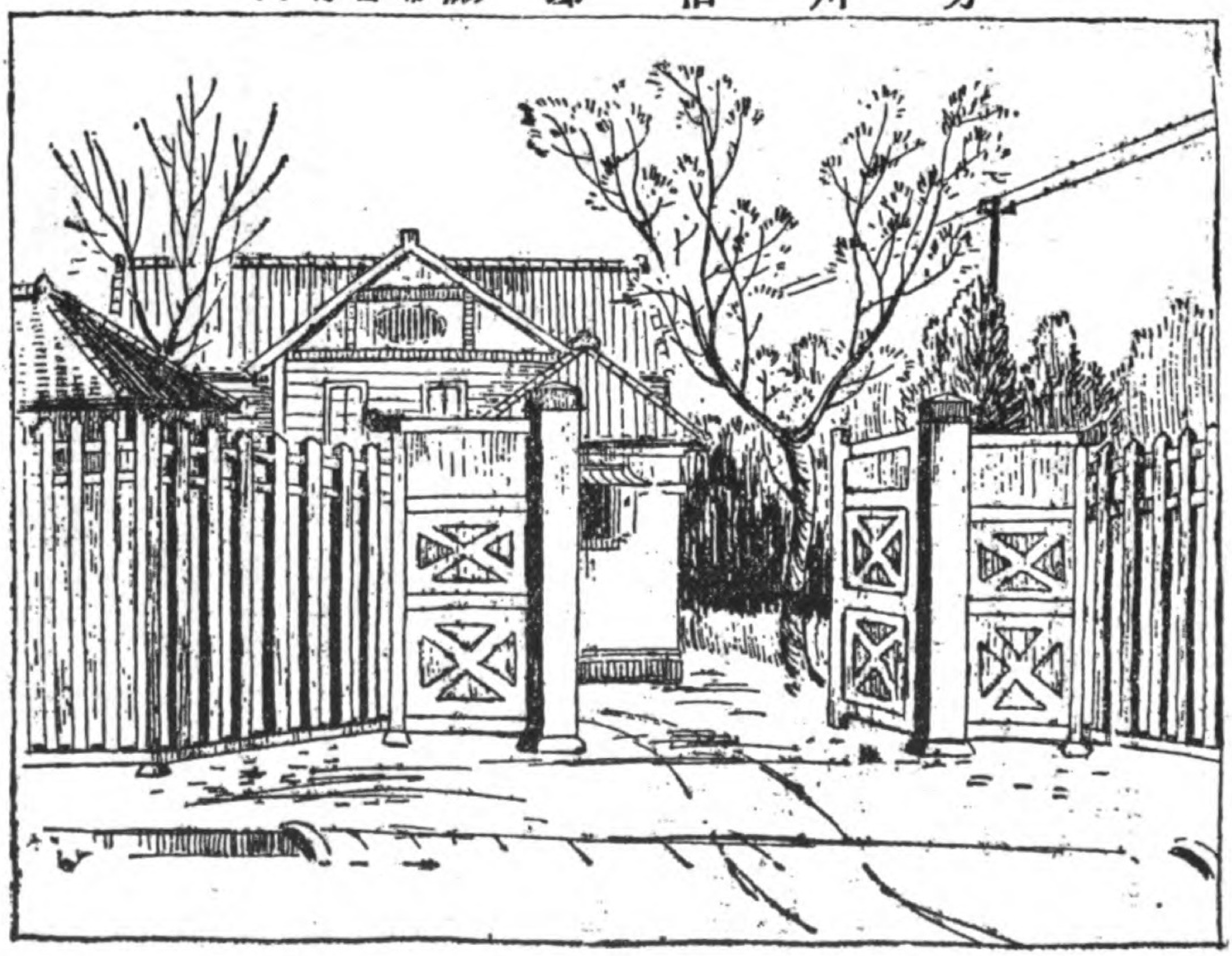
大古の樣な韓人部落を旅行致しますと形ばかりの冠木門の門口に注連繩を張り松葉と木炭とを繩に挾んであります又番椒を挾んであるのも見受けます、これは其の家に目出度出產のありました標徵でありまして、松葉ばかりの時は女兒の生れた徵でございます、此の注連繩は絕對に犯すべからざる規定でありまして、律義正しき韓人は互にそれを尊重して居ます、他人はもとより親戚故舊迄も門內に入ることは出來ません、分娩に付いては家內のものでも一切姙婦に干涉の出來ない定めであります、それは分娩を不淨と信じた迷信の結果でありまして、女性が命にかけての苦痛をするお產を、家人は別室に避けて馬耳東風と見流し、姙婦も却てそれを喜ぶ習慣となつて居ます、さて愈產氣を催しますと、姙婦は暗い內房に閉ぢ籠り、腹這になり兩足を伸ばして頭を突出し、臀を踵より持ち上げて突出しそして股を展開て後半身を兩足の甲で持ち支へまして、機の熟するのを待つのでありますが、姙婦は次第にその努力の爲めに身體が疲勞まして汗づくみとなり、終には綿の樣になり、眼も眩み、氣も絕え入るばかりになります、その樣に無益な野蠻な苦痛を受けました後に、嬰兒は世界の風を吸ふことゝなります、愈お產が了りますと產婦は自身で甲斐々々敷產婆の仕事を自分でチヤンと仕舞ひ、とり上げもやれば臍の緖も捻切つて、決して人の手は借りません、出產後三日間は每日木綿で嬰兒の身體を拭きます四日目には產婦は水甕を頭上に載き、井戸から水を汲んで來て嬰兒に初湯を使はせ、自分にもお湯にかゝります、此の瞬間を盜んで家人はそつと嬰兒を見て、始めて男子であるか女子であるかを知りますが、公然それを識別ことの出

來るのは一週間目の習慣になつて居ます、一週間目の日から初めて内房に出入りが出來まして、家人も皆嬰兒に接することが出來ます、若し不運で二人も三人も女兒を擧げますと、良人は無理ながらも習慣として非常な權幕で妻を叱り、口を極めて罵倒ます、妻は只哀苦々々と涙を浮べて陳謝ますが、考へて見れば哀れな事です、二週間を經過ますと妻の里の母や近所の婆さん達が見舞に來ます、三週間目に注連繩を外して誰でもかまはず應接することが出來ます、それから誰も彼も若布を以て見舞に參ります、見舞に來たお客さんには若布の汁をこしらへて濁酒を振舞ひます、これは中等以下の社會の習慣でございますが、上流の社會になりますと救産安と曰ふものを傭ひます、救産安とは我國の産婆であります、此の救産安は試驗受けるのでもなく、それを稼業にするのでもなく、只腰嬰兒を取扱つた經驗に富みて居る迄のことで、それに關する學識がある譯でもありません、それは姙婦とゝもに内房に閉ぢ籠り、萬端の世話をなします、嬰兒が無事に肥立ちますと、お禮として衣服一襲足袋草鞋とゝもに添ります、富豪になりますとその上米を添へるのが例になつて居ます、産婦の献立は飯と若布の汁ばかりで、それを百日間も續けて居ます、それはこれさへ食べて居ますと乳が澤山出るとの傳説迷信からださうです、嬰兒の肥立つ間の一週間は産婦の食物は家人が料理して内房の入口まで運びます、此の時向ふ三軒兩隣村の連中は極めて靜肅に致しまして聲高に語り合ふことさへお互に注意します、云ふまでもなく韓人は極めて不衛生な出産育兒をしますので、從て産婦の病氣も嬰兒の死亡數も多いさうでございます、民籍調査中の今日で完全な統計は分りませんが百に對し二〇乃至三〇の死亡率で、あるさうであります、韓國の不衛生なことは決して姙婦のみではございません、一般にその通りで加之に迷信の強い國民でございますから病氣の時でも醫藥を用ひることがございませんので子供は極めて強壯ものばかり育ちまして、纎弱もの はどしどし死んで仕舞ひますので、娑婆へ出た連中は孰れも

蠻頑式なものばかりと云ふ譯であります、獅子は子を產みてそれを試す爲に千仭の谷から落すと同じ筆法で韓國人は呱々の聲を擧げると直ぐに身體の强弱を試驗されその上若布から黍から出來た乳で育てられながら自然に放任せられて育ちますから、光線も空氣も掃除も全くおかまひなしの溫突に燻ぶつて骨格逞しくピン〳〵して居るのを見ますと、衞生々々と騷ぎ立てながら愛に任せて顏の蒼白い纖弱なものにしますのに比べて如何かと考へます。

流行の婦人持の日傘　八間骨で長さは廿一吋と廿二吋の二種あり、色はお納戸の濃いネベ色といふものが一般の若い向に持囃されて居る小豆色、茶、お納戸でもないではない又老人の實咲なのには鼠や革色なども行はれるがネベは地色にナケの來のが遲いのと色が判然して上品向とで昨今大に流行界を風靡して居る、裂地には青柳織、相瓦織、縫ひには滿れ松葉や白松や白樺を散らしたのがあつて紅葉に牡丹を配らつたコントラスト織といふのもある又普通のダシ付好みは千種萬様である柄は一文字廻りと輪廻りとあつて縫目に銀を纏めた象眼入なども新式で昨年に比べると彫は幾らか淺くなつて居る骨止めにする紐付の輪は全く廢れてピクナウル捲き付け柄の所で御留にする、兜飾のあるのは若かい令嬢向で柄には色糊を牡丹に綴つた飾り玉が少くなりて、絹絲の玉總などが行はれる。

芳川伯邸（麻布宮村町）





端午のちまき

桑原東浪

端午は俗に男の節句とかいひまして、軒には菖蒲に蓬を挿添へ、家々には菖蒲酒を整つて、疫神を拂ふとか申して酌交はします、まして男兒のあるお家などでは、甲冑、武者人形など飾立てゝ、門には眞鯉、緋鯉の幟吹流が、宛然龍門に登るとでもいひさうで、何となく勇ましい氣持のものです。この節句も久しく衰退して、一時は跡方もない位でしたが、近頃はまた彼方此方に旗幟の翻へるのを見受ける樣になりました。そこでこの節句には何方でも粽といふものを製へますのですが、この粽には茅ちまき、笹ちまきの二種ありまして、茅ちまきの方が古い慣習ださうです。

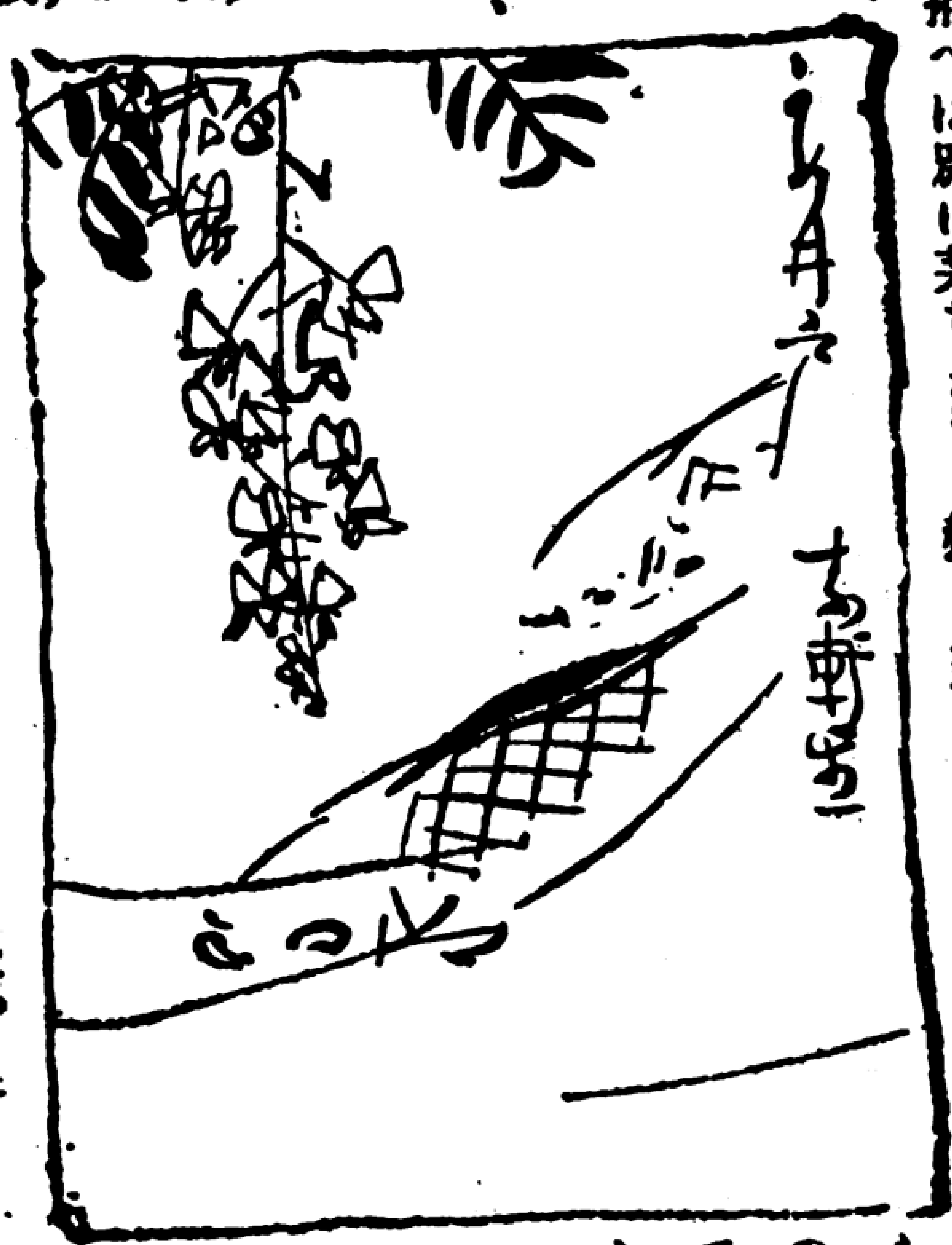
○茅ちまきと笹ちまき

この粽は粳の粉に水を注して固く粘り、サツト湯煮て又よく粘交せまして、茅ちまきならば、千茅を水に浸しておいたので卷くのです、之を卷くには粳の粉の粘ッたのを里芋の子の樣な形に拵へて、その尖つた先のところから、茅の葉を當てゝ丁寧に卷き、卷き終つたら其尾を糸で結び、二三寸位茅を殘して切つて仕舞ふのです、この卷方はなか／＼手極ものでチツト骨の折るものです。一茶は「お袋が手本に投げる粽かな」など申してをります。一寸格好物です。出來上つたらは又蒸籠に入れて蒸しますので、蒸れたのを盆に盛りて出し、粽の先の方をチヨツト解いて、砂糖とか「きな粉」などつけて食べますのです。しかし、只今では處によつては第一に千茅などを手に入れるのが容易でありませんから、此古式の茅ちまきは餘りいたしません樣で、其代りに笹ちまきの方をもちひます。茅ちまきは蕪村の句など見ると、

　　粽ときて蘆吹風の音聞かん
などゝ、何となく奥ゆかしく、すつかり風流化されてしまひます。

笹ちまきの拵方は、その下拵へは別に茅ちまきと變りたるところはありませんが、その格好を三角にして、それを巻くのに、熊笹の葉を使ひます。先づ粳の粉の粘つたのを三角形のおむすび形に拵へ、それを笹の葉で、手綺麗に包み、竹の皮の細く糸の樣に裂いたので結び、結んだ皮は長く殘して釣るせる樣にしておくのです。そしてこれを矢張蒸籠で蒸して、出來上つたのを紐附の儘、釣下げて知合などに贈るのです。これも手極が大切です。一茶が紐附の風勢を讀んだのに、

　　折釘にかけたところが粽かな



といふてゐますから、この笹粽も隨分古くから拵へたものらしふ御座います。

關東邊は餘りこの粽はいたしませんが、九州邊では五月の節句には拵へて、お互に贈答たりいたしてをります。丁度關東の柏餅で、その粳の粉をつかふところも似てをります。まだこの外に唐ちまきといふのがあります。これは今日も支那ではやつてをりますし、日本でも長崎邊では拵へます。

○唐ちまき、一名
　　唐あくちまき

これは材料に粳の粉を使ひませんで、糯米の粉にしない其儘のをつかひますので、拵へます前晩に唐灰汁の中に、糯米を洗つて好く水を切つたのを、糯米一升に唐灰汁三合の割で浸しておきます。唐灰汁といふのは、藁の灰汁の事です。一晩經

ちますと、糯米が全然黄色く色が附きます。そこで布で袋を拵へて、その中に糯米を詰め、大釜に入れ四時間位湯煮るのです。袋に詰めるにも餘り一杯に固く詰めると、糯米が増へて布を裂きますから、未だ二合位は這入る位の餘分を殘して布の口をする方が好いのです。すつかり煮立つて湯煮上つたら、釜から引出して盆か何かに移して、充分に熱を冷まし、冷えたら袋を綻ばして出しますと、眞黄色なお滋味うな餅の樣なものが現れます。斯樣いふやうに出來上つたのが、唐ちまきなので、これを格好好く糸で端から切て、菓子盆に乘せて出ますのです。粘强く味もよろしいもので、一寸風變で面白ものです。

前に申しました茅ちまきや、笹粽は粳の粉で拵へるのですが、米を水に浸して、臼で碎くなどは、東京などでは、誰方のお家でも出來る譯では御座いませんから、粉屋か乾物店にまゐると、しん粉糯があります。それで間に合ひますから、それを使つておけば、極手輕に出來ます。暮春のお慰にかつは古をしのぶたよりともなりて、家庭の趣味を增すかと思はれます。



▲不規律な習慣　日本に長く居ります或西洋婦人の話に、日本の下婢は雇ひ入れた當座こそよく命令を守りますけれど了ひには何時となく何も彼も不規律になつて、何事も吩咐けなければしないやうになります、成程斯う云ふ風では一家の主婦は安心して外出する事が出來ぬのも無理はありませぬ、不規律と云ふ事は確かに日本人の惡い習慣でありますと申しましたがもつともな說だとおもひます。

クラスメート評判記

島村靜子

△實業家の令孃――村井房子樣

黄がゝつたかすりの御召を召して、髮を羅馬に結つたところどう見ても虎の門式です。

此令孃は校中第一の勢力家で、先生にかなり受けがよいのは矢張り親の御かげだと察せられる。二三日たつと髮を、思ひきり、ハイカラに結つて登校遊ばす。此令孃の一番始めに心ざしたことが女流教育家其次が女醫者其次が小說家其次が詩人今でも大のバイロンびいきでいらつしやる。

△病院長の令孃――西靜江樣

色白で肉づきよく血色のよいところさすがはお醫者の令孃だ、學校中で評判の美人、唱歌の先生が、肩入なさるとやら岡燒連のかげ言いつかはお宅の看護婦に賴んで三高の生徒と寫眞の交換を求められたさうなその噂が校中にひろまつて、皆が唱歌を作つて歌つた位。

△牧師の令孃――島崎菊枝樣



平常、マガレツトに眞紅のリボンを、前から見えるほどに結んで、はかまをひくゝはいていらつしやるところは詩人的ですけれども、お顏は少々御氣の毒な位、御父樣の御職掌にもかゝはらず全校一の惡口屋、表面上は其んなに惡く見えませんから國語の先生の大のお花おとくいは作文、仲々なれていらつしやるから、うまいもの、ラブレターなんぞ、かきつけていらつしやるからよ。

△藥品店の令孃――坂井妙子樣

藥品屋と言つたつて大阪ではパリ〳〵のおくすり問屋妙子樣は伯父樣のところへ幼い時からもらはれて、いらつしやつたのだそして伯母樣が、去年の秋おかくれなさる時に、おまへにはもらい兒だとおつしやるまで、一寸も知らなかつたんですつて御自分でも言つて、いらつしやいますわ、私を生んで、いたゞいたのは實のお母樣だけれども幼い時から育てゝ、いたゞいた親の方が有難いと言つて孝行を、遊ばすところなんか、私共少しでも眞似たい位今度新らしいお母樣が、いらつしつてからは何んとなく不愉快だといつて寄宿舍に、這入られました、大人びて居られますけれども順しい方です、けれどもどこかひれてゐる樣な心地がいたします、上級の方には受けのよい方、理想は商人の奥樣。

△支店長の令孃＝＝三島絹子樣

クラス第一の氣取り屋一寸美人で、病身だものですから、表面は、大そう順しくつて、どこの御令孃かと思はれるほど、房子樣が、絹の着物を召されると、明日からは、御自分も同じ樣なのを召していらつしやる、他の方が何にでも上だと氣になつて召物などは、直ぐ、かへていらつしやるけれども學科など負けると、一生懸命に勉强なさるので、いつも組では、三四番の處で、先生達に、御信用のあつひ事本校一でせう、きぬ子樣のおつしやる事なら、一も二もよいとしてゐらつしやるものですから、皆きぬ子樣に、おべつかばかし、しかし陰では、仲々、うまく人を使つて狂言をなさいますので、誰だつて知るものは有りませんわ、菊枝樣が御入校なさつてからは、どしどしあの舌で素破ぬきなさいますので、此頃ではきぬ子樣の話しが出ると惡口を云ふ樣に、皆樣の信用がおちてまゐりましたほんとにばちですわエンゲージメントがあるのですつて、

世界奇聞

▲美貌と玉葱　英國領のベルミユーダズといふ島の住民は全世界で一番美くしい皮膚、血色を有つて居るさうで、その原因は同島民が殆ど全く玉葱を主食として居るからださうである。

▲牝牛の寢る時　ある牧畜者のいふところによると牝牛は不思議と必らず左側を下にして寢るさうで左側に怪我でもした時でなければ決して右を下には寢ぬといふ事だ。



▲馬に酒　佛蘭西では昨年葡萄の收穫が非常に多く造酒高も甚だ多いので馬にも酒を呑まして居るといふ事である、それは燕麥に酒をかけて食はせると半分の分量ほか食べないで馬がよく動くからださうだ。

▲奇妙な卵　クリートブラドのスキンニングロープといふ所で鷲が卵子を産んだ、その卵は目方が六十目長さ十吋半幅八吋といふ大變な卵であつたがそれを割つて見ると中にもまた卵があつてその殼まで固いのであつた。

▲不眠症は憂ふるに足らず　腦髓專門の一學者の說によると不眠症は普通に想像されるほどの害を與へるものではない、寧ろ不眠を憂ふる掛念の方が害を與へる、腦は部分的睡眠をなすもので不眠の間にも腦の一部は互に交替して休んで居るものだ、併し不眠症のものは晝間も時々假睡をして腦を休息さするがよいと。

▲石鹼球の競技會　亞米利加の流行社會にはこのごろ石鹼玉の競技會といふのが流行つて大供達がきやア〳〵云つて石鹼玉を吹合つてるのはなか〳〵無邪氣なものだといふことだ。

▲電光の惡戯　ランカシア聯隊の一兵卒は電光に打たれて全く盲目になつた處が三日たつてまた電光に打たれてすつかり元の通り目が見えた。

▲大西洋の波　大西洋の荒波は有名なものだがその高いのになると四十呎にも及んで長さは二百呎にも及ぶといふ事である。

長命せる老媼の生活

三野榮子

むかし、ある在所に一人の婆さんがありまして、毎日お寺へまゐりますと、口癖のやうに「何卒早くお迎ひを願ひます。」と云つて居るので、ある日寺の小僧が佛壇の後方に隠れて「今ぞ願ひを……。」と云ひも終らぬに、婆さんは飛び退いて「一寸お待ち下され、伜に遺言を忘れて來たから。」と逃げ歸つたので、小僧は腹を抱へて笑つたとやら、よく妾共も「死にたい死にたい。」と云つて居る人を見ますが、心の奥底をたたいたら、此の婆さんに過ぎないのでせう、こんな人に限つて地震などの時は人より先に駈け出すから可笑しいやうなものゝ、しかしそれで結構で、人に「生存の慾。」が無いやうになつてはお仕舞ひです、小説などには誠に美しう書いてありますけれど、彼の自殺などは多く發狂の結果で有らうと思ひます、それに男女の心中などゝ來てはお話にならないものが多いでは有りませんか、只それ情ばかり、非常に同情するものも有りますが、それで人の價値が何處にあるでせう、隨分其の道筋には同情に耐へないもの〻無いでも有りませんものゝ、最う氣が狂つたり意志の力を失つては、無論常規をもつて其の行爲を律することが出來ないと共にその度外れの仕方を謳歌することも出來ないでは有りませんか、左う〳〵華嚴の瀧や阿蘇の噴火口へ平氣で行かれるもので有りません、「無意義の生存。」などゝ云ふ方もあるやうですが、そこにお氣がつかれる、今のさまではならない、人はます〳〵向上せねばならぬ、世は改善すべきである、人生乃ち意義ありでは無いでせうか、ほゝゝ……妾はいつも飛んだ議論めいたことばかり、そんな事は何方でも宜いとして、少なくとも我が女學世界の讀者は長命を望んで居らるゝお方ばかりと思ひますので、すこしあやかつて戴きたいと、此度は長命しました祖母のお話をいたすことに仕ました。

妾は不幸にも祖父の面を知りません、が、不思議に祖母は父方のも母方のも長命で、少さい時には非常に可愛がつて戴いたものです、父方のは九十二歳、母方のは八十六歳まで此の世にあられましたが、數年前相前後して、めでたき往生を遂げました。附け加へて申して置きますが、妾の父母も最うどちらも六十歳以上ですが今になか〳〵達者なもので、先日兄などは父と座相撲を取つて負かされた程であります。

△若い時からよく働いた人

父方の祖母は中肉で脊も餘り高く無かつたやうに思ひますが、何時もニコ〳〵として上機嫌でした、父方は昔から代々大庄屋をつとめて居た家で、身代も相應にあつたものですから、祖母も若いうちから花とか茶とか云つて日を暮して居ても善かつたのでありますが、祖母の父と云ふのが誠に嚴格な人であつたさうで、子供の時から拭き掃除萬端、召使の女も同樣にさして、畑仕事にまで連れて行かれしとやら、そんな風に育てられたものですから、お嫁に來て後も、臺所のことなど下女まかせにして置いたことは一日も無かつたと云ふことで、來客があつても料理屋から物を取り寄せるやうなことをせず、必ず自分の手料理で差し上げ、暇さへあれば屋敷内の掃除など仕て居るので、ある人が「結構なお身分でそんなことまでせずとも宜いぢや有りませんか。」と云つたら、祖母は只笑つて何とも答へませんでしたが、後で召使どもに話されて云ふその時の言葉は、妾どもゝ度々聞かされました「人は此の世へ働きに來たもだ。」と云ふ言葉であつたと云ふことで「なぜ働かねばならぬか」と云ふことは全く神秘的に領得して居たものでせう、孫どもゝ隨分たくさんですが、祖母から此の「只働け。」と云ふ訓戒を受けなかつたものが有りません、で、先年も佛事のために皆が本家に落合つた時、誰かゞ「ぢや皆は善う働いて居るだらうね。」と云つたので一同大笑ひを仕たものの、何誰も氣恥かしかつたには違ひないやうでした。

△藥といふものを飲まぬ

それに祖母は藥を飲んだことが無いので孫どもが胃病とか肺病とか騒いで居ると「今時の若いものは何う仕て、ああも身體が弱いのだらう。」と不思議がつて居ました、死なれたときもたつた三日の患ひでしたから、藥を飲まれたのは此の三日だけで、その時は妾も本家へ介抱にまゐりましたが、お仕舞の日などは厭がつて藥を飲んで戴くのに、大層困つたのです、かれこれするに様子が變なので、醫者に來て貰ひましたら「もう駄目です。」と宣告されたので、病人が平素から好めるものを手まかせに差し上げて居ますと、ほんの間際までお念佛などを唱へて眠むるやうに落入つたので、始めて死人の介抱を仕た妾などは「死ぬと云ふことは左程苦しう無いものか」と思つたほどです。



申し遲れましたが、祖母は昔から何處へ行くのでも歩行で、俥や籠のお世話に成つたことが有りません。現に死ぬる數日前、二里あまりあるお寺へ參詣して、近所の若い婆さん達に挾まれた程、往復とも達者に歩いて居ます、妾が學校時代に俥に乘つて歸つたのを見て、挨拶が濟むと「榮ちやんも弱蟲に成つたのう。」と笑ひました。

△陽氣な性質

大層元氣な方で、お目にかゝると、自から此方も氣が引き立つて來たもので、またなか／＼お話上手でした。

それですから、祖母の部屋は孫どもの部屋のやうに成つて居たもので、桃太郎、かち／＼山、松山鏡などは妾どもが非常に歡迎して居たものです、今でも其の時のことを思ひ出すと、お桃を拾ひ上げた婆さんのやうな、てら／＼した祖母の面が眼の前に浮んで、何とも云へぬ善い心地が仕ます。

妾どもの知つて居ることで、祖母がいつも笑つて居たのは、若い人達が眼鏡をかけたり杖をついたり仕て居ることで有りました。

△身體はあまり達者でない

母方の祖母は、ほつそらと仕た方で背は女としては餘程高い方でした、それに八十の坂を越しても白髮が少ないので、年よりは若う見えて居たかと思ひます。

しかし、身體は何方かと云へば餘り達者な方で有りませんでした、大患ひを仕たと云ふことは聞きませんけれど、時々風邪などに罹つてお寢みなされて居たことがあります、それに一見いかにも弱さうなので「柳に雪折なし。」と云ふもので有らうと云ふのが殆んど定評になつて居たやうです、最も晩年は御酒などを少しつゝ飲まれて餘程元氣でした。

餘計なことを申すやうですか、妾の母は娘の時に目方が二十貫と云ふ肥滿で、肌の色が大層白かつたものですから、お湯の都合で、たまに錢湯へなどまゐりま

すと、人々が目をそばだてたものだと云ひますが、其の後子供が出來るやうに成つて、だんだん細くなつたのは宜しいのですけれど、廿四五から例の血の道で三十二三になるまでは藥を飮まぬ日とて無かつたと云ひます、しかし今六十を過して却つて若いものより達者なのを見ますと、若い方々で非常に病氣を氣にかける人がありますけれど、左程苦にすべきものでも無からうと思ひます、それに苦にすることが一層身體を痛めるに違ひありません。



淺草凌雲閣（東京名所縮觀）

△藥より飯

祖父は妾どもが病氣で寢て居ますと、いつもお藥をと云つたことは有りませんが「御飯をおあがり。」と、う

るさい程お勸め下さつたもので、御自身が病氣の時は平素よりもお食が多い程で「よく食し上がられることよ。」と申しますと「おいしくないことは誰でも同じことだが御飯を止めたら早く頭が上らないので食べます。」と云つて居られました、そして「一ばん勢がつくものは御飯だ。」と常に「飯粒の一つでも粗末に思つては成らん。」と妾どもに申し聞けられました。

　身體の狀況と病氣とに依つて一概に申すことは出來ますまいが、何しろ長命した祖母の言葉ですから妾自身は其の言葉を守つて居ますので、精神作用も手傳つて居るのでせう、今に大患ひを仕たことが有りません、あまり妾の身體がた細いものですから、祖母のお話をいたしますと「貴女こそ柳に雪折なしよ」とお友達に笑はれて居ます。

△御馳走は氣持一つ

祖父は非常の大酒家で、殊に手廣く商賣を仕て居ましたからお友達もたくさんで、飲みつけに來る客も隨分多く、酒飲みの癖とて長座するものも少なく無かつたが惡い面一つ見せなかつたと云ふことです、それで母などが妹──妾の伯母──などゝ一緒に小言を申しますと「同じ御馳走するならお客の氣持を惡く仕ては成らぬ、それに男が外で遊ぶのは內が面白う無いから起るものだよ。」と戒められて居たさうですが、只今の兄がまた中々の大酒で、時々飲み友達を連れて歸るので、妾などは厭でたまらぬことが有りますけれで、母がまた惡い面もせずお仕舞ひまでお燗の注意など仕ますので、始終來るお客さまは大歡びで、兄も時々面目をほどこすことが有りますので、つい〱妾どもまでおつと仕ては居られ無いやうに成ることも有ります。

　話が餘談になつて恐れ入りますが、兄のお友達で矢張御酒をあがる人の細君は、いつもお客があると厭なお面をなさるので、兄などは「わざとゆつくり仕て遣る。」と云つて笑つて居ますが、大抵の方は御馳走になりながら、「不愉快だつた」と細君を罵つて居るさうで「そんなことなら宅で御酒を出さぬ規則にすれば宜いに。」と母などは申して居ます。成稱御馳走を出す位な

ら、お客に不愉快を感せしむるも如何なものでせう。

祖母は至つて氣の長い方で、心配なことが起つても「そのうちには何うか成るだらう。」と云ふ風に、餘り氣に仕なかつたさうです。左うでせう、お年寄られても氣樂なことばかり云つて、いつもものゝ心づいた孫どもを笑はして居られました。

△佛敎信者

双方の祖母も、また非常の佛敎信者で、晩年の仕事はお寺詣りで有りました。

そして、其の云ふ所が一致して居たのも可笑しうございました、何か歡び事があると、すぐ「佛樣のお蔭だ。」と云ひまして、また惡い事があつても「これ位のことで濟んだのは佛樣がお守り下さつたからだ」と云ふのです、それで孫どもが極樂がないの地獄はないのと申しますと、他處さまの老人のやうに躍起となつて御辯解なさることは有りませんでしたが「信仰して居れば解る。」と朝晩の二度は必ず孫どもに佛樣を拜まして、近所の寺に說敎などあると、誰かを連れて行かれました、お蔭で妾なども十二三の折にはなか〳〵の難有家に成つて仕舞つて居ました。

二人とも食物には別に餘り好き嫌ひが無かつたやうに思つて居ます、滋養に成るとか成らぬとか云ふことは勿論昔人間ですから云はう筈も有りませんが、子供にそんなものを食はしては善いの惡いのと人々が云つて居るのを聞いて「あんまり心配仕過ぎて、今時の人達は子供を弱く仕て仕舞ふ。」とお二人が話して居られたのを聞いたことが有ります。

何う仕ても長命する人には何處かに違つた所があるやうに思ひます。



若き婦人の眼の保護

醫學士　井上　温

△清潔と眼の保護

眼を强くして容易に眼病に冒されないやうにするには、身體各部の清潔を保つことが肝腎です。身體を清潔にすることは、諸病を防ぐ本で、眼を强くするといふ上にも之れが一番大切であります。常に顏に觸れ易い手は特に注意して清潔にすべきで、爪なども綺麗に摘み取り、時々洗ひ淨めて置かねばなりません。そして朝起きた時、又は外出するとか大掃除するとかしてひどく塵埃を被つた時などには、一々ずつと洗ひ淨めねばなりません。身體を此のやうに注意する上に、居室の如きも、光線の工合を十分良くして、薄暗い處で仕事をする事は成るべく避けねばなりません。又針を使ふことは、非常に眼を勞するものですから、裁縫はなるべく日中にするやうにし、已むを得ず夜爲す時は、燈火に近い明るい處ですることゝし、それも餘り長時間に渡つてはなりません。夜黑い絲で黑い布片を縫ふのは殊に害になります。其他夜は讀書も惡いし、彩色を使つて畫を描くことなどは最も惡いやうであります。又婦人は產後は固より月經中は、身體が非常に弱つて居りますから、成るべく眼を使はないやうにしなければなりません。特に月經が不順であると、自ら身體や精神に異狀を來して、やゝもすると鼻孔や眼の網膜から血が出ることがありますが、さういふ際には一層注意して眼の使用を差控へねばなりません。

△眼の惡るい人は眼鏡を用ゐよ

それから申して置きたいのは婦人が眼鏡を用ゐることです。世間では眼鏡は婦人の美貌を害するとか、淑女の風ではないといふやうに申しますが、眼の惡い人はやはり相當の眼鏡を掛けた方がよいのです。さうしなければ惡い眼がます〳〵惡くなつてしまひます。し

かし眼鏡を用ゐるとしても眼に相當したものでなければ、却つて眼を悪くしますから、これは眼科醫の指揮に從はねばなりません。又普通教育を受けた人には、そんな事はないでせうが、田舎などに行きますと、如何はしい水をつけて、眼病を直したり、眼を強くしたりすることが出來るものと信ずる者がまだ大分あるやうです。或は祈禱さへ受ければ眼病が直るなどゝ思ふてゐる人があります。之が爲に、あたら眼を悪くするものが尠くないやうですが、これも十分注意せねばなりません。

△藪にらみでもすつかりなほる

次に既に眼病になつたのを述べて見ると、色盲といふのがあつて、靑を赤と間違へ、黄を靑と間違へて、婦人なれば折角擇り分けて買つた反物も、後で見て失敗つたといふやうなことがよくあります。これは、當人の不都合のみならず、總て子供に迄も遺傳するから、早く根治さすることが肝要です。又藪にらみなども子供の時からあるもので、大した差支のない所から、多くは打遣つて置きますが、生長してお嫁に行かうといふ時になると、これは大變邪魔になりますから、早く療して置かねばなりません。專門の醫者にかければ、表面丈は兎に角普通の眼のやうになります。尤も初期であれば、すつかり直ることもあります。色々の原因で眼が全く見えなくなつた場合には、仕方がないから義眼即ち似せの眼を入れるのですが、一寸判らぬやうになります。又黒目に白い星が出來た時なども、專門醫にかければ、白い點を彩つて、黒く美しくすることが出來ます。

△妙齢になつて起る眼病

腺病性の眼となると、身體は瘦せて蒼ざめ、眼瞼に腫物のやうな物が出來て、眼は痛み、見ていかにも穢らしいものですが、是等も早く醫療を加へれば、すつかり癒ります。或は親に梅毒があつた爲、本人に遺傳して、角膜實質炎といふ眼病を何時となく起すことが

あります。これは幼少の折は左程のこともありませんが、やがて妙齢に達すると、俄に惡くなつて參ります。實驗によると、この眼病は二十歳位の時に一番多いやうで、此の爲に折角の結婚談も見合になる例が尠くありません。これはなか〳〵手つとり早くは癒りませんが、而かも亦決して不治の病ではありません。それからよくあるのはトラホームです。これは幼年時代より罹つて居るものが、澤山あつて、已に妙齢になつて、これはと氣のつく時には、多くは二期三期になつてあるので、大分治療に手數がかゝりますが、それにしても成るべく早く治療しなければ、往々盲目になる事があります。

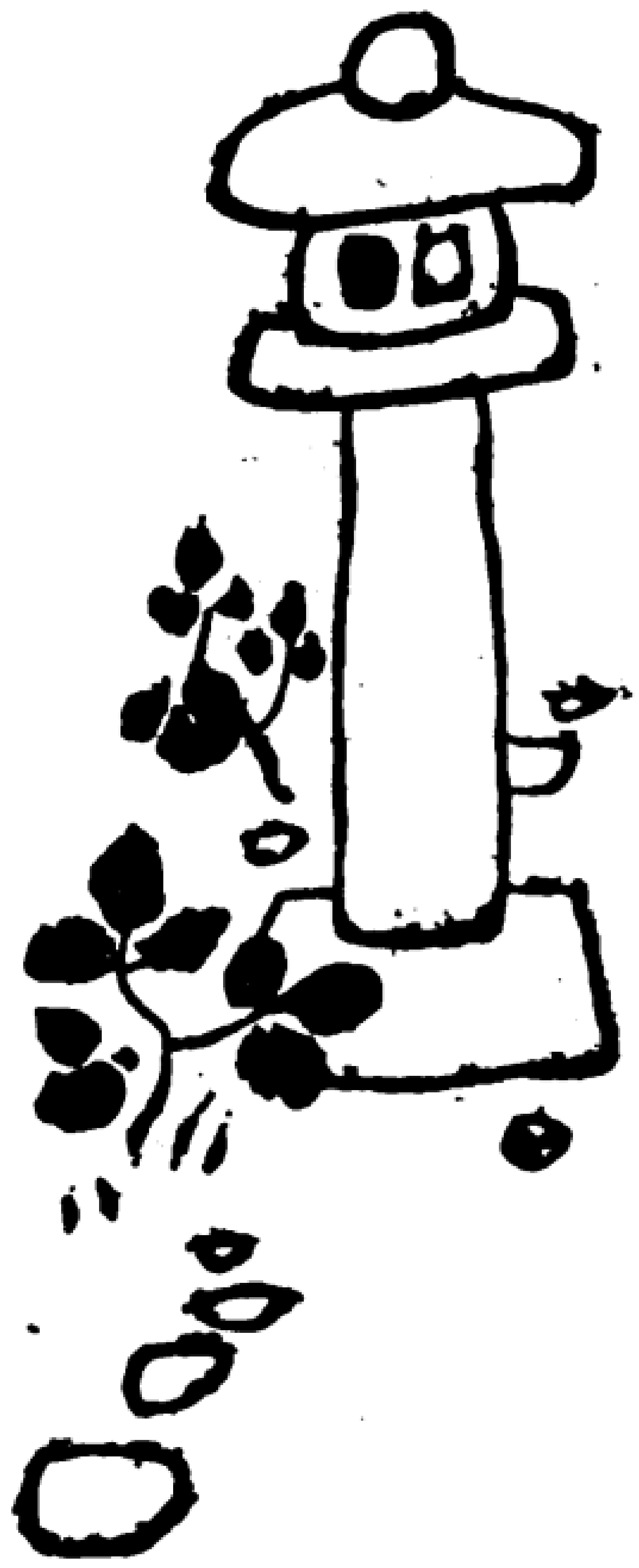
手を綺麗にする法

▲家持の手の荒れる第一の原因は仕事で、濡れた手を碌々拭きもせず直きに他の仕事に取掛り、其上に垢埃の着いたまゝ乾かせるのは最も手の美觀を傷けます。又冷たい水に入れた手を急に暑い湯に浸けるのは、其光澤を去り皮理を粗くします。そして荒れた手には汚垢が附き易く、汚垢が附けば皸、凍瘡が切れ易く、手は益々きたなくなるわけです。それ故臺所の仕事が濟んだら、早速微温湯に洗粉で綺麗に手を洗ふべきであります。洗粉の外に、糠、小豆、茄の汁、コーンミール、オートミール等は至極結構な洗料です。

▲果物の汁は美しい手の敵です。林檎や梨の皮を剝いて其汁が指の間に滴れたのを鳥渡手拭で拭つて濟まして置くのは白い手を黑くする基です。硫黄燐寸を燻べて其煙で手を燻るのは斯樣な時の妙法です。南瓜は一般に皮膚を清潔にするものです。生南瓜を小さく切り其汁氣を搾つて充分に揉めば如何なる汚垢も綺麗に落ちるものです。

▲洗濯をすると手が荒れて赤くなります。あれは洗濯に用ゆる石鹸が手の脂を去つて仕舞ふからです。それにには樟脳油少許に酒を二三滴落して用ゆれば直きに其光澤を恢復します。

▲手袋は啻に垢埃の附着を防止するのみならず、急激な寒暑の度を調和するものです。西洋の細君は雜巾がけをしたり鍋釜を磨く時に、皮のミットンを用ひます。要するに手の用心は家持にも誰にも出來る事ですから、家の仕事が忙しいからとて打遣つて置くのは、女の身化粧を怠つて居るといふ譏を免れません。



家庭教師の利益と弊害

高田清風

△近頃起つた非難の聲

家庭教師の事を言ふ前に一寸述べて置くべき事があります。近頃、教育界でも世間でも、硬教育と云ふ聲が盛に起つてをりますが、此の硬教育とは何であるかといふに、一言で述べますと、兒童や生徒に骨を折らせよと云ふことであります。

之れが急にやかましくなつたのは、從來の教育の二つの缺點の反動であります。其の一つは兒童や生徒の心理情態から割出して其の負擔を大に減じなければならぬと云ふ所から教へる程度をずつと低めた事で、此等の教育を受けたものは實際の役に立たぬと云ふ非難が諸所に起り、やがて學科の程度を高めよと云ひ、兒童や生徒の奮發心を大に喚起せよと稱へられて來たのであります。他の一つは、一時、教授法と云ふものが盛に研究せられて教授法の爲に教授の材料を弄ぶやうな氣味のあつた事です。即ち教師は其の技倆を示さん爲に嚙んで含めるやうな教へ振りをしたので、生徒の眞の活動は見られなかつたのです。其反動として近來は成るべく生徒や兒童に仕事をさせよ、教授に趣味あらしめるもよろしいが、趣味其の物が教授の目的と云つたやうな昔の夢を見て居てはならぬ、兒童や子供をして努力の結果趣味を覺えしめるやうにせねばならぬと云ふ説が多くなつたのです。つまり子供をして自動的に働かせて努力の結果、進取の氣象、克己の精神を養ふやうにせよと云ふのが硬教育の主旨で、熊澤蕃山の、「憂き事の尙此の上につもれかし限りある身の心ためさむ」といふ歌の心と同じなのです。

△家庭教師の硬教育

家庭教師は家庭に於いて十分に其の子女の監督が出來ない時に聘するものであります。家庭で十分に手が行き届くならば家庭教師は不必要です。世間には家庭教師を置きさへすれば子供の成績が良くなるものと思ふて頼む人がありますが、成程教師が脇に附いてゐる間は學校の成績は良いやうですが、一度獨り立ちの境遇になると、家庭教師の手に育てられた者は實にみじめなものであります。殊に見榮の爲に聘するなどは言語道斷と申さねばなりません。さて家庭で手が行き届くとして其の子女を監督する上の注意は、第一は學校にて果して眞面目に學んで來たか、第二はそれをこなすために十分熱心に復習するか、第三は怠らず豫習をなすかの三點にあらねばなりませぬ。つまり爲すべき仕事をば十分自分の力で實行するか否かを見るのであります。其れが滿足に行かぬ時はどうかしてやらせなければなりません。これが家庭教育に於ける智識の方面の監督であります。そして家庭教師なるものは一家の事情上、手が届き兼ねる爲に聘するものですから、その採るべき方針も亦右の三點にあらねばなりませぬ然るに從來の家庭教師は多くは丁寧懇切に教へ諭すことばかりを主として、叱責督勵をしませんから、子供は知らず識らずの間に、「解らぬ處は家の先生に聞けるからどうでもよい」、「此の次ぎの場所も先生が教へて下さるから自分で調べずともよい」といふやうな懶怠な性を養ふやうになつて居ります。從つて家庭教師から離れる時はたゞ無責任な懶怠な性が殘るに過ぎないと云ふ遺憾なる結果を見るのです私は嘗て或る學校を志願してをる子供を頼まれて教へた事がありましたが入學試驗が終へた日に、悄然として來て「先生に教へて頂いたことは一つも出ませんでした」といはれた時の有樣は、今もあり〳〵と頭に殘つて居ります。親切が仇となつたやうで（もと〳〵愚な子供ではなかつたので）家庭教師の立場と責任と云ふことは十分考へねばならぬ事だとつく〳〵思ひました。



△家庭教師の必要な場合

然し家庭教師は全く必要のないものとは申されませぬ。手の届き兼ねる家庭では矢張り必要であります。私の見る處では、醫者と辯護士をしてゐる人の子女は概して成績が惡いやうです。これは一つは手が届き兼ねるのと、一つは金錢には餘り不自由がない爲に、つひ放縱に流れるのでせう私の知人からもこんな述懷やら愚痴やらを隨分と聞かされました。つまりかういふ人々は宅に居る事が少なくて其の子女に目をかけることが隨つて薄く、又夫人にしても人の出入やら交際やらが多い爲にこれも十分に督勵が出來難いといふやうな事情からでありませう。由來横着な心は大概何人にもありますから、十分な監督者がないと兎角ずるをきめまして、遂には不幸を見るやうになります。かう云ふ家庭では是非教師を聘して子女の監督指導を託するがよからうと思ひます。家庭教師

の有害無用説を數々聞きますが、これらは世間の家庭の事情と家庭教師の眞責任を會得せぬより來たものと思はれます。眞に子女の將來を思ふ人は、家庭の事情に由つて矢張り教師を聘した方が良しいのです。

△獨立心の無くなる原因

家庭教師の責務は前に陳べたやうに託せられた子女の監査督勵にあるのですから、徒に丁寧親切に教へるのみに終らず、子女が眞に自分の力を出して力めて居るか何うかを見定めねばなりません。上流社會や富豪等の子女は獨立心が乏しいと云はれてゐるのは則ちこゝに手ぬかりがあつたのでせう。要するに家庭教師の執るべき方針は硬教育でなければなりません。硬教育的に指導督勵しなければなりません。教師が多く世話をやかずに、子女をして澤山の仕事をさせる様に仕向けるのが、家庭教師の眞の技倆を要する所で、又最も困難な所であります。子女の解らぬ所を直に教へ、明日の豫習を教師がやるのは、最も容易な骨の折れない事で、誰にでも出來ることですが、これでは子女の頭は少しも働かず、將來依賴心の強い我儘な無責任な自分では事を仕出し得ない意氣地のない者と成つて了ひます。家庭教師を頼む人は、此の道理を能く〳〵辨へて置かぬと、わざ〳〵託した甲斐がないのみか、反つて惡結果を遺します。殊に一家の主婦たるものは、内政の全部を受け持つて主人の留守をすることが多くありますから、家庭教師を頼んだ場合は、姑息の愛を捨てゝ、硬教育の必要と云ふ點よりして、十分なる監督を家庭教師に託すると共に出來るだけ子女の日常の狀態を話し合つて指導誘掖に心を用ゐられたいものであります。かの女心からして、唯丁寧親切に多く教へる先生が良いと思ふやうな淺はかな考へを捨て、將來と云ふことに注意せられて、硬教育的に十分監督ありたいものであります。そして最後に望みたいことは、この教師は子女を託するに足ると思はれたならば、十分に信用して萬事を打ち任せ、出來るだけ家風や子女の性質を話し、倘時々主人や自分の考へて居ることを

遠慮なく申し出られることです。陰で何のかのと言ふのは甚だ宜しくありませぬ。家庭教師に就いて世間で彼れ是れ言ふのは、家庭教師其の人が自己の責務を覺らない罪もありませうが、家庭の人々が教へる事の多きと徒に親切なのとを喜んで、熱心に嚴格に指導啓發して子女に自發的奮勵心を起さしめるやうに注意深



き依頼をしないといふ事も亦大に與つて居やうと考へられます。一家の内政を司り子女教育の家庭内の責務を最も多く有する主婦は此の邊の用意は十分にありたいと思ひます。硬教育と云ふ聲が次第に高くなつて來ましたので、家庭教師を聘する本來の意義を述べまして、『大方の一考に供します。



首夏の趣味

物集梧水

八重櫻すでに散り、『春』漸く逝かむとす。人は絢爛なる櫻花に疲れ、所謂る歡樂極まつて哀傷多く、一種限りなき淋しみの感に打たるゝは、まさにこの季節なり。されど惟ふに、陽春三月の櫻花は未だ我が世を飾れる百花の最高潮を示すものにあらず。唯だ聊か空寂たる二月の天地に『春』先づ來ぬと告げし梅花に次いで、桃花、櫻花踵を接しつゝ愉快なる淡紅色を天に潮するが故に、人皆な長き睡眠より目覺めたるが如く、等しく共に相仰ぎて悉く其の美を歎賞して已まざるに過ぎざるなり。未だ百花の最高潮を示すものにあらず。

『春』の季節は寒暖その宜しきを得、一種人をチャームするが如く覺えしむ。見よ、或は霞の如き、或は櫻花の如き、宛ら煙や雲のやうに悠々人に迫らざるもの天地の間に彌漫し、有らゆる生物をして陶然美酒の如く酔はしむるにあらずや。されど『春』の趣味は極めて軟弱なり、單純なり。動もすれば人をして柔弱ならしめんとす。此に於てか天帝强烈なる『夏』を下して叱咜鞭勵し、人をして美酒より醒めて奮起せしむ。

見よ、卯花の雪白なる、山吹の黄金色なる、燕子花の飽くまで紫色なる躑躅の火の如く燃えんとする、而して新綠の水の如く滴れる、誠に首夏の景致は春のそれに比して甚だ色彩の美に富み、而も煥發的なるにあらずや。

◎山村僻邑を過ぐれば

春盡き、夏將に來らんとする日、山村僻邑を過ぐれば、いさゝ小川の流れ、小さき聲をなしつゝ離落の外

を流るゝ水に沿ひて、一叢の山吹あり、極めて濃き綠色の葉の間より點々星の如く輝き、風情云ふばかりなし。古へは山吹の名所多かりしも、今は殆んど其の跡を絶ちぬ。

駒とめてなほ水かはん山吹の花の露そふゐどの玉川　皇太后宮太夫俊成

ほろ〳〵と山吹ちるか瀧の音　芭蕉

尙ほ一叢山吹の側に一本の古柳あり。黃綠色の葉漸く鮮かならんとし、柳絮紛々として風に飛びぬ。あゝ何等の景致ぞや。古人は柳絮水に入りて浮藻となると想像したりき。妙想の至極なり。

路のべの淸水ながるゝ柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれ　西行法師

葉柳や蘆の絡りに丸木橋　三雨

少しく距りたる所の木立に紫の雲動くと見れば、藤花の今を盛りと咲き亂れたるなり。古へ、藤原氏全盛の頃は緣の色と持囃されつゝ歌に、詩に、多く詠せられしが、今は聊か衰へたるが如し。

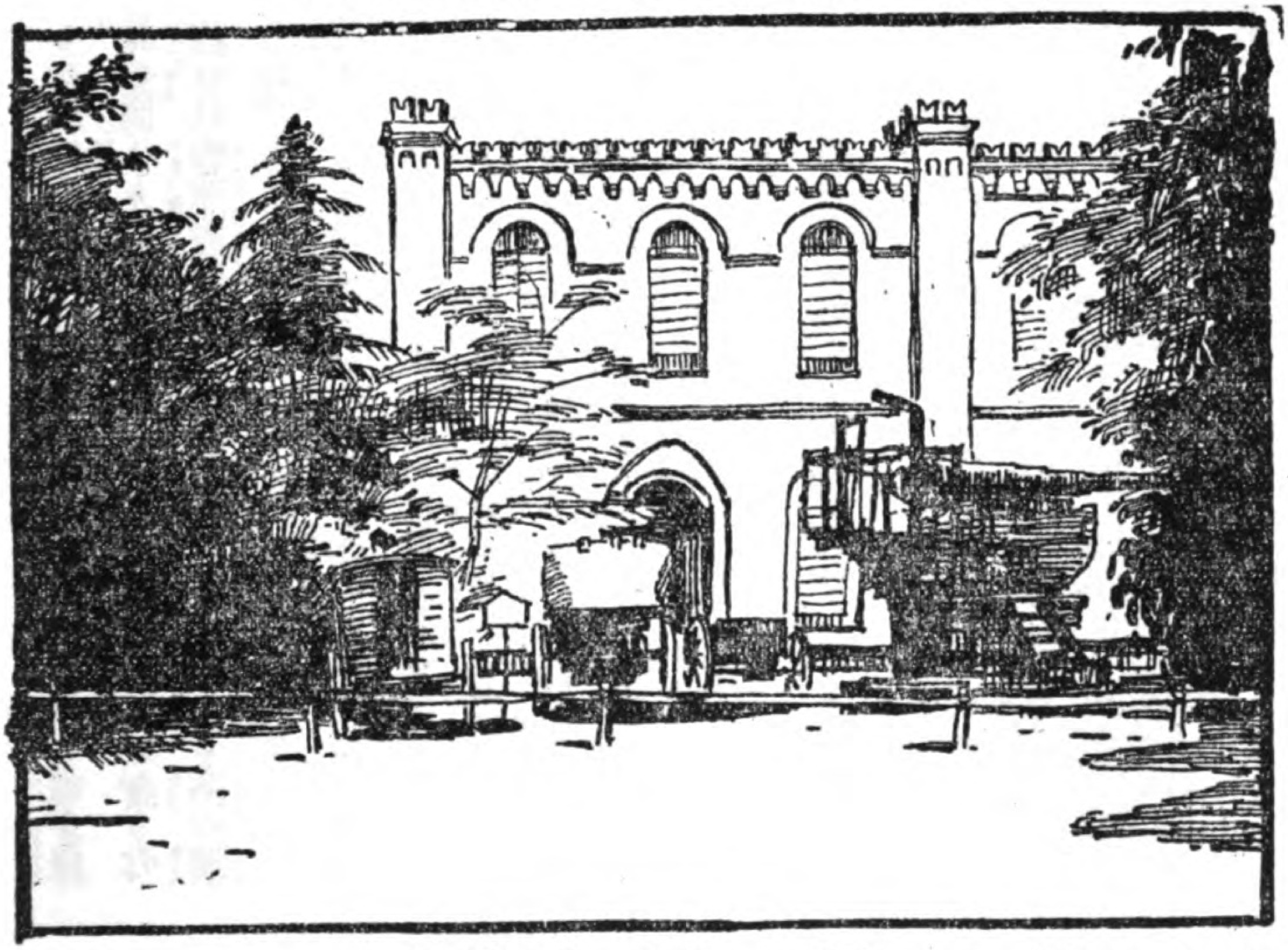
ふぢの花折りてかざせばこむらさき我がもとゆひに色やそふらん　源　爲善

藤の茶屋茶を煎て遲き日なり鬼　碧梧桐

◎端午の日高きに登れば

五月五日、新綠水の如くに濔れる山の手の高臺より八百八町の街衢を望めば、陽炎もゆる家々の屋根瓦は宛ら大海原の波濤の如く、その上に悠々活躍せる大鯉あり。言はずもあれ、是れ端午の光景なり。抑も端午の節會は、都にも、鄙にも、其の趣味甚だ多きものなれども、殊に大都會の方、聊かこの面白味深きが如し。この日、男子ある家には、鯉幟を立て、武者人形を飾り、軒に菖蒲を葺き、粽を喰ひ、菖蒲酒を飲むなり。鯉幟を立つるは、鯉魚の瀧登りと云ひて男子の出世を祝はんが爲めなり、武者人形を飾るは、古へ光仁天皇の御宇、外冠攻め來りしかば、早良親王を大將軍として之を擊退せしめ給ひぬ、その出陣の日は偶々五月五日に當りたれば、今に至るまで當時の有樣を寫したる

遊就館　（東京の遊園）



ものなりとぞ。菖蒲は邪氣を拂ひ、命を延ばすものとして用ひられ、昔は藥玉とて、菖蒲、艾など十種ばかりのものを五色の絲に結びて壁に懸け、宮中にては御帳に懸けさせたりきとぞ、粽を喰ふは、昔し支那に楚の屈原と云へる忠臣ありき、國を憂ふるの餘り、五月五日、汨羅と云へる水中に投じて死せしに、楚人之を憐みて、毎年五月五日、米を竹筒に入れて水中に投じぬ、然るに屈原の靈魂現はれて曰く、米を竹筒に入れたるものは、他の者に喰はるゝ故、米を楝の葉に包み之を五色の絲もて結びて投せられよと、是れ粽を喰ふ濫觴なりと云ふ。昔は此の日に男子ども相集まりて菖蒲大刀を打ち、印地打をなして遊びたりしが、今は殆んど廢れたりき。

木がくれて名譽の家の幟哉　蕪村
江戸住や二階窓から初幟　一茶

◎月夜に寒村に遊べば

山懐の寒村にしあれば、垣根にむら〳〵と咲ける

卯花は雪よりも白く、木の根、岩の根にいゝしと這ひ擴ごりて咲ける躑躅の花は血よりも紅なり。山月、眉よりも細く、斜めに暗碧の空に横れるの時、忽如、天の一角に玉璧を碎くが如き聲あり。仰いで其の杜鵑血に鳴く聲なるを知れる時、無限の悲痛と、無限の哀傷と、無限の悽怨とは、相迫りて詩人の胸臆に思はず涙を霑はしむ。

さつき山うの花月夜ほとゝぎす聞けどもあかず又鳴かんかと　　讀人しらず

鞘ばしる友切丸やほとゝぎす　　蕪村

杜鵑は古來最も多く詩歌に詠ぜられし鳥なり。その聲、悲愴なるが故、歌人は努めてその初音を聞かんとしたり。その鳥の口を開けば、咽喉紅なる故、血を吐くなりと言ひ傳へらる。この鳥の鳴ける折に盛りなる躑躅は、まさに此の血汐の濺りて咲けるものなりとさへ言ひ傳へられぬ。

つゝじ野やあらぬところに麥畑　　蕪村

籠に寢てうち起す山や村つゝじ　　菅雅



淺草公園の花屋敷　（東京の遊園）

杜鵑の宿として花橘、卯花をあしらへること古へより多きは、この鳥の鳴ける頃に恰も盛りなるがためなるべし。

やどりせし花たちばなも枯れなくになどほとゝぎす聲絶えぬらん　大江千里

ほとゝぎす我れとはなしに卯の花のうき世の中に鳴きわたるらん　凡河内躬恒

◎夕暮れ田圃の畔に立てば

五月雨しとくゝと降りくらす夕暮、田舍道を過ぎて水田の畔に出でぬ。五月女の菅笠かぶりて鄙歌面白く唄ひつゝ稻を植うるさま、神代以來かはりなき姿と見て懐しき心地す。

早苗とる山田の筧もりにけり引く注連縄に露ぞこぼるゝ　大納言經信

鎌倉の御所と歌ふや田植笠　菅雅

眼に見ゆる風物總て青色と綠色となり。四邊の樹立皆な嫩葉を冠し、綠色したゝる上に尙ほ色ませとや五月雨いたく降り灑ぐが故、綠色は彌がうへに鮮明となり、雨の雫もまた綠色ならんとす。少しく距りたる丘に梧桐の木立あり。綠濃き廣葉かすかに風に搖れて雨しぶきを煙せつゝ戰ぎぬ。その廣やかなる葉がくれに紫色の雲動けると見たるは梧桐の花なり。地上にも數多散り落ちたり。その一つを拾ひて花の香を嗅げば柔く甘き匂ひあり。花橘の香よりも更に昔の人の戀しく思はる。

終日鳴き暮す蛙に睡眠を催すこと切なり。この頃は蛙の目借時とて、蛙の人目を借ると云へるは、宜べにも面白き俗說なり。

雨蛙しきりに鳴いて流雲　三允

その聲で一つ踊れよ鳴く蛙　一茶

◎京に近き山里を過ぐれば

京に近き山は其の形概ね圓く優し。大空のどかに晴れたる日、京に近き山の麓を過ぐれば寒村あり、茗圃あり。寒村には筍子の伸ぶること一二尺、早きもの

は既に成長して若竹となり、遅きものは僅かに土皮を破りて其の頭を露はせるに過ぎず。なよ竹の、やがては憂き節しげき世に出づるかと哀れなり。茗園には白き手拭を冠り、赤い襷を掛けたる女の、新茶摘みながら唄ふ鄙歌、節面白く、永く〳〵餘音の、日も將に西へ入るを忘れんかと覺えし。

筍子や兒の曲ぐきのうつくしき　嵐雪

若菜野は花にして見て茶つみかな　也有

◎

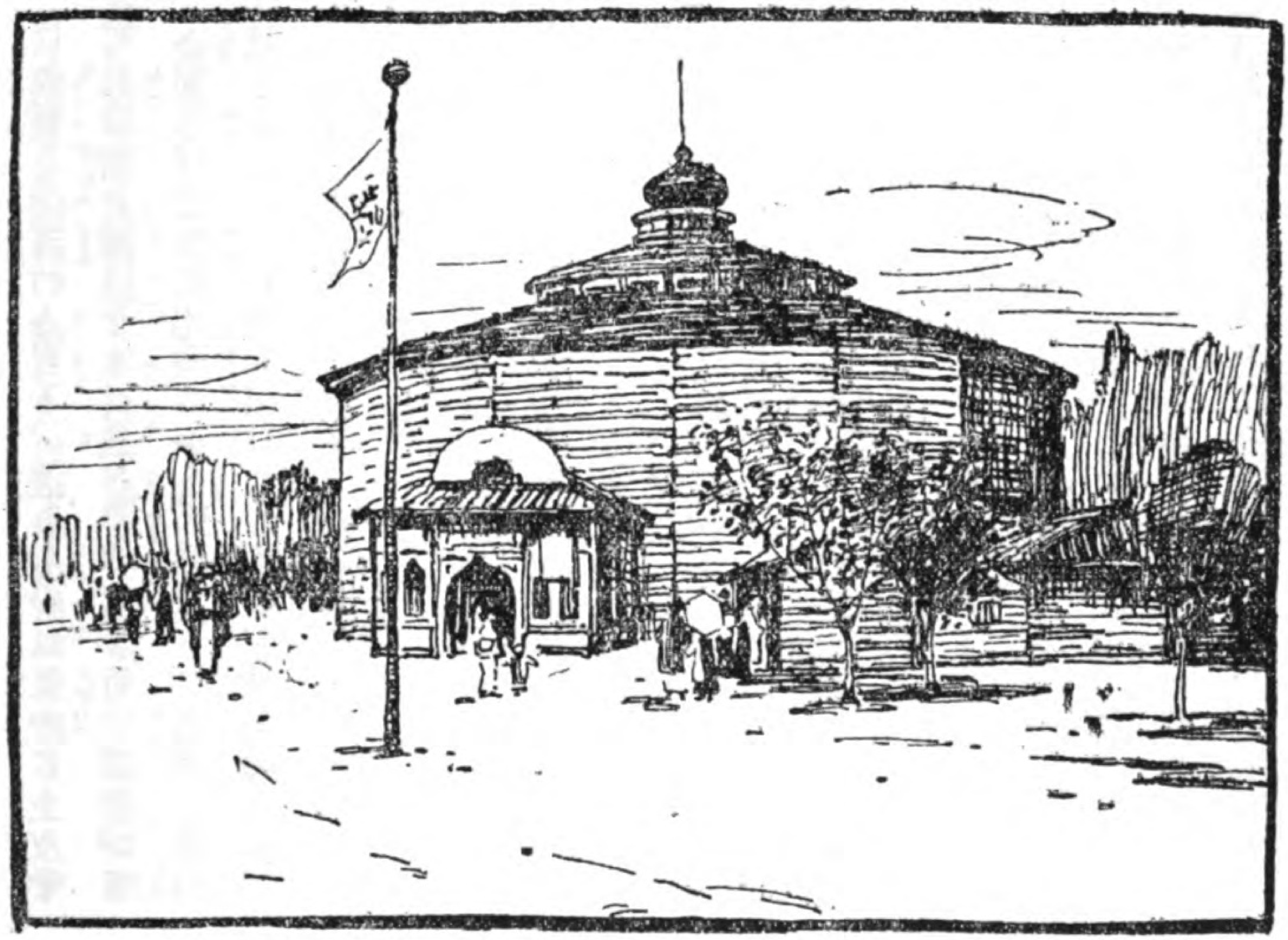
新綠すでに濃綠となり、鮮明なる首夏の日光に反射して、樹々皆な綠玉を點したるが如き日、前栽に植ゑたる牡丹花に對したる時ほど、最も色彩の明美と瑰麗とを感じたるはなし。牡丹は花の王なり。その紅色なるは炎を包めるが如く、その白色なるは雪山の崩るるに似たり。之に配するに百獸の王たる獅子を以てするは、他に之に匹する物なきに依る。昔、隋の陽帝の時、初めて此の花を賞し、唐の玄宗皇帝の時に至りて終に百花の王となりたり。此の花を眺むるには最も正午に近き、日輪の光度強き時を宜しとす。我が國にては古へ之を深見草、又二十日草等と稱して和歌に詠ぜられしが、多く土地に適せざるを以て、從つて其の美を賞する者少かりき、牡丹に相似て芍藥あり。古來花の相と稱せらる。是れ牡丹を第一として百花の王としたるが故に、芍藥を第二として牡丹の宰相たらしめし意なりとぞ。牡丹は純紅、純白、この二種を最上とし、芍藥は紅色の花瓣と幣束の形したる黃金色の蕊を有するものをば第一位に置けり。

金屛の赫奕として牡丹かな　蕪村

五六代芍藥つくる小家かな　士朗

櫻花に對して盃を傾くるは可なり。梅花に對して茶を啜るも可なり。されど牡丹花に對しては盃も、茶も似合はしからず。唯だ紅玉の如き覆盆子を玻璃皿に盛り、太白砂糖をかけ、牛乳を入れ、銀匙にて之を啜すべし。然らざれば暗綠色なる長大の葉に擁せられつつ黃金色に輝ける枇杷を名器に盛りて、僅かに其の一二顆を喫すれば、牡丹花に對して甚だ對稱の妙を極む

上野パノラマ館　（東京の遊園）



るを覺ゆ。

◎闇夜に小川を傳ひ行けば

月なき闇夜にいさゝ小川を傳ひゆけば、地蟲低う鳴き、螢火繚亂として飛びかふ。寂寞の情に堪へずや。

夜もすがら燃ゆる螢をけさ見れば草の葉ごとに露ぞ置きける　　健守法師

折々、地蟲の低う鳴ける間に、戸を叩くが如き聲あり。更たくるに從ひてその聲益々繁し。是れ水鷄の鳴くなり。

夏の夜は槇の戸たゝき門たゝき人だのめなる水鷄なりけり　　和泉式部

古へ、螢は腐草の化したるものと思はれ、腐草若し暑濕の氣を得れば螢となると言ひ傳はりぬ。螢の名所は昔も今も甚だ多く、石山、宇治などは殊に名高く、宇治の螢は源三位頼政の亡魂なりとさへ云はれぬ。

◎朝に池の面を眺むれば

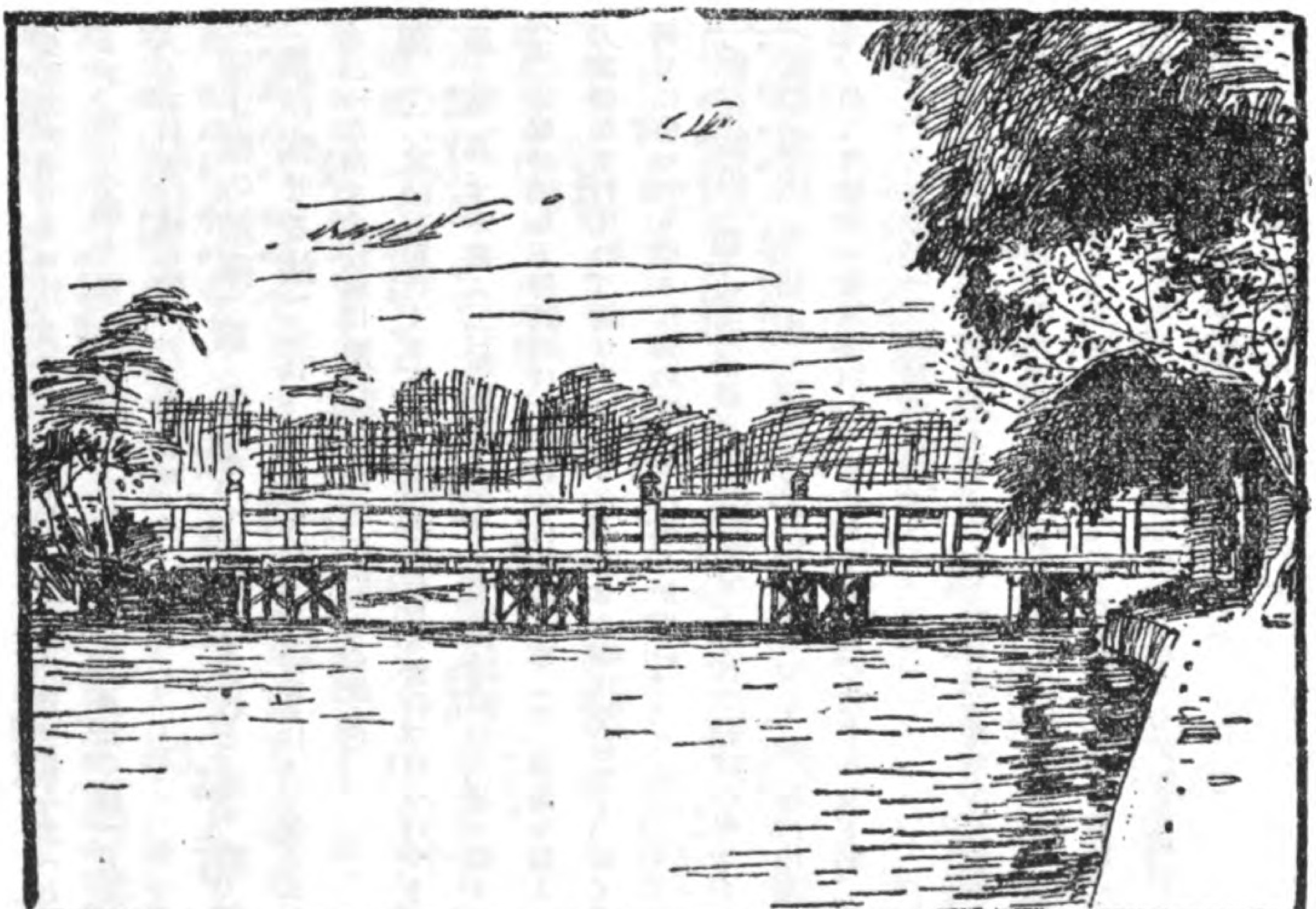
雨はれたる朝、水亭の欄干に倚りて池面を見れば、燕子花の紫花一入濃く咲き出でぬ。女の姿うるはしきを燕子花に譬へたるもの無きやうなれど、蓮花に譬ふるより更に相應しかるべしと思はる。池の畔に花柘榴あり。その紅色の鮮かなるは、燕子花の紫色なると誠に好き一對なり。

昔、在原業平朝臣東國へ下りし時、三河國八つ橋に來りしに、燕子花美しく咲きたりしかば、かきつばたの五文字を五句の頭につけて旅の心を詠みにき。

から衣きつゝなれにしつましあればはる〴〵きぬるたびをしぞ思ふ　　藤原業平朝臣

花柘榴はその色甚だ美しけれど、我が國にては之を愛づる人少く、詩歌、俳句によまれしは殆んど數ふるほどなり。併しながら支那にては古來その美を認め、美人の赤き裳裾をば柘榴裙など云へる詞さへある位なり。

花柘榴干すや四五枚麩ぶた　　李枝



赤坂辨慶橋の櫻　（東京の遊園）

衛生顧問

糸左近

石鹸に就て ■ アイボリー石鹸は、皮膚に適しませうか御示し下され度。(筑後の田舎娘)

■ 何石鹸に限らず、都ての石鹸は垢を落し、且消毒の効あるものには相違無いが、之を過度に使用すると皮膚の潤澤を害ひ、却つて有害となるのみならず、皮膚を美麗にするなどの効力は如何なる石鹸にも無いことを斷々乎として保證致します。其點に於ては從來の糠及び麩の方がよい、即ち糠二麩一の割合で混合し、之を以て顔及び肌を御洗ひになつた方が衞生上ばかりで無く、美容上に於ても宜いのであります。麩は藥屋に賣つてゐます、若し無いと云つたら牛乳屋より分けて貰はれよ。

長身器に就いて ■ 私は今年十八歳で身は僅に四尺六寸に候、此頃長身器といふ物が出來居り候由、之を買ひ求めて使用すれば身丈が伸びませうか、又外に何とか良き方法有りませうか。(讃岐の愛讀一少女)

■ 米國のカーチレーヴ商會で賣つて居るのを東京で受賣して居ます。之を使用するには一日に牛乳を四合以上宛飲み、其他の滋養物も取り、坐ることを止して腰を掛ける習慣にし、運動を適度に爲さればなりませぬ。斯くして該器を六ヶ月以上忍耐して使用すれば、若い人なら多少の効が有りませう。其の他の長身法も或は羊の淋巴腺を食べれば伸るとか、或は小麥と烏麥とを煎じた汁を飲めば長身法の第一だとか云ふ人も有れど、嘘の第一だと思召せ。

逆上症の治療及び瘦せる法 ■ 私は至つて健康ですけれど、逆せ症で顔面赤くほてり、近頃になつては日に〳〵肥え太り候、右二つを治す方法或は藥は無之候や。(近江の心配女)

■ (一)運動を勵行する事 (二)滋養に富める食物を取らぬやうにし、而も節食する事 (三)精神を使用する事(四)臨臥の入湯を缺かさぬ事 (五)睡眠時間を五時間或は六時間位に縮める事 (六)便通を整ふる事の六箇條を實行すれば逆せ症も治り且つ瘦せる事は受合です、斯くて思ふ通りに瘦せたら順々に元の生活に復るが宜い。

便秘症の無藥療法 ■ 平素便通あしき爲氣分すぐれず醫師の申さるゝには内服藥や灌腸では習慣となるから食物に注意せよと云ふ、依て毎朝水一合宛を飲んで居りますが、何の効も見えず候、如何樣に致したら宜敷候や。(横濱の百合女)

■ (一)腹部の冷水摩擦をする事。(二)香の物及び菜類を比較的多く食する事。(三)腰湯を毎晩爲す事。(四)腹部を夏冬共にフランネル樣の物で温包しておく事。(五)夜寢床に這入つてから兩手を以て輪狀に按摩する事(六)心配事をせぬ事。(七)運動を怠らぬ事の七箇條を勵行し、及び毎朝冷水を飲むことを續けらるゝ事。

白帯下の簡單療法 ■ 白帯下の爲め少し運動致しますと下腹痛み困りますが、何か簡單なる素人療法を敎へ下され度。(小石川の困苦女)(備後の心配女)

■ 醫療を受けられよ、輕い白帯下だと思つてると豈圖らんや子宮癌で有つたといふやうなことが往々有ります、兎に角最も簡單なる療法はイルリガートルといふ器械を買ひ求め、之に日本藥局法の食鹽二匙程を微温湯に溶したるもので、一日に二回程宛洗れよ。これならば醫療を受けつゝ行はれても害になりませぬ、のみならず、輕い白帯下はこれで治ることが有ります、但し器械を時々熱湯で消毒せぬと不潔になつて圖らざる有害を來すことが有ります。

ヒステリー病と神願 ■ 私事年來ヒステリー症で色々治療を受け候へども、更に効無く困り居り候處、或る人の申さるゝには、本病は醫藥よりも神に禱つた方が效があると申され候、果して醫療では治らぬもので、神力を藉られればならぬものに候や。(下總の迷女)

■ 精神の慰安を得んために宗教を信ずることは甚だ宜いことで、殊にヒステリー症の如き精神的の症には然りであるが、醫療を捨てゝ神に祈禱をしたり、或は中膈を斷つたりすることは宗教の本旨では有りますまい。我若し神なりせば「病氣には醫者にかゝりなさい、貧乏ならば働きなさい、無理な願をしなさるな、御門違をしてはなりませぬ」と夢枕にでも立つて願下をさせませう。

糖尿病の療法 ■ 幼少の頃より糖尿病で苦しんで居りますが、何卒自宅療法を御敎示下され度。(静岡の嘆願女)

■ 言ふまでも無く醫師に就いて診療を乞はれよ、兎に角藥物のみを以て治さうといふことは迚も駄目である、故に攝生を嚴守して之を退治せればならぬ、取りも直さず攝生は療法である今之を逐一述れば(一)含水炭素の食物例へば米麥芋類砂糖類等の如きを絶ち、而して鶏卵、牛酪魚類、キャベツ、芹、菠薐草、胡瓜の如きを食べてるが宜い。所が我が國人にして米飯を食べぬといふことは非常に苦いものであるけれど、病が苦かつたら忍耐せればなりませぬ。(二)運動をして汗を多く流すやうにするが肝要だ、然うすると小水が少くなり從つて糖分が下らぬ。(三)入浴の數を多くすることも糖分を下さぬ一つになる。(四)按摩法も大切である。(五)空氣日光に觸れればならぬ。(六)内服藥は色々あるけれど素人の方に申しては危險であるから言はぬ。

耳鳴の療法 ■ 私は今十八歳に候が、九歳の時酷く頭を打たれた爲かも知れませぬが、此頃は夜分床に入りますと耳鳴を訴へて眠られぬことがあります。又晝でも少し靜かな所に居ますと同じく鳴つて參ります。何卒之を治す方法を敎へ下され度。(紀伊十八歳女)

■ 耳鳴にも色々ある。(一)磬鳴といふのは蟬鳴の如き音が聞えたり、或は湯の沸騰するが如き音の聞えたりするので、之は劇しい響を受けた爲などから來る。(二)鐘鳴といふのは遠方の松風か或は濤の音が聞ゆるやうなので、之は腦が惡かつたり或は聽神經に故障があるゝと聞ゆる

のだ。(三)内響といふのは色々の雑音が聞ゆるので、之は中耳の内に分泌物が溜つ、其れが動く際に聞ゆるのである。(四)幻聴といふのは音樂の聲が聞えたり、或は人の囁く聲や或は蛙の聲などが聞ゆるたいふ、之は耳中に貧血してる所が有るより起るのだ。其他錯聴、複聴などあるが、貴女のは或は其の打たれたことが原因になつてるものかも知れれど、兎に角耳科専門の醫師と内科専門の醫師との二人に就いて診察を受けられよ、素人療治の出來る病ではありませぬ。

吹出物等の雑問一束

■ 皮膚病で困る(下谷の井上たつ子)顔にむら〳〵出來た(大阪春風)無色の細い吹出物一面に生ず(大阪の紅葉)ニキビ或はイボの如き物鼻頭に生じ時々消え失せる(京都嵐山花子)顔にヘメケが出來て困る(横濱の菅生)顔に吹出物のシミがある(大阪の困り女、鼻の邊にブツ〳〵が澤山出來た(大阪の十七歳女)
右何れも其の療法を教へ下され度。

■ 何れにしても夜寝る時、イロチオールを酒精適宜の量に溶かして塗り、朝起てから卵を半個或は三分ノ一位の量を塗り、三十分時も經てから清水で洗ひ落すことを實行することを一二ケ月試し、それでも治らなんだら皮膚病専門の醫師に治療を乞はれよ。

皮膚の弛みを治す方法

■ 姉と私とは二人共顔の皮膚に「たるみ」が出來て艶が有りませぬ此の療法を教へ下され(紅葉女白萩女)

■ 河魚、海魚の刺身や鳥獣肉や緑菜類を多く食べるやうにし、大氣に觸れて運動し、左の如き鐵剤を服み茶を藥物にして試られよ。

還元鐵 〇、一　鹽規 〇、一　甘草末 適宜
右九丸に作り、一日三四回食後直ちに三丸宛

即時効ある毛生藥は有るか

■ 塗けると即時に薄毛が濃くなる藥を何卒々々教へ下され。四十一年度の本誌に載せてあつた毛生藥は幾月で効あるか。(女學世界愛讀女)(大阪の尋女)

■ 即時に生ゆる藥は斷じて無きのみならず、永久に塗けてゐても効が無いことがある。要するに毛生藥は左程に効の無いもので、効有るとしても六ケ月以上を要します。

子を有つ法

■ 私は子宮に異常無く、夫も亦人に勝れたる健康者でありながら、七年間子を有たぬ(東京の不姙女)子宮に左程の異常無けれど月經時々不順になり、其の不順なる度毎に姙娠かと樂しみ居れど、又月經が有るやうになり、斯くて日を送り居り候(悲しさの女)顔が蒼くて眩暈し易くて子を有たぬ。(愛知縣の小さき媳)
右何れも子を有つ法を教へ下され。

■ (一)身を温暖にしてゐる事。(二)精神を愉快に暮す事。(三)日光に觸れる事。(四)運動を勵行する事。(五)毎日入湯を怠らぬ事。(六)動物性の食物を取る事。(七)夫婦和合する事。(八)子宮は勿論其他の部分に於ても故障無きやうに醫療を受く可き事。(九)學問技藝等を適度に勉強せぬ事。(十)夫剛に妻柔、若くは妻剛に夫柔、何れにしても性格を反對にするやうにす可き事であるが併し子を有つと有たぬは理窟一方で

は論ぜられぬもので、かう申す左近も今二三人子供を儲けたいものだと願つて居ますが、僅かに一人居るのみです。

月經不順の原因及療法　■廿七歳に候て十五歳に初經を見てより今年まで大抵不順に候、之を治す藥を御教示下され。(大阪の花井たま子)

■不順の原因は色々あろけれど、一言に盡せば身體の何くかに疾病が有るのですから、名醫に就いて其の疾病の有る部分を發見して貰ひ、且つ其の治療を受けらるゝこと肝要である。素人療治としては毎度申すことながら藥よりも毎晩寢際に腰湯を實行せられよ、之を寒い冬の晩も暑い夏の晩も一日として怠ること無く、責ては一年忍耐して實行せられよ不順の治るのみならず精神が爽快になり、便通は整ひ、子宮其他の部分が調子宜しくなること受合です、之が辛抱出來無いで唯一服の藥で治さうといふことは御無理です。

手の赤くなるを防ぐ法　水仕事の手傳をする爲でせうか、夏殊に冬期になると手が赤く相成り誠に見苦しく困り居り候、これが豫防法を教へ下さい。(小石川大澤みつ子)

■水仕事をしたら乾いた手拭で更に濕りの無いやうになるまで能々拭き取り、後で手と手とを擦り合せて温暖を感ずるやうにし、決して直に火で手を温むることの無いやうになさい、又右の様に實行してヘットを少し塗けておくことも宜い。とは云ふものゝ水仕事の手傳をなし、少し位手が赤くなるなどは寧ろ女子の本分で、心ある者から見たら、却つて斯の如き婦人の方が美しく見ゆるだらうと思はれます。

脊髓病と結婚　■今年で八年間脊髓病に惱んで居りますが、治らぬものでせうか、又私が子を生まぬとすれば、私の家の血統は絶えて了ふので、夫を有てと勸められてゐますが、斯る病中に結婚しても差支有りますまいか。(赤坂の脊髓病女)

■脊髓病にも色々種類が有つて殆んど不治に屬するもあろし、或は又療治を加ふれば、縱ひ平癒まで多くの時日を要するにしても治るのがある。兎に角結婚は平癒したる上ならでは宜しからず候。

(仙臺市泣顏女)へ――餘り幾つもの問であるのみならず、之を一々説明することは出來ぬ。上京なさるなら大學病院で診察を乞はれよ。

(高知の時子)へ――少しの卵を塗けて洗ふことを續けて居られたら、長年の後に治りませう。

(大阪の田中はつ子)(東京のすみれ女)(心痛婦人)(大阪三軒家愛讀者)外數十人へ――來月の紙上に答へませう。

質問は端書にて女學世界質問の旨をしるして左記へ宛てゝ送られたき事

東京市本郷區弓町貳丁目八番地

糸　左　近



いろいろの實驗

菜園の趣味

東京　通子

私共は効外でございますから、少許の菜園へ四季折々の青物を作りますが、自分で手を下すことは誠に樂しみなものです、僅かな空地でも利用されますから、皆樣も實行なさいませ、疊一枚位の土地なれば、爲渡小松菜位は作られます。地面を鍬が無ければ、金の棒か何かで能く掘り返して均し、暗渠泥を其に交ぜて、小松菜の種を播くと、直きに芽が出ます、そこで夕方お米の精汁を時々かけてやると、朝のお汁の實にする位には直ぐに大きくなりますから、大きい葉から摘み採ります、此樣に致したのは誠に柔かで、自分の丹精だと思ふと餘計に美味うございます、そして皆んな採り切つた所で又前の方法で種を蒔くと、年中新しい物が喰べられます、少し手はかゝりますが、甚麼に樂しみだか分りません（賞）

面白き貯金法

芝區　くに子

私は去年以來紙屑、新聞、石油の罐など凡ての廢物を賣つたお金は、たとひ一錢でも二錢でも一定の小箱に入れておきまして、一厘も左右いたしません、それでもう如何程かと昨日見ましたら、まああなどれませんよ、壹圓近くに成つてゐました、私の宅の樣に少人數でしかも洗ひ流した樣な新世帶でもこんなですもの、敢て舊家と云はずとも普通の家ならばさぞや大きい事だらうと思ひます、斯くして何十年と貯へ、その上で適當な事に寄附でもしたらば、誠に面白い事だらうと思ひます、それから今一つはシヤツなど洗濯屋へ出すべきものを内で洗ひ、その洗ひ代をまた別の小箱に入れて置いたらばこれまた一興かと思ひます、これから皆樣一つおためし遊ばしては如何、造作ない事ですから、（賞）

召使に一日二時間の暇

くちなしめ

私は下女を遣ふのに一日に二時間の暇をあたへ升、一人の下女ゆゑ晝の用事は私も手傳ひ、夕飯後八時迄は宅の用事をさせ、八時から十時迄は當人の心まかせに致させ升、かういたせば用事は必ず熱心に致しまして何事も手早く出來て心持が宜しう御座い升、又字を習ひたいと申す者には出來ぬながら手本をやり、子供の讀み古した本をあたへ、かやうに

して目に一丁字もなかつた女二人は、假名で手紙をかくやうに成りました、わづか日に二時間のひまでも、自分も人も利益を得て居り升事はおほきいものでございます、（但し夏季は六月廿日より八月廿日迄は晝後二時間暇をやり升）（賞）

屑餅のお萩

岡本朝子

硬くなつた餅のかけやかびたのを、水に漬けておいて、洗ひ上げる時くろ〲擦して、水を流し、又前の樣に五六度水をかへて流すと、かびは皆流れて仕舞ますから、笊に上げて水をたらして置ます、そして朝御飯を炊いて、ふき上つた時、其上に前の餅をばら〲と入れて蒸しおきて、御飯をうつす時、其上側をとり、擂木でよくつきまぜてお萩に致しますと、結構なお八つが出來ます。

筆の用ひ方

牛込　華子

私は筆を求めると、直ぐ微温湯で洗ひ、悉皆糊氣を去つてから使ひます、而して習字した後では紙でよく〲墨汁を拭き取り、金屬製の鞘に納めて置きます。斯う致すと、何時でも筆の尖端は柔かで、書きよく、且つ少しも痛みません、私は昨年五月求めた一本の筆をいまだに用ひて居りますが、益々手馴れて書き好くなるやうに覺えます、時には十日程用ひないことがあつても、尖端は硬固りません、皆樣も是非お試しなすつて御覽遊ばせ。

埋木細工の使方

備後　石井露草

私の家に埋木のお盆がございました、そして何時もふき〲して、一度も水はくゞらせないで、光澤があつて大變よくふきぬいたのを、田舍から未だ來たての下女が、知らずに其のお盆を水の中へ浸して置いたので すつかりつやがなくなつて了ひました。

美味しいジヤム

東京　さかえ

私共では毎年田舍から澤山の蜜柑を買ひますので、腐らせるも惜しいと存じ、ジヤムに致して保存します。蜜柑のジヤムは甘味　酸味に富み、恰度杏のジヤムの樣で、結構なものです。その製法は、先づ腐れかゝつた處は庖丁で削ぎ取り、皮を剝いて二つ切位にし、可成く深い鍋に入れ、初めは火を弱くし、汁が出て來たら强めて煮立たせます。沸騰つたら裏漉にかけ、全分量の七分目程砂糖を入れます（アタ引なら猶よし）すると、ドロ〲になりますから一度煮立せて、今度は焦げ付かない位の火で約そ二三時間煮詰めます、誠に美いジヤムになります。

布糊の代用物

神戸 岡本郁子

溫飩粉三合許りをドロ〳〵に溶くとき、水一升五合程を沸らせて、湯をかき廻し乍ら、前の溫飩粉をソロ〳〵流し込みて、かきまぜ、煮立せて裏漉しにして適宜の濃さに水をまぜて張物をすると、布糊で張るのと少しもちがはず、しかも餘程經濟です、溫飩粉三合程で七八反位は張れます。

二つの經驗

大阪 庫野のぶ子

疊が塵埃で汚れたのを拭き淨めることは可なり、面倒な仕事ですから、つひ怠り勝になるものです。之を淨める最も簡便な方法は、箒で疊の表を掃く前に、卯の花(豆腐滓)をパラ〳〵と疊の上に撒いて、少時してから掃くのであります、かう致すと、宛然拭いたと同じ樣に綺麗になります。又繪の具で彩色する時分、其繪の具に少し砂糖を混ぜて使ふと、綺麗な光澤が出ます。

脚氣に就て

大和 菊水

追々夏季に向ひますと、脚氣を病む人が少なくない、私も其一人で、足から手先口邊までも痲痺して物云ふのさへ動悸はげしく、毎年困て居ました、昨年も其通り、然しさう何時も轉地は氣兼なのでふと何かに有つたのを思ひ出して、米飯を悉く廢してパンの一點張にし、空腹なれば麥湯等で濟して居りました處、四五日後より日に日に下部より痲痺とれ一月程の中に痲痺だけは全く去り、漸々と快方に向ひました、皆樣の中でもし御同患の御方があれば一度御試し遊ばせ、

鮭の食べ方

栃木 淸子

鹽鮭は何といふても田舍の家庭には無くてならぬお總菜の一つですが、餘り鹽の强いのは困るものです、私共では是迄、斯う云ふからいのは米磨の水に浸けるか、又は粕漬か、甘酒漬に致して、鹽氣を脫いて居りましたが、此間、不圖物好に、豆腐のオカラの中に埋めて置いて見ましたところ、奇妙によく鹽氣が脫けて、何時になく美味しく戴けました。

棕梠類の利用

大阪 森 三子

棕梠箒の役に立たなくなつたのは仕方がないものゝ樣に思召す方もおありですが、決して然うでありません、私宅では棕梠を束れてある所の糸を悉く取り去り、何かに捲き付けて置きますが、かう致すと何にでも利用されます。また其棕梠は糸の捲いてあつた綺麗な處を三つ程に分

げて、其の中央部を菅の糸で、堅く括り兩端を切り揃へますと、丈夫なメアシが出來ます。それから釣瓶繩の役に立たなくなつたのは、是亦た捨てずに、二寸五分か三寸程の長さに切つて、其眞中一寸程の間を菅の様に括つて、メアシに致します、此方は大層柔軟で、器物を洗つても傷が付かないで宜しう御座います。(實)

雑誌の整理

岐阜　田中柏葉

私は少女の時分から引續いて、女學世界を愛讀してゐるので、古くなつたのが隨ひされぬ程澤山あります。ソレデ私は之を何うしやうかと考へました、屑屋に賣ると、一貫目とかいふことで、一冊五六厘にしかつきませんので、餘り勿體なう御座いますから、寧そ自分で部類別にして製本して見やうと存じ、バラ／＼に解いて、口繪は口繪で集め、料理は料理で纏め、衛生は衛生、育兒談は育兒談で一綴に致し、而して此等に表紙を付けましたところ、立派な寫眞帖、畫帖、料理の栞、育兒書、名流婦人の生活、和歌集、美文集、風俗誌等、滑稽もの／＼有益な本が得られました。

火傷の應急手當

富山　西田秋園女

私は裁物をしやうと思つて、布海苔の煮沸騰つたのを金盥に入れて冷して置きました。すると直ぐ其後へ、親戚の三歳になる女の兒が遣つて片足を突込み、辷つて轉倒ぶ拍子にドロ／＼に成つた布海苔の熱いのを浴びたのだから耐りません、ヒー／＼泣き叫ぶのです。私はいきなり抱き起し、水で洗つてやりますと火傷は幸ひ兩脚の膝下少し丈でしたが、眞赤に腫れ上つてゐるのです。私は此時或る人から教つたことを思ひ出したので、早速南天の葉を鹽で揉み、其汁を着けてやりましたところ、暫時にして泣き止み、腫も次第に退きました。

赤兒の臍出血

麻布　靜子

近所に先日、四十近い婦人が御産をしました、何しろ御年を召して初めての御産なのですから、御骨の折れましたこと。それでも産れた赤ちやんは誠に丈夫で、皆さん大悦び、別ても御良人は嬉しさの餘り、抱き上げて搖つたり、頬に接吻したりして入らつしやいました。所が其晩は火の付くやうに泣くので、何うした事か、若やと思つて臍の繃帶を解いて見ましたら、臍部から出血してゐるので、私は吃驚致しました。この臍出血は誠に怖いもので、其傷口から黴菌が侵入したり、續けて出血したりして、折角丈夫に生れても回復の付かない事になる例は往々あります、然し直ぐ手當することが出來ましたから、今では其れも治りましたが、一寸御注意までに。



和歌

佐々木信綱先生選

一等

○　佐渡　渡邊とみ子

山の湖さ青の水に獵人の銃の烟を白く浮べぬ

評　靜寂、神代の如き山上の湖、さゞなみの上に眠れる鴎、「そこにも猶おそひ來るうき世の風を巧にうたひ出でられたり。

二等

○　韓國　大井柳子

淡雪は紅梅色の衣きたる高麗のうなゐの黒かみにちる

評　色の配合もわざとらしからで佳し。

二等

○　信州　深井伊智子

窓の外日はうらゝけし蜜蜂の櫻に通ふ羽音せはしく

評　近き頃、紀の國紀の川のほとりに住める教子の上京せられしが、蜜蜂を飼ふ樂しさを語られしを聞きて、歌によまばやと思ひし折から、此歌をよみて一しほ、山里の生活、なつかしく成りぬ。

三等

○　尾張　榊原みね子

春雨や絞匂へる有松の古き町屋を燕の飛ぶ

評　廣重の東海道五十三次の古き錦畫を見る心地す。

三等

○　牛込　峰鈴音子

青嵐に入りてかをれば裁板のうすものゝ衣さゞなみぞよる

評　下句原作「うすものごろもさゞなみよする」

三等

○　豐後　熊谷野菊

のどやかに島の少女と歌ふべし瀬戸の海より夕潮は來ぬ

評　うつくしき唄聲もおもはれて。

秀逸

○　横濱　小豆澤清野

にこやかにたゞほゝゑみて物言ひぬ君の機にも白桃咲きぬ

○　三河　はる子
いくすぢは銀の色して佐保姫の衣縫ふらしも春雨の降る
評　いひざまいまだしき點はあれど、うつくしき歌。

○　愛媛　渡邊梅子
逝く春を何しのへとかゆるわかぬたそがれどきのものかなしみ

○　豊後　菅原芳子
花もなき青き木立にしと〳〵と日毎雨ふり五月となりぬ

○　小樽　上原玉枝子
茫々とはてなき地を行く如く心曇りぬ悲しめる日は

○　下野　片岡浪子
朦朧と車ひゞきてよみかへる白き大氣に町の夜明けぬ

○　豊前　田鶴子
いく度か潮の音に夢さめぬわが生ひたちし島の夜に似て

○　美作　田鶴子
姉に得し絹のてまりの失せぬとてひねもす泣きし昔こひしき
評　女らしきをもて採る。

○　麻布　あけぼの
あかつきのもやのなかなる若草や神代のさまに小鹿むれゐぬ
評　下句よし。三句原作若草野とあり。一字改めつれど猶いまだし。

○　愛知　たそがれ女
天つ姫月の御船に棹せば音なく散るよ白銀の花

佳作

○　京橋　村上白百合
故郷は母屋の庭の芍薬の紅き芽ぬらし春の雨降る

○　横濱　吉川香都子
古井筒手まり落してひた泣きしいとけなき日を思ひ出づるかな

○　岩代　木田八重子
併後に麻機織りし君戀ひぬ小木曾の山の石楠の花

○　麹町　牧野はん子
忍同しのび音に泣く島夕汐をへだてゝ春の花見る

○　出雲　治子
戀の歌きゝながら野の宮に旅の日記かく春の大和路

○　河内　西村千代子
天地はうすき絹もて包まれつ夢路行くことおぼろ夜の旅

○　豊後　吉眞靜子

○　芝　秋浦棠子
君が住む花の里よりはるの風青原づたいわがかみをふく

青き濃白き波立つ海の面に眞晝の光り溢きてかゞやく

○ 近江 中村清子

川沿の畔を過る眞晝の夏笑掠む小鳥哉

○ 越中 榊原睦子

鶯の今朝の初音のうれしさに衣ぬふ手をしはしたゆたふ

○ 相模 宮川喜女子

語らいしその日おぼえてしめやかに春雨ふりぬますらひの身に

○ 越後 岩本芳子

藤つるの伸びつくしたる上枝より小とり一むれ南にとびぬ

○ 美作 龍子

初夏の野にかぐはしき白百合と君が心といづれゆかしき

○ 愛媛 渡邊峯子

立てかけし二十五絃はおのづからさゝなりすなり逝く春のうた

○ 熊本 細川千代子

朝雨はあとなくはれて悠々とこぎゆく舟を窓ごしにみる

○ 大阪 中島康子

雲と散る櫻の花のたえまより糸よりほそき春の雨かな

○ 門司 勝吉はるみ

青白き夏のあしたの月光に顚へて立てる並木松原

○ 羽前 野口秀子

我魂は四月の春の風となりて楢の花を吹き渡らまし

○ 三河 島田國江

手枕の夢こゝちよきこのよころ音もしづかに春雨のふる

○ 小樽 金子みさを

おん母のよろこびまする御顏よあり〳〵見えぬ汽車に乘る朝

○ 富山 藤田あきら

貴嶺の雪のあさはしのぼりかれてたゆたふわれを秋風さむき

○ 奈良 富澤美龍子

故もなくたゞほゝゑみの溢れ來ぬ櫻の窓に歌思ひ居れば

○ 大阪 豊花

爽やかた胸病む人と語りつゝ波の音きく夏の夕ぐれ

○ 伊勢 馬場はなえ

琴の音は時雨るゝなかにたゞよへりその淋しさに心亂るゝ

○ 福山 松下春子

雲そびゆ数百年の松ふるき福山城の春の夜の月

○ 日向 新名直子

田螺拾ふ里のうなゐ子日にやけてあちこち歩く春日和かな

○ 伊勢 佐々木らく子

化粧をへて鏡に若き我かげよふと女てふほこりに笑みぬ

○ 本所 根岸百合子

淋しさに空行く雲をながむれば世に亡き友のいとゞ戀しき

○ 岡山 林榮子

花咲かで室に枯れたる鉢の草それにも似たる我運命かな

○ 芝 森たかえ子

ふるさとの母を戀ひて暮れするさびしき夜半に春雨のふる

○ 相州 中田靜江

搖籃に眠れる乳子の手に持てる花にも蝶のねむりけるかな

○ 兵庫 安藤まと

むら鳥ねぐらあらそふ聲のして花の梢は薄月のかげ

○ 韓國 川崎みつゑ

夕さればたちばなかなる霰音にきかまほしきは和ほとゝぎす

○ 京都 西村いし子

みやみなくふる春雨に桃のはな散りゆくあとの梢さびしも

○ 筑後 原田つる子

春の風野に咲きぬれし菜の花のつゝましげなるうすかなり吹く

○ 横浜 中島菊齋

佐保姫の舞のみこゝろも繰る糸は今朝ふりいでし春の雨かも

○ 米国 村植光子

おもかげの父に似たるときくごとにそと立ちてみぬ姿見のまへ

○ 栃木 鈴木いつ

夕霧はほのにかゝりぬ白梅にうす明りする七戸の家に

○ 東京 石木とく子

初夏や卓に揃へるわが家の障子にそよぐ若楓かな

○ 岩代 江口せつ子

新樹皆曙をめげてよろこびぬ夏来と歌ふ小鳥の聲に

○ 磐城 伊東百合子

佐保姫の玉手にすさむたきものゝ匂ひけぶれる春の朧夜

○ 韓国 藤井千代子

春の日や朽ちし襟の切かぶにもの淋しさをふと感じける

○ 門司 萩野英

三尺の窓にしづるゝむらさきの藤うつくしき春の雨かな

○ 本郷 吉田まさ子

初夏はものぞなつかしき萌ゆる葉も水色衣の人のすがたも

○ 大阪 秋野峯子

夕風にそよろ匂ひてふるさとのまほろしにみゆ木犀の花

○ 牛込 渡邊さと子

もののふの痛手養ふ鄙村に風暖かに桃の花さく

○ 牛込 平塚白百合

丘の家白き馬などはなちたる若草の野にかげろうもゆる

○ 千葉 水野やす

君とわが若き夢をさゝへつゝ湖にしぐるゝ春の雨見る

○ 京城 中尾艶子

鳩の子は疑ひ深きまなざしにおどおどしくも人を見るかな

○ 小石川 高橋春江

春雨晴れに見物するなる若き葵の紅き手がらを美しと見ぬ

○ 丹波 菊森一枝

夢に似し雛の宮に美き姫の春を舞へるか紅梅の散る

○ 越後 みちを

霧ながら霞こめたり鮮の山霧きなり春来たるらし

○ 牛込 平塚つげ枝子

風吹けば草のはずれのさやさやと琥珀の玉をからむが如き

○ 姫路 いと子

春雨の軒の玉水音たえて庭の欄に月ぞ匂へる

○ 大和 野尻良子

春よむにあきりものうき春の日を午なく響す川関ふの家

○ 出雲 しらぎく

なたれ咲く小川のほとりかごさげて家路いそげば鶯の聲

○ 河内 中野富子

春風にかよふ琴のしらべこそ月にうかるゝすさびなるらし

○ 奈良 野尻石郎

草もゆる廣野に春の舞姫のながきもすそを引きはへたまふ

○　愛媛　渡邊緑子

船は入りぬ君に逢ひ見む嬉しさをむねにゑがきてまつ波止場かな

○　堺　さくら女

初瀬寺や朝の運會に石階を留つゝきけり緋ぼたんの花

○　大阪　小島千鶴

野の道を鶺鴒二つ蝶二つさきになりつゝあとになりつゝ

○　筑後　原田つる子

春の雨雜木林の若葉みななやましげにも泣きぬれて降る

○　河内　糸若柳野子

唯一人とぼ〱と行く和歌の浦根上り松の夕月夜哉

○　佐賀　江口靜子

咲く花のにほひにまがふ霞よりもれてゆかしきおぼろ夜の月

○　京都　大北靜子

新年を指なりてまつ少女らを羨む我となりにけるかな

○　横濱　月岡やすら

春の野は殊になつかし美はしき花得てしより殊になつかし

○　横濱　小豆澤清香

名も知れぬ花を取りきて増へる淋しき身なりあはれとおぼせ

○　滋賀　深田はる子

菜の花の風に散るよと思ひしは同じ色なる胡蝶なりけり

○　大分　菅原尾花子

人訪はぬ片山里の一つ家の青葉若葉にさみだれのふる

○　四谷　安藤きみ子

去年の今日は花のはたちを餘きしてつまとよばれてはおらひし日よ

○　千葉　美鶴

浮舟の波にたゞよふ身にしあれば汀をさしてよらんとぞおもふ

○　陸前　岡山としえ

ふくらみし祇園の花のかずよりも多く寄りぬよろこびは滿く

○　下總　小出保子

ゆくりなく丘をめぐれど君見えずわが前髪に緋櫻の散る

○　大阪　谷川きわ子

糸つむぐ嫗が家の春の緣幼き兒等は土あそびする

○　岩代　木田よし子

和御魂白き光に包まれて森に寢つらむ行春の鐘

○　筑後　原田つる子

霞籠しに河岸色の水ながれ木をへだてゝ櫻花咲く

○　大和　夕霞

花にほふ彌生のけふよ新妻の胸にも似たる春ののどけさ

○　筑後　熊谷蘭

見渡せばたゞ一色の麥畑のひろきみどりに春雨の降る

○　東京　廣瀬春代

春の夜やありし昔のしのばるゝほかげ靜けき京の町かな

○　釜山　朱雀とし子

砂山のしろき光をすひつゝもすなほなる子はうつら〱ぬる

○　靜岡　鈴木矢壽子

豆の花散る淋しさを雨の日の窓に思へり老鶯の鳴く

○　大阪　ゆかり

讀めおきし君がみ文をとりいでゝ昔を偲ぶ春の雨の夜



春窓日記

静岡　天野欣

一日、朝から糠の様な雨がしと〳〵と降つて終日歇まない。雨滴の音を聞きながら六疊で雜誌など讀む、いつも程感興が湧かない淋しい日であつた、誰か訪れて來さうなものと下駄の音のするたびに小窓を排けて見たが、誰も見えなかつた、大石から櫻餅を買ふ。

二日、夜來の春雨が名殘なく晴れ渡つた。庭は洗つたやう。温い日光が心地よく照る。

おひる前洗濯をする、東京の靜江さんより郵便が來た。午後、久しぶりで邸内を徜徉する、どの木もどの草も時節到來と云はんばかりに和かな緑色の若芽を擡げ初めた。わけても柳の芽ざしは面白い、牡丹に芍藥が眞赤い芽を吹いた。何處を見ても春といふ感じがみち〳〵てゐる。桃の花を切つて花瓶に挿す。（壹等）

いやな日

下總　百合枝

弱生の一日、朝靜子さんのところへ香取櫻見物お斷りの返事を上げる。私はこの弱生の春を、總べての美くしいものにそむいて、藥くさい祖母のみとりをせなければならないかと思ふと、ほんとに悲しくなる。

午後靜子さんよりまた手紙來る。貴女の御境遇に同情するなど〻沁み沁み書いてあつた。この温い友情はありがたいが、私は生れつき他人樣に同情していたゞくのが大嫌ひ、何となく一種の侮辱を受けた樣な氣がして、妙に反抗心が起ります。同情に生きる人は弱者です、あゝ私は弱者になりたくない。

「弱きものよ、汝の名は女なり」など〻いふ言葉は私大嫌ひです。けれども實際の私の境遇は――と、また省みると言ひ知らぬ寂しい思ひが胸に湧いてくる。あゝほんとに今日はいやな日だこと。（貳等）

試驗の濟んだ日

大和　操子

窓に倚つて、絲さんと土産物の相談をして居ると、夕飯の鈴がなつた。どや〳〵食堂に詰めかけると、菓子や蜜柑が澤山並べてある。何の人の顔を見ても嬉しさうな微笑が漂つてゐる、舍監がにこ〳〵し乍ら席に着かれて「皆樣、試驗終結のお祝ひですから澤山召上れ」と言はれると、待兼ねたといはん許りに一瀉千里の勢で平げて了ふ。やがて自修室に戻つて見ると、電燈が華やかに若い顔を照して居る。「風琴彈きに行きませう」と、小野さんの發言で二三人駈けて行つた。岡村さんは十日餘も捨てゝあつた編物を出して針を動かす。絲さんは「寄生木」を讀み乍ら袖から日へ手の百度參をさして居る。私と末子さんとは大きな聲で「故鄕の空」を歌ふ、お隣の室からは賑やかな笑聲が漏れて來る。（三等）

船中日記

備中　貞子

窮屈な三等室に居たゝまらず、こそ〱狭い階段を這入つて甲板に上つた、まだ何となく風は寒い様は油を流した様、春がすみが棚引いて來し方も行先もはつきりとは見えないが、母と再會の喜びはもう〱目の前に浮んで居る「花田さんぢやなくつて」と背を叩かれて私は驚いた、赤銅模様で一寸見掛けたけれど、夢にも思ひよらなかつた目まばゆい様な貴夫人はクラスメートの岡さんであつた、金の簪ダイヤのリング、御召といひ、揃ひも揃つて美しい友の姿に射倒される様に覺えた「どこ迄？まあ御一人で」輕蔑の眼で見下された時、私はあきらめては來たもの〻、故郷へ歸ることの面目なさが又ひし〱と胸にせまる、家の人はいはずも哉、村の者迄待つて〻呉れるときく、此見すぼらしい姿を……嗚呼來なければよかつたと思つたが、此刹那又私は一の光明を見出す事を得た、此船の底には眞黒になつて働いて居る男子さへあるではないか、嗚呼弱き者よ……と我から慰めて立上り見渡せば、嬉しい我故郷の港はすでに吾に握手せんとして居た。（秀逸）

裁縫日記

熊本　白萩

昨日田代屋から持つて來た、縮緬の長襦袢を縫ふ。洗朱の地に薄い絲で竹を染め出した、大柄な友禪で、振ひつき度いほど好い柄、好きなものだと針の運びからして違ふのは自分ながら可笑しい。

ふと瞳を上げると、疎らな籬の彼方、青く伸びた麥畑の邊りには、ゆらゆらと陽炎が立ち昇つてゐる。あゝやがて菜種の花がさくとその懷かしい香が、何時もいつも此處迄匂ふて來る。あの頃が一番好きだと、夢の様な事を想ひ浮べて、又も針を運した。（秀逸）

嫂様のお産日記

信濃　松井すみ子

「アノ湯を沸すのだよ、嫂さんがお腹が痛むと言ふからネ、早く……」兼産婆の伴さんは小室で私を敲き立てゝ豆ランプ片手に、臺所の方へすタ〱と行かれる。私は慌てゝ跳れ起きて、帶をぐる〱巻きつけやう〱の事で釜に水を入れ火を焚きつけた。時計が二時を打つ。嫂さんの苦し相にウーン〱呻る聲が高く聞える。

湯が沸いて、石鹸や盥の用意が出來て、暫く經つてから、産婆のお濱さんは悠々と迎に遣つた僕と共に來られた。ウーンといふ聲は益々烈しい。三時が鳴つて間もなく、ギヤア〱と様な泣き聲、實際、可愛らしい聲ではなかつた、大盥に微温湯を満々と注いで運ぶと、産婆は髪の毛の長く伸びた嬰兒を、大切さうに取り揚げて片手で湯加減を見て、産湯をつかはせた。

「ヤア女の子か」と兄様は大悄氣、でも私は可愛らしい女の子だから嬉しかつた。（秀逸）

夕暮の記

長野　中島せつ

春の夕、駒田村の堀畔を私は一人さまよふた。長かつた日も暮う事に近

い、遙かの對岸に、白帆が二ツ、茜色の夕日を受けて浮んでゐる。一帶の黒い松の間を縫ふて、賑やかな脊揚の掛聲が聞えてくる。白い砂山を走る子供の姿は石塊でもころがる樣、丘の上の茅屋から煙が縷るう登つて綺麗な鳩が二三羽舞ひ立つた。

日は今沈むところ、夕雲輝く湖の面を時々柔らかな風が風と波つて、小波がキラ〳〵と岸を洗つて居る。掛聲がパツタリ止んだ、薄い夕靄が水の面を包んで、四圍の村々山々がほのかに夢の樣、長命寺の鐘が、幽に響いてくる、波が白くなつた。

湯の宿にて

岐阜 田島たか子

かさ〳〵と、木の葉に當る霰の音がした。

「明日もまた立たれませんね こんな天氣になつては……」と、隣室で若い嫁の聲。「さうされ、だけど明朝までには歇むかも知れないよ。」婿らしい聲が、襖よりこちらにゐるのか、手に取る樣に聞える。時は既に十時を過ぎたるに、未だ何かごと〳〵して居られる。

私は明日歸るといふ母子の姿を心に描いた。そして若い華やかな、嫁さんは、最う明日行くのかと思ふと、何となく心細い感に打たれ、私一人が寂しい處に取殘される樣な氣がした。

雨の宿

福島 佐藤愛子

三日、あゝ昔が渕は何時霽ることだらう。湯治に來ても臨張効驗が見えぬ降り續く雨に氣が滅入るので、手風琴を彈いて見たが、根から面白くない。あゝ弱き體、不幸な身よと、悲哀の身を欄干に倚せると、いつか軒場の雫に我旅衣は濕りがち。なつかしい村里の方を見返ると森も畑も雨に濡れて、耶麻街道を旅人が俯向きがちに通つてゐる。嘉の旅枕にあたる雨の音も、もう飽いた。

お通夜の晩

横濱 吉田美代子

今日はお通夜なので眼の廻る程忙しい。兼て知らせて置いたので、夕方から皆樣のお詣、私はお菓子、茶器など運ぶ、母樣や兄樣がお相手で四方山のお話、お父樣の御病狀、御臨終の模樣などで話は湿めるばかり、岩瀬の伯母が「美イさん父樣が居なくつて淋しいでせう」と眉を顰めて仰有る。私は唯胸が塞つてお答も出ない。母樣は俯向いて襦袢の袖でそつとお眼を拭はれる、兄樣はお眼をつぶつて顔を反向けられた。一座無言で白けかゝつた時波瀬の伯父樣が思ひ出した樣に 佛前へ進んでお經を上げられる。一同皆な沈んだ調子で聲を合せた。父樣は此淸いお經を何と聞かるゝか、靜かに立昇る線香の煙は夢のやう。

卒業後の一日

東京 京友子

縫ひ立ての袂襦袢にしながら、姉樣冠りを眞似て日あたりで張り物をなする、母樣がメレンスの帶側や襦袢の袖や前掛など、長いのや短いの赤いのや紫のを出して下さる、取はつたや こして指先に力を入れてキュツ

キュッと躯を伸しながら跳る、フト晶子樣の「しみのきれ友禪のきれ緊まぜの」といふ歌を思ひ出して、自分が畫の中の人でもあるかのやうな氣がして、嬉しい、やっと半分ばかり縫った頃、淸やがみどり樣からのお手紙持って來る、小さな蝶の影が、讀んでる卷紙の上をスーッと通った。

マダム日記

大瀬芳枝

朝、入百吉が島岡からの話のあった子守を伴れて來た、年の割には小柄で温順しさうな子だから置くことに決めた。

相變らず雪子の下痢が止まらぬので、久保醫院へ連れて行ったら、院長は今までのおもゆが惡いのかも知れないから牛乳を二倍にして飲ませなさいといふ、何のことだらう馬鹿々々しい、牛乳を止めておもゆにしたものをまた牛乳にせよなどゝ、何だか醫者もたよりない心持がする。

夜は夫への手紙を書く、二時間も掛ったので尺を取って見たら約一尋半あった、昨夜一晩かゝって作った、なつかしいお歌の返しの厭折に、綻び初めた庭の梅を一輪封じて送った。

關先生

三重 峯野花子

三日、御なつかしい關先生からの御便り、嬉しやと見れば、かれて御病中と承りし彼のお優しい奥樣が遂に／＼、生前お手植の花を供せられる身となられた由が例のしめやかな御筆で如何にも悲しく記されてあった。

嗚呼罪なき今年漸く五つの眞雄樣がお可哀相だと常なき世をかこった。

四日、「待に來る夜半も戀しき松風をたえずや苔の下に聞くらむ。」とは嘗て師の君の教へ玉ひし歌なるに、今やそをまこと御身の上にとは夢にも圖り知らざりしを、としどろもどろの書きぶり御はづかしいが、今はそれ所でないと思ひ切って御悼みの詞だけ申上げた。

共進會の一日

尾張 榊原美根子

夫に連れられて共進會を見に行った。正門前の噴水を見るとてベンチに腰を卸したが、人が大勢振向くので恥かしい。工業館の織物はゆっくりと見たかったが、夫に遠慮して素通りした。それでも燒物は二人とも好きなので時間を費した。御臺食の笊蕎麥、見たばかりで胸がふさがって食べられなかったが、更科少女の言葉がをかしい。臺灣館の芭蕉煎餅、胡蝶池畔の散歩、いづれも面白い／＼、夕景イルミネーションの輝いた時、門を出た。

△當世良人氣質

佐々木邦譯述

「此の原著は無名氏著 That Husband of Mine といふ、其の筆致と出版會社の同一なのから推して、譯者は此の無名氏を例の「いたづら小僧日記」の著者と同一の無名氏だと思ふ云々」と譯者は述べ居れり、譯は讀み易く、内容は面白し、定價金四拾錢、府下巣鴨町上駒込内外出版協會發行。



書簡文

遊學中の弟の許に

備中　貞　子

花の色、月の影とりぐに面白き此頃を、御身樣には病の床に御苦しみなされ候よし、我れは泣いて其幸うすきをいたみ候、たよる人なき旅の空にてはさぞく心淋しうも候ふべし、山々御察し致し候、なつかしかるべきこゝ故郷に共に明し暮す身なりせば夜もねでなぐさめ候はんものを、思ふにまかせぬ世に候よ、食事其他の事に就ては細々宿の方へ申遣し置候へ共、尙不自由も候はゞ御申こしなされ度、心して身を養ひ一日も早く嬉しき便りきかせ給へ、母君もいかばかりかよろこばせ給はんに、まして勇氣百倍先頭第一に登らざるべからざる大山は早眼前に天そゝり居り候なよ、山川はるけきこなたより御身樣が幸のみ祈り居り候尙例の手製のカステイラ御送り致し候、姉が心を深く御味ひ下さらば、それにて滿足いたし候ゝゝ（壹等）

地方の友へ

深山さくら

君子樣、昨夜芳子樣の御披露が○○社で御座いまして、私も兩親に連れられて參りましたが、あの房々したお髮を水の滴れる樣な高髷に上げて、地赤の間物に黑地總模樣の袿を召して新夫の君と並んで、入口に立つてゐらしつた芳子樣のお美しさ、いつもの無邪氣な子供らしい芳子樣とはまるで樣子が變つて、つゝましやかな花嫁姿、ほんに御目にかけ度う御座いました、私貴女からのお言傳て申上度いと思ひましたが、始終大勢の人に圍まれてゐらしつて、少しでも暇があると直ぐお召更へといふので、一寸もお側へ寄れませんでしたから、とうくお話もせずにお別れして了ひました、でもいづれ其中また御目にかゝる折も御座いませうから、何卒あしからず、餘は後便にてゆるりと、（貳等）

南國より

小石川　川崎文子

御手紙拜誦。まだお炬燵の內ですつてね、背戶の梅が桃に代り、都還ひの雛子の鼻唄に寸を伸びた麥にさゞ波立つ南國の四月は、越後の御夢には入りますまい。

蛹！蛹！、永い冬の間の、たみ樣の沈默が破られるのも、遠い事では御座いますまい、やかては何處の空に翼伸し給ふ事か、働くといへば譯かけることより外は心得ぬ私には、たみ樣の永い沈默が寧ろ怖ろしう御座います、Xの未來を控へて、孤城を守る蛹！　將來の活動が想ひやられます。牛込の○○樣からは御便りがございますか、越後のたみ樣、東京の××樣、それに南の果ての私、其の間に、微か乍らも通へる血ある事を思ひますとき、不思議な感情に打たれて、淡い誇りを感ずるのです。（參等）

紀州にある父へ

京都 紫苑子

波荒き夜の紀州灘に潮吹く鯨、解剖夫の血まみれになる光景など、新聞と仰せ越し下され眼に見ゆるやうにて候。鯨を捕獲せし夜は徹夜遊ばさるゝ由、何卒お風邪召さぬ様に御注意遊ばされ度願上候。宅の方は皆皆至つて丈夫に御座候間御安心遊され度、火の用心戸締りなどよくよく注意致し居候へば御心配御無用にて候。御申越しの大島の絹入今日御送り申上候。外に菅御の甘納豆少々、御茶菓子に遊され度、また鹽鰹は、鹽味が冷えるといけないからとの御心遣ひにて候。（秀逸）

友の許に

熊本 白萩

貴女、この頃何して居らつしやるの、矢つ張りスケッチ？ 私貴女の事考へると何時でもあの、マガレットに巾廣の白リボン、畫板に向つて少し頭を傾げて美しい襟頸を見せて被居つたお姿が浮びますの、この頃は髪は何に結つてゝ、マガレット、桃割、それとも島田？、オホゝゝゝ矢張り束髪でせうね。

私最うすつかり田舍者に成つて仕舞ひました。髪だつて束髪は母が嫌ひですから、桃割に白い手拭被つて裾を端折つて、裏の畑でお菜摘んで居る所なんか、御覧なすつたら、吃度喫驚りなすつてよ。（秀逸）

米國の義兄へ

南海 露香

ソルトレーキの美くしい寫眞帖御送り下さいまして有難う御座います、くり返しくり返し拜見して遠い遠い綺麗な御地の有様を想像致して猶此中に兄様の御姿があればどの様に嬉しいであらうと思ひました。

そして御封入下さつた亡き姉への御志、確かに御受けを致しました、母も私も御心の程泣いて御喜び致しました、翌日早速墓參致しまして墓前に手向けました。あゝ地下の姉はどの様に嬉しく思つたでせう。三年前の悲傷又新らしく胸に湧き返つて、暫らくは得も立ち去らず、遠い米國の兄様を思ひ、十萬健士の姉を想ふて何だか夢の様な心持ちが致しました。御歸國の日を待つて居ります。何卒御身を御大切に遊ばせ。内地は唯今花盛りです。左様なら。（秀逸）

都なる友へ

福島 小菅そめ

春子様もう何も仰有つて下さいますな、私の頭には家庭などゝいふ觀念はなくなつてしまつたのです、人は私の事を何といはうが、そんなことはかまひません、勿論自棄は起しませんよ、私は唯、日一日を苦慮なく暮して、自分の趣味に生きて行かうといふ考です。しかし私は數多の知己や諸姉方には決して私の様な經路をおふみなさらんやうにと、陰ながら祈つて居ります、なほ春子さん、あなたのスヰトホームを幾重にも祝し、光ちやんの御健全を祈ります。 とし

歸郷を勸むる文

尾張 榊原美根子

私、嫁ぎたりとて我田へ水を引く譯にては候はねど、結婚するがおいやなりとて故郷へ歸りまさぬは御心得違ひと存候、或る派の人々は結婚てふことを卑しきものゝやう考へ被遊候へども、決して決してさるもの

にては無之、社會なる人間の義務にして、又當然の權利にて有之候。されはこそ結婚し得せたる女は名譽ある試驗の及第者と存候、何程の學問智識有之候とも、結婚仕らでは女の道に背きたる儀に候、卑しき身乍も憚らず御結婚御勸め申上候、」

霞湖畔の友へ

下總　月沖百合枝

靜さん！ 本統にしばらく失禮致しましたわれ。湖畔の春や如何？もはや菜の花も咲きそめたでせう。昨日も蘆の若芽の萌えいでし河の畔に立つて、あなたのことを思ひました。

麥のみどり、菜の花の黄、明るい春の光の溢るゝ野面を袂輕げに飄しつゝ、朗らかに唱歌うたひつゝ行くあなたの御姿が偲ばれて、懐しさに堪へず一人でほゝ笑みました。

叔母樣の病も追々快くなつてきました。いづれ其中伺ひます、待つてゐて下さい。

蕨に添へて山里より

四谷　櫻子

浮世離れし片山里も此頃はさすがに、春の色のどかにて、畑にはけぶる菜の花の色、空には歌ふ雲雀の聲、都にしられぬ眺めに候。さて此一筺、今朝程ゆふべの雨をあてこみて妹と二人、後の山かげ道を巡りて折り取り候もの、數は僅かなれども新らしく和らかきをば御味ひ下されたくと御目にかけ申候。かた〴〵花の都の御便りも承らまほしうて。

久しく來らぬ友の許に

青山　やす子

靜子樣！ どう遊ばしたの、此頃はお出にもならないし、お手紙も下さらないのれ、御病氣？ それとも何か御用がおありになつて？ 貴孃のお好な紅椿は、もう散り始めましたわ、戴いた玉は大きくなりましたよ、其代り又おいたも烈しくつて、今朝なんか花瓶をひつくりかへして床の間中水だらけにして了ひました、でも可愛いわ、二三日うちに被入つしやいな、私首を長くして待つて居ますよ。山と積るお話は其折に。さようなら。

姉さまへ

惠美子

姉樣、ぢやない最う奥樣れ、私あなたがお嫁きなすつてから寂しくつて〳〵仕樣がありませんの、

姉樣、あなたの一番お好きだつた庭の櫻が、此頃眞盛りよ、今日もれ櫻の下へ行つて思ひ出したの、丁度去年の今頃、姉樣と私と此の木の下で遊んで居つた時、そこへお巡りになつたのは武三樣れ、それが今ま兄樣、御夫婦だと思ふと本統に妙だわ。姉樣、一度遊びに來て頂戴な、櫻の散らぬ内に、姉樣の丸髷姿が早く見たいから、

友を慰むる文

巣鴨　さだ子

御手紙昨夜拜見致し、同じ母なき身の御同情の涙禁じ難きまゝ、御玉章を手に人なき庭に下り、白梅の下夕月の光を身に浴びて姉さんの事、

はてはなき母の事など考へて心ゆくまでなきましたの、御手紙には御母上樣が貴女をのこして他家の人となつたのも、去にし三年の今日とか、然し妙さん燒野のきゞす、夜の鶴、たれとて我子に幸あれと願はぬ者はありませんですものを今頃は屹度妙さんの身の上を案じて前途を祈つていらつしやるでせう、私の母は最早亡き者、然し貴女はいつかお會ひになる時がきます、それをたのしみに、せめて今のお母樣に御孝養を御つくし遊ばしまし。

友への返し

兵庫　太田縫子

政子樣お手紙拜見いたしました。私、そんな水くさい氣でお知らせしなかつたのではありませんの。全くお恥しくてれ、幾度手紙の終りに書きかけたか知れませんのよ。母にだつて四ヶ月頃に尋ねられて、妙な返事ですませた位、そつと姙婦心得といふ本を求めて一人で氣をもんでゐましたのですもの。それ祝ひ帶をせよ、產婆に見て貰へなどゝ申さる度に、穴へでも入りたい樣な氣がいたしますよ。やがて貴女も、如何にもとお思ひ遊ばす時が來ますよ、失禮。

寫眞を贈る

大和　操子

淨子樣、お寫眞を有難う。凉しいお眼、すらりとしたお姿、震ひつきたい樣れ、たれた、零れ櫻のお振袖がよく似合つて、只、例の御笑窪のないのが少し物足りない樣に思ひますわ。何時迄も〳〵手箱の中に秘めて置きます、私はなんか恥かしくつて上げられない樣なのよ、まるでソマトーゼ宜しくなんですもの。餘りお强を頂くからだつて、父迄が笑ひますのよ。でもまあ衛生美人とでも名づけて差上げませう。人にお見せなすつちやいけませんよ。

新評女大學　戶川殘花著

貝原益軒の女大學を一節毎に委曲を盡して評論したる書なり、戶川氏以爲らく、世に基督教あり、佛教ありて女の道を說く事至れり盡せりといへども、而かも未だ眞の女を作るに足らず、近くは福澤翁の如きありて大に女道を說きたりといへども而かも未だ翁の所謂紳士の家庭を見る事能はず、即ち古き賢母良妻說を研究せんと爲すは極めて近き社會の潮流にして、止むを得ざるの勢ひといふべしと、敢て此の書を世に紹介す、(定價金廿五錢、日本橋區檜正町服部書店發行)

大陸作家小品　山崎貞譯註

英語世界叢書第七篇として出づ、チエオフの大事件、アンドレーフの沈默、ゴルキーの二十六人對一人、ズーデルマンのなやみのうば、ダンヌンチヨーの死の勝利、モーパッサンのフイフイ孃、ツルゲネフの散文詩等を收む、英語研究者によし。(定價金參拾五錢、本館發行)

新編オルガン教科書　天谷秀著

今回文部省檢定濟の上第三版を發行せり、師範學校、高等女學校の教科用、及び小學校教員諸氏の參考書として、又家庭音樂用として良書なり、表裝も美麗なり、(定價金五拾錢、神田區今川小路二丁目東京音樂院發行)

女聲唱歌　天谷秀 近藤朔風 共著

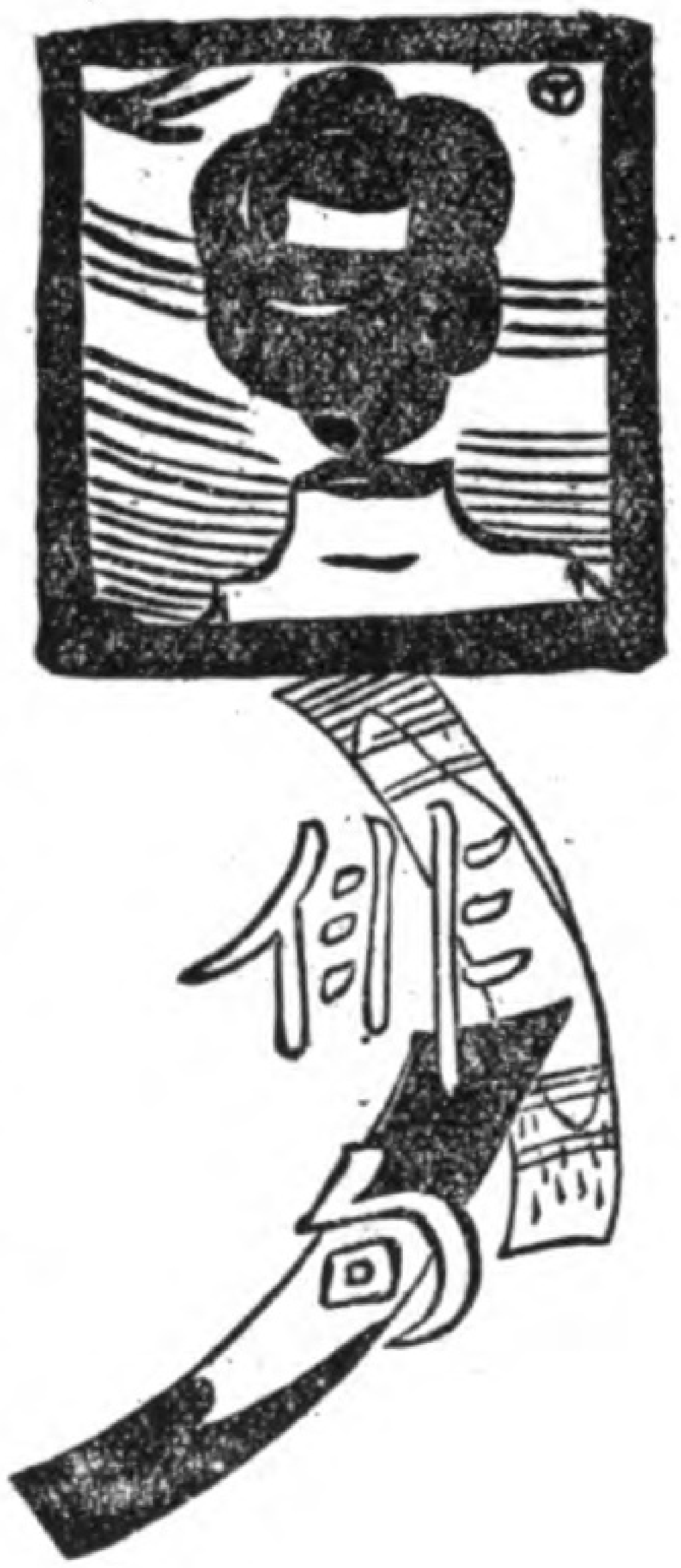
本書も文部省檢定濟の上新に發行せるものなり、內容は泰西名家の傑作たる女聲三部合唱にして、歌詞は與謝野晶子、大塚楠緒子、三宅花圃女史等の諸名家の作に成り、同じく女子師範學校、高等女學校等の教科用、及び家庭用として適當なり、表裝は總クロース製の頗るハイカラのものなり、(定價金五拾錢、日本橋區通油町水野書店發行)

圖書應用紙細工　木內菊次郎著

本書は先づ紙細工一般の理論を記し、次に折紙細工、組紙細工、織紙細工、其他切貫貼付、紙捻、厚紙、製本の細工等を述べありて、小學校、師範學校の教員生徒、其他兒童教育に趣味をもてる父兄母姉の參考として良き書なり、(定價金五拾錢、京橋區南紺屋町實業之日本社發行)

弦齋夫人の料理談(第三篇)　石塚月亭

小豆は如何に煮るか、松魚の刺身は如何に作るべきか、鰻は如何に燒くか、秋茄子は如何に料理すべきか、牛肉飯はどうして造るか等、總て實用向の有益な事を每月に渡つて述べたるものなり、(定價金六拾錢、實業之日本社發行)



天　静岡 山崎峰子

生れ落ちて仙洞御所や雀の子

地　三重 静女

若鮎に手際を見する宿の妻

人　牛込 酒井輝子

ペン走る机上に薫る沈丁花

秀逸

奈良 桃花

千年の夢にかろき春の風

大阪 木村とく子

煤拂ひ燕にゆるすひさし哉

人仁に燕すくへる小村哉　三河 はる子

春雨に長うなりけり釣瓶竿　根室 戸田てい

此寺に鐘大に過ぐ櫻かな　三島 遠山雪子

手に櫻下り來る僧の眉若し　三重 平岡きよ

病む猫を抱いて眠たき春日かな　東京 眞琴女

山僧の袈裟は俗なり梅の月　青森 藤苗きみ子

櫻散る京の三位の屋敷跡　静岡 村松千枝

田の中の新設驛に御かな　美濃 三田京子

養子五世曾祖母の笑かほ大幟　廣島 石井ちとせ

競ひ舟かすむ隅田の櫻かな　北海道 金子竹枝

山門に白椿散る夕かな　東京 結城もと

老鶯や破鏡の人の窓に倚る　伊豆 鈴木矢壽子

淋しさや病院の庭に風光る　神田 中村とし子

筆耕の指の疲るゝ日永哉　鹿兒島 山口鶴子

弟の書室ににほふぼたんかな　大阪 愛子

一週忌今年は寺の櫻かな　大阪 もみぢ

雪消ぎて馬に鞭やる春野　福岡　深町敏子
夏草やたゝりありてふ古井筒　宇都宮　栗原廣子
薫風に藤三尺のゆらぎかな　大阪　坂口捨子
黄昏るゝ館のゆとりや春の雨　北海道　村井すま子
冷いやりと襟の頸を春の風　福島　木村づれ
かりそめの女中の戀や朧月　長崎　牛島英子
おふた子を歌にれるすや春のよひ　靜岡　大石さかえ
足袋白き旅姿人や月朧　下野　藤岡武子
提つてかゝり横波る網かな　佐賀　野田ゆかり
卯の花に籬の四五尺破れけり　安藝　石井ちとせ
蝶一つ手摺にするや日永かな　大阪　ちどり
添寝しておとぎばなしや春の宵　三重　よし子
うかれ男の恨み顔なり春の雨　福井　寺田里女
紫陽花や産後の姉の初袷　愛知　三浦しの子
白椿散り重なりし苔の上　芝　百合子
小鼓な姉の人や春の宵　三重　佐々木らく
弟の飾りを待つや柏餅　東京　林豊美子
洗濯ほす新開町の棒杭かな　伊豆　土屋みき子
ハンカチを打ちふる力にほとゝぎす　茨木　文露子
青蛙御座しますおばこ草　大阪　まさる子
緋ほたんや嫁とる人の美しき　大阪　波来

瀧を餅に擬ぞる島や青嵐　神戸　鈴木雪子
琴やめて藤花散ふるふすま越　日本橋　きゆ子
親一人娘一人や衣更　横濱　岡本らん子
園に色あせて葵花の夕日かな　日本橋　ゆき子
雨やんで障子にうつる燕かな　赤坂　こと子
春雨に破傘を捨つる女哉　横濱　山崎静子
嫁ぐ姉と別れ惜むやおぼろ月　大阪　愛花
山深みなぞ躑躅咲く乳母が宿　東京　高瀬喜美子
馬上會釋花嫁行くや朧月　大阪　毛利よし
自轉車の落花をにじる野道かな　滋賀　深田鶴子
遠乘の公達霞む春野かな　麻布　淺井さく子
馬場にころぶ男や春の宵　神戸　山口まい子
鞦韆の中まで花の吹雪かな　下總　夫矢女
五月雨や平等院のおく暗し　栃木　平野美世子
雉子鳴くやあけぼの近き村はづれ　美濃　三田京子
はづかしき心なりけり花見舟　靜岡　露女
琴洗るゝ卯の花垣や雨あがり　尾張　榊原みれ子
野遊びの丸髷重き飾り哉　大阪　みれ子
若き母襁褓干して居る桃の宿　大阪　坂香登廣子
雲の間照らすらむ春の月　兵庫　山脇春枝
衣洗ふたらひに散るや梅の花　岩手　松岡清香



美文

懷郷

京都　京子

「母ちやん、お梅さん處にね、綺麗にお雛樣飾つてあつてよ、家にも飾つて頂戴な」、花子は息を切らして歸つて來てかういつた、成程明日は桃のお節句だ、アヽこんな時こそ國にゐてお祖父樣やお祖母樣の側で、お床一ぱいにお飾りして見せたら飛び付くほど喜ぶだらうに、旅から旅へとさまよふてる今の境遇ではとても出來ない事だ、お雛樣はおろか臺所の物だつて荷になるからと必用なものもないくらゐ、親の心を知らぬ花子は頻りに膝に縋り付いてよう／＼とせがむ、せめては是れ丈でもと去年初節句に送つて下すつた内裏雛の軸物を床に掛け、三寸にも足らぬ一對の雛樣と、京人形や市松人形を並べて、ほんの眞似事のやうなことをした、掛花活には白梅の一枝、まだ桃や櫻はないから猶更淋しい、それでも滿足してか花子は人形かゝへてうれしさう。（一等）

銀のひかり

東京　若葉

十三歳の二月から十七歳の去年迄五年間かゝさず求めて居た雜誌を一卷一號から一册も無くさずに戸棚の隅に隱居させておいた、戸棚を明ける度びに、拂つてしまつたらいゝだらうにと母樣は仰しやるけれど、賣つてえゝさうしませうとお返事した事がなかつた。

日曜の雨の降つた日、お花から歸つて見たら、中玄關に見慣れない男の人が居て、樣が一生懸命に例の雜誌を運んで居た、うづ高く積み上げた本を叮嚀に數へて、二十五錢で頂きませうと男の人は云つた、まあ此れだけで二十五錢？と思はず云つたら、「ぢや最う五錢上げて三十錢で」とせつせと風呂敷に包んでしまつた、其のなくなつた後には少さな二十錢銀貨と五錢の白銅が妙に光つて居た。（二等）

蟲は

東京　田澤昌子

松虫、涼虫、蜩最もあはれなり、蟬のかしましく、聞くだに暑さの彌増さる思ひのするに、なかにもミン／＼蟬の、殊更めかしく人を怖るゝさま、心の底したたしげなく、聲惜しみするらむ妙に啼き止むぞこざかし、芋虫の無能にしてたゞころ／＼と肥りたる、罪もなけれど見苦しく毛虫のおのれさしたる勇も無きに、いかめしげに身をしてなし、人を人とも思はぬ面つき憎しとも憎し、蚊蟲にして聲あらば、いかにするまじからん。（三等）

朝の花園

群馬　石井富子

もうお父さんも起きていらつしつた樣だ、お掃除もほゞすみ、火鉢も綺麗になつたので、今度は皆洗面かた〳〵草花を見る、夕べむしろをかけるのを花ちやんに賴んだら、少しチユーリツプの莖をいためた、眞紅の大輪はほんとにかんざしにでもしたい樣、もしこれが私のまゝになるならすぐ取つて押花にして、遠くにゐます姉さんにお送りするのだが、これはお父さんが命より大切にしていらつしやるのだから、さうもゆかぬ、アネモネをねづみが食べたのか、鮃が食ひ切つた樣になつてゐる、口紅水仙も咲きかゝつてゐる、サフランも小さい乍ら優しくつていゝ、どこから來たのか鉢植のパンジーに黄色い胡蝶がやす〳〵と夢を結んでゐる。（秀逸）

あゝ故郷の春

福井　加藤小蝶

すみなれし故鄕を後に、學びの業をいそしまむとこの地に來たりしは、もはや三とせの昔となりぬ、定めの業を卒へて日夕慕ひし故鄕に歸らんとす、弟は笑顏もて門邊に迎へん、妹達は若菜つむ手を措きて走り出でてよろこばん、三とせの前に我を送りし絹川も、今日は花を浮べて待つならむ、友垣と袂をつられし小高き岡は三とせの昔のまゝなるか、窓に近き紅梅は、我が最も好みしもの、今年もめでたき香に匂りや、待ちこがるゝは故鄕の空かな。（秀逸）

或る日に

東京　友子

朝、桃割が大分こわれたので解いでローマに結ふ、母樣が江木に先日の御紋付の燒増三枚ばかし賴んどけツておつしやるので、羽織を着て出て行く。

夜、何だかあき〳〵したので、讀みさしの詩集をペタとふせて、又讀まうともしなかつた、とう〳〵雨になつた、一ツ二ツ軒打つ音、見なれた油繪の額にジーツと目を据ゑて私はまた思つた、あゝ、芳子樣も結婚なすつた、あの五人の中でいよ〳〵私一人が、とうとう〳〵泣いてしまつた、火鉢にかざした手はまた痩せたやうな。（秀逸）

朝霞

大阪　盛岡米子

母樣のお聲にふと目がさめたのは五時一寸前、まだすこし早いがと思つたけれど、思ひ切つて床を出た、着物をきかへて竹やを起こす、雨戸をあけると、有明の月は淡く障子の硝子ごしに可愛い妹の寢顏を照らす靜かな朝だ、遠くに汽笛がかすかにひゞく、俥はカラ〳〵と北の方へ走つた、續いてカラコロと下駄の足音、これは東へきえた、鷄が鳴く、新聞配達の鈴はチリンチリンと勇ましく朝風に響く、雀はチユー〳〵とさへづり初めた。

天使

群馬　石井露子

ほか〳〵暖かい中庭の枯草の中に、白いよだれかけがちら〳〵見える

「姉さん此の花の所へ今黄色の蝶がきたから取らうと思つたら高く上つて了つたの」と英ちやんは可愛い聲で云ふ、まつ黒の髮の毛が、下膨れの白い頬へかゝつて何とも云へぬなど愛らし、「あゝ又にげた」と口惜しさう、お母さんは傍でお洗濯して居られる、白い物ばかりで骨が折れさうだ、洗濯板の上でブラシで一心に擦つていらつしやる、英ちやんは蝶を追ふのにあきたのお母さんの傍に來て、「あたいがお手傳ひしませうか」といふ、お母さんはにつこりとなされ、「又蝶を追ひなさい」と言はれたが、きかないでお洗濯したがるので、小さいハンケチと金だらひをあづけると、可愛い手でコチヨコチヨと洗つてゐる。

嫁どりの祝

牛込　平塚白百合

表座敷は銀燭かゞやいて、島臺のはしが僅かばかり見えてゐる、ゆるやかに流れた月の光に、ほの白い櫻の花が浮かみ出て、夢のやうな温かい夜である、柱によつたまゝ長い振袖を重れて、今宵ゐらつしやるといふ姉様をいろいろと胸に畫がいて見た。

離家からも隱居所からもはなやかな光がもれて、折々、島田髷の女の影がうつる。

遺愛の小鼓

麻布　あけぼの

珊瑚のやうな露の玉が、軒の蜘蛛の巣にゆらゆらしてゐる、細い雨が絶えまなくふる、日はどんよりとして、家の中は何だか淋しい、つかれた針の手を止めてじつと耳をすますと、隱居所の方から熊野を謡ふのがとぎれとぎれに微う聞える、私は堪らなくなつて、母様の遺愛の小鼓を両袖にしかと抱いて立つた。

讀み手

四谷　櫻子

「まあ今度は私よんでよ」と立ち上つて緣側に出る、空はよく晴れてこぼれる様なお星様、明日もいゝお天氣だ、暫くのぼせた顔を風に吹かせてゐると、奥から「もういゝ事よ早くきて頂戴」と呼ぶ、何だかかるた會の全權へ握つた様だ、彼の長椅子にすつとよつて、先づからを一つ「皺ほゆる」と讀み出すともう座はしんと靜かになつて、あとは只「ハイ」「ハイ」と起る巡辭の間を、讀みあげる自分の聲が、高く低く響くばかり。

貴き御姿

芝區　くに子

或日、夕つ方、買物にとて伊皿子まして急ぎぬ、高輪御殿前へさしかかりし時、いづこよりか高らかと聞ゆる喇の音、ふと振りかへれば前立勢しき馬丁は二頭馬車に鞭打ちて勇ましうかけ來りぬ、これはと許り歩みをとめ、ふと見上てし其刹那、目に映じたる車上の人は、あるやんごとなき御方なりき、カーキー色の軍服召させ給へるいかめしき御英姿拜するだに恐れ多く、思はず頭をたれぬ、去年の夏古邪にて十重廿重の人波に押され揉まれなどして、御姿の中ばだに拜するを得ざりしものを、今ゆくりなくもまのあたり拜せしことの畏さなき時た貴さに、お馬車の過ぐるも知らでうつふしなりぬ。

春の宵

秋田　鑑客ゆきの子

何處からか透きとほるやうなハモニカの音が流れて來る。

六疊の室にお母さんと妹の雪ちやんと私と三人並んで寢た、灯を消すと室ばかりポンヤリと明るい、雪ちやんは熱心に學校できいたお話をお母さんに話しかけてゐたが、お母さんの返事がないので、「お母さん」と低く呼んだ、けれ共やはり返事がないので、今度は私の方へ向いて、「姉さん」とよんだ、私は寢入つたふりして默つて硝子越に窓から白い雲を見てゐた。

異境の日章旗

お哇　稲田けい

南十字星座が次第々々に薄らいで、水平線の上には、白い積雲が旭に反映して浮き出した、水鳥はやさしい姿を時々見せる、やがて雲が飛んで行くと、後にはマヲナキア山の雪を頂いた雄姿が現はれた、其の裾野は一面に青々とした砂糖黍畑で、其中に散在して居る部落には、日章旗が勇ましく風になびいてゐる。

行く春

牛込　華子

風呂のふたを取ると、濛々と眞白な湯氣が立つ、ボンヤリくもツた窓のガラスに、外から小雨がかゝツて、風が持つて來た櫻の花がヒツタリとついてゐる、アヽ今年ももう花の散る頃となつたのかと思ふと、いひしれぬ淋しさを覺えた。

ふる郷の山

岐阜　田中柏葉

樂しの故郷は伯耆の、昔しは火を噴いたといふ大仙山の麓の小さな村です。

他國の花の咲く三月には、まだ大仙颪が烈しうて寒うございますが、二三日天氣が續きさへすれば裾野の雪が解けて枯草が現れて、乾きますので、妾等は兄や姉と裾野へ野火を附けに行きます、あちらからもこちらからも火を諸方につけて歸つて、夕方外に出て見ますと空は眞赤になつて、パチ〳〵と音を立てゝ燃えます、そして六月になつて行つて見ると、水々しい柔かい蕨が澤山並んで生えてゐます。

蠅捕蜘蛛

滋賀　野崎みどり

五分にも足らぬ灰色の其體を、ロツと身構へた、兩眼はきら〳〵と輝き、八つの脚は微細に震いて居る、淡黒き壁には音なく、たゞ、吹く風に、戸箱の戸のみががタリゴリリといつてゐる、やがて蜘蛛が急に體を躍したと思ふと、口にはもう一匹の蠅が居た、八つの脚は徐にそれを抱いた、四邊は矢張り靜である。

夕景

弘前　知恵子

遙に聳ゆる津輕富士を仰げば、胸の思も洗ひ去らるゝ心地、岩木川は夕陽に彩られて、近きは紅く、遠きは碧く、清き水底には小石きらめく、塒に急ぐ鳥の一群忙しう鳴いて森の中に消ゆれば、後には人影も無い、刻一刻に暮色は迫る、森は黒く山は紫に。

田舎の春

東京　寺村留子

暖かい日を背に負ひつゝお庭が、ヒカ〳〵と光つてゐる、やがてネズ

ミ色の手紙を頭から取つて、赤く光つた顔をこすり〳〵、先づ一服といつた風。……南向の窓を明けると裏一面が菜畑で、黄色の美しい花が盛一ぱいに咲いてゐる、何處からともなく雌蝶雄蝶がもつれ〳〵に飛んで來てヒラ〳〵と花片にとまつた。お庭の方で妹の美代子が「花よ胡蝶よ春風よ」と唄ふ聲が樂しさうに聞えた。

石取り男

駿河　もと子

突つ立つた岩山は、白い膚をむき出して、波靜な青い渚に、其の屏風のやうな影を落してゐる。男はその斷崖の頂から垂れた一條の綱引を腰に括り付け金槌振上げて石を斬り取つてゐる、槌の音がカン〳〵――と岩山の壁に反響して、何となく物悲しく聞える。

どんよりと曇つた沖には、伊豆の大瀬崎が雲の中の物のやうに横つてゐる。

春の水

三島　遠山雪子

春の水は奥山を出でゝ曠野に入るを、痩せた私は帝都を追はれて田舍に隱れた。水は美しい香のある花瓣を載せて流れ、私は暴い胸を抱いて泣く、あゝ水は遠く去つて復歸らぬが、私は何故か都が戀しい、夢であつた過去に對して。

乳母の家

小石川　てい子

細かい雨は音もなく降りそゝいで、部屋の軒を濡い夕煙高く漂つてゐる。遠い足柄の山續きが靜かに暮れの色に包まれると、裏の家で機を織る機の音がいつか止んでゐる。

破れた簾に雨を凌いだ物もらひが軒に立つた、乳母は無言でお鳥目を與へた。物もらひは咽ぶやうな麥畑の小徑を、影のやうに夕暗に沒して行く。

大通りにて

四谷　櫻子

閑様を御暇したのはもう五時半、スタ〳〵と道を急いで四谷の大通りに出て少し歩くと、フトと氣がついた、小脇にかゝえた小さい風呂敷に餅のふくさと銀行の通帳とが包んであつたのがなくなつてゐる、サア大變、閑様を出る時には確かにもつて居た筈、すると道で落したのに違ない、と思ふと急にどうきが烈しくなつた。「ぼんやり者奴」と例の父様や母様のこわい御顔が目先にちらつく、私はもう夢中で一直線にもときた道へと引かへした。

散る櫻

靜岡　天野欣

庵原川の渡しをわたる、乘合は三人きり、さあ出ますぞと――爺さんの一竿で船はスーツと岸をはなれた、和らかな風が一陣ふき渡つて、櫻の花がチラ〳〵と散つた、船は小波を立てゝ進んだ。

誌友倶樂部

▲今月の誌上で拜見致しました、故賀江博士は私の家のつい近所にお出でゞございました、只今も御遺族はいらつしやいます、あの記者様一昨年の十月號に掲げてございました記事「貧き裏舗に苦しみつゝ世を呪ひ行く婦人」といふのは操子夫人様の事ではありますまいか。(富山、秋田女) 記者曰、昨年十月號の記事は別です。

▲萩子様同情に堪へません、木枯すさぶ冬があれば、花笑ふ春も必ずございます、何事も悲観してはいけません、過去は夢と諦らめて前途に光明をおみとめ遊ばせ、世間は決して貴女を捨ては致しません、忍耐と勇氣とは人に一日もかくべからざるものと思ひます、襲ひ來る運命と戰つて見事お勝ち遊ばせ。(千草)

▲在米國堀井様、片井様、遙々種子の御寄附に預りまして、厚く御禮申上げます、園藝好適のシーズンとて、三十餘坪の妾の花壇は、正さに陽光の惠を受けて、夫々得意の發芽の見事さよしかも近き將來の希望の輝きに滿みつゝ、斯くて花と妾と……。(信濃、恒子)

▲四月號で拜見致しました愛讀者椿花様に一寸分だけ御通知致します、内藤千代子様の御住所は神奈川縣高座郡藤澤町鵠沼ですけれど、鵠沼の中には車田、西砥上、砥上、堀川、下閘、中閘、下閘、上閘、柳原、上藤ケ谷、下藤ケ谷との十一の字があります、このいづれですか後より申ます。(岐阜、ときわ)

▲稲の落葉さま、ほんとうに御同情申上げます貴女のお作を拜見致し、幾度も〳〵袖をしぼりました、貴女が目の前にお出であそばす様で、ほんとうに泣きました、世の中にはかゝる立派な府當をお持ちの方でも此の様な非人情とは實に歎息の外ありません、深く〳〵御同情申上げます。(岐阜中川靜香)

▲石狩の伊都子様に申上ます、札幌の罵口は餘りひど過ぎるわ、いくら田舍者だつて東京からゐらした方を醜香と同じに見る人もないでせうよ、それから又「今晩は」を「お晩ですか」と云ふ人も私の交際して居る所には御座いません、女學生をアイヌ式とは隨分だわれー、私も其女學生の一人ですもの、ほんとうに耳がいたかつたのよ、雪國ですから少しは都と變つた様子をしなければなりません、住めば都とやら申ますものを、少しおほめ遊ばせ。(札幌加藤花子)

▲吉田竹子様、私も世界中の、繪葉書を集めて居ります何とぞ御交際を願ひます、御志ある御方は下名まで御送り下さい、御禮には米國中のを差上ます。(Francis okada 1900 Hodeonst Deaverolo)

▲もし間違つたら御免あそばしませ、四月號のスヰートホームをおだしになつた方は萩香さんではなくつて、緣にゆかぬ人、熱烈なる少女の戀、さてはマダム振りの燃ゆる思ひに筆がそつくりよ、かあさまとか、きよ、お京さん、鵠沼お十八、理想は文學士、近眼鏡、養子嫌などいふ言葉を見ても、どうもさうらしいのね、殊に「ましてや人も多かる中につい六ケ月以前まで一面識もなかつた篤様」とこれは殿方に澤山な御つれのあつた動かぬしるし、みなさんはどうおぼしめす？ でも萩子さんのことが書いてないのは不思議ネー、とにかくどちらにしても末永く御榮え遊ばせよ。(セミナ)

▲練油パールを用ひますと髮が赤くなりますから、私は常にツバキの三宅油を用ひて居ります香ひは少々わるう御座いますが、毛がさら〳〵してればりません、又白ツバキの油は少しもフケが立ちませんし、毛の爲めにも一層よろしゆう御座います、尤も價はいくらか高いかも知れません。(足利綠葉子)

▲諸姉様、大分好時候になりました、聯合共進會も只今が至極よろしい時ですから、どうぞ御出掛け下さいますやう、當地愛讀者一同に代り

て御招き致します、城の外の見物する處のない田舍の名古屋も御見すてないやう御願申上ます(名古屋、田山夕ぎり)

▲皆様、私は日本の古切手卅五枚(三十五種)外國の古切手三百八十四枚(百種)有つて居りますが、おのぞみの方に二圓位で御ゆづり致し度う御座います、おのぞみの方は次號の此らんで御知らせ下さいまし、私もつて上ります。但東京市内に限ります。(東京、紅ばら子)

▲「離別された妻の告白」を御讀みになつて皆様何とお思ひなさいました、私はあの姑が小づら憎くてなりません、それにつけても可愛さうに六人の嫁さんが離別された事が氣の毒でなりません、まあ〳〵春志さんといふ人もわからん人ですね、大學を卒業した人に似あはん事、とに角不思議な人の寄り合ですね、そんなやうではとても七人目の嫁さんも又々追ひかへされますわ。(香川の人)

▲鳥も通はぬ八丈ヶ島の、遙か向ふの此の布哇の田舍町の本屋で、女學世界の二月號を求めて見れば、嬉しや加納様が長崎に一人、豐後に一人、昔のお豐様と思ひ比べて、何だか同じ御方のやうに考へられて、御なつかしく存じまゐらせ候、と。四十三年三月三日のお節句に布哇島ヒロ町にて橘花子)

▲内藤千代子と申す方について知つて居ます事だけ皆様に御知らせ申ます、御手蹟はお氣の毒な様のお下手です、そしてお妹はおありのやうに書かれた所と、一人娘のやうに書かれた所とあります、皆様御注意遊ばせ。(岐阜、ときわ)

▲本誌第十卷第四號に、栗原古城様が英人が原因となつた大戰爭といふのを御掲載になりました中に、「稗田阿禮といふお爺さん云々」と御座りましたが、古事記には、「姓稗田名阿禮是年廿八」と御座りまして、お若い方の様にかいて御座ります、又本居宣長翁其他二三の故大家は御婦人の様に御解釋になつて居る様我の夫は申して居られましたが、如何でせうか御敎へ下されませ　。(堺、大川芳子)——稗田阿禮は舍人をして居たのでたしかに男子です、そして蘇我蝦夷の亂に古記がすつかり燒けて了つた時に、阿禮が非常に記憶がよかつたものですから後日の爲にと朝廷で諸の年代記を集めて、阿禮に口稱を誦取らせた其の時が二十八歲といふのです、其後和銅四年に至つて、阿禮が六十五歲の時に、博士太朝臣安麻呂をして其の記憶する處を筆記させてかの古事記が出來たといふのですから、其のお爺さんであつた事もたしかです(記者)

▲記者様、私は三十七年三月より缺かさず御誌を愛讀致して居りますが、御誌に依つて斷えず益を得て居りますので、厚く御禮申上げます、又私は三十八年六月渡米いたし、只今は南米に主人と共に遠來に來て居りますが、異郷に居りましても何の慰めもなく淋しく感じます折柄には御誌を唯一の友として樂しんで居ります、併し私の手に入りますのは、月の廿日後で御座います故、隨分待遠しく思はれます、當地の繪葉書寄贈いたしますゆゑ御落手御願ひ申上げます尙ほ記者様方の御健全を祈り上げます、(三月七日南米メンピチイにて彌生より)

▲四月號のスヰートホームは隨分素敵ね、どなたゞか知りませんが、ほんとに幸福な方ですわね、私も未來に於てあんな甘い樂しいホームがつくつて見たいわ。(東京、白ばら)

▲皆様、寒くて御腹が痛んでお困りの時には、番茶の極熱いのに、梅ぼしのほごしたのと生姜のすりおろしたのとを入れて御飲み遊ばせ、可い工合に暖まつてなほります、又頭痛が致しましたら、江戸の名物稲荷ずしを御好なだけ御上り遊ばせ、御外部からなればリンゴのしぼり汁をつけるか、又むいた皮で摩擦遊ばせ、妙になほります。(京都、文月園)

▲愛讀者様の内で本誌の四十一年二月號お持ちの御方は、誠に恐れ入りますが、暫時の間お借し下さいませんか。(尾道長江町一丁目増田幸)

▲誌上の姉君様、私は昨年九月韓國元山に參りました、當地は至て砂糖が安いので、なぐさみに手輕な菓子や饅頭をこさへようと思ひますけれど、一つも存じませんから、甚だ恐れ入りますが、諸姉様、如何なる物でもよいから何とぞ御敎へ下さいませ。(元山、りつ子)

▲夢の精様の仰せの通り、夢二様の御繪は少々ね、でもあの現代式のまなざし、私はもういつもチヤームされてしまひますの、あんな美しい目の方があれば、少々位手や足の大きなのは我慢して兄様の御嫁様に押つけますわ、本當にあの目はゆめ二様獨得でございますのね、日本畫では蕉園様のが一すよい御目つきですのね。(大森夢の精)

▲綾子様の「卒業前の女學生」は眞に畫を見る様な氣で讀みました、妾はこんな上手な御作を拜見する度に獨りで讀むのが惜しく思はれて、同時に心は慕しい故郷にさまよひます。(大久保、由美子)

▲四月號は誠に樂しく拜見いたしました、表紙の「春の野邊」とやらも、口繪の「春たけなは」もなかなか立派でございます、それから中の記事の晶子様の「雑記帖」、百合子様の「スヰートホーム」もふるつたもの、稲の落葉様には大いに同情いたします、それから、私のいつも樂拜して居ります、内藤千代子様の「女の手紙」も面白く、龍子様の「北海道の山鬼」は誠におなつかしゆうございます。(北海道札幌、ホワトローズ)

▲御誌に投書致します書簡文なり、日記文なりにて一等、二等、三等などの點を得た者は、皆それぞれ賞與有之由承り居り候なれども、今度私共の朋友にて書簡文の投書中しかも三等の賞ある様認め候なれば、早速伺ひ候處、なんの賞も參らずとの御話、右は各々御送附濟に相成り候や、また多數故間違なきやと不思議にたへず御尋ね申上候。(不思議女) 賞品は毎回一々送つて居ります、但原稿に住所氏名を書いてないのは止むを得ず送らずに預つて置きます。(記者)

▲此度のスヰートホームはたしかに千代子様ですれ、私は記者様はあんなに仰しやつても、此前の元祿姉さんの時と同じ事で、屹ツと記者様の一人だと思ひます、鵠沼にだつて愛讀者は澤山ありませう、何なら辨當持つて毎日さがして御歩きになつては如何、私は實は花散里の君と同じ方ではないかと思ひます。(佐世保、つゆ子)

▲四月號のスヰートホームは内藤様の御作だらうと私思ひますわ、皆様どう思し召して、それから皆様不束者ですが御交際を願ひます。(大阪府三島郡三ケ牧村高崎春枝)

▲愛知縣と靜岡縣の誌友の御方に御願ひ申します目下御地で開會中の共進會紀念スタンプ付繪はがきと水戸名勝水戸家士遊戯繪はがきと御交換して下さいませんか、當地名勝史蹟繪葉書の交換を御願ひ申ます。(茨城縣水戸市上市楓小路廿一根崎方安藏まさ子)

▲四月號に、我が窓のと云ふ和歌をお出しになつた四谷の戸田道子様、もしや四谷第二小學校出のお方では御座いませんか、それなら私も同じクラスに居つたものです、おなつかしゆう存じますわ。(四谷、すゞ子)

▲なつかしき諸姉様達よ、妾繪葉書が大へん好きで御座いますから、どうぞ御惠み下さいませんか、きつとお禮として當地又は名古屋の共進會の繪葉書を差上ます。(愛知縣豐橋市吳服町高須愛子)

▲伊勢の安井らく子様、同姓同名で御なつかしう存じます、やはり私も安井らくと申します、何かの緣でせう、二月號の短文の遠州の野菊として出で居りますのは私です、都合上六月から下關へ參つて居りますが、此後同姓同名を御緣に日に厚き御交際を願ます。(下關、野菊子)

▲神谷都子様、私は三四年前から近眼にて甚だ困り居り候ところ、あなた様は此療法を御知りとのこと、誠に厚かましくは候へど御氣の毒ながら御敎へ下さるお願申上候。(北海道、可寓女)

各學校卒業式

△東京音樂學校

三月二十五日午後二時より卒業式を擧行せり、證書授與式、校長の告辭、文部大臣の祝辭等ありて式を終り、後卒業生の演奏十餘番、最近同校囑託として來朝せるピアノの名手テツオール夫人の獨奏等ありて非常に盛んなりき、本年度の卒業生は、聲樂部四名、器樂部十三名、甲種師範科二十二名、乙種師範科十五名あり、其中女流天才として將來望を屬せられ居るは、ヴアイオリン科の蜂谷龍子、甲種師範科の宮內歡子同岡部千代子、同鈴木みつ子、乙種師範科の重谷富衞子の五名の由にて、殊に蜂谷女史は安藤幸子教授配下の天才として夙くより屬望され居りしやに聞く、

△府立第三高等女學校

三月二十八日午後一時より第六回卒業式を擧行せり、證書授與、校長の告辭、府知事告辭、來賓祝辭、生徒の答辭等ありて式を終りたるが、本年の卒業生は本科九十六名、補習科十七名にして、學事報告によれば、是等の生徒の平均年齡は例年よりもやゝ多くなり（これは希望者多くして入學試驗の競爭が激しくなり、年少の者は自然淘汰されたる爲めなるよし）、又平均身長に於て全國高等女學校の卒業生の平均身長より一寸幾分か高き結果を示したるよし、學校の信用の厚きと體育の行屆きたるによる喜ばしき現象と思はれたり。

△青山女學院

同女院及び青山女子手藝學校にては、三月三十日午後二時より、青山學院講堂に於て卒業式を擧行せり、證書授與後、校長の告辭、博士元田作之進氏の演說等ありて式を終れり、尙ほ其前日には同講堂に於て同女院內の英藝、濺木、幼年文學會の聯合文學會を開きたるが、二十幾番の番組を何れ劣らずつとめたる中にも、淸國女生徒林淑賢のピアノ獨奏の巧妙なりしには、何人も感嘆せざるはなかりき。

△女子美術學校

三月二十四日午後九時半より第十四回卒業式を擧行す、校長佐藤夫人の告諭、尾崎市長の祝辭肝付男爵の演說等ありて式を終れり、因に本年の卒業生は日本畫科十二名、西洋畫科六名、編物科五名、造花科二十二名、刺繡科二十六名、裁縫科九十七名。

△東洋高等女學校

小石川區丸山町の同校にて三月二十七日午前九時第四回卒業式を擧行したり、學事報告、卒業證書授與等を了りて校長村上博士の告辭あり、次で來賓上田萬年氏の演說等ありて式を終り、別席にて茶菓の饗應あり、尙ほ別室に成績品を陳列しありしが、例年に比して著しき進境を見しは、教職員諸氏の苦心の結果と見へたり。

△日本女子商業學校

三月二十七日午後九時半より第七回卒業式を擧行せり、證書授與、和田垣校長の「經濟に就て」てふ訓辭演說、尾崎市長の祝辭ありて式を了り、尙ほ午後よりは常磐會の餘興を催され、英語讀誦、活人畫、薩摩琵琶等ありて盛んなりき、本年の卒業生は、高等科十九名、補習科三名、本科二十八名、裁縫高等科六名、同普通科四名、速成科十七名、合計七十四名。

△女子高等師範學校

三月三十日午前九時半より第二十一回卒業式を擧行したり、當日は式場なる講堂に兩陛下の御眞影を揭げ、來賓職員は其左右に着席して一同敬禮の上皇后陛下御作「みがゝずば」の唱歌を合唱し、中川新任校長より文科十九名、理科二十三名、技藝科二十一名、地理歷史專修科二十一名、並に附屬高等女學校專攻科十五名、同高等女學校八十四名の各卒業生並に保育實習科修了生七名に證書の授與、校長の告辭及び文部大臣の祝辭、各卒業生總代の謝辭等ありて式を了れり、學校報告によれば、今回の技藝科卒業生二十一名に對し、各地方よりの招聘七十餘の多きに達して、六十餘の供給不足を示せる由。

△香蘭女學校

三月二十九日午後二時より第十七回卒業式を行へり、君ヶ代、勅語捧讀について、卒業證書を授與せられ、ついで述べられし校長長橋政太郞氏の告辭は、多くの外國婦人により育てられ

たる生徒に對する卒業後の心得としては、懇切丁寧をきはめ、後來賓ジ、ビスカステス氏の演説、生徒の日、英語の答辭、演說諳誦等ありて、和氣堂に滿ちぬ。來賓は部下にありて宗教教育に携はる外國婦人なりき、卒業生は本科十名、專修科一名、英語科三名、中外國婦人一名なり

△東京高等女學校

其の卒業式を東京技藝女學校の卒業式と共に三月二十六日午後一時より擧行せり、幹事棚橋一郎氏の學事報告、證書授與、後ち校長棚橋絢子女史の式辭ありて、勤勉、修養、忍耐等に就て諄々として說かれ、ついで來賓の祝辭、演說等ありて式を終れり、因に同校入學希望者は近來益々多きを加へ、從つて校舍の狹隘を告げたるより、目下增築中にて、近々落成すべしといふ

△精華高等女學校

三月三十日午前九時より本科、技藝科の卒業式及び附屬幼稚園の證書授與後、園長勝田夫人の訓辭あり之に對する幼兒の感謝の唱歌は誠に愛らしく、それより本科其他の證書授與、校長勝田孫彌氏の懇篤なる訓辭、及び來賓瓜生男爵の有益なる演說等ありて式を終りしが、其式中にも生徒間の親睦の樣現はれてゆかしく見えたり、因に本年は本科卒業生三十六名、技藝科四十二名、幼稚園の保育修了者は三十七名

△日本高等女學校

四月九日午後二時より大塚なる建築中の校舍に於て證書授與式を行へり、同校長の卒業生に對する訓話はいつもながら懇切にして熱誠讃に溢れ、又來賓井上博士の卒業後の婦人の心得に就ての談話は極めて有益のものなりし本年度の卒業生は七十二名なりし

△東京府女子師範學校

同校第九回卒業式及び府立第二高等女學校第十回卒業式を三月二十九日午前九時半より擧行せり式は「御稜威かしこき」の校歌に始まり、それより師範卒業生六十六名、高女卒業生四十五名高女補習科修了生三十一名に對して證書の授與あり、後校長及び府知事の告辭卒業生の之に對する謝辭等ありて式を終れり、式後別室にて茶菓の饗應及び成績品の展覽ありしが、本校の成績品は殊に見事なりと見たり。

△フエリス和英女學校

四月五日午後七時半より橫濱山手の同校講堂ハン、スコイタ、ホールに於て卒業式を擧行せり式は祈禱に始まり、次に勅語捧讀、君ケ代、本科卒業生の歡迎の辭、其他英文朗讀、邦文朗讀三部合唱、オルガン獨奏、岩佐教頭の獎勵の辭ありし後、ブース校長より圖畫科二名、裁縫科四名へ進步賞、聲樂科初學科四十名、同科中學乙部九名、豫科二十名、英語師範科二名、本科三十四名、圖畫科一名に修業及び卒業證書を授與して告辭を述べ、卒業生の答辭ありて式を終れり

△三輪田高等女學校

三月二十七日午前九時より第七回卒業式を擧げたり、教頭三輪田元道氏の學事報告、校長より證書授與告辭、次いで來賓高木兼寬男の扇子に就ての面白き演說等ありて式を終りしが、本年の卒業生は本科百五十五名の多きに達し、又補習科第一回卒業生として十三名を出したり、尙ほ別室に成績品を陳列して來賓の縱覽に供しゐりしが、其の精巧を何人も賞し合へりき。

△成女高等女學校

三月二十八日午前九時より卒業式を行へり、證書授與校長宮田脩氏　顧問山根正次氏の告辭、祝辭等ありて後、來賓櫻井ちか子女史の經驗的の面白き話　高田早苗氏の眞要としての當代の眞人に對する心得の話等ありて一先づ式を終り、午後よりは本校生徒卒業生によりて組織せらるゝこの花會の餘興ありて折柄春雨しめやかなる中に百花歷亂の趣ありき。

△日本女子大學校

四月九日午後一時より同校第七回卒業式及び附屬高等女學校第九回卒業式を擧行せり、本年の卒業生は家政學部八十三名、文學部二十三名、英文學部十八名、教育學部第一部十三名、同第二部二十名、高等女學校七十二名にして、森村市左衞門、大隈伯の演說、及び文部大臣の祝辭等あり、式後別室にて茶菓の饗應あり、雨天なりしにも拘らず來賓は多く、頗る盛大なりき。

箱根湖畔の家庭生活

石内富枝子

今年は例年にない、降雪が多量つたから春の神様が、豫算超過事業繰延とでも、なされたのか何時迄寒い事だらう、お向ふのお婆さんは、會ふたびに例年になく寒くて〳〵つて嫌だ〳〵つて、屹度云いますよつて美和が笑つて居た。

昨日、鵠沼の花枝様からのお手紙にや、北向きの紅梅も、大方散れて、了つて、鶯も老鶯と、あつたが箱根は鶯のうの字ゃ見えない、なんぼ高根の箱根だつて、いゝ、イヤに脱俗振つて、下界の事我れ不關焉と、すまし込んでる憎らしさ、自然の神様もなか〳〵、いゝ、つむじが曲つてる。

昨日の、夕方ハラ〳〵、と降つた雪は直ぐ止んで、今朝は日本晴れの好天氣、



美和のよく言ふ、はだかん坊の洗濯日だ、ステッキのやうな太いつらゝが少し細く成つて、道は霜解けでお汁粉を流したやうだ。

髪も結ひたし‥と兄樣のお起なるを待つて居ると、まだ、ヤット十二三歲位の學校盛りの男の子が生じいたけを賣りに來た、二里の山坂をこんなによく早く來た事、日曜なので、賣りに來たので有らう、少したかいが、「不用ないわ」つて斷るに忍びなくつて「マア孃樣まけさしたら宜しいぢやございませんか、隨分たかい」つて吃驚してたが何故だか可哀相でそのまゝ買つてやつた。

八時半のタイムがリーンとなると、兄樣、ノコ〳〵起きてゐらしつた、母樣がお留守なのでこの頃早起きなさる、「どうせ長もちはないけれど一週間位は續きませう」と申上げたら「馬鹿！」つて怒鳴つけられた。

兄樣としたら母樣の不不在が、あらゆる寢坊會のレコードを破つたと云ふのであらう、兄樣と朝の食事を戴くのは珍らしい事なんですもの。ちり除けとつて火鉢の前に食卓を運ぶ、食卓の上の御茶碗やら、お汁椀やらがお膳の上で右に左に面白くスケートをやつてる、指の先でこするとこそ〳〵と薄い氷が飛ぶ。

兄樣はまるで火事場でお結飯をほうばるやうに、食べると云ふより、寧しろおしこむ――其忙しさをいつも思出すけれど、お友達の風谷樣と、お汁粉の食つくらして、風谷樣の三杯召上る内兄樣が九杯食べたつて、全くよ、兄樣の學生時代つたつて去年迄だつたが――何しろ、今年から較べたら、――食べる事、食べる事夏と冬と丈けで一俵は、かけねなし、慥かに違ふとは原田樣の下馬評。「敏郞、もう好い加減になさい」つて母樣も吃驚なすつたつけ。

まめつたい事、まめつたい事、一寸の間もヂットしては居なさらない、火鉢の前で母樣と、お話中も、手を空しくしては居なさらず、灰でお習字、わを書たり角を書たり、はては母樣のお話より、灰の方へ氣をとられて――「ねえ敏、左樣だらう、ね、」しきりに母さん



日比谷公園の噴水（東京の遊園）

被仰るが、兄様、知らぬ顔の半兵衛さん、書たり消したり、書たり消したり、私しやお可笑つて〳〵、「兄さま―ア」つて耳元で怒鳴つけると吃驚なすつちや、「馬鹿！　突然に何のこつた」なんて有仰る。某日なんかまた、甚しかつた、東京の伯父さまがお出に成つた時、矢張例に依つて例の如しで、お話しながら灰のお習字、尋常一年生が、イスイヌ、をヤット敎はつて書やうだ、書たり消したり、――もう兄さまは灰の方へ精神は行つて了つた。大穴あけて、夫れを又、段々埋めてゆく穴をあけては又埋める、下手な土工みたいだ、それも止して又習字だ、無論伯父様の話なんか念頭にない、これが一種の兄様の病氣、――灰書病オホヽヽ、なかなかはいかつてる――「敏さん、なか〳〵熱心だなア」つて伯父様被仰ると、兄様何んと聞いたか頓狂な聲して、「えッ夫れア可哀相に」なんて有仰るもんだから、伯父様、あつけにとられて「何、言つてるの敏さんわ？」「だつてなか子（伯父様の娘）さんが病氣だつて被仰いましたらう？」なんて仰有つたもんだから誰れだ

つて吹き出さないものはない、母様は熱い白湯をのみかけて被居したので、火傷するやら騒ぎだつた。

外はまるで田のやうだ。下駄の歯がズブ〳〵這入る曳番ふんで歩く姿なんか振つたもの、さぞ歩きにくい事であらうに、兄様、どこかへ出ていらしつた、又、どろが頭へ跳ねた、なんて有仰つてお歸へんなさるだらう。

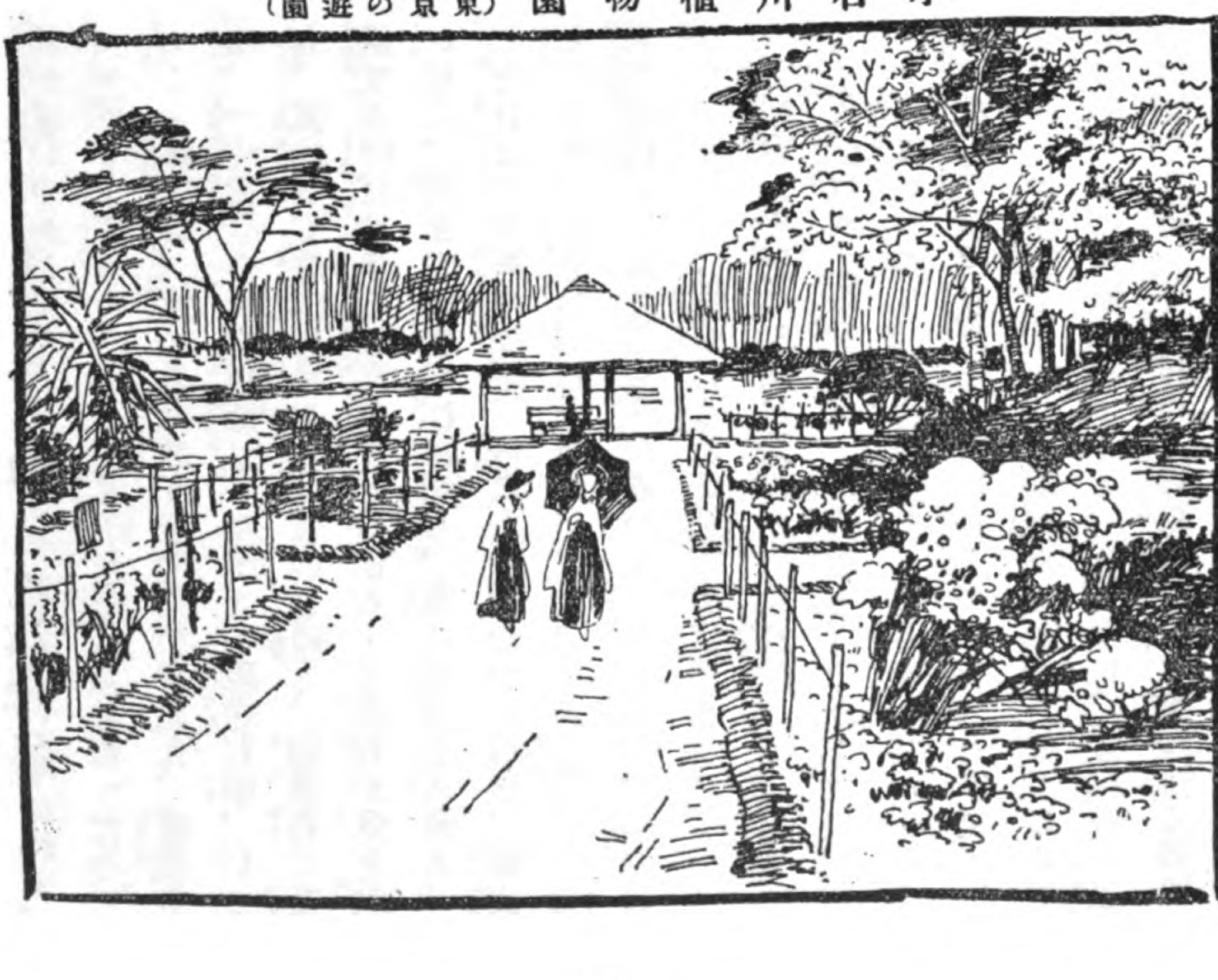
熱海の母様へお約束の三日間おきの今日が來たからお手紙を書かうと机に向ふと、兄様、歸つて來なすつて、「どこへ出す？」とお訊きになるから、「母様へ」と答へたら、「左様か、乃公も上げやう、」と被有つてペンと、インキを以てゐらしつた、兄さん此節お言葉が惡く成つて「兄様がな」と言つたのを此頃ぢや「乃公、乃公つて、みつともないわ、

「母様がお留守だと、兄様はお山の大將我れ一人と、ゐはつて、いけません、そして今日は日曜なので遊んではかし居ます、昨日おろしたての下駄、今日はかいて了ひました、例の通りお背の方まで、どろを跳揚げては、夫れで平氣でお坐り成さるし、兄さんのいけない事、お話に成りません、それで昨日の三時にも…：と」書かうとすると、隨分ね、言附けられるが嫌ならなさらなけりやいゝのよ、突然、筆も紙も取り上げられて了つた、「馬鹿！ 馬鹿！」くだらぬ事書くな」其聲つたら、實の兄様ながら愛想がつきる、内の兄様は何故、此様に亂暴なのだらう、だから早稻田出身は嫌いだけれど、岸様なんか本統に優しい、あんな方御生み遊ばした母様、どんな方だらう——つても、内の母様だつて、あんなに優しいのに此様な兄様が有るのだから——兄様は親に似ぬ鬼子かも知れない、兄様だつて、非道いわ、「富枝は此頃寢坊していけません、掻巻の裾を、剝いで風をスー〳〵入れられてヤット起きるんです」なんて、嘘言、嘘言ばつかし、いつも、私にされる事を、私にかづけて憎らしい、毎朝々々海鼠の化物みたいに、まるく成つてお寢つて被居つて、私の起きる時なんか御存じない癖、だから昨日のオヤツの事も言つけて上げやうと思ふのよ「母様、昨日の三時

の時、二人で同じやうに最中を分けましたのよ、そしたら兄様、せつせと召上がつて了つて、私のをみんな強奪つて了ひました、それのみか、私がアングリ食べやうとする處を、突然取つて了ふ、其亂暴つたら、本統にいけませんの」今度こそ見附けられぬうちにと、手早く封じ込めて了ふ、ごた〳〵言合ひをしながら、お晝迄かゝつて、ヤツト、伊豆の國熱海町〇〇館内、吉岡文様と、兄様特色のすみ色あざやかに、美事に書上げられた、三錢切手二枚はつて投函す。

お晝食には、美和に淺漬け大根出して來てもらふ、ぶ鯛のみそ漬けを燒く、まあ、如何致しませう、肉が崩れて困るわ、母様は如何な事成すつてお燒きになるのかしら？　かうと知つたら、よく氣をつけて見て置けばよかつた、まさか、十五錢出して、ぶ鯛のみそ漬けはどうして燒きますの？」とも電話掛けられやしないし、どうしやうか、あゝ、さう〳〵、何んでもかう平らな金串でお燒きになつたやうだつたつけ、と、思ひついて、方々、家探しゝたら、押入れの引出しの中

小石川植物園（東京の遊園）

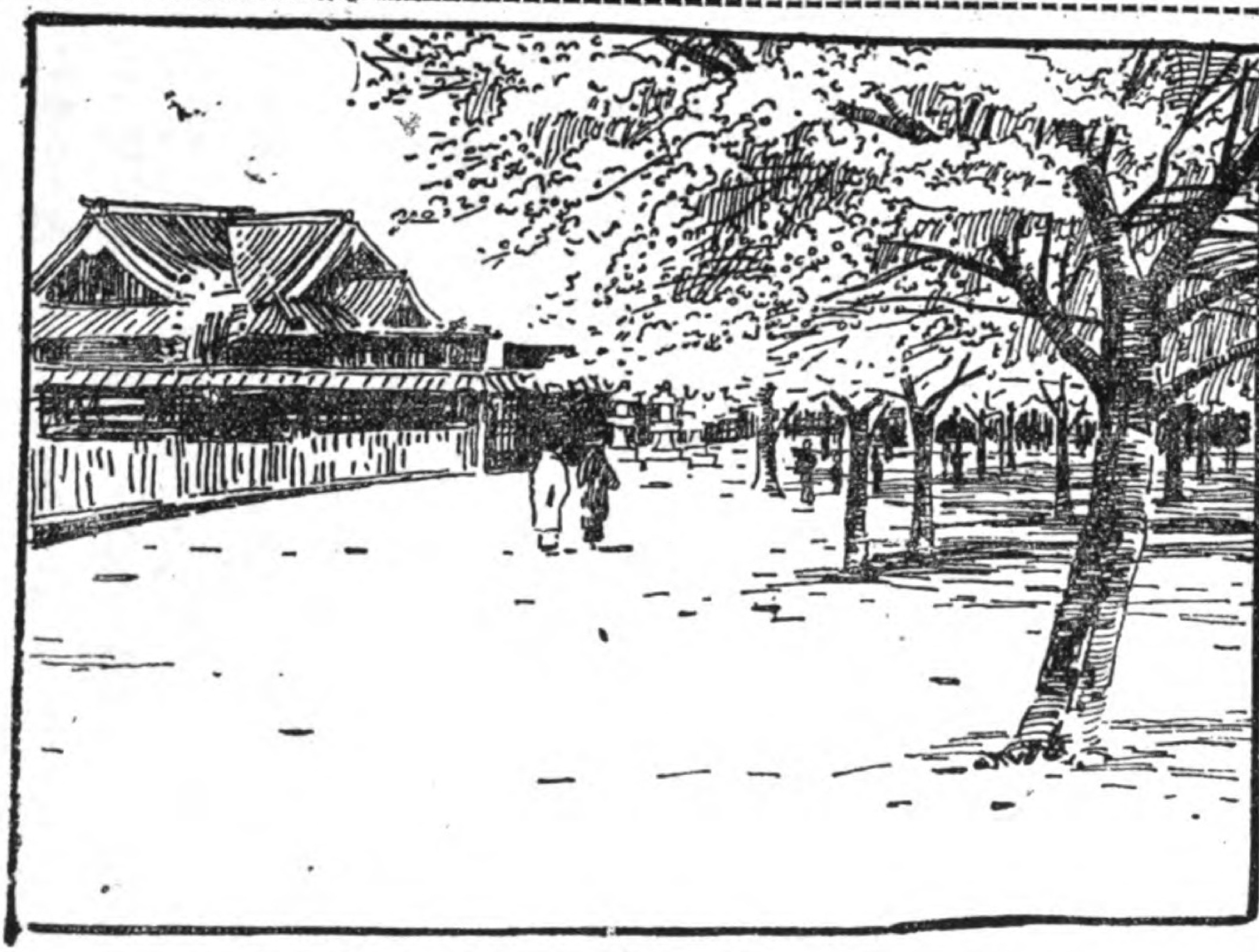


に晒の布に叮嚀に包んであつた、ぢやアこの黒燒きは、美和と私と頂く事にして、金串のを兄樣に上げませう。金串三本に、しつかりさして、遠火で燒く、お吸ものは、凍豆腐に、今朝のしいたけともやしのみつ葉、食後の散歩だつて兄樣ヌタコラ庭へ下りて、ブランコをやつて被居る、私はお風呂へ火をつぐだけ手傳つて母樣のお被布を縫ふ。

兄樣は汗を拭き／＼上がつてゐらしつた、「兄樣、押繪するんですけれど糘飯臺がなくて困りますから、こしらへて頂戴な」つておねがひしたら、珍らしくも「ヨシ、一つ乃公上手造らへてやらう」つて直ぐ造らへに掛つて下すつたは好いが鉋がチットも切れないので、兄樣、歯がみして、一生懸命だ、「なんの板だか知らないが鐵のやうだなア」つて時々休んぢや又ゴシ／＼……、あんまり夢中になつてゝ、「今日は、オイ君、吉岡君、オイ」つてしきりに、笠原さんが後ろで、呼んで居らつしやるに、一切聾だ、「兄樣笠原樣が被入るぢやありませんか、兄樣」夫れでも、きこえない、兄樣はお耳が遠いのかしら？「オイ君、」ポンと背中を叩かれて、「ヤア――アッハ、、、」「君ア何時來たアね」だつて……「寒いね、爐でも焚かうぢやないかねえ、富枝さん、一寸焚きつけて頂戴」オホ、、、現金だ事、いつも、富枝つて怒鳴付けるに。たのむ時と、繪葉書の交換する時だけは、さんの字をつける――美和が氣を利かせて、焚きつけてくれたから、私はお茶を入れる。

今日は、お茶菓子が、何にも、なかつたつけ、桃山もなかも、退治してしまつたし、と、あゝ左樣だ／＼、先月母樣が、おこしらへに成つた甘酒がさぞ、美味になつてませう、珍らしくわかして上げませう。

「大蟻君」と綽名を附けられた、笠原樣、と、甘ちやん／＼云はれてる兄樣だ、二人とも「こうア甘い、こりア美味い」つて、何位召上るんだらう、なか／＼、獰猛な勢だ、「笠原樣、何程召上つても宜しうございますが、お陰樣で苦がいお藥頂かされました、」なんて事被仰らずに頂戴」「オヤ／＼、そんなに、食べると私のが無くなるつて富枝さんの豫防線とア振つてるね」



靖國神社（東京の遊園）

「あら！　嫌、嫌な兄樣、隨分ねえ、何んぼ私が食辛棒だつて……」「君ン處ぢや、如何して、此樣に甘く出來るんだへ許せるんなら、秘傳許してくれ給へな、富枝さんがなすつたの？」なんの彼のと、きゝたがつて、うるさいから、もち米焚いて、麴でかうしてと、舌の疲れる程、教へて上げるに、かめに入れて、密封つて置くのですと申上げると、最早、初めのもち米の焚き方を忘れて了ふ、兄樣、傍で「駄目々々夫れより君、役所へ辨當以つて通勤ふのを止めて、内へ來給へ、よく左樣な事でいろは――なら、とにかく、食べる事を忘れずに居るよ」なんて、まぜつ返すので、尙更判らなくなつちまふ、「それでは、私が云ひますから其通り、お書なさいな」笠原樣はノートへペンで走らす……つて言ふと好ゝが「駄目よ富枝さん、も少し、ゆつくり言つてくれ給へ」と仰有るの、私の云ふ事さへこれだもの、速記者に成らうなんて、金魚がたき登りを眞似ると同じよ、材料は、もち米一升、麴一升五合、もち米の焚き方は、米飯を焚くと同じ水加減（但し少々やわ

らかめ）麹はお湯一合ばかりにて、よくつぶれる迄摺る、焚けた、もち米をよく熟した頃を、見計つて、かめにうつして、摺れた麹と、むらなく、よく〱、かきまぜ、密封して、一ヶ月位經つてから、使ふ。

「書けまして、判りましたか、食召る時にはお鹽を入れるのですよ」「左樣ですか夫れも書て置きませう」本統に驚く、驚いて了ふ、書けて了つたと思つたら、まだ書き終えない、これでも、役所ぢや、速記の泰斗、斯界に其名も高い笠原樣ですつてからねえ、驚くわ、大きく云へば、一時間もかゝつて、やつとノートの中へ、納まつた。

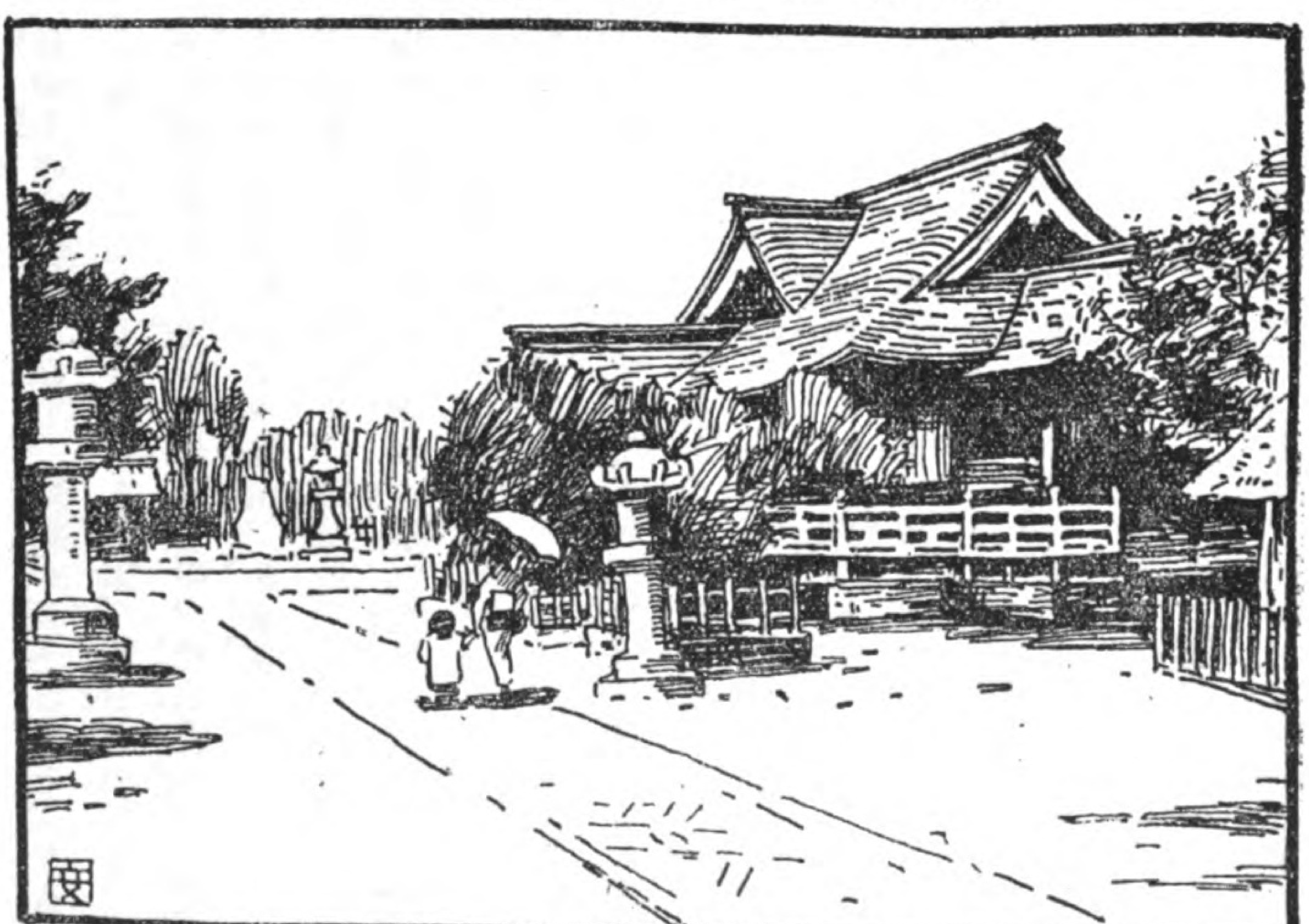
「笠原君、町田（書記）は何故、あんなに顏色が惡いんだらう、年中、ごみ箱の中の、靑ッ葉みたいに、靑く成つて、しほれ切つてるね」「左樣さ、ありあア、カナリヤと同じ、靑ッ葉だの粟だのばつかし、食べてるからね滋養物とるやうに、言つてやらうと……」「ハッハ、ハ、增給してくれつて云はれると困るつてのか」「ハ、ハ、」「オホゝゝ、」お腹の形の惡くなるほど、散々お腹の皮をよらせた「君ア、婆さんが病氣で困るだらう、どうせ、富枝は遊んでるんだから……、夫れに、使ひ走りは得意だ相だから、菓子屋や、豆腐屋、靑物屋のお使ひ位は、勤まるだらうよ、使つてやつてくれ給へ」だつて「あら、隨分ねえ」「何んだ、何が隨分だ——結構ぢやないか、お前みたいな、人間を使ひてがあるものか」お前みたいな人間、私にどこが不思議な處がある「ハゝゝ、富枝さんなんか、勿體ない、僕にア、さら、さ豆の齒の婆さんが、適當さアね」まさか、勿體なくもないけれど、嫌なこつた、眞平だわ、笠原樣のお使ひなんか羊羹くず五錢頂戴……なんて隨分、振つてる「葱、一錢下ださい」なんて、すてきだわ、「富枝がね、君に、すてきな、尊稱を奉るつて、公然の命名式前に鳥渡披露して置こうか」私の顏と笠原樣と、見較ながら、被仰る、「好わ、兄さま……そんな嘘言、被仰るものぢやなくて？　御自分で——、あなたの事を」言も終らぬに、さへぎつて「言譯するな、お前から、言つたんぢやないか「一寸一時間」だつて、「ぢや一寸、上

がつて」と云つて、一時間位、話してるつて、ハ、、、ハ、獰猛だらう」「あら、随分、あれこそ嘘言、大嘘言、好い面の皮だ、兄さまが附けて、私に……」「お前が言つたんぢやないか」「嘘言だわ、私、存じませんもの、非道いわ」「まア止し給へよ、好ぢやないか、切角の戴き名、僕、有難く拜命する」又一同に笑つて了つた。

笠原様、甘酒に酔つぱらつたやうに、眞赤に成つて、「君、又來る、左様なら、」つて歸つて行つた。

後で氣がついたら、御自分のは帽子かけに掛けてありながら、わざ／＼柱の針に掛つてた、兄様の帽子を被つて行つて了つた。さぞ、だぶ／＼、したらうに、兄様も兄様だ、「乃公は、頭が大きく成つたのかなアかたくて被れない」なんて、眞面目くさつて、ひねりまわしてる可笑しさ、まさか、飴の細工ぢやあるまいし、半日も經たぬに、大きく成つたり、小さく成つたりするもんぢやない、「それは、笠原様のぢやアありませんか」「オ、左様か、成程、色が異ふねアッハ、、、、」「兄様はバンカラ、」つてお隣の直ちやんに言はれた通

龜井戸天神　(東京の遊園)

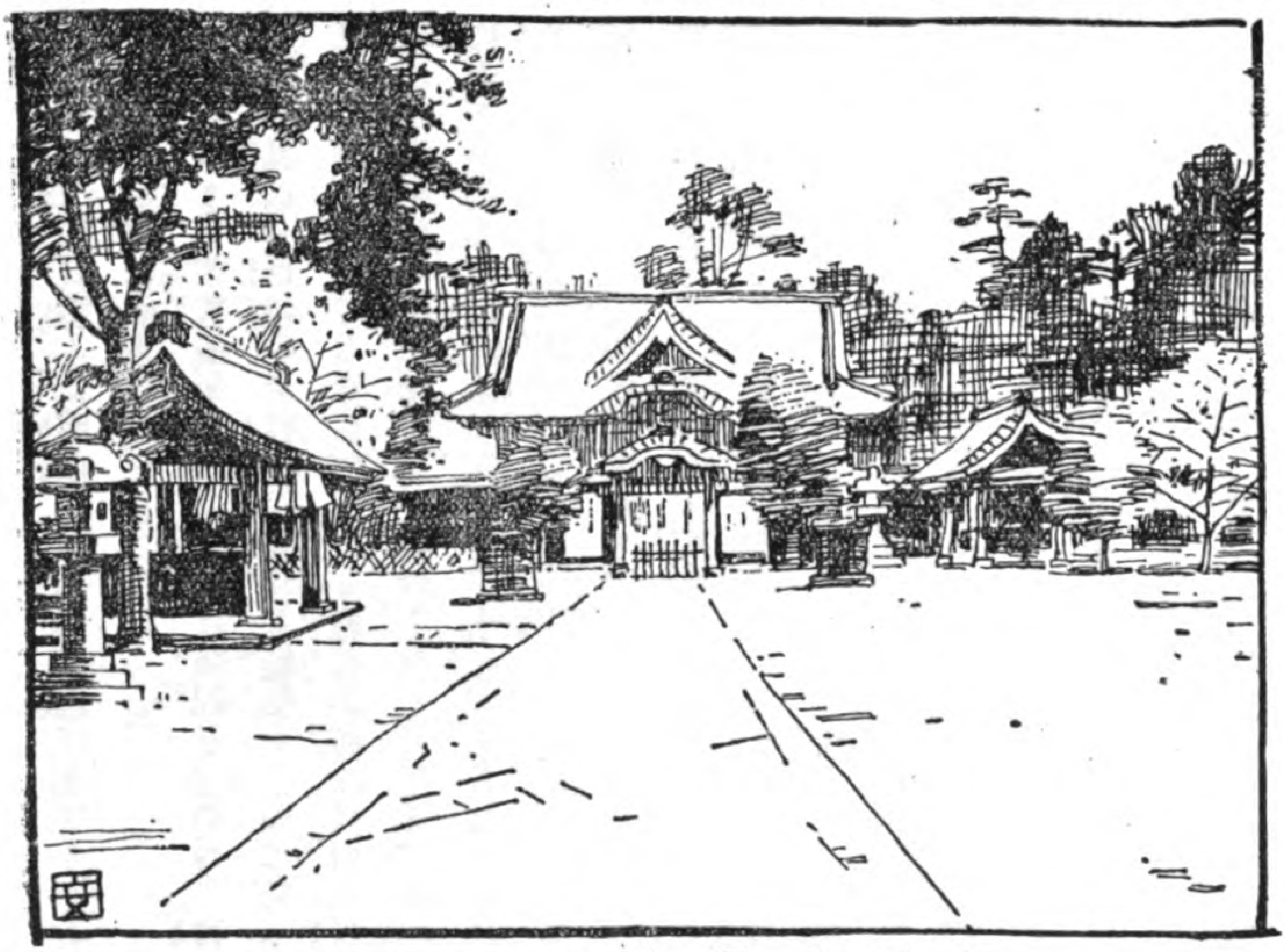


りた。

お隣家から、直義ちやんと、義雄ちやんが遊びに入らしつた、八歳と、六歳の兄弟だが、大きな身體だ。お二人とも、母様似で、細面の、目のすゞやかな、可愛い子、桃と、櫻を、並べたやう、此樣に、可愛い子が、やがて、私達が「小母さん」と呼ばれるやうに、なる頃は、内の兄様見たいに、成るんだ、と、思ふと――「姉ちやん「門前の小僧、ならよむ、經讀む」つて言ふね」なんて「習はぬ」が出來ないで、まはらぬ舌で、おしやべりするのが可笑しくて成らぬ。

直義ちやんに、百人一首を敎へて上げる、かり穗の庵の、とまをあらみ……、とまを。あらみがなか〳〵出來ない、「ともあらい、ともあらい」つて、とう〳〵「ともあらい」で止して了ふ、兄様は、義雄樣相手に、イロハカルタ、敎へて被居る、「お止しなさいよ、お小母さんは嚴しい方だのに、吉岡さんへ上げると。下らぬ事許り敎へるから。やらない、なんて、有仰ると困るぢやありませんか」と云ふても、おもしろがつて、「目の上の瘤、」なんて、瘤が云へないで、「たらんこぶん、たらん、こぶん」と云ふ、面白がつては、何回でも云はせる、「母の、かなみの、松山鏡」が、直義さんにや。云へないて「松山、かまぎ」だの「まつやな、かまゝ、」しまひには、何だか、わけのわからぬ事云出す「お前の前髪。下げ前髪」「生むぎ、生米、生玉子」種々な事云つちやア笑つてる。

直義さん、兄様の、口振覺えこんで、時々、獰猛、だの猛烈だの素敵だの、やア脱線々々、なんて、生意氣な事を言ふ。「いたやがあつて、かわやがあつて、しぶやがあつて、うまやがあつて、なアに、」なんて直ちやんが云出す、「何だらうね」、兄様が考へると、義雄さん「栗――ッ」と云つて了つた「えゝ、義ちやん、云ふんぢやないよ」と。直ちやん、顏を顰面る「ちアね、今度は「青いお座敷に銀の玉一つ、なアに」又義ちやん、「蓮の葉」つて、すつぱぬかれた、直ちやんお顔がくもつて、雨が降り出しさうになる、頗る形勢不穩に成つて來たので、兄様の發起で「桃から生れた、桃太郎」



上野東照宮　（東京の遊園）

を手をつないで唱つたり、「其名も高い、足柄山に、けだもの集めて、相撲の御けいこ、エッチャ〳〵、ノコッタ」なんて、叱りてのないのを、よい、しほに、親の時より、この時だと、散々遊んだ。

先刻の殘品で、失禮だけれど、鳥渡火を通して、お二人に上げて、私も、お相伴する「吹いて召らないと火傷しますよ」義雄ちやん可愛いお口で「甘い〳〵」とよろこんで食上がる、「何時迄も、遊で、被居いよ。玉子で、いゝまんま、食べませうね」義ちやんを、膝へのせて、直ちやんと、机の上でいたづら書をする「鯛の目、たこの目、鮹の目、天がくもつて雨ザア〳〵、あられポツ〳〵、オットたこ入道、」なんて言ながら、たこ入道を書いて上げると「可笑しいな、おかちいな」つてお膝の上で、ぴん〳〵跳揚る。

玄關のベルが、チリチリン、あら誰れ？　誰れも來る人はない筈、兄様が見えなくなつたから、又いたずらであらう、と思つてると、美和が、手をついて、「お坊つちやま、母様がお迎ひに被入いましたよ」「あら、

左樣では又明日被入い面白い事して、遊びませう」と約束してお歸し申す。

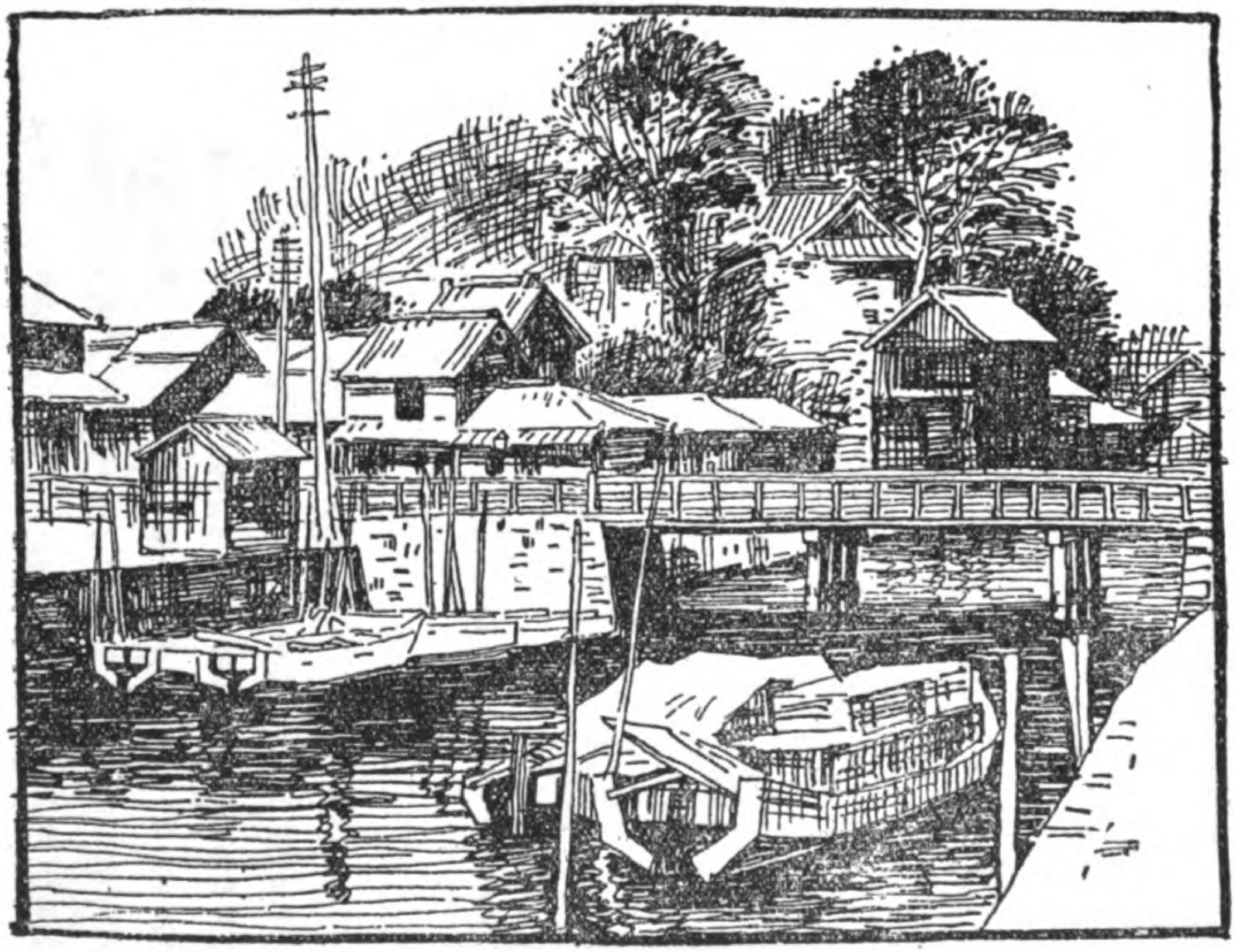
久し振りで蓄音機を出す、兄樣は簿記を、やつて被居る、私は、母樣のお被布、美和も縫物――つて云へば一つぱし縫つてゐやうだが……雜布の布には白い行列が二行半許り出來たまゝ、膝の上にのせて、熱心にポートこぎ、時計は、九時を三十分、過ぎた「どれ止しませう、富枝、床敷いてくれ」、今迄の靜かさを破る兄樣の聲に、美和は吃驚して、盲目の目をあくやうな、眼ぶりをする「美和や、寢床を敷ませうね」「オイ美和、夜に成ると、目と目と附いて……」なんて云違つて「夜に成ると、毛と毛と、ついて、大きな、雷樣な――に」子供見たいな事、試けば、先生更に解らない「何か御用？」なんて飛んでもない事、言出す「寢る事だよ、解つたか？」「あら、左樣で……どうも有難ふ存じます」「あら、嫌な、美和オホ、、、、」兄樣も私も、笑ひころげてゐるに、御本人、すましたもの。床就くと、誰れか勝手で話聲がする、「奧ちやお二方お寢みに成りましたつては、うるさい人だね、こんなに、おそくなつてから、來る人があるかい」眠むさうな聲で……。あら、又、森田が來た、「富枝さん、又來たね」兄樣まで、又來たと有仰る、誰れが言初めたか森田の事を、「又來た」と言ふ（但し私の內許り）、森田と云はずとも、「又來た」、と云へば判かる。

誰れが好き、誰れが嫌いと云ふ人はないけれど、森田ばかりは、何故か蟲が好かぬ、素寒貧のくせに、乙にみえばつちや、お汁粉の御馳走すれば、乾度よ、後で絹ハンケチで口を拭いたり、烏渡、話すにも、捲き舌の、變な發音の英語交りで話す。愛がどうの、戀がどうのと……。嫌な事ばつかし。

此間も寒い晚、遊びに來て、箱根程、寒い處はないのこんな、振はない土地はないのつて、言ふから、故鄉自慢の私だ、無言つちや居られない、「そんな事が有りますか、北海道は降つた雪が凍る、日光はまだ寒い、諏訪は湖水が凍つて、スケートの名地、何程寒いつたつて、蘆の湖は、一分の氷も、張りませんよ」つて云

つてやつた。すると、才子氣取りの、森田は「夫りア左樣だが、どう云ふわけか、箱根の寒さは、凍る以上、寒いですよ日光より、暖かいつて、夫りア、貴女の想像です」あつぱれ、日本通の、つもりだ、夫れ程、嫌な箱根なら、居なければいゝに。官舍の入口に、「無用の者、入る可からず」ぢや、僕ア這入つても好と思ふ文法上、入る可からずぢや、違つてると思ふ「無用の者入るを禁ず」と書いて、あれば判つてるけれど」なんて、なか〳〵、一トかどの、法律家のつもりだ、が、俳句の運座をした時、雪、梅、と云ふ題で、母樣が、「枯れ枝に、春の來にけり、六ッ花」つて被仰ると、兄樣が「氣の合ふた、情け積れる、吹雪かな」とお書になる、私が「鶯の、初音床かしや、梅の宿」と書く、森田は、暫く考へてゝ、「冷いと、手を引込める、今朝の雪」ですつて、後とで、森田の心の通りだつて大笑した、が、まア、それは、好として、初音と書いた、私のが、先生、了解出來ぬと見えて、「お孃樣、これア初を、と云ふのですかつて…。流石の母樣も、兄

待乳山　（東京の遊園）



樣も、一とたまりもなく、吹き出して了つた。蛙の題で「ねをきいて、高いと云ふて、蛙かな」と云つた、中田と、森田は、好一對だと、兄樣いつも有仰る。

何しろ、こんな、見聞の狹い、――イヤに、利口振る小さく考へちや、悲觀する、こんな人、大嫌だ。「森田樣、お歸んなさいよ」なか〳〵、手厳しく追はれてる「美和ちやん、鍛冶屋の鞴の音知つてるかへ」「知つてないわ」「知らない？　どうか、こ――か、く――、つて言ふぢやないか、アッハ……」流石の美和も笑ひ出した「オホヽヽ、止して下さいよう、オホヽヽヽ私らア嫌だわ、オホヽヽヽ」坂道を團子がころがるやうに、止め度なく、笑つてる。

美和の、父親は、鍛冶屋だつたけ、

兄樣も、笑ひながら「馬鹿な奴だ、下らん事を云つてるなア」、全くよ、役所で「下らぬ人間、上品な人格」と云ふ、當選をしたりすると、屹度森田だつてから：だつて、自分で、自慢顔に又落選したつて云ふ、まだ、何の彼のと、くだらぬ事を云つて居る。



記者曰く、富枝さんはあの有名な内藤千代子さんのお針友達で相州箱根の旅人宿○○館の娘さんです、この文を見ると内藤さんとほゞ同じ文脈でいづれが姉やら妹やら實際千代子さんは皆さんに大騷ぎされてる丈け中々の才筆ですが、富枝さんも隨分引けは取るまいとおもひます。兎に角鵠沼美人と人種學上同一民族同一語系の隱れたる一大天才たる事は爭ふべからざるものでせう。

女學世界
第拾卷第七號

世渡り上手

五月十五日
發行

諺に曰く、智慧は運命の征服者なりと、又曰く、思慮あるあゆみは幸福に達するの道路なりと、これ昔人の考へ定めし處世法の大綱にして、元より然るべき處なり、されど時代の變化は自づから又別種の意見を生み、生存競爭の激甚は智慧の働らきをして千變萬化ならしむ、この興味ある問題を捉えて一代の世渡り術を描ける才人の筆は、今滴るごとき新緑の色に包まれて初夏の天地を賑はさんとす。

目次概要

才媛文壇懸賞募集（五月十二日〆切）

▲美　文（二十字詰十五行以内）
▲日　記（二十字詰十五行以内）
▲書簡文（二十字詰十五行以内）
▲いろ〳〵の經驗（十五行以内）
▲和　歌（一人一首）
▲俳　句（一人一句）
▲笑話　▲誌友倶樂部

△美文、日記、書簡文、いろ〳〵の經驗の四種は用紙は半紙の事△和歌、俳句、笑話、倶樂部は端書に限る、△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす△名宛は博文館内女學世界宛とし△原稿に文の種類及び住所氏名を明記する事

賞品

△美文△日記△書簡文
天賞貳圓、地賞壹圓、人賞五拾錢
△和歌△俳句△笑話
天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢
△いろ〳〵の經驗（賞壹圓）

毎月一回一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内（定刊數……十二冊増刊四回：一、五、九、十一月價格同一）

郵税　一冊　二錢

廣告料

廿四字詰	一行	四半頁	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	……	五十五圓
一等	……	……	廿三圓	四十五圓
二等	……	十圓	十九圓	三十八圓
三等	五十錢	七圓五十錢	十四圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず〳〵
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵劵代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢劵相添申込あれ

不許複製

明治四十三年四月廿六日印刷納本・第拾卷第六號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

與謝野晶子女史著

女子のふみ

（體裁優美瀟洒）

正價金四拾五錢　郵送料金八錢

閨秀作家與謝野晶子女史が候文、言文一致、雅俗折衷等の諸文體と溫健、優美、奇警、瓢逸等各種の情調とを以て現代婦人界の必要に應じ實用と文學とを調和せる書翰文の一新例を示されたるもの、作例豐富、作法鄭重且つ冒頭には通俗なる假名遣辭典を以てせる至便の好著也。敢て世の淑女、學生諸孃の座右に薦む。

發行所　東京日本橋檜物町　振替東京二三〇番　**弘學館**

賣捌　東京日本橋　振替二三三八　**大倉書店**

其他全國各地方取次店

（新刊）

日本女子大學講師　戸川殘花著

新評女大學

全一冊　正價金廿五錢　郵税金貳錢

現代の模範的婦人と稱せらるゝ良妻賢母は多くは此書に依りて直接に、又は間接に、精神教育を受けられたる人々なり。今加味するに女子教育に熱心なる殘花先生の評釋を以てす。古今相照應して、此所に家庭の寶鑑成る。敢て明治婦人の座右に薦む。

發行所　東京日本橋區榑正町　**服部書店**

賣捌　大倉書店、東京堂、前川文榮閣、六合館、目黒書店、平誠堂、北隆館、東海堂

女（後付の一）

第五巻第七號

少女世界

五月一日發行

東京本町 博文館

本文紙數百廿八頁
口繪美麗なる石版寫眞版澤山

正價金拾錢 郵税壹錢

口繪と表紙

○中將姫……（河合英忠）○初夏……（岡野榮）○伊勢の少女會○岐阜の少女會○お人形○女學校寫眞○誌友の面影（以上寫眞版）

本文の記事

▼お伽小説 鶯塚……巖谷小波
▼西洋の少女と日本の少女……佐々木教授▲夕の星……櫻井百合子▼冒險小説 腕輪の行衞……押川春浪▼少女小説 母の家……西村渚山▼少女小説 舊友……沼田笠峰▼契冲の歌……佐々木信綱▼乳母ぐるま……さくら子▼ひぢつきの編み方……石井とみ子▼伊勢と岐阜の少女會記者▼少女史談 ひばり山……竹貫佳水▼漂流少女……江見水蔭▼家庭の少女……▼繪畫發表 少女會館……大盛況





第五巻
第六號
増刊
文章世界
菖蒲艸
五月一日發行
一、現文壇の諸家に對する現代青年の公開狀二十餘通
一、現文壇諸家の現代文學に關する評論及び研究數篇
一、本誌々友が苦心の小品二百三十餘篇の中より選抜せる傑作十數篇
一、本誌主筆田山花袋の現文壇に對する感想錄『インキ壺』一篇
一、『中央文壇に於ける文士分布圖』は一目瞭然たる文壇現勢圖
一、文章詩歌に關する先輩諸家の講話數項
一、青年作家中最も勢望ある五作家が苦心の短篇說五篇
★
全一冊洋裝菊判
紙數二百四十頁
口繪寫眞版豐富
正價金二十錢
郵稅二錢
★
東京本町
博文館

女(後付の三)

（付の一）

女(後付ノ五)

農業世界 第五巻第七號 增刊

（五月廿日發行）

水産案内

洋裝菊判紙數二百四十頁
口繪石版寫眞版豐富

正價廿錢

郵稅（本國）三錢

國內河川沼湖に富み、四邊海を以て環らす我國は、世界有數の水産國たるに拘らず之を利用して魚貝類の養殖を計るの念に薄く、無盡藏とも云ふべき海産物の漁撈收獲亦進まず、水産物を製造するの道に暗し、是れ吾人の遺憾とする所にして、本誌は即ち之に誌せんが爲めに、鹹水及び淡水魚の養殖、貝類と海藻類の養殖より漁撈採取、水産物の製造等苟も水産に關する事項は悉く網羅し、平易なる文章を以て叮嚀親切に詳述したるもの、內容の豐富にして廉價なる他に比類なかるべし、新利源の發見に熱せらるゝ人は宜く必讀すべし……………………



東京本町
博文館
振替口座東京二百四十番

女（後付の六）

北村東紅君著

▼東京本町 博文館▲

娯楽園藝 花と庭

洋装 四六判総クロース特製美本 紙數二百八十頁挿畫數十圖

近刊

著者は、多年、花卉、庭園、蔬菜、果樹類の栽培及手入等に從ひ、現に其豊富なる經驗を以て、高輪なる岩崎邸の園藝部に主任として、日常の實際に管掌しつゝあるの士なり。本書は、一般家庭に於て、小園藝を樂む人人の指針とも爲さんが爲めに、其蘊蓄を提供して、實際に應用し得べき各般の事項を流麗なる筆致を以て詳説したるもの。園藝趣味の益々擴大されんとするの今日、斯道に志あるの士は宜しく一本を座右に備へて可なり。



原胤昭君著 全二冊

母と子

何うしたら子供はよく躾けられるか

和装 菊判美本 前編（紙數二三六頁）正價五拾五錢 郵税八錢 後編（紙數一八〇頁）正價四拾五錢 郵税六錢

人生の幸福は富か譽か將た壽命か、否な眞の幸福は子寶よ。其の寶子を得んとするには子の育て方躾け方を如何にせんとは世擧ての問題だ。今や之を解決するに最も有力なる實驗談は記された。世既に知る如く著者は出獄人を保護し不良少年を研究して二十有八年の經驗を積み、茲に此の解答を著はされたのだ。乞ふ速に繙讀して第二の人を賢明良善忠孝の民に造り一家のため國家の爲めにせられなば本書刊行の素願である。

目次

（前編）○家庭の感化○三歳兒の魂○繼ッ子○名家の遺子○著者の實驗○犯罪の原因○兇賊山邊音槌の最後○山邊音槌の經歷○山邊音槌の爲人○犯罪原因の説明○山邊音槌の改悔時代○育兒の方針○結局如何したら可いか？

（後編）善と惡、母の兩面育て方躾け方の善惡實驗談六十一題

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替貯金東京二四〇

女（後付の七）

柳清香油

けいしかう油



美術小間物
香水化粧品

其他流行品種々取揃置候間御枉駕奉願候

東京日本橋通三

柳屋本店

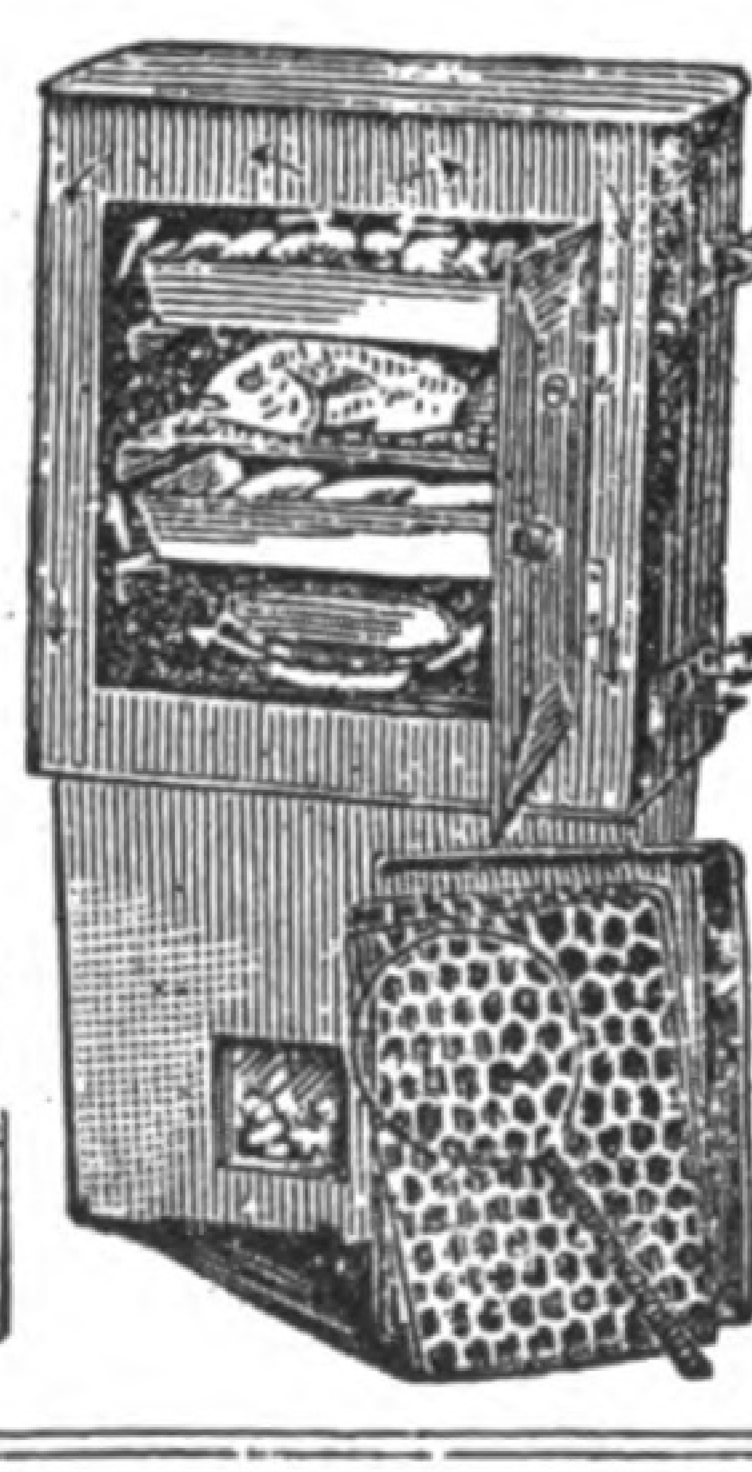
電話本局二〇一

專賣特許

臺所重寶

名和式テンピ





大三圓●中二圓五十錢●小一圓九十錢●說明書御希望の方へは無料送呈

專賣特許名和式テンピは曾て實業之日本誌上に於て「改良されたる臺所重寶器」として紹介されし和洋兼用のテンピなり

東京日本橋區蠣殼町二丁目十五番地電話浪花一一七七振替口座一〇二五四番

特許カマド据風呂

名和商店





女學世界
（每月一回廿六日印刷納本）
第拾卷第六號
明治四十三年四月廿六日印刷納本
明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可

貝原益軒先生遺訓

（婦女子の心得）

凡そ人の樂しむべきこと三つあり一つには、身に逆を行ひ僻事なくして、善を樂しむにあり。二つには、身に病なくして快く樂しむにあり。三つには命長くして久しく樂しむにあり、富貴にしても、この三つの樂しみなければ眞の樂しみなし、故に富貴は、この三つの樂しみのうちにあらず、若し心に善を樂しまず、また養生の術を知らずして身に病多く其のはて短命なる人は、この三つの樂しみを得ず、人となりてこの三つの樂しみを得る計なくんばあるべからず、この三つの樂しみなくんば、いかなる大富貴を極むとも益なかるべしと

故に婦人は常に衞生に注意して少しにても身體に異狀あれば早く善き藥を選びて療養せらるゝ樣の心懸け肝要なり、而して中將湯は、最も完全にして信用ある婦人の最良藥なり。

（定價金貳拾錢●郵稅貳錢）

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界 明治期復刻版㊵
明治43年4月（第10巻第5号）、5月（第10巻第6号）

2010年7月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3853-1　C3321